

関西大学大学院文学研究科副専攻「EU-日本学」

平成 29 年度活動報告書

第 10 回 KU ワークショップ
第 9 回 EU ワークショップ
報告論文集

Proceedings of the 10th KU／9th EU Workshop

Sub-Major Curriculum EU-Japanology
Kansai University Graduate School of Letters
Annual Report 2017-18

General Department of Humanities
Kansai University Graduate School of Letters

関西大学大学院文学研究科副専攻「EU-日本学」
平成 29 年度活動報告書

第 10 回 KU ワークショップ
第 9 回 EU ワークショップ
報告論文集

関西大学大学院 文学研究科 総合人文学専攻

ま え が き

本報告書は、2017年度に実施した2度のワークショップ、KUワークショップ(9月12日(火)～19日(火))とEUワークショップ(10月24日(火)～11月2日(木))での報告をまとめたものである。本副専攻は、2007年度に採択され、2009年度までの3か年にわたって実施してきた文部科学省の組織的な大学院教育改革推進プログラム「関西大学 EU・日本学教育研究プログラム」の後継事業として、学際性・国際性を持った新しい人文学教育・研究を担う若手研究者の養成というプログラムの基本理念を継承しながら事業を推進している。そのハイライトともいえるべき事業がこのKU・EUワークショップである。

さて、このたび実施した「第10回 KUワークショップ」では、本学とルーヴェン大学(ベルギー)、カレル大学(チェコ)、チューリッヒ大学(スイス)の若手研究者の学術交流を目的として研究報告セッションを設け、本学文学研究科の大学院生1名、東アジア文化研究科の大学院生1名、ルーヴェン大学の若手研究者2名、カレル大学の若手研究者2名、チューリッヒ大学の若手研究者2名が各自の研究成果を報告した。また、「第9回 EUワークショップ」では、本学とルーヴェン大学(ベルギー)、カレル大学(チェコ)、チューリッヒ大学(スイス)の若手研究者の学術交流を目的として、各大学において研究報告会・学生交流会を設け、本学文学研究科ならびに東アジア文化研究科の大学院生8名、そして各交流大学の若手研究者8名が各自の研究成果を報告した。幸いにもKUワークショップには20名、EUワークショップには各会場合わせて50名前後の聴衆を迎え、両ワークショップとも、英語・日本語による活発な議論および意見交換が行われた。

本報告書には、ワークショップでの研究報告や、その後に行われた議論を踏まえ、本学と上記交流3大学に所属する若手研究者が、新たな研究視角の獲得を目指して執筆した報告論文を収めた。これら報告論文には、なお粗削りな部分も少なくないが、日本研究の国際性・学際性について模索する若手研究者の息吹も行間から感じられることと思う。読者諸賢には、このような熱意を感じ取っていただき、ご助言いただければ幸いである。そして何より本ワークショップに参加した大学院生がこれを機縁に国際的かつ学際的な日本研究とは何かを考え、新たな研究領域を開拓してくれることを願ってやまない。

末筆ではあるが、本ワークショップの実施、本報告書の刊行にあたってご助力いただいた関係者各位に深謝申し上げたい。

2018年3月 関西大学大学院文学研究科長
藤田 高夫

目 次

まえがき	i
第 10 回 KU ワークショップ実施報告	1
第 10 回 KU ワークショップ報告要旨・論文	5
明治戸籍における法律上の矛盾とそこから続く差別問題 Zuzana SRBOVÁ	7
市川房枝の婦選獲得同盟 ―政治的機会構造論による分析― Lieven SOMMEN.....	15
自殺の医療化 ―19 世紀末から 20 世紀初頭の日本における自殺の医療化― Kateřina ŠPIROCHOVÁ	23
明治維新と岸和田藩 ―士族の動向を中心に― 絹川 紘平	32
On Creating the Book 「Korea」 by the Swiss Armed Forces and Watanabe Shōzaburo Rosa Jiyun KIM.....	43
菱田春草と朦朧体 ―伝統と近代のはざまで― 田邊 咲智	52
News from the winter wonderland: Yoshitoshi's representation of Saigō Takamori Freya TERRY.....	62
役者絵から美人画へ：〈春信娘〉成立をめぐる Sabine BRADEL	75

<u>第9回 EU ワークショップ実施報告</u>	83
<u>第9回 EU ワークショップ要旨論文</u>	91
<u>中世における興福寺と大和の武士</u>	義 紘明 93
<u>The Taishō New Education Movement</u> <u>-A Critique Assessment of the Movement's Nationalist Tendencies-</u>	Naomi SCHOLTIS 102
<u>The Social Function of <i>Nisshigōbengo</i> (日支合辦語)</u>	四宮 愛子 112
<u>日本における臓器移植 ―1977年に可決された法案の歴史―</u>	Jana HERMANS..... 120
<u>The Keicho-era embassy to Europe in Novels</u> <u>-By a Comparison of <i>Hazekura</i> by Kon Toko to <i>The Samurai</i> by Endo Shusaku-</u>	斎藤 佳子 128
<u>モーリス・マーテルリンクの日本での受容 ―近代劇を中心に―</u>	奥西 芙佐子 133
<u>クリストファー・ドレッサーのデザインと第二回ロンドン万博</u>	西垣 江利子 141
<u>A Life for <i>Ars Una</i> – the Eduard von der Heydt Collection in St. Gallen</u>	Jeanne FICHTNER..... 151
<u>江戸時代の唐様書法に見られる明末書風 ―董其昌の影響を中心として―</u>	高 絵景 153
<u>Aesthetics of War-Textiles and other Examples of Material Culture from the Shōwa Period-</u>	Klaus J. FRIESE 163
<u>与謝蕪村筆《奥の細道図》とその制作背景について</u>	猪瀬 あゆみ 174
<u>Research on the Ryūkyū Kingdom Textile Collection at the Museum of Cultures, Basel</u>	Anjuli RAMDENEE..... 183
<u>The Tale of Genji and the Marriage among the Heian Nobles: Discussions over Lady Murasaki</u>	三代地 春奈 184
<u>身分制の固定化 ―徳川時代寸前の被差別民―</u>	Lucie MORNSTEINOVÁ 190
<u>万葉集の書写形式の多様性と研究課題</u>	鷲尾 亜莉沙 196
<u>共産主義時代の旧チェコスロヴァキアにおける日本語教科書の特徴</u>	石田 薫 203

第 10 回 KU ワークショップ 実施報告

日程：2017 年 9 月 12 日（水）～19 日（火）

第 10 回 KU ワークショップ 研究報告会

2017 年 9 月 13 日（水） 於：関西大学尚文館 501 教室

10:50 - 11:00 原田正俊教授 開会挨拶

第 1 セッション

- 11:00 - 11:30 Zuzana SRBOVÁ ズザナ・スルボヴァー（カレル大学）
明治戸籍における法律上の矛盾とそこから続く差別問題（日本語）
- 11:30 - 12:00 Lieven SOMMEN リーヴェン・ソメン（ルーヴェン大学）
婦選獲得同盟の成立と展開 ― 政治的機会構造論による分析（日本語）
- 12:00 - 12:30 Kateřina ŠPIROCHOVÁ カテリナ・シピロホヴァー（カレル大学）
自殺の医療化（日本語）

休憩（12:30-13:30）

第 2 セッション

- 13:30 - 14:00 KINUGAWA Kohei 絹川紘平（関西大学）
明治維新と岸和田藩―士族の動向を中心に―（日本語）
- 14:00 - 14:30 Rosa Jiyun KIM キム・ジユン（チューリッヒ大学）
On Creating the Book "Korea" by the Swiss Armed Forces and Watanabe Shozaburo
（英語）
- 14:30 - 15:00 TANABE Sachi 田邊咲智（関西大学）
菱田春草と朦朧体―伝統と近代のはざま―（日本語）

休憩（10 分）

第 3 セッション

- 15:10 - 15:40 Freya TERRYN フレイヤ・テリン（ルーヴェン大学）
The Japanese Woodblock Print Artists during the Meiji Era (1868-1912)
- Focus on the Collection of the Royal Museums of Art and History（英語）
- 15:40 - 16:10 Sabine BRADEL ザビーネ・ブラーデル（チューリッヒ大学）
役者絵から美人画へ：〈春信娘〉成立をめぐる（日本語）

2017 年度 KU ワークショップ・プログラムは全 8 日間の日程で行い、研究報告会、フィールドワーク、関西大学の図書館・博物館見学会などが実施された。フィールドワークでは、台風により変更はあったが、大阪歴史博物館、大阪くらしの今昔館、あべのハルカス美術館、カップヌードルミュージアム、白鹿記念酒造博物館などを巡った。

第 10 回 KU ワークショップ

報告要旨・論文

明治戸籍における法律上の矛盾とそこから続く差別問題

Zuzana SRBOVÁ

カレル大学哲学部日本研究科 修士課程

[Abstract]

The research topic mentioned above is a subject of my Bachelor Thesis at my home university - Charles University in Prague, Czech Republic. I have started to look into the Japanese Family Registries (Koseki) since my Exchange Study Program in Japan in 2014-15, and successfully defended the thesis in September 2016.

The objective of the thesis is following. Firstly, I describe the new system of Meiji Koseki and also other closely related modern laws and codes coming to Japan in Meiji period. Then, I apply the previous description and come up with several legal contradictions between the Koseki Law (1871), Emancipation Law (1871), Civil Code (1898) and the Nationality Act (1899). Finally, from the legal perspective, I analyze the problems in the Japanese Meiji Society caused by these contradictions in the modern law system, which appears to be mainly the continuing discrimination of certain social groups.

To be more specific, the first part of the thesis deals with a topic of the origin and the development of the modern koseki registration system throughout the history. Its aim is to provide with a historical overview of the Japanese population and Household Registers and to introduce a process of transformation of the previous records into the modern household registering system. The core section considers the relation between the modern legal system and its impact on the Japanese society during Meiji period, namely the social outcastes.

In conclusion, I aim to assess the forms of Meiji Household Registers, contextualize them into a legal framework and analyze its impact on the Japanese society. The results show, that although the Japanese people were emancipated as the nationals of a modern state, in fact the social discrimination had never been eliminated. Furthermore, it clearly appears that it was only the household register system, which determined the legal relationship of an individual as a citizen to the state, as well as it also turns out that the one responsible for the discrimination of outcastes in Meiji period, was the Meiji legislation itself.

Due to the length limitation, this paper focuses solely to the key points, major issues and the conclusions of my thesis.

[論文]

はじめに 論文の目的と先行研究

本研究の目的は、明治時代の戸籍制度を中心に、他の主要な法律間に発生した矛盾を分析し、その影響で明治社会において作り出された新たな差別の形を指摘することである。

そのため第一章では、明治戸籍制度を紹介し、その定義・特徴について述べる。第二章、本論では、戸籍法・身分開放令・太政官布告第百三号・明治民法・国籍法における矛盾点を分析する。最後に、これまでの分析をもとに、当時の日本社会に如何なる差別が出現したかを結論としたい。

戸籍とその法律上の関係が研究対象になったのは、二十世紀末の頃である。戸籍の実態と当時までの戸籍の歴史を深く取り上げたのは石井良助氏『家と戸籍の歴史』（1981年）である。しかし、明治時代前後における名簿の身分制などに関して初めて述べたのは、横山百合子氏『明治維新と近世身分制の解体』（2005年）である。二宮周平氏『戸籍と人権』（2006年）は戸籍と様々な法律の関連性について研究をしてきた。

英語が主要となる学界では、明治戸籍に関する研究が比較的少ない。といえども、代表的な分析者、オーストラリア人の Chapman David 氏とデンマーク人の Krogness Karl Jakob 氏、が日本における戸籍とそれに関連する家族制度、法律関係、歴史関係、社会的問題などを取り上げている。それぞれ自身の研究著書以外に、二人は『Japan's Household Registration System and Citizenship: Koseki, Identification and Documentation』（2014年）という海外の専門家の寄稿と日本人専門家の翻訳された論文の編集書を出版している。

日本をはじめ、西洋においても日本における戸籍一般に関して更なる研究が必要である。

第一章 明治期の戸籍制度：定義と特徴

本文に入る前に、「戸籍」「差別」のそれぞれの定義とその特徴の設定をしておこう。上記のように、明治時代の日本は西洋式の行政や法律制度を適用しようとしていたが、これまでの日本の仕方と異なっていたため、法律の運用が困難であった。同様に、戸籍の定義にも最初から矛盾があった。

まず幅広く言うと、西洋にある多くの法律制度は、ローマ法及び古代ヨーロッパの歴史的伝統に由来する。そういった西洋社会の単位は個人であり、その個人が成長し、社会に浸透できるよう支える役割は、家族という機関が果たしている。したがって、家族全員の記録に基づいた戸籍ではなく、個人各々の身分登録（Birth Certificate）が発行される。

一方、日本の場合、古代より複雑な身分の構成が現われ、一般民衆の国家身分登録の開始は大化改新まで遡る。その身分は個人としてではなく、属する家族の一員として与えられた。こうして氏姓制度に基づいたシステムが十世紀前後に廃滅したが、集団主義の現象が現代まで存続し、明治維新後は編製した形でありながらも復活した。また、明治時代以降注目される家制度は近現代日本の法律で初めて制定されたものであり、それによると戸籍とは「人民登録、班田収授・氏姓確認の基本台帳で[...] 戸口の名・続柄・性別・年齢・課不課の別などを記載」（注1）するものとなった。

このように、西洋と日本の戸籍の概念が異なったため、明治期に西洋の法律制度を日本の制度とそのまま合体させ適用させることが如何に不可能なことがわかる。

つづいて、差別とは「特定の個人や集団に対して正当な理由もなく生活全般にかかわる不利益を強制する行為をさす」（注2）ことであるが、昔より階層制度のある日本の環境では、「部落民」「エタ」「ヒニン」という日本人の一部がこういった差別行為によって、社会的に排除されてきた。彼らは、特に江戸時代以降差別の対象となり、土農工商という封建社会の身分制度から排斥

され続けた結果、日常生活に重大な影響が及んだ。明治時代に入り、日本が文明開化した中、以前の封建社会が間もなく崩壊し、西洋から取り入れた政治制度等に基づき、新たな国家が成立した。

また、西洋諸国が近代化するのに大凡一世紀もかかった反面、日本の場合、明治期の数十年で成しえたことを考慮に入れると、日本の富国強兵への努力や近代化へのスピードは尊敬されるべきであろう。一方、成立した明治時代の国家制度を見てみると、あまりに近代化の完成速度が速かった影響で複数の不明瞭なところがあったことが明らかになる。

その中で、法律制度を取り上げてみると、制度全体を一気に改革することが不可能であったため、立法、布告、法令等のそれぞれを徐々に改正していく他になかった。しかし、このように制定された法令は、明治初期から十九世紀末にわたってたった三十年で施行していたため、法律用語の曖昧さ、定義の不一致、法律上の矛盾は異常ではなかった。更に、明治時代の法律制度にはもう一つの大きな特徴がみられる。それは、法律の形式的な構成は、西洋の組織と合致したにも関わらず、中身はこれまでの日本の必要に応じたことということである。

第二章 分析：明治戸籍法と他の法律の関連性、法律上の矛盾によって作り出された新たな差別の形

明治時代、日本は徐々に近代化していったが、その過程は簡単ではなかった。王政復古ののち、政府が二つの主要な課題に直面していた。

一つは、近代の国として十分な機能を果たすため、適切な法律制度を確立することであった。新たな標語となった「富国強兵」に従い、将来の目標の一つとして大日本帝国の領土を拡大し、西洋大国の同等相手となるため、まず内政を造って見せる必要があったのである。

二つ目は、国を正常に指導できるよう、国民（注3）を一体化することであった。そのプロセスの一つの手段となったのは、戸籍制度である。最初の戸籍法は「壬申戸籍」と呼ばれ、明治四年（1871年）に太政官布告第百七十号として導入された。本来の目的は、家族ごとに国民を登録し、住所、土地や資産の規模、家族人数、年齢、家族関係、職業等といった重要な情報を収集することにあった。また前文では、戸籍による登録は国民が政府より保護や無事を保障される条件となった。更に、国民として対象になれる者が次のように解説されている。

「戸数人員ヲ詳ニシテ猥リナラサシムルハ政府ノ最モ先シ重スル所ナリ
夫レ全國人民ノ保護ハ大政ノ本務ナルコト素ヨリ云フヲ待タス
然ルニ其保護スヘキ人民ヲ詳ニセス何ヲ以テ其保護スヘキコトヲ施スヲ得ンヤ
是レ政府戸籍ヲ詳ニセサルヘカラサル儀ナリ
又人民ノ各安康ヲ得テ其生ヲ遂ル所以ノモノハ政府保護ノ庇蔭ニヨラサルハナシ
去レハ其籍ヲ逃レ其數ニ漏ルルモノハ其保護ヲ受ケサル理ニテ自ラ國民ヲ外タルニ
近シ此レ人民戸籍ヲ納メサルヲ得サルノ儀ナリ[...]
随テ戸籍ノ法モ終ニ錯雜ノ弊ヲ免レス或ハ彼籍ヲ欺キ去就心ニ任セ往来規ニヨラス
沿襲ノ習人々自ラ度外ニ附スルニ至ル
故ニ今般全國総體ノ戸籍法ヲ定メラルルヲ以テ普ク上下ノ通義ヲ弊ヘ宜シク粗略ノコ
トナカルヘシ」（注4、引用）

上記を分析してみると、家族人員を詳しく把握して秩序を守ることが、政府にとって最重要問題である。ところが、「その保護すべき人民」を明らかにせずに、何をもってしてその保護すべき人民を保護すべきか。これが政府の、戸籍を詳らかにしなくてはいけない理由であり、それをもって人民全員の安全を保障する義務がある。そのため、戸籍を逃れたり、省かれたりする者は、自ら国民から外れたと判断され、国民として身分が確認できない理由で、政府の保護の対象となり得ない。

第一節 身分解放令（1871 年）

身分開放令（注 5）とは、明治四年（1871 年）8 月 28 日に太政官によって制定され、「近代の部落民の社会的地位に関する束縛を無くし、今後『新平民』として国の近代化に参加できるようになった」（Nguyen 2011 : 1）と公布する画期的な法令である。これをもって、これまでの士農工商という厳格な階層制度がようやく崩壊し、解放令の施行によって部落民は正式には自由を与えられたのである。また、以前に宣言された一君万民（注 6）という思想に加わり、部落民も今度天下の民衆の一部となり、人民全てが平等になった。そうなるため、まず戸籍に入っていない人々には直ちに登録しなくてはならないと義務付けた。更に、1886 年の戸籍法の改正では、「エタ」の人々については「元エタ」、「ヒニン」の場合は「新平民」と身分事項欄に追加で記載された。もう一つの戸籍による登録の仕方は、永住地を知らせる義務であった。しかし、戸籍名簿に住所の詳細が記載されていると、本人とその全ての家族の起源が公にわかってしまうのである。

その結果、正式に解放された部落民は、身分解放令の規則と戸籍の有様によって、一般の平民から分割させ、実際に新たな差別を受けることになった。要するに、身分解放令は社会における不平等を無くすべきである法令として宣言する内容を実現できなかったのである。

第二節 太政官布告第 103 号（1873 年）

戸籍と関連する他の布告として、明治六年（1873 年）3 月 14 日に制定された第百三号である。それにより国際結婚の夫婦や家族関係を法律において定めた、所謂「内外人民婚姻規則」(Chapman 2014:95)である。当時は国籍法等のような法律が一切存在していなかったことを考慮に入れると、この布告第百三号が確かに近代日本の法律体系の中で、初めての日本在住の外国人に対する規則となったことに注目したい。但しその規則は、日本に在留する全ての外国人に対応せず、あくまで日本人と結婚したい外国人とその日本人の結婚相手の家族における、結婚した後の戸籍上での家族関係や財産に対する権利等を把握していたのみであった。この布告によって制定された規則が、後年になって施行した明治国籍法の基準となったため、布告第百三号は日本の国籍法の元祖と知られている（注 7）。

「自今外國人民ト婚姻差許左ノ通條規相定候條此旨可相心得事

- 一 日本人外國人ト婚嫁セントスル者ハ日本政府ノ允許ヲ受クヘシ
- 一 外國人ニ嫁シタル日本ノ女ハ日本人タルノ分限ヲ失フヘシ若シ故有ツテ再ヒ日本人タルノ分限ニ復センコトヲ願フ者ハ免許ヲ得能フ可シ
- 一 日本人ニ嫁シタル外國ノ女ハ日本ノ國法ニ從ヒ日本人タルノ分限ヲ得ヘシ
- 一 外國人ニ嫁スル日本ノ女ハ其身ニ属シタル者ト雖モ日本ノ不動産ヲ所有スルコトヲ許サス但シ日本ノ國法並日本政府ニテ定タル規則ニ違背スルコトナクハ金銀動産ヲ特携スルハ妨ケナシトス
- 一 日本ノ女外國人ヲ婿養子ト爲ス者モ亦日本政府ノ允許ヲ受クヘシ
- 一 外國人日本人ノ婿養子トナリタル者ハ日本國法ニ從ヒ日本人タルノ分限ヲ得ヘシ
- 一 外國ニ於テ日本人外國人ト婚嫁セントスル者ハ其國或ハ其近國ニ在留ノ日本公使又ハ領事官ニ願出許可ヲ乞フヘシ公使及ヒ領事官ハ裁下ノ上本國政府ヘ居出ヘシ」（注 8，引用）

上記規則から言うと、外国人が日本で身分を認めてもらうのに方法が二つあった。一つは、外国人の男性の場合、日本人女性の家族の戸籍に婿養子として記入される方法であった。婿養子という方式は、日本では前代より既知の模様であったが、明治時代になって初めて外国人にまで適用することになった。二つ目は、戸籍の戸主である女日本人、いわゆる女戸主、と結婚し、「入夫」になる方法である。

いずれかの方法を取り、正式に「日本人外国人」となったら、日本政府がそういった人の身分を認めると宣言した。また、日本人男性と結婚した外国人女性には、そのまま日本の法律が適用され、日本人と同様の身分も獲得できることになっていた。それに対し、外国人と結婚したい日本人女性の場合、結婚後女性は日本人としての身分を自動的に失い、更に国法に従えば、動産は持つことができたが、日本国内における不動産の所有は許されていなかった。

したがって、上記規則には次の主な要因がみられる。まず、明治期、西洋の諸国に近付こうと日本は外国人に対してかなり好意的な方針を立てた。それと対照的に、日本人女性の身分と社会位置がまだ低かった明治初期らしい法令であったとも言える。

しかし、論争されているのは、布告第百三号自体だけでなく、戸籍制度に繋がる関連性も重視された。当時、第百三号によって制定された規則をもとに、外国人が戸籍による身分を持つ日本人と結婚すれば、その外国人が日本人相手の戸籍に登録されたと言ったが、その結果、日本国内で永住地を得られた。

この事実が重大な意味を持つ。元々日本は島国であり、しかも江戸期は日本人の移動が相対的に制限されていたため、法律で定める「国民」「国籍」等といった明確な用語は特に必要なかった。そのため、当時までは一般的に「住民＝国民／住所＝国籍」という非公式な解釈がされていた。明治時代になり、布告第百三号の規則が加われば、実際に日本国内に永住地を持つ外国人であっても、その人が法律上では日本人であった。なぜかと言えば、国内に永住地があるというのは日本人であることと解釈される仕組みであったからである。現在、この矛盾を初めて指摘したのは、戸籍制度に詳しい教授・弁護士である田代有嗣氏である。

結果としてもう一つの問題が現われた。当時の戸籍法も布告第百三号も、国際結婚から生まれる子供の身分に関する規則を含んでいなかったのである。戸籍に登録する際、両夫婦が同じ国籍、即ち日本の身分を持つのが基本であった。この手順をもとに、生まれた子供が当然親と同一の国籍になると予想されていたが、法律には制定されていなかった。

第三節 明治民法（1898 年）

近代日本の立法体制を創るに当たって、次のステップになったのは民法創りである。明治三十一年（1898 年）7 月 16 日の最終確立までは十数年もかかった長い道のりであったが、本節で見ていきたいことは、民法で定められた家制度と家族の解説である。

そもそも家制度とは、複数世代のシステムに基づく家族であり、「家長を中心に代々継承されるものとして、個人よりも優位におかれていた」（注 9）ものとされる。江戸時代から既に存在していた方式であったが、時代によっては内容の解釈が変わっていた上、初めて定義として法律において制定されたのが明治民法であった。明治期は、「家族国家」という思想が加わり、家制度においては家長が一家の主人となり、家族全員がその家長に従うという原則をもとに、家族国家の場合、家族は国民であり、彼らが忠実に家長である天皇に従うべきである思想を意味していた（注 10）。

このように制度化した家制度と戸籍の関係に関しては、明治期の知事で政治家でもあった渡辺清（1835～1904 年）がこう述べた。戸籍はただの人別調査の手段ではない。もしそうであれば、西洋の人別登録制度に沿って行政を行えば良いのであるが、日本の戸籍には文化による特徴があるため、西洋式法律を容易には適用できない。その文化の特徴の一つは、戸籍が政府にとって国民に安全を保証し、社会保障を支配するための手段として必要であることである（二宮 2014:173）。

1898 年の戸籍法の改正により、戸籍名簿とその家族の詳細が公に公開された。即ち、手数料を条件に今度は役場において家族関係者以外にも一家の抄本・謄本が手に入ったのである。公開の理由は、土地の持ち主とその適法の相続者を確証したり、自営業の合法化に関する手順を決めたりするためであった。しかし、暫くして多くの企業が、戸籍において意図的に在職中の社員と潜

在的な応募者の身分を調べていた。結果、身分的に相応しくないと判断されたら、解雇・不採用となったのである。職場における差別だけでなく、抄本・謄本で身分を確認した上で行動に出るパターンが他に不動産産業にもあった。身分を理由に拒否された人々にとって、不動産の売買は苦痛であった。このように、新たな差別行為が誕生したとみられる。そういった行為は差別の対象となった人々とその家族の身分自体を抑え、もっと広い意味では人間としての一番基本的な人権を抑圧することになると言える。

このように、世間による社会的排除を防ごうとしていた戸数が少なくなかった。戸籍の公開の影響によって差別を受けた人々は、自衛のため戸籍に登録すべき事実を隠す場合もあった(Krogness 2014: 150)。正確な情報を記入する義務があったものの、役場によって詳細の正確さを確認することはほぼなかった。

第四節 国籍法（1899 年）

明治時代の日本は、他国に対して、自身の国粋を探り、国境を画定しなくてはならない状況にあった。その正式な成果となったのは、1899 年に施行した国籍法であった。これまで、「国籍」という概念は法律上には存在していなかったが、万が一日本国籍を証明する必要がある場合、その証明になり得たのは戸籍謄本のみであった。そのため、戸籍法と国籍法には密接な関係があった。

国籍法の構成はフランス法に由来するが、戸籍制度と合致するため、日本国籍の取得手段として血統主義(jus sanguinis)に基づく方式が選ばれた。こうして、日本国籍を得るのに次の条件の何れかを満たす必要があった(Ibid: 157)。

① 子供が生まれた時点で親一人は日本国民であること

② 子供の父親が出産前に死亡した場合、死亡の時点で日本国民であったこと

上記の何れかを満たした上で、子供が戸籍名簿に登録できたという国籍取得と戸籍名簿の相互関係がみられる(柏崎 1998: 286)。

明治時代の法律は現代も適用されているわけではないが、当時創られた法律が次の時代の改正と新たな法律体系の基になり、戦後の現代人にまで何らかの影響が及んだ。国籍の取得は当たり前のことではないと指摘し、身分証明のない「忘れられた人々」というグループについて解説したのが Chen 氏である。国籍は、個人と国にある法律関係を作り、その取得可否によって身分証明が決まる。更に、身分証明がなければ、教育、就職、婚姻、育児等のような日常生活だけでなく、国に対する権利と義務にも影響が及ぶ(Chen 2014: 222)。このグループには、以下のような二種の人々が属する。

一つは、身分を失った或いは何らかの理由で身分が証明できない原因で、身分が確認できない限り戸籍の登録が不可能なため、国籍が取得できない、所謂「無国籍者」である。原因は、両親がアジア系在日外国人であることが多い。この場合、大正・昭和初期にフィリピン、東南アジア諸国の方から来日した移民や戦後まで在日していた日本植民地朝鮮、台湾、満州国等の人々の子孫が無国籍者になるケースが多くみられる。こういった人々は、親の母国での戸籍を持っておらず、日本生まれ日本育ちであるのに関わらず、人種的、文化的な違いが現れたため、社会においては外国人として扱われたのである。実際、無国籍者は日常生活に困ることが多いだけでなく、世間に無視され、民族的背景が不足しているため、自分が何者か分からないという個人的危機も例外ではない。

二つ目は、行政の過失や法律上の矛盾が原因で、戸籍の登録が不可能になる「無戸籍者」である。両親や家族の一部が部落民で戸籍を持っていないことや、離婚後女性が行政上で元の戸籍に再登録できないことなどが主な原因となっていた。実際に無戸籍者にどのような影響が及んだかと言えば、まず無国籍者と異なり、無戸籍者は一般の国民と比較して人種的、言語的、文化的な相違がなかったため、社会において一般の日本人であることを前提として扱われた。しかし法律

上では、身分が存在していなかった結果、住民票の登録、医療保険、婚姻届の提出等さえできない事例があった。

おわりに 結果とまとめ

明治時代は、日本にとって間違いなく巨大な変化をもたらした時代になった。当時の政府が、機能しなくなった政治制度を見直し、近代国家のシステムを一から創らなくてはならないという課題を背負っていた。それが成立できるよう、完全な法律制度が必要不可欠であった。しかし、法律を確立するに当たって、立法者が、どれ程西洋の法律制度を適用すべきか、どれ程既に手元にある法律の規則に沿うべきかの程度に悩んでいた。

社会においては、国が新たな身分制度を制定することによって、江戸期まで存在していた階層社会を無くし、人民全てを解放することが目的であった。しかし、開放といえども、人民全てというのはこれまで一般社会において身分のなかった人々も含めるため、そういった人々の場合の身分は法律上で今度どうなるかは把握できなかったのである。

本論のまとめとして、戸籍制度と法律上の矛盾を大きく二つの問題に分けられる。一つは、江戸時代から存在していた部落民の問題である。身分開放令によって開放するはずであったものの、本論の分析にみられる通り、法律の曖昧な定義が差別を広げさせたのである。1920年代、日常において身分を認めてもらおうと「水平社」という開放運動組織が結成された。更に、戦後からは「同和」対策教育が行われた。もう一つは部落民だけでなく、明治時代以降初めて発生した差別の形、無戸籍者・無国籍者の問題である。このように差別を受け続けた人々に対する差別行為が現代に至るといえることがわかるが、その法律上での始祖は明治時代にまで遡る。

注

(注1) 『日本史B用語集 改訂版』(山川出版社、2009年)

(注2) 『ブリタニカ国際大百科事典』(小項目電子辞書版、2011年)

(注3) 「国民」という法律用語は、初めて正式に1898年に施行した民法・1899年に国籍法において確立したが、本文の解説のため、明治時代全般の日本民衆を「国民」と呼ぶことにする。

(注4) 国立国会図書館デジタルコレクション『明治四年四月太政官布告第百七十号(戸籍法)』
〈Online 2018-01-09〉<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/787951/94>

(注5) 「身分解放令」という名称は、当時存在せず、初めて現われたのは大正時代より行われ始めた部落解放運動の活動の時であった。

(注6) 「一君万民」はそもそも吉田松陰の思想であり、「天下万民の主君である天皇にすべての民衆が結集し、『誠』をもって『忠』を尽くす」という意味を持つ。『倫理用語集 改訂版』(山川出版社、2009年)

(注7) 太政官布告第百三号による規則が1899年に施行した明治国籍法の基準となったが、これらは、1950年に国籍法の改正により除去された。

(注8) 国立国会図書館デジタルコレクション『明治六年三月太政官布告第百三号』
〈Online 2018-01-09〉<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/787953/175>

(注9) 『現代社会用語集 改訂版』(山川出版社、2008年)

(注10) 明治期は、「家族国家」という思想が、富国強兵と同様に大日本帝国への道の基礎的な思潮として解釈されていたが、1930年代は愛国心を支持する国家主義の一部となり、概念が変わった。(Chapman 2011: 13)

参考文献

和書

- ・石井良助『家と戸籍の歴史』（創文社、1981年）
- ・横山百合子『明治維新と近世身分制の解体』（山川出版社、2005年）
- ・利谷信義，平松紘，鎌田浩（編集）『戸籍と身分登録』（早稲田大学出版部、2005年）
- ・岩谷十郎『日本法令索引〈明治前期編〉データベース利用のために：〈解説〉明治太政官期法令の世界』（国会図書館調査及び立法考査局、2007年）
- ・二宮周平『戸籍と人権』（部落解放人権研究所、2006年）

洋書

- ・CHAPMAN David, KROGNESS Karl Jakob (2014) ed. *Japan's Household Registration System and Citizenship: Koseki, Identification and Documentation*. London and New York, Routledge.
- ・CHEN, Tien-shi (2014). *The stateless (mukokusekisha) and the unregistered (mukosekisha)*, in *Meiji Japan, in Japan's household registration system and citizenship: Koseki, identification and documentation*. London and New York, Routledge.
- ・HOWELL David L. (2005). *Geographies of Identity in Nineteenth-Century Japan*. Berkeley, University of California Press.
- ・NGUYEN Ha N. (2011). *The 1871 Kaihōrei: Discourse, Outcastes and the Politics of Making Modern Japan* (Master's Thesis). Singapore, National University of Singapore.

洋雑誌

- ・CHAPMAN David (2011). *Geographies of Self and Other: Mapping Japan through the Koseki*. The Asia-Pacific Journal, Vol. 9, Issue 29, No. 2.
- ・KASHIWAZAKI Chikako (1998). *Jus sanguinis in Japan: The Origin of Citizenship in a Comparative Perspective*. International Journal of Comparative Sociology, Vol. 39, No. 3, pp. 278-300.
- ・WINTHER Jennifer A. (2008). *Household Enumeration in National Discourse: Three Moments in Modern Japanese History*. Social Science History, Vol. 32, No. 1, pp. 19-46.
- ・SMITH Robert J. (1972). *Small Families, Small Households, and Residential Instability: town and city in 'pre-modern' Japan*, in *Household and family in past time*. Cambridge Books Online.
- ・REBER Emily A.S. (1998). *Buraku mondai in Japan: Historical and Modern Perspectives and Directions for the Future from the perspective of an American Researcher*. Dōwa mondai kenkyū, No. 20, pp. 45-62.
- ・RUYLE Eugene E. (1979). *Conflicting Japanese Interpretations of the Outcaste Problem (Buraku Mondai)*. American Ethnologist, Vol. 6, No. 1, pp. 55-72.
- ・HAH Chong-do, LAPP Christopher C. (1978). *Japanese Politics of Equality in Transition: The Case of the Burakumin*. Asian Survey, Vol. 18, No. 5, pp. 487-504.
- ・KŌZŌ Yamamura, MURAKAMI Yasusuke (1984). *Ie Society as a Pattern of Civilization: Introduction*. Journal of Japanese Studies, Vol. 10, No. 2, pp. 279-363.

市川房枝の婦選獲得同盟 —政治的機会構造論による分析—

Lieven SOMMEN
ルーヴェン大学日本学科 修士課程

[Abstract]

After the end of the First World War, individualistic and democratic sentiments swept the globe. In the 1920s, these feelings led to a more competitive political system in Japan. It also furnished all Japanese males with universal suffrage rights in 1925. Fusae Ichikawa, a feminist pioneer, returned from the United States in 1924. She started the Women's Suffrage League that same year, along with such women's activists as Ochimi Kubushiro, Tsuneko Akamatsu, and Mumeo Oku. The group was active between 1924 and 1940, but ultimately failed to attain the three types of women's political rights it sought. While researchers such as Kano (1974) and Sugawara (2002) have pointed to Japan's shift towards a militaristic regime following 1931's Manchurian Incident as the cause for the failure, this is insufficient as an answer. The League worked in a decade with a societal mood that was eminently predisposed to democratic sentiment, and as such the group's lack of results is puzzling.

The framework of Political Opportunity Theory will be used. A structuralist methodology, it offers insight on the inner working of a civil rights organisation and its contention with the state, and will be applied to the history of the movement as it transpired between 1924 and 1937. The group was offered multiple significant political opportunities, but failed take advantage of them. The period between 1928 and 1931, in particular, was weighed down by conflicts between progressive and conservative members of the Women's Suffrage League. It is this lack of internal stability that kept Ichikawa and the others from attaining their desired rights. In this way, the Manchurian Incident, often considered the pivotal movement for the women's movement in prewar Japan, is reframed as having been less important than is often thought.

[論文]

はじめに

第一次政界大戦後、自由主義・個人主義の政治思想が戦前時代における最盛期を迎えた中、市川房枝らの「婦選獲得運動」が1924年から1940年にかけて、レジームに対して婦選や婦人公民権などの「三権案」を要求し続けた。1920年代の後半、彼女らがフェミニズム活動により成果を上げ、政友会・民政両党と大衆に支持を得た。1928年も、1931年も、政党が帝国議会に提出した「制限婦人公民権」は議会を通る見込みであったが、結局保守的な貴族院により審議未了となった。そして、1931年度の満州事変が起こり、日本社会を右翼及び軍国主義に向けさせた結果、年々と婦選獲得同盟の活動がさらに抑圧されるようになった。婦選獲得同盟の歴史的な展開は菅原(2002)・鹿野(1974)・今中(1977)・Molony(1980)などの作品で幅広く記述されているが、同盟の政治的機会の分析がまだ不十分である。世界中の他の市民運動との関係・相違点を指定するために、

構造的なフレームワークが役立つ。それにより、市川らの活動及び政治的思想を考察しながら、運動を歴史的に位置付けることが可能になる。そこで本稿では、McAdam、Tarrow、Tilly が1970年代から1990にわたって発展させてきた「政治的機会構造論」というフレームワークを婦選獲得同盟に応用し、運動を構造的に分析していきたい。

まず、第一章では、理論を一般的に解説する。第二章では同盟の歴史を紹介し、最後に、第三章で両方を合わせ、政治的機会構造論を手がかりに、運動を分析する。

第一章「政治的機会構造論」というフレームワークについて

本論で使われる方法論を一般的に解説していく。まず、五つの用語（「政治的機会」「レジームの性格」「全体運動の時系列」「社会的な絆および行為の構造」「フレーミング・デバイス」）を定義づける必要がある。

政治的機会構造論の歴史背景

McAdam(1996)によれば、政治的機会とは、ある運動が成功できるコンテキストのことである。例えば、戦前の日本における婦選運動に目を向けると、1925年に男子普通選挙権が実現した。従って、選挙に対する日本国内のムードが変わり、婦人らに「婦選も入手できる」という機会を与えた。運動が成功することにはメンバーの積極的な態度が不可欠であるので、彼女らのこうした野望が政治的機会となったと言える。以上のような「機会」が理論の鍵となる概念である。一方、ある社会の政治環境と倫理が違ふというのは言うまでもないことであり、研究者にはその環境の機会を自力で見極める責任がある。機会を確かめるために、以下の四つの諸側面、すなわち「レジームの体制」「運動の時系列」「社会的な絆及び行為の構造」「フレーミング・デバイス」がある。

レジームの定義

ある社会のレジームが運動の形に大きな影響を与える。戦前の日本の場合、レジームとは、日本国政府と地方行政を指す。政治的機会構造論によると、運動の活動が起こる際、三つの行動者が関わる。レジームのメンバーが政治環境を創る一方、民権運動のチャレンジャーが新しい権利を要求し、政府側と葛藤する。そして、第三者の行動者として、政治的なアウトサイダーがレジームとチャレンジャーの媒介をする。

このレジームは四つのタイプに区別できる (high-capacity, democratic; low-capacity, democratic; high-capacity, undemocratic; low-capacity, undemocratic)。強い中央権力を握っているレジーム (high-capacity) がある一方、弱い権力の政府 (low-capacity) もある。また、民主主義的なレジーム (democratic) は大衆に影響されやすいが、非民主主義的な政権 (undemocratic) もある。

運動の時系列の重要性

ある運動の歴史には、早急に活動を始めた政治活動家 (early risers)、及びより遅く活動に参加した行動者 (late-comers) の両方がいる。前者が後者に道を開くことが多いが、時折政治環境が逆回転し、「late-comers」がより力強く抑圧することもある。行動の時点により、活動に投与される政治的機会が決まる。政治的機会構造論をあるコンテキストに応用する際、時間の経過を意識すべきである。

社会的な絆および行為の構造

McAdam et alii (2001)によれば、市民運動の活動は演劇のパフォーマンスのようである。運動・レジーム両側には行動のレパートリーがある。その行動の繰り返しが「葛藤のサイクル」(contentious repertoire) と呼ばれる。大衆がそのパフォーマンスに飽きると、運動は失敗になる。芝居を支えるのは社会的な絆及び行為の構造である。このコンテキストでは、人間関係が非常に

重要である。ある運動には安定的なネットワークが不可欠であるので、上述した「チャレンジャー」（活動家）と「アウトサイダー」（第三者の政治的行動者）が新しい絆を結ぶことができれば、政治的機会が出来上がる。戦前の日本の婦選獲得同盟のような、暴力的でない運動の場合、アウトサイダーの支持を獲得し、対議会活動を行うなどのようなレジームに許される行動を取る以外に方法がない。運動の影響力はそのメンバーの能力・観点・モチベーションだけではなく、レジームとの関係にも制限される。

適切なフレーミング・デバイスの重要性

フレーミング・デバイスとは、ある運動の考え方・目的・方向性・実践などを指す。運動側のメンバーに対してだけでなく、レジームや大衆に対しても説得力のあるレトリックを示さないと社会的変化が出てこない。市民運動の活動は演劇である。市川らの婦選獲得同盟を例として挙げると、彼女らの 1920 年代の運動が政府に認められている対議会活動を行い、レジームに止められなかった。しかし、過激的な活動を行う勇気がなかった市川は運動内のメンバーに批判された。運動を成功させるには、メンバーに「成果が上げられる」という確信を持たせないといけない。

以上、政治的機会構造論の鍵となる概念を記述してきた。第二章では、婦選獲得同盟の 16 年間にわたる展開を短く描写していく。

第二章：婦選獲得同盟の成立と展開（1924 年 - 1937 年）

市川房枝は婦選獲得同盟を金子しげりと一緒に起こす前に、平塚らいてうの新婦人協会の一員として、1919 年から 1921 にかけて、女性運動に貢献した。平塚は特に政治的運動を展開しようとしたわけではないが、同協会の対議会活動の結果として、1922 年に政府が治安警察法の第五条を改正し、婦人に政治的な演習会・演説会を開く権利を与えた。しかし、結局、平塚と市川の政治思想が合わなかったため、二人は 1921 年に別れ、協会を解散させた。第一次世界大戦後、個人主義・自由主義の最盛期、市川が 1924 年にアメリカ合衆国から帰国し、男子普通選挙権を要求している日本社会の刺激を受けた。そこで、金子しげり・川崎なつ・赤松常子・久布白落実・奥むめおなどと手を結び、1924 年 12 月 13 日に婦選獲得同盟を成立させた。（注 1）

鹿野政直（1974）によれば、同盟の歴史は四期に分けることができる。第一期は 1924 年から 1928 年までであり、第二期は 1928 年から 1930 年までである。第三期の段階が始まる前に 1930 年が転換期となった。従って、第三期は 1931 年から 1937 年までである。1931 年、満州事変が起こり、市民運動が抑制されるようになるので、同盟の戦術転換が必要となる。婦選獲得同盟の寿命は 1940 年まで続いた。本稿では、日中戦争下の運動の性格が戦前のものと大きく異なるため、最後の三年間の分析を省く。したがって、1924 年から 1937 にわたっての展開を取り扱う。

第一期：1924 年 - 1928 年

同盟の結成に際して、市川らは政府が許す活動の種類に絞ることを心がけた。そして、市川個人の考えでは、イデオロギーを持たないというのも大事なポイントであった。それは、「日本全婦人のために闘うには、政党・政府に対して、『絶対中立』を必死に貫く必要がある」と思っていたからだ。具体的に言えば、第一期の活動は主に対議会活動と演説会の開催であった。『婦選』という機関紙を持っていた彼女らは、演習会・演説会を開くために、自力で日本を旅行していた。婦人では議会への法案提出はそもそも不可能であったため、女性問題を重要視している若手の議員を探しだし、帝国議会への法案・改正案の提出を依頼した。婦選獲得同盟が要求したことは、「婦人選挙権」（婦選）・「公民権」・「結社権」で、いわゆる「三権案」であった。公民権とは、地方行政に対して投票できる権利、また名誉職に就ける権利ということである。そして、婦人結社権とは、政党を結成する権利や、政党に入る権利を指す。

戦前の日本の帝国議会は衆議院と貴族院があった。衆議院は選挙があったため、比較的に進歩的であったと言える。一方、貴族院は選挙がない機関で、保守的であった。同盟は松本君平(革新倶楽部)・星島二郎(政友会)・西岡竹次郎(政友会)・坂東好太郎(中正倶楽部)のような婦選派少壮議員から共感を得、早々に議会に三権案を提出してもらえたが、法案は議会を通らなかった。1924年の第五〇回帝国議会を除けば、衆議院は毎年婦人参政権を可決したが、貴族院では毎年審議未了となった。Garon(1993)が、1920年代中に、保守的な議員の中でも「婦人に政治的権利を与えることにより、女に国家の安定に貢献させよう」という観点がだんだん広がっていったと述べているにもかかわらず、第一期には、三権案の貴族院で可決されるには程遠かったと言えよう。

第二期:1928年 - 1930年

1928年、初めての男子普通選挙が行われ、無産政党の八名が衆議院に当選した。女性問題への社会的意識が高まっていたと言えるが、四年間何の成果も上げられなかった市川らは、同盟の「絶対中立」について反省せざるを得なかった。1928年の選挙の際、市川らは婦人の三権を支える十四名の候補者を支援した。しかし、例の「絶対中立」の観点から、市川は候補者の政治思想を気にせず、女性問題を重視している者のキャンペーンに関わっていた。結局、十四名の中の七名が当選したが、同盟内の対立も起こった。「絶対中立」を訴えていたのに、選挙運動に務めた市川が奥むめお・山川菊栄・吉野作造などに強く批判された。

婦選獲得同盟は1928年まで独特の活動を行ってきたが、市川らは運動を成功させるには他の団体(とくに無産団体)との強力が要することに気付いた。そこで、1928年3月に六団体と手を組み、「婦選獲得共同委員会」を結成した。この組織には日本婦人参政権協会・全国婦人同盟・関東婦人同盟などが加盟した。全団体が婦人参政権を目的とすることにより一致した。しかし、三・十五事件の結果として、関東婦人同盟が崩壊した後、日本労農党に付属する全国婦人同盟も解散した。1929年、短期に存在していた婦選獲得共同委員会が解団したわけであるが、1932年の婦選団体連合委員会に道を開いたとも考えられる。

政友・民政両党は婦人参政権を反対してきていたが、1928年に強い批判を受けている中、田中内閣(陸軍系)は女性問題を選挙勝利への鍵として見極め、女権運動を認めた。政友会の幹部を説得したのは婦選派少壮議員の星島二郎と西岡竹次郎であった。そして、政友会が女権に関する法案を発表したその直後、民政党も是認した。これは、政党が婦人参政権に賛成したわけではなく、支持率を上げるために女性問題を取り上げただけであろう。それにしても、政党のほうから婦人権案が議会に提出されるようになったのは、政治環境の女性へのムードが変わりつつあったという証であると言えよう。ただ、両党が紹介した法案・改正案は婦選獲得同盟のものと大きく異なり、地方行政への参政権に限られていた。「議会にこのような法律が制定されると、残りの権利を入手しようがない」と恐れていた市川らはかえって両党のプログラムに『婦選』の記事を通じて、反対活動を行った。その結果、政党との関係が悪化した。結局、第五六回帝国議会では、法案が貴族院を通らなかった。これは、望月圭佑内務大臣と秋田清(政友会)が時期尚早論の立場を取り、可決への道を遮ったことが原因であると考えられる。

過度期:1930年 - 1931年

1 地方支部について

1930年―1931年の間、連続して三事件(万宝山事件・中村大尉事件・満州事変)が勃発し、日本を軍国主義に向けさせるが、菅原(2002)は、実にこれが婦選獲得同盟の最盛期であったと主張している。1930年、同盟の地方支部が2支部(金沢・新潟)から11支部まで急増し、婦選運動を日本全国に普及させた。1919年から1932年まで、工場における労働争議が徐々に増えつつあった。支部は働いている婦人を支えようとしていたが、市川の立場から見れば、このような活動がレジームとの拮抗を呼んでしまう危険性があったので、政府を怒らせることを避けるように指示を出した。そのため、当然本部(市川・金子など)と支部の間には対立が起こった。

同年、濱口内閣は婦人運動を制御しようとする一環として、1930年に婦人同志会と大日本婦人連合会を成立させた。婦選獲得同盟の保守的なメンバーは市川を「過激派」と決めつけ、家族制度を重視する新しい団体を創るために、同盟を退団する。久布白落実・ガントレット常子・井上秀子は婦人同志会に加入し、その幹部として市川らを強く批判しだした。こうして政府が婦選運動の分裂を招いた。

1928年、政党が提案した婦人公民権が議会を通らなかったが、この時に政府自身が「制限婦人公民権」を提出することを発表し、女性問題への解決を国家的な政策とした。すなわち、家族制度を考慮しながら、安達謙蔵内相は婦人に地方行政への選挙権、及び名誉職に就く権利を与えることを指示した。ただし、行政に務めるには、夫の同意が前提とされた。1928年と同じく、婦選獲得同盟はこの制限婦人公民権に対して全力で反対活動を行った。第五九回帝国議会では、政府の法案が衆議院を問題なく通ったが、貴族院で審議未了となった。

同盟のメンバーは、次の議会で三権案が法律化されるだろうと思い込んでいたため、審議未了のニュースを喜んで迎えたが、1931年9月に満州事変が起こった。第五九回議会后、政府は女性問題を完全に議事項目から削り、軍隊との葛藤に集中することに移った。1930年代、三権を入手する機会は市川らにはもうなかったと言ってもよい。

第三期:1932年から1937年まで

年々と市民運動への抑圧が高まっていったが、市川はレジームに許される新しい活動を探り、婦選獲得同盟の性格を変容させた。

1932年に婦選団体連合委員会が結成され、1937年まで続いた。婦選獲得同盟と一緒に毎年、「婦選大会」を開催した。婦選獲得同盟以外にも、日本基督教婦人参政権協会・婦人賛成同盟・全関西婦人連合会の、三つの団体が加盟した。しかし、婦人団体連合委員会と同じく、無産主義への弾圧のため、婦選団体連合委員会は成果を上げられず、消えた。1930年代の前半、軍国に対して平和主義の意見を発表したのが、1935年以後戦争反対の活動は不可能となった。その代わりに、大会は女性の政治教育・家族制度下の母性保護に視線を向け直したのである。市川は個人として1935年の「選挙粛正運動」に加入した。政府が操っていた運動であったため、市川には婦選活動を行う自由がなかったが、レジームとより密接な関係を創ることができたと考えられる。その結果として、日中戦争下の「国民精神総動員運動」に加わるのが可能となり、戦後の女権を投与する日本国憲法の道を開いたと考えられるのではなかろうか。

第二章の結論

本章では、婦選獲得運動の歴史的な展開を1924年から1937年まで概観した。フレームワークと同盟の歴史を双方確認した上で、第三章では運動の理論による分析に進みたい。

第三章:婦選獲得同盟の政治的機会構造論による分析

第一章で述べた「政治的機会構造論」の五つの側面に一つずつ触れながら、市川房枝の婦選獲得同を分析して行く。「政治的機会」そのものが理論の最終的な鍵となる概念である。理論による分析を行うため、まず他の側面である「レジーム」「運動の時系列」「社会的な絆及び行為の構造」「フレンジ・デバイス」を考察する。

2つのレジームの指摘

政治的機会構造論はレジームの形の識別をととても大事な点として強調するが、国家とコンテキストにより政治環境が大きく異なってくることが多いため、理論にはレジームを区別するツールがあまりない。それゆえ、その度に Takenaka (2014) が紹介した戦前日本におけるレジームの分析を参考にする。

Takenaka によれば、1900 年に成立した政治環境は非常に競争的であった。なぜなら、薩摩藩と長州藩の政治家が常に対立的な関係を保っていたからである。1919 年以降の政党政治時代に入ると、政権を選挙が握るため、政党は必死に大衆の意見を意識する義務があった。ただし、非民主主義的な機関もあった。例えば、選挙なしの元老も貴族院も保守的で、無産階級社会をあまり配慮しなかった。しかし、婦選獲得同盟の活動に見られるように、市民運動の存在はレジームに許されたので、民主主義的な活動は間違いなく効いていた。一方、満州事変の発生後、政党の権力が急速になくなったため、権威主義的なレジームが成り立った。

以上のことから、Takenaka は日本の 1920 年代のレジームを「半民主主義的レジーム」(semi-democratic regime) と名づけている。そして、1931 年以後の軍国主義的なレジームは非民主主義的と述べている。改めて政治的機会構造論に目を向けると、第一章で述べたように、レジームには四つのタイプがある。戦前の日本の場合、1920 年代のレジームは high-capacity, democratic であり、1930 年代のは high-capacity, undemocratic であると言えよう。前者では、運動の活動が影響力を持っている。後者では活動が抑圧されるため、平和主義的な運動では社会を変化させることができないと考えられる。

婦人運動の時系列での婦選獲得運動

婦選獲得同盟は日本の最初の婦選運動ではなかったが、政治的機会構造論が記述する「early riser」ではある。市川は新婦人協会の一員として、平塚と協力し、家族制度に合う活動をしていた。そのため、政府が「新婦人」を認め、1922 年に婦人に政治的な演習会・演説会を開く権利を与えた。その権利が相次ぐ婦選獲得同盟に不可欠な手段となった。同時に市川が頼もしいフェミニスト活動家として知られるようになった。アメリカから帰国した際、自らの令聞を活かし、婦選獲得同盟を成立させた。

市川が貫いた「絶対中立」は第一期に政治的機会を与えたと考えられる。当時の政治環境はまだ激しいフェミニズムと接触したことがなかったため、その結果、市川らに対議会活動などを認定した。第二期に入ると、自由主義の波に乗った無産運動は婦選運動と共同しようとしたが、あまりに抑圧されたので、何の成果も上げられなかった。一方、政府が無産・共産の弾圧に集中していたため、婦選獲得同盟が無事に活動を続けられたのではなかろうか。そして、第三期の満州事変は婦選への道を完全に閉ざしたが、それ以前から同盟がメンバーの対立によって混乱に陥ったとも言える。

婦選獲得同盟の社会的な絆および活動構造

新婦人協会が活動した三年の間、平塚と市川は協力したが、政治的思想がずいぶん違っていた。市川が常に婦人参政権の重要性を訴えていた結果、他の活動家に市川が「センスのある」フェミニストとして知られるようになった。従って、アメリカから帰国した際、簡単に新しい運動を起こすことができたと言える。しかし、1924 年以降、市川の戦術は常に批判の対象となっていた。市川はあくまでも政府に認められている活動のツール(対議会活動・演説会)を使ったが、結局何の成果も上げられず、同盟のメンバーと他のフェミニストから批判を受けたのである。1928 年に戦術転換を行うが、相手にした無産運動はレジームに弾圧されていたので、目標を達成することが不可能であった。そして、婦選運動のいわゆる最盛期である 1930 年には、同盟のプロタゴニストの何人かが退団し、グループを混乱に陥らせる。1931 年の第五九回議会の際に、政府の制限婦人公民権に徹底的に反対したが、それは戦略の間違いであったという事実もある。地方支部との対立もブルジョア的すぎる市川の政治思想のレトリック的失敗であった。以上のことを考察した上で、婦選獲得同盟の行為の構造が有効的ではなかったと考えてもよいだろう。

市川のフレーミング・デバイス

運動の対レジーム活動は演劇のような過程である。従って、運動の目標を果たすために、活動家に説得力のあるパフォーマンスを演じる責任がある。一方、活動がレジームに認められてい

ない限り、平和的なプロテストが不可能である。第一次世界大戦後、男子普通選挙が実現した中、「国家の安定に女性の役割も大事だ」という考え方が日本のブルジョアの中でも広がりつつあった。市川らはその機会に、女性にも三権を与えるよう訴え、うまく社会のムードに乗ったわけである。しかし、年々に彼女らが議会に出した法案が審議未了を重ね、活動が不十分であったことが明らかになった。

フレーミング・デバイスという概念から、「レジームに対する説得力」ということが浮かぶかもしれないが、実際には同盟内のレトリックが一番大事である。それに成功することができなければ、メンバーのモチベーションもリーダーへの信頼も徐々になくなる。婦選獲得同盟の場合、1928年によく他の市民運動と共同するようになったが、もう手遅れであったのだろう。政府は婦人問題を議事項目に導入するが、同盟の幹部が満足できる提案ではなかったのも、反対された。それを見て愕然とする同盟の保守的なメンバーは活動に飽き、退団し始めた。政府側との関係も悪化した。1931年前のフレーミング・デバイスには大きな問題点があったと言えよう。そういう意味では、1931年に婦選運動の機会を破壊したのは満州事変だけではなく、市川自身の虚しいフレーミング・デバイスでもあったと考えられる。

1931年後、公に婦選活動ができなくなっていた市川は別のアプローチを試した。「女性は掃除をする」という思考を手段にし、選挙粛正運動で「政治環境を整理する」というフレーミング・デバイスで女性の政治への参加を実現させた。法律的な権利は1946年に日本国憲法により導入されたが、戦前における市川の活動はその道を開いたと思われる。

結論

婦選獲得同盟には幾つかの政治的機会が現れたに違いない。1920年代のレジームは半民主主義的であり、婦選活動を認めた。そして、市川がアメリカから帰ってきたちょうどその時に、男子普通選挙権が議会を通った。日本社会のムードは女権に対して好意的であった。しかし、市川らはその機会を捕らえることができなかった。なぜなら、政府が許す活動の限界を超える勇気がなかったためであると考えられる。第一期には、全然効かない対議会活動に集中していた。そして、第二期の1928年によく他の運動との協力が可能になった際、無産階級がレジームにより強く抑圧されるようになり、その機会がなくなった。

政党も政府も女性問題をプログラムに入れたが、制限婦人公民権であった結果、同盟が懸命に反対した。原則としてはこの反対活動は間違いではなかったが、「これが最後のチャンスだ」という遠謀が市川になかった。1930年、婦選同盟の中心メンバーが退団し、対立団体を起こして婦選獲得同盟に批判・圧力をかけた。その後、混乱に陥った同盟の政治的機会が満州事変により完全に破壊されていった。一方、第三期には、市川は公に婦選活動を行うことができなかったが、軍国主義的なレジームのプロジェクトに貢献することを通じて、女性の政治環境への参加を実現させる。こうして戦後の日本国憲法に記されている女権に道を開いたと言えるのではないだろうか。

本稿では、「政治的機会構造論」というフレームワークを婦選獲得同盟の歴史的な流れに応用した。以上のことから、1931年の満州事変は日本社会のムードを大きく変容させ、ある程度に機会を破壊したことも認めるべきではあるが、それだけが根拠であるわけではないということが明らかになった。1931年以前の同盟の活動には政治的機会が多かったにもかかわらず、フレーミング・デバイスや行為の構造が適切ではなかったため、成果を上げることができなかったように思われる。しかし、1930年代の市川の活動はレジームとの協力を通じて、日本の婦人の政治への参加の第一歩となったという事実もある。市川らの活動がなかったとすれば、戦後の女性解放もなかなか実現しなかったとも考えられるのではないだろうか。

注

(注1) 当時、「婦選獲得期成同盟会」との名前をつけたが、翌年に婦選獲得同盟に変更した。

参考文献

- ・筑摩書房編集部（編集者）『市川房枝：女性解放運動から社会変革へ』（筑摩書房、2015年）
- ・市川房枝『市川房枝自伝：戦前編』（新宿書房、1974年）
- ・金子幸子『近代日本女性論の系譜』（富士出版社、1999年）
- ・McAdam, Doug; McCarthy, John; et alii (1996). Comparative Perspectives on Social Movements—Political Opportunities, Mobilizing Structures, and Cultural Framings. Cambridge University: Cambridge University Press.
- ・McAdam, Doug (1982). Political Process and the Development of Black Insurgency, 1930 – 1970. University of Chicago: University of Chicago Press.
- ・McAdam, Doug; Tarrow, Sidney; et alii (2001). Dynamics of Contention. Cambridge University: Cambridge University Press.
- ・菅原和子『市川房枝と婦人参政権獲得運動 – 模索と葛藤の政治史』（世織書房、2002年）
- ・Takenaka, Harukata (2014). Failed Democratization in Prewar Japan: Breakdown of a Hybrid Regime. Stanford University: Stanford University Press.
- ・Tarrow, Sidney (1998). Power in Movement: Social Movements and Contentious Politics. Cambridge University: Cambridge University Press.
- ・Tilly, Charles (1978). From Mobilization to Revolution. Massachusetts: Addison-Wesley Publishing Company.
- ・Tilly, Charles (2006). Regimes and Repertoires. University of Chicago: University of Chicago Press.
- ・Wilson, Sandra (2002). The Manchurian Crisis and Japanese Society, 1931 – 33. United Kingdom: Routledge.
- ・Dickinson, Frederick (2014). Toward a Global Perspective of the Great War: Japan and the Foundations of a Twentieth-Century World. American Historical Review, Vol. 119, No. 4, pp. 1157 – 1159
- ・Garon, Sheldon (1993). Women's Groups and the Japanese State: Contending Approaches to Political Integration, 1890-1945. The Journal of Japanese Studies, Vol. 19, No. 1, pp. 5 – 41
- ・Griffin, Edward (1972). The Universal Suffrage Issue in Japanese Politics, 1918 – 25. The Journal of Asian Studies, Vol. 31, No. 2, pp. 275 – 276.
- ・今中保子「昭和初期婦人参政権運動の形成とその展開 — 婦選獲得同盟広島支部結成を中心にして」（『歴史評論』323巻、1977年）
- ・鹿野政直「婦選獲得同盟の成立と展開 — 「満州事変」勃発まで」（『日本歴史学会編集』319巻、1974年）
- ・松山治郎「婦人公民権案の推移：とくに第五十九議会の審議を中心として」（『法学論集』、1970年）
- ・Molony, Barbara (2000). Women's Rights, Feminism, and Suffragism in Japan, 1870-1925. Pacific Historical Review, Vol 69, No. 4, pp. 639 – 661
- ・Nolte, Sharon Hamilton (1986). Women's Rights and Society's Needs: Japan's 1931 Suffrage Bill. Comparative Studies in Society and History, Vol 28, No. 4, p. 690
- ・成元哲、角一典「政治的機会構造論の理論射程」（『ソシオロギス』、22巻、1998年）
- ・山崎裕美「戦前期における市川房枝の政治観」（『東京都立大学法学会雑誌』、45巻(2号)、2005年）
- ・児玉勝子、山口美代子『市川房枝 政治談話録音 速記録』（インタビュー）（国立国会図書館所蔵、1978年）
- ・Molony, Kathleen Susan (1980). One Woman Who Dared: Ichikawa Fusae and the Japanese Women's Suffrage Movement. Michigan: University of Michigan Press.

自殺の医療化

—19 世紀末から 20 世紀初頭の日本における自殺の医療化—

Kateřina ŠPIROCHOVÁ

カレル大学哲学部日本研究科 修士課程

[Abstract]

My research examines the medicalization of suicide (or suicidal behaviour) in Japan and asks how it has become possible that suicide, which was traditionally in Japanese culture not only accepted, but also had quite romantic connotations, turned at the end of 19th and beginning of the 20th century in serious disease.

At the beginning I try to explain how people understood the phenomenon of suicide in premodern Japan. First, I would like to outline the act of suicide from the perspective of Buddhist religion which dominated Japan for the most of its history. Then I briefly introduce two kind of suicide, which are undoubtedly connected to Japanese culture the most. At the end of the chapter I would like to examine the medical books and clarify whether the physicians before Meiji period perceive the suicide as a mental illness.

In the second chapter, I would like to introduce European psychiatry of 19th century. In premodern Europe suicide was seen as a mortal sin which is very different from „an honourable death“ as it was seen in premodern Japan. But in 19th century this view on suicide drastically changed. Physicians as Pinel, Esquirol or Freud described suicide as a serious mental disease and their doctrine became not only the core of European psychiatry, but also the core of Japanese psychiatry in Meiji and Taisho era as well.

As a third point of my presentation I would like to explain establishing of Japanese psychiatry and introduce the „father of Japanese psychiatry“ Kure Shuzo and his main ideas about treating mentally ill people with focus on suicidal patients with conclusion whether the medicalization of suicide was successful or not and what kind of problems came along.

At the end, I would like to inquire the opinion of the first Japanese modern psychiatrists against suicide with the focus on “philosophical suicide” (demonstrated on the case of Fujimura Misao), suicide connected to bushido codex (demonstrated on the case of Nogi Maresuke) and suicide of lovers and clarify, whether all kind of suicides were considered to be mentally ill or – despite of medicalization of suicide – not and why.

[論文]

はじめに

現在の日本の問題点を挙げるとすれば、必ず自殺が挙げられる。日本と自殺について考えると、多くの人は長時間労働のサラリーマン、一人暮らしの引きこもり、いじめられた学生、家族のために自分の夢をあきらめてうつ病にかかった主婦などが思い浮かぶのではないだろうか。つまり

自殺は社会的で、医学的な問題であると考えられている。しかし、日本ではこれまで自殺は社会的あるいは医学的な問題として認められてきたのだろうか。

歴史を見ると、自殺は医学的な問題というより死に方の一つの方法であった。この自殺の方法の中で最も有名なものは、武士の切腹であろう。だが、心中という二人（一般的に恋人同士や親子）での自殺も知られており、近松門左衛門によって書かれた浄瑠璃によって有名になった。そのため、昔の日本では、自殺に対する一般的な見解は極めて良かった。なお、日本における宗教の教義によって、自殺は応援されなかったが、悪くも思われなかった（注1）。

先行研究によって、どのようにして過去の日本における自殺の現象が考えられていたのか、また現在の日本における自殺の現象が考えられているのかが明らかになっている。

しかし、どのようにして現在のように、自殺は一般的な死に方ではなく精神病によるものと考えられるようになったのかがまだ十分に検討されていない。したがって、本稿では19世紀末から20世紀初頭の日本における自殺の医療化について研究したい（注2）。つまり、本稿の研究の目的は上記のとおり、自殺の概念の変化を解明することである。

まず、昔、特に中世と近代日本において、自殺はどのように考えられていたのかを報告したい。次に、現在の日本の精神医学がヨーロッパの精神医学に基づいているため、ヨーロッパの18-19世紀の精神医学を考察したい。それらの考察の中で、医師による自殺に対する考え方はどのように変化していったのかについて主に考察したい。さらに、日本の精神医学の設立と日本の現代精神医学の創設者と考えられている呉修三について考察したい。最後に、哲学的自殺と心中や切腹などの「伝統的な日本の自殺」に対して、明治の医師はどのような意見であったのかを分析したい。

第一章： 明治まで自殺のイメージ

この章では、昔の日本人は自殺という現象をどう捉えていたのかを簡単に報告したい。まず、宗教は自発的な死に対してどのような意見であったのかを考察する。次に、武士の切腹に見られるような自殺のタイプを分析する。それから、江戸時代によく起こった愛し合った二人が行う心中というタイプの自殺を紹介したい。最後に、昔（特に江戸時代）の医者は自殺を精神病とする意見があったかどうかを解明したい。そして、そのような意見があった場合、どのような意見であったかを検討したい。

第一節： 宗教と自殺

中世と近代の日本における宗教と言え、神道や、儒教、仏教が考えられる（注3）。Blombergによると、神道と仏教は人生の意義に関する質問に答えているため、宗教であると考えられる。しかし、儒教は宗教というより道徳律ではないだろうか（注4）。また、神道は天皇とその一族に関する宗教であり、支配した武士の階級、また一般大衆の宗教は仏教であった。そのため、この論文では仏教に集中して考察したい。

仏教においても、「人はそれぞれ死の時期が来たら、死ぬべきである。天命まっとうする前に死ぬことは次の命に悪い影響を与える」と考えられているため、基本的に自分を殺すことはあまりよいこととされていない。

仏教は自殺をすすめない一方、他方では自殺を却下していない。仏教によると死はあまり重要ではなく、死んでいく自殺者の思想が大事である。なぜなら、転生を信じている仏教系にとって、死は終わりではなく、一つの人生から次の人生への過程に過ぎないからである。これは、人間は死後また生まれ変わるという意味である。しかし、死んでいく人の思想は次の命に大変な影響を与えるだろう。そのため、自殺の動機は極めて重要である。自殺の動機が仏さまに近づこうとすることであるなら、自殺は自殺者にとって悪い因果にはならない。しかし、自殺の動機が憂うつや憎悪などなら、自殺は自殺者の次の人生に対して悪い影響を与える。そして、自殺者は憂い事

や嫌いなことから逃げられずに、次の人生も同じような運命に再び出会ってしまうと考えられている。

第二節： 武士の自殺

西洋では、「侍」と言えば、おそらく刀や切腹を思い浮かべるだろう。切腹とは、自分の腹部を短刀で切り裂いて死ぬ自殺の一つの方法である。腹切り、割腹ともいう（注 5）。武士の自殺は昔、戦争のときに現れたと考えられている。武士は捕らえられ、拷問され、敵の手で殺される代わりに、自分で自分を殺した（注 6）。しかし、その自殺する方法はおそらく刃を伏すことであった（注 7）。儀式的な切腹の礼儀は何年も経て次第に築かれた。切腹が儀式的な行事であると言われる理由は、昔、日本人は個人の魂は腹の中にあると信じていた。そのため、武士は自分の腹を切れば、死を受け入れる心構えを持つという意味であった（注 8）。

動機に基づいて切腹のタイプを詳しく分類する研究者もいる。この論文ではあまり重要ではないため、一番有名で特別なタイプだけを紹介する。そのタイプは、殉死、諫死、人柱である。殉死とは、主君の死を追って臣下などが死ぬことである。殉死は中世に一般的だったが、江戸時代に禁止された。しかし、最後の殉死の事件は 1912 年に起こった。乃木希典陸軍大將は明治天皇の死後、妻と一緒に切腹をした。殉死と人柱は本物の自殺ではなく、自己犠牲であるとする研究者もいる。人柱とは、建物（特に橋、城など）の地下に葬られた人である。人柱になった一般人もいたが、大名の城の場合は、武士は精霊として主君の城を守るために建物の地下で切腹し、人柱になった。そのため、人柱も武士の自殺に属する。

諫死というのは、臣下が主君の意見や行為に同意せず、切腹をすることである。このような動機はヨーロッパの自殺者の動機に一番近いと思う（注 9）。

一般的に、切腹には二通りあった。第一は、捕虜となって敵に拷問され、殺されることを拒否する場合。第二は、罰として上から命じられた場合。この二つ目は、厳しいことかもしれないが、武士は戦死以外には切腹しか名誉の死はなかった。つまり、たくさんの武士は主君のために死ぬ（自殺する）のは名誉であると思っていたようだ。そして、武士は何らかの理由で体面が損なわれたら、切腹でまた自分の名誉を得られる。

次に、武士は幼少の頃から、いつでも主君のために死（自殺する）ねるように育てられた。山本常朝によると、武士道の意味は死である。もちろん、皆生きていたいと思っていたが、武士はどんな時であろうとも死の準備をしていた（注 10）。

切腹は武士ならではの死に方で、一般人は切腹を許されなかった。だが、大衆にとって、切腹はいつもロマンチックな行為であった。ときに、自分の腹を切って、死んでいくとき、短歌や俳句を書く武士は悲劇の英雄の理想であると考えられていた。これらは劇と文学によく現れている。

結果、切腹は武士の生活の一つの部分であり、悪いことより、名誉の死に方として認識されていた。切腹した武士はよく一般人の間でも人気がある文学と劇の主人公になった。つまり、切腹は現在の精神病による自殺とはあまり関係がなさそうである。

第三節： 心中

心中とは、相思相愛の仲にある男女が双方の合意により一緒に自殺することである。心中をこの論文で論じる理由は、心中は精神病に起因する自殺に一番近いからである。

心中は近世以前にもあったのだが、町人に親しまれた文学の影響で、江戸時代に最も顕著になったため、この論文では、近世を中心に論じたい。

江戸時代の心中について書かれた文学の中で最も有名なものは、近松門左衛門の浄瑠璃である。今でも人気があるのは、特に「曾根崎心中」と「心中天網島」の二つである。この浄瑠璃の内容は、ほかの江戸時代の心中に関する話と大体同じである。優しいが、貧乏な商人（他の話では、時々武士の主人公もいる）は美しい遊女を好きになる。しかし、お金がないため身請けもできず、その上家族に対する義理のため、この世で二人が添い遂げることは不可能である。そのため、一

緒に死のうと決める。また極楽浄土で一緒になれることを信じて、来世の契りのために現世での生を断つのである。

江戸時代、心中が極めてロマンチックなことだと考えられていたために、文学者が心中について様々な浄瑠璃や、浮世草子などを書いたのか、それとも、多くの浄瑠璃や浮世草子書かれたために、心中がロマンチックなことだと考えられるようになったのかは、まだ明らかにされていない。しかし、江戸時代の作者と現代の日本文学の研究者によると、この心中の話は実際に起こった事件に基づいている。江戸時代、多くの人は経済的理由で結婚をしたため、男は楽しみを遊郭など、多くの遊女が集まる地域に求めた。そして、貧乏な武士や町人などが遊女を好きになり、ずっと一緒にいたいがお金がないため身請けもできず、一緒に死のうと決めたという事件が起こったと言われる。

果たせぬ愛、貧困、家族の問題などの動機のために、現在も自殺をする人がいる。しかし、江戸時代の心中は精神病というより、社会的な問題であったと考えられる。もちろん、様々な問題に苦しみ、生活が続けられずに自殺をした人（恋人達）もいた。しかし、例えば「心中天網島」の場合、主人公は会った時から一緒にいたいなら心中しかほかに選択肢がないと思い、5年程、心中の願いを持ち続けていた。つまり、この二人は精神病をわずらっていたわけではなく、哲学的自殺を遂げたのだ。

結果、江戸時代の心中は医学的な問題としては捉えられておらず、社会的な問題であるにも関わらず、大衆に極めて強い愛の証という印象を植え付けた。

第四節： 過去の日本の精神医学

1819年の日本において、最初の精神医学書が出た。土田献の「癲癇狂経験編」がこれである。これまで、癲狂は漢方医学の本の一部として扱われていただけであった。しかし、その部分は極めて短く、あまり詳しくなかった。そして、日本における漢方の本は全て 983 年に丹波康頼によって書かれた「医心方」という本（注 11）と中国から伝えられた「黄帝内経」という漢方の本に基づいて書かれていたので、内容は大体同じであった（注 12）。つまり、「医心方」と「黄帝内経」には自殺について全く書かれていなかったのも、1819 年までに書かれたほかの日本における医学書も自殺について触れていないと言われている。

「癲癇狂経験編」には 60 ばかりの症例が記してあるが、その中に自殺未遂の事件もある。「二一歳の男子。三ヵ月ばかり前から物におびえ、不眠、落ち着きなく、死のうとすることがあるので、部屋に閉じ込めた。ダイザイココウブ湯と下気丸を与えていると、三ヵ月で治った。」（注 13）若い男が自殺しそうになったので、家族が医者を呼んだのに、江戸時代の医者は自殺が精神病だとは考えていなかったということがこの記録から分かる。理由は三つある。第一は、訴えていた症状から彼は偏執病で悩んでいた。そのため、ひどく何かにおびえて、今にも川に身を投げそうな様子であった。しかし、これは医師の間では自殺ではなく事故であると考えられる。なぜなら、彼の目的は自分を殺すことではなく、恐ろしさから逃げ出すことだからだ。第二は、その男の場合は、狂気の症状として認められた様々な症状があり、自殺はそのなかの一つであった。第三は、土田はその男を自殺の症状がない狂人と同じように治療し、彼を三ヵ月で治したようである。つまり、土田は特に自殺を治療したのではなく「只の狂気」を治療していた。もちろん、過去の日本において、自殺を精神病として治療した事例もあった可能性があるが、そういう記録がない。

以上より、明治時代まで精神病についての本が少なく、そしてその本の中に自殺についての記録があまりないため、昔の医師は自殺は精神病ではなく、せいぜい狂気の多くの症状の中の一つであると考えていたと推測される。自殺それ自体は（死にたいという願望以外、狂気の症状が出ていないなら）精神病として認められていなかったと言われている。

第二章： 19 世紀のヨーロッパの精神医学

20 世紀初頭の日本の医師の自殺に関する意見は 19 世紀のヨーロッパの医学書に基づいていた。そこで、ヨーロッパの精神医学を大まかに説明したいと思う。19 世紀までキリスト教の影響で、自殺は大罪で、自殺者の魂は直接地獄へ行くと考えられ、死体はキリシタンの墓地に葬られなかった。そして自殺者（時々自殺者の家族も）の財産は取り上げられた。つまり、中世のヨーロッパにおいて、自殺者は狂人というより、犯人としてみなされた。

一般に、精神的に病んでいた人の治療はあまり良いものではなかった。精神病患者は動物として扱い、部屋や地下室に閉じ込め、鎖につないだ。それが 18 世紀末にフィリップ・ピネルと、ジャン・エティエンヌ・ドミニク・エスキロールという二人のフランスの精神科医のおかげで完全に変わった。ピネルは精神的に病んでいる人（自殺未遂した人を含む）もやはり人であるため、鎖につながず、むちを打つ代わりに病気を患う人として扱うべきだと主張した。ピネルの生徒エスキロールは先生の考えに従って、狂気と自殺は精神の病気で、「道徳」で治すべきであると述べた。エスキロールの考えはいわゆる「フランス精神医学」の基本になった。このフランスの医学に対立する立場を取っていたのは、ドイツの医学であった。ドイツの精神科医によると、精神病と自殺は脳の病気であった。つまり、自殺者の脳を見ると、精神病にかかっていたことがわかるという意味である。そのため、ドイツの精神科医は癲狂を体の病気として見直してみた。その考え方のおかげで、認知症などの病気が理解されたが（注 14）、これまでの研究によって、狂気や自殺は脳の病気ではなく、精神の病気なのだということがわかっている。しかし、両方の精神医学は自殺を決意する人は気が狂っていると同意見であった。

心理学の観点から自殺という現象を研究したのは、精神分析学の創始者として知られるジークムント・フロイトであった。フロイトによると、自殺は他の人を殺す願望である。しかし、その目的を達することができない（殺人を実現できない）せいで人は殺意を自分に向けて、究極のところ自殺する。

フロイトの生徒、分析心理学の創始者カール・グスタフ・ユングの自殺に対する意見は先生とは異なったが、また有名になった。ユングは、人は生活に一定の変化がほしく、ステレオタイプの生活を変える他の方法がない場合、自殺をしようと言った。つまり、ユングによると、自殺は人の究極的な変化の願いである。

さらに、20 世紀初頭のヨーロッパにおいて、エミル・デュルケームとトマーシュ・ガリグ・マサリクが自殺を社会的な問題とする有名な理論を書いた。デュルケームとマサリクは自殺を医学的な問題というより、社会的な問題として認めた。その二人によると、人が自殺をする原因は、社会の問題（貧困や社会的不平等など）である。その問題を解消すれば、自殺者の数は極めて減ると考えた。現在は、この理論が最も知られているが、日本では 70 年代になってようやく紹介されたものであり、本論では 30 年代までの自殺の医療化について考察するため、この自殺を社会的な問題とする理論については論じない。

第三章： 自殺の医療化

日本において、精神医学と心理学は 19 世紀末にヨーロッパ医学の採用とともに伝えられた（注 15）。そして、日本の医師はヨーロッパの精神医学として、精神病と自殺も脳（身体）の病気であると述べたドイツの精神医学を選んだ。そのため、1886 年に東京帝国大学（現在の東京大学）で日本で初めての精神科が設立されたとき、自殺という現象を研究する専門は神経病理学と生物学的精神医学になった（注 16）。

日本の現代精神医学の創設者は「呉修三」と考えられており、彼が精神病の中で特に自殺を考察していたため、本研究において極めて重要な人物である。

自殺に対する呉の中心的目的は五つであった。第一は、自殺を科学的に調査し、解明すること。第二は、自殺の議論を公開すること。第三は、政治に公衆衛生の責任を負わせること。第四

は、精神的に病んでいる人に病院の治療を利用可能にすること。第五は、自殺を病気として認定すること。以下を見ると、呉は全ての目的を達した。

呉は自殺について様々な記事や本を書き、東大で自殺に関する講義をし、政府が自殺の研究に資金援助するよう働きかけ、そして病院に精神病にかかり自殺未遂した人のための病床を作った。つまり、呉のおかげで、自殺は精神病の一種として認定され、自殺未遂した人が患者として治療を受けられるようになった。

しかし、この自殺の医療化は長所ばかりではなかった。自殺が精神病の一種として認定されるようになったということは、自殺者はみな狂人だったという意味である。そのため、昔は自殺に対するイメージはあまり悪くなかったというよりロマンチックでさえあったのに、明治時代になると自殺を試みた人は家に閉じ込め、自殺した者の死因として事故や心臓の病気を挙げるようになった。つまり、自殺は、精神医科の間では重要な話題になったが、大衆ではタブーとなった。

それから、呉の理論を詳しく見ると、呉は一度も自殺の原因として社会的な問題を想定したことがない。例えば、遊女に自殺者が多い理由は、その女性は生まれつき精神的に弱く、悪い人間であると言っていた。彼に言わせれば、良い女性は決して遊女の仕事を選ばないというのだ。しかし、その女性は本当に自ら遊女になることを選んだのだろうか。呉は、自殺未遂した遊女を患者として治療したいと思ったが、もしかすると、その女性の経済状態や遊女にならざるを得なかった経緯をよく考えれば、遊女の自殺者の数を減らせたのではないだろうか。

第四章： 20世紀初頭、様々な自殺のタイプに対して、医師の意見

第一節： 哲学的自殺（藤村操の事件）

明治時代の1903年まで、医師や知識のある人達は自殺について呉の意見を採用した。しかし、1903年に藤村操という哲学の学生が「哲学的自殺」を行ったため、医師と教養の高い知的なエリートは二つのグループに分かれた。

藤村操は、遺書で精神的に病んでいるのではなく、正気で自殺をすることを決めたと書いていた。その後、華厳滝へ飛び込んだ。メディアは彼の自殺について様々な記事を書き、彼の辞世の歌は極めて有名になった。メディアと理知的な人にとって、藤村の自殺は人間の精神が自由であることの証である一方で、医師にすれば、藤村は精神的に病んでいた人ということになる。

呉は、藤村は狂人であり、彼の自殺の通俗化は極めて危ない行動であると言っていた（注17）。次に、ほかの精神医学にも重要な存在である大隈重信は、滝に飛び込む方法で自分を殺すことは精神の自由の証ではなく、精神の弱さの証である。と述べた（注18）。それから、澤田順次郎は、藤村は犯罪者であったと述べた。なぜなら、澤田によると、自殺未遂や自殺をするような人は絶望、嫉妬、激怒などの気持ちに負け、その気持ちの影響により行動に走るからである。つまり、自殺者は社会にとって危険な人だという意味である。

20年ほど経った1921年に藤村の自殺は杉田直樹によって検討された（注19）。杉田によると、自殺は一般的な行動ではなく、自殺者は皆、精神的に病んでいる人だというわけではないそうである。そして、自殺は肉体的疾患というより、精神の病気としてフロイトの精神分析によって直すべきである。そのような意見は心理学者の間で極めて人気を集めたが、世界恐慌のせいで、政府はある特定分野（その中に心理学も含まれる）を支援しなくなったため、第二次世界大戦前に消えてしまった。そのため、杉田の意見は大衆に広まらなかった（注20）。

第二節： 現代日本の心中

前章では、明治の精神科医の多くは、自殺は精神病であると捉えていたと考察した。しかし、大衆の意見は正反対であった。特に、切腹と恋人の心中については極めてロマンチックなイメージが広まっていた。そのため、本稿では、明治の精神科医はどのように「伝統的な日本の自殺」を捉えていたのかを考察したい。

精神科医の中では心中は自殺の医療化であると考えられていたのに、メディアの影響で大衆はロマンチックなイメージを抱き続けていた。しかし、心中は切腹と違って、政治的な使用方法がなかったため、医者などに表立って咎められた。

心中に対して最も批判的だったのは中村古峯である（注 21）。中村は精神科医というより、心理学者であった。また、多くの医師と違って、ドイツ精神医学ではなくて、フランス精神医学を重んじた。つまり、心中は、他の精神病と同様に精神の病気として治療するべきだと述べた。中村によると、心中は極めて強い愛の証ではなく、極めて強い死への願望である。なぜなら、死者は愛を感じないから、愛の証ではないというのが理由である。次に、金子準二は、心中は江戸時代に身持ちの悪い遊女から生まれたため、恥ずべきことであると述べた。金子によると、心中は、貧乏な生活をする遊女が純情な男を引っ掛けて、心中をさせるというものである。そのため、精神が弱い遊女を治療すべきであるとした（注 22）。

以上より、20 世紀初頭の日本において、精神科医にとって心中は普通の自殺と同様に精神病として認識されていた。しかし、メディアの影響で、大衆は心中に対してロマンチックなイメージを持ち続けていた（注 23）。

第三節： 武士道に基づいている自殺（乃木希典の事件）

19 世紀末の日本において、欧米諸国は文明国であるが、日本は発展途上国であるという考えが一般に共有されていた。そのため、日本の伝統的な文化（切腹を含める）は非文明的なものであると考えられていた。また、切腹は法律で禁止されていたので、医師は切腹で自殺をする人の精神状態をあまり検討する必要はなかった（注 24）。しかし、それは 1912 年に突然変わった。

1912 年に明治天皇崩御後、日本の陸軍大将乃木希典は妻と共に殉死した（注 25）。殉死は江戸時代に既に禁止され、時代錯誤だと考えられていた。そのため、大衆は乃木の行動にショックを受けた。しかし、天皇（国）のため、自分の命を犠牲することは極めて強い政治的な道具としての価値があったため、日本政府は乃木の自殺の理想化を抑制することなく、後押ししていたと言われる（注 26）。

多くの精神科医は切腹と、国や天皇などのためにした自殺に対して意見を述べることを控えていた。そのため、明治時代の有名な医学者三田定則は「医師は愛国的意図による自殺を裁くことができない」と言った（注 27）。ほかの精神科医は「殉死や、伝統的な日本特有の自殺」は医学の問題ではなく、文化の問題であると述べた。

しかし、乃木の自殺の美化を促進していた精神科医もいた。例えば、心中を研究していた精神科医小峰茂之は自殺を二つのタイプに分類した（注 28）。一つは、西洋でよく見られる「悪い原因のためにした自殺」である。その悪い原因とは例えば、うつ病や同性愛などである。もう一つは、日本（特に、開国まで）に見られた「良い原因のためにした自殺」である。その良い原因とは愛国心などである。小峰は、悪い原因のためにする自殺は抑制すべきだが、良い原因のためにする自殺は称賛したほうが良いと主張した。つまり、小峰は切腹（殉死）は普通の自殺と異なり、精神病ではなく、日本の文化の特別な部分であると捉えたのである。この小峰の自殺に関する理論を、政府は第二次世界大戦のときに利用した。

第五章： 結果

本稿では、どのようにして日本において、自殺が一般的な死の方ではなく精神病によるものと考えられるようになったのかを解明した。最初に、日本医学界において明治時代までに、自殺はどのように考えられていたのかを調査した。その調査によると、漢方医師はほかの狂気の症状がなければ自殺は精神病として捉えなかったようである。そして、殉死は江戸時代に禁止されたにも関わらず、心中と切腹は大衆に理想化されていた。次に、19 世紀のヨーロッパの最も有名な精神科医と心理学者の自殺に対する意見に触れ、フランスの精神医学と日本の医師が選んだドイツの精神医学の差異を大まかに説明した。さらに、日本の精神医学の創設について考察した。精神

医学の創設者、呉修三を紹介し、彼が自殺の医療化に達した目的を解明した。呉の行動は多くの精神的に病んでいた人を助けたが、自殺は死に方としてではなく、精神病と考えられていたので、タブーとなった。最後に、哲学的自殺と心中や切腹などの「伝統的な日本の自殺」に対して、明治の医師はどのような意見であったのかを分析した。医師はメディアと異なり、哲学的自殺は存在せず、そういう自殺をした藤村は只の狂人であったと述べた。同じく、心中の自殺を非難していた。しかし、武士道に基づく自殺に対しては、精神科医の意見はそれほど厳しくなかった。

考察の結果、19 世紀末から 20 世紀初頭まで、ヨーロッパの精神医学に基づいて、日本における自殺の医療化が成功していた。しかし、自殺のタイプによって医師のアプローチが異なった。特に、愛国のためにした自殺は理想化されていた。その理想化は、30 年代、軍隊が権力の座につくのに伴って続いていたが、それは他の研究の課題である。

注

(注 1) この論文では、日本の宗教として神道、仏教、儒教を想定している。

(注 2) 現在、自殺は社会的な問題と医学的な問題として考えられているが、この論文の目的は自殺の医療化を明らかにすることであるため、自殺の医学側面を中心する。

(注 3) 16 世紀にキリスト教が日本に伝えられたが、最初は広まったものの、徳川幕府によって禁止されたため、日本人の自殺に対する考え方に大きな影響を与えなかった。ただし、「ヨーロッパの精神医学」の章にキリスト教の自殺に対する見解が大まかに触れられている。

(注 4) Blomberg, C. (1976). *Samurai Religion: Some Aspects of Warrior Manners and Customs in Feudal Japan*. Sweden: Uppsala. pp. 57

(注 5) <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%88%87%E8%85%B9>

(注 6) Blomberg, C. (1976). *Samurai Religion: Some Aspects of Warrior Manners and Customs in Feudal Japan*. Sweden: Uppsala. pp. 84

(注 7) 鎧を着ていたら、自分の腹部を切り裂くのは無理であり、そして全ての堅苦しい礼儀を守ると、おそらく切腹が終わる前に敵に殺されてしまうのではないだろうか。

(注 8) 昔の日本において、人の魂は頭ではなく、腹にあると信じられていた。理由は、戦のときに武士が首を掻き切れ、頭は身体から離すことができたが、腹は体の中心なので、身体から離すことができなかったからだ。

(注 9) 現在のヨーロッパでは、生存配偶者を自分の死で罰したいという自殺者が多いと言われている。

(注 10) Yamamoto, C. (2004). *Hagakure: Moudrost samuraje z kraje Saga*. Praha: Temple. pp. 9

(注 11) 「医心方」は中国の「諸病原候論」という漢方医学の本に基づいていると考えられている。

(注 12) 西丸 四方『精神医学の古典を読む』(みすず書房,1989 年、58-60 頁)

(注 13) 西丸 四方『精神医学の古典を読む』(みすず書房,1989、56 頁)

(注 14) 先行研究から、認知症は脳の病気であり、精神にあまり関係がないことが明らかになっている。

(注 15) 蘭学のおかげで、ヨーロッパの医学は日本の医師に 17 世紀に紹介され、江戸時代にいくつかのヨーロッパの医学の知識が日本の医学制度(漢方)に入ったが、明治まで詳しく研究されなかった。

(注 16) Di Marco, F. (2013). Act or Disease? The Making of Modern Suicide in Early Twentieth-century Japan. *The Journal of Japanese Studies*, Vol. 39, No. 2, pp. 331

(注 17) 呉の予想は間違っていた。藤村の自殺は(同じ場所で)たくさんの若者を自殺に導いた。

(注 18) 1838 年—1922 年

(注 19) 1887 年 —1949 年

(注 20) Di Marco, F. (2013). Act or Disease? The Making of Modern Suicide in Early Twentieth-century Japan. *The Journal of Japanese Studies*, Vol. 39, No. 2, pp. 342

(注 21) 1881 年—1952 年

(注 22) 今までの研究によって、遊女の心中の場合は、一般的に遊女は心中に積極的ではなく、男が女に心中を強いたことが明らかになっている。

(注 23) この論文では、異性愛者の心中に対する意見だけ分析するが、20 世紀の 30 年代、たくさんの同性愛者も心中をしていた（特に、女性同士）。だが同性愛の心中に対して大衆の意見は精神科医と同じく厳しかった。理由は、同性愛は自殺の一つの原因だと考えられていたからだ。

(注 24) 1895 年に日本は日清戦争に勝利したが、ドイツ、フランス、ロシアからの圧力のために、遼東半島を中国に返還しなければならなかった。それに抗議するため 40 人の兵士が切腹をしたが、これは例外的な事件であった。

(注 25) 妻が夫の後を追って自殺することは後追い自殺と呼ばれている。

(注 26) 天皇のための犠牲は、1940 年代に特攻隊が結成されたことでピークを迎えた。

(注 27) 1876 年—1950 年

(注 28) 1883 年—1942 年

参考文献

- Becker C. B. (1990). Buddhist Views of Suicide and Euthanasia. *Philosophy East and West*, Vol. 40, No. 4, pp. 543-556
- Blomberg, C. (1976). *Samurai Religion: Some Aspects of Warrior Manners and Customs in Feudal Japan*. Sweden: Uppsala.
- Di Marco, F. (2016). *Suicide in Twentieth-century Japan*. New York: Routledge
- Di Marco, F. (2013). Act or Disease? The Making of Modern Suicide in Early Twentieth-century Japan. *The Journal of Japanese Studies*, Vol. 39, No. 2, pp. 325-358
- Freud, S. (1917). *Mourning and melancholia*. London: The Hogarth Press.
- Harvey, P. (2000). *An Introduction to Buddhist Ethics*. United Kingdom: Cambridge University Press.
- Heine, S. (1994). Tragedy and Salvation in the Floating World: Chikamatsu's Double Suicide Drama as Millenarian Discourse. *The Journal of Asian Studies*, Vol. 53, No. 2, pp. 367-393
- Hurst, G. C. (1990). Death, Honor, and Loyalty: The Bushidō Ideal. *Philosophy East and West*, Vol. 40, No. 4, pp. 511-527
- Kitanaka, J. (2006). *Society in Distress: The Psychiatric Production of Depression in Contemporary Japan*: thesis. Quebec: McGill University
- Manning, J. (2012). Suicide as social control. *Sociological Forum*, Vol. 21, No. 1, pp. 207-227.
- Masaryk, T. G. (1998). Sebevražda hromadným jevem společenským moderní osvěty. Praha: Ústav T. G. Masaryka.
- Nitobe, I. (2002). *Bushido: The Soul of Japan*. Tokyo: Kodansha.
- Robertson, J. (1999). Dying to Tell: Sexuality and Suicide in Imperial Japan. *Signs*, Vol. 25, No. 1, pp. 1-35
- Tinková, D. (2004). Hřích, zločin, šílenství v čase odkouzlování světa. Praha: Argo.
- Yamamoto, C. (2004). *Hagakure: Moudrost samuraje z kraje Saga*. Praha: Temple
- 西丸 四方『精神医学の古典を読む』(みすず書房、1989 年)

明治維新と岸和田藩

－士族の動向を中心に－

絹川 紘平

関西大学大学院文学研究科 博士課程前期課程

[Abstract]

The present study was undertaken in order to clarify the movements of *shizoku* (warrior families) in *Kishiwada-han* (the feudal domain of *Kishiwada*) after the *Meiji* Restoration. Some studies have mentioned it, but few studies have attempted to grasp it integrally. Therefore, it is important that we seek integrally solid evidence showing the movements of the *shizoku* of *Kishiwada-han*.

In the closing days of the Tokugawa Shogunate, the government of the *Kishiwada-han* had financial trouble, like other feudal domain governments at that time. So the *Kishiwada-han* attempted to cut its budget.

As part of the *Kishiwada-han* plans to cut its budget, the *Kishiwada-han* cut the hereditary stipend greatly. After the abolition of feudal domains and the establishment of prefectures, the *Meiji* government continued to cut the hereditary stipend. In 1876, the *Meiji* government carried out *Chitsuroku-shobun* (the Abolition Measure of Hereditary Stipend). Many *shizoku* in *Kishiwada-han* became poor for this reason. As a result, they tried to go on the land or get a job as teachers and local public officers. In addition, some of them established organizations to help the poor classes of them. The brick manufacturing association and the vocational aid center for *shizoku* are typical examples of such organizations. Their living conditions improved because of these activities.

During the 1880s, some *shizoku* and local volunteers made plans to honor Mr. *Okabe* (the previous feudal lord of *Kishiwada-han*). First, they planned to build *Okabe* shrine in the ruins of *Kishiwada* castle but this project didn't come to fruition. Instead of it, the monument that honors Mr. *Okabe* was built there. In 1888, the ruin of *Kishiwada* castle was maintained as a park and commemorative ceremony was held. In 1893, *Nagamoto Okabe* who was the last feudal lord in *Kishiwada-han* was in attendance. He had a conversation with *shizoku* of the *Kishiwada-han*.

In conclusion, *shizoku* in *Kishiwada-han* had to find new job for cutting their hereditary stipend. So they turned to jobs in farming, teaching or local public officers. And some of them established organizations to relieve the financial problems suffered by poor classes. Their living conditions changed for the better due to these activities. By the way, *shizoku* in *Kishiwada-han* kept a close relationship with each other after the abolition of feudal domains and the establishment of prefectures. And they also continued a close relationship with the previous feudal lord. In the 1880s, they took action honors Mr. *Okabe* with the help of volunteers. Eventually, their movements resulted in building the monument of Mr. *Okabe* and holding a commemorative ceremony.

はじめに

今からおよそ 400 年前である 1603 年（慶長 8）、関ヶ原の戦いに勝利した徳川家康により江戸幕府が開かれ、全国各地に設置された藩が支配をする幕藩体制が築かれた。こうした各地の藩士をはじめとした武士はここから徳川慶喜が政権を朝廷に返還する 1867 年（慶応 3）の大政奉還まで実に 300 年近くにわたり支配層となった。しかし、大政奉還からはじまった新政府の一連の政策により、各地の武士、すなわち士族は従来の職や特権を失うこととなる。では、その後士族はどのような進路をたどったのだろうか。こうした明治時代以降における全国各地の士族の動向についての研究は史料的な制約などもあり、十分に進展していない状況となっている。

本報告では、大阪府南部にかつて存在した岸和田藩における士族の動向について、史料制約がある部分もあるが、第一章において士族自身の動向を主に就職先などの進路の側面から検討し、第二章でかつて士族が就職していた岸和田城郭の変化をみることにより、その一端を明らかにしたい。

史料としては、士族であり廃藩後、堺県会議員などを務めた熊沢友雄が 1852 年（嘉永 5）から 1895 年（明治 28）にかけて執筆した『熊沢友雄日記』を主に用いた。また、士族の氏名・家禄などの基本的情報は 1873 年（明治 6）に作成された「岸和田士族名簿 附家族名前年齢」（大阪市立大学学術情報総合センター蔵。以下、「岸和田士族名簿」と表記）に基づいた。

第一章 家禄の削減と藩士の生活

1867 年（慶応 3）、徳川慶喜は大政奉還を行い、天皇を中心とした新政府が成立することとなった。新政府は慶喜に対し、領地の一部返還などを要求したが、これに反発した慶喜ら旧幕府軍は新政府と武力衝突することとなり、いわゆる戊辰戦争として 1869 年（明治 2）5 月頃まで争いが続くこととなる。その中で、各藩は新政府か旧幕府どちらの体制につくかの決断に迫られ、多くの藩は新政府側に追随することとなった。

岸和田藩も最終的には新政府側につき、1868 年（明治元）には藩主が岡部長寛から長職へと家督が相続された。その後、版籍奉還を経て藩財政の改善が試みられる中、藩士の家禄も削減された。特に、1870 年（明治 3）に行われた岸和田藩布告では多くの藩士の家禄が旧高から大幅に削減され、無勤者には家禄の一部の上納を求めたため、生活に大きな影響を与えた。その後、1871 年（明治 4）には廃藩置県となり、岸和田藩は岸和田県へ移行した後、堺県へ合併された。家禄の支給は廃藩後も政府によって継続されていたが、全国の士族に家禄を負担することは難しく、1876 年（明治 6）に金禄公債証書の交付をもって家禄の支給を停止する秩禄処分を断行した。こうした一連の流れの中、旧岸和田藩士族も新たな進路を見出す必要に迫られた。以下、旧岸和田藩士族の進路選択でみられた各事例についてみていく。

（i）帰農

帰農は、明治初年によくみられた方法であった。たとえば、1871 年（明治 4）8 月に岸和田県が行った布告には、「今三、五年之間ニハ、必家禄上納之時節到来可致候間、今ヨリ家禄ヲ度外ニ置キ、家産ヲ経営致シ、何時ニテモ農商ト可相成様有之度事」などとあり、家禄が廃止されるまでに農業や商業へ従事することを促している（注 1）。そうした中、熊沢友雄も県吏を辞任したことから帰農を検討していた。同年 8 月中旬、熊沢は城下町郊外の春木村村長であった倉橋惣吾を呼び寄せ、翌月屋敷地を購入し、二反を「帰田ノ策ヲ予メ立ツル」ために検査したと日記に記している。10 月 15 日には前庭の前栽を取り除くなど帰田の準備をすすめていた。その後、熊沢は別の仕事をする事となったため、この帰農は実行されなかったが、士族で土生滝村在住の勝井氏の元を訪れたとする記述の中で「同氏去ル二月ヲ以同村ニ退去ス、帰農ノ方向ヲ確定スルヲ以テ也」（1872 年（明治 5）4 月 13 日条）などとあり、帰農は明治初年に士族が選択した進路の一つとしてよくみられた方法であった。

(ii) 教員

廃藩から一定期間が経過し、諸制度が整備されるようになると、教員あるいは県吏への就職が選択肢の一つとして加わった。うち県吏については (iii) で後述する。

1880 年 2 月に刊行された『堺県教員録』には、旧国名（和泉・河内・大和）別に堺県の師範学校・小学校教員 1836 名分の情報（族籍、出身地、氏名など）が記されている。族籍欄の情報に基づき、堺県下で士族が教員に占める割合についてみると、族籍欄が未記入などによる族籍不明者（21 名）を除き、『堺県教員録』には全体で士族 599 名、平民 1216 名の情報が記されている。そして、族籍不明者を除いた全体における士族の占有率（士族の教員数／平民・士族の教員数）はおよそ 33 パーセントとなり、堺県において士族が教員に占める比率はおよそ 3 割であった。

同書と「岸和田士族名簿」の人名を照合すると、旧岸和田藩士の氏名は 97 名見られ、彼らのほとんどは旧岸和田藩領地、あるいは和泉国の地域を中心に就職していた（注 2）。

城下に近い現在の岸和田市内に存在した小学校で同じ方法を用い、各校の士族の占有率（士族／全教員数）を割り出すとおよそ 77 パーセント（うち旧岸和田藩士族のみに限るとおよそ 57 パーセント）となり、士族の占有率は堺県の平均に比べてさらに高くなる〔表一〕。特に城下に近い小学校では、教員のほぼ全員が士族である場合もあり、教員という職業が士族にとって重要な選択肢の一つであったことがうかがえる。

和泉国以外で教員となった人物は大きく減少するが、河内国で 6 名、大和国で 4 名それぞれ旧岸和田藩士族の氏名を見ることができる。では、こうした背景として挙げられるものはどのようなものだろうか。

1873 年（明治 6）、堺県は 5 月に 64 校、7 月に 50 校の小学校増設の計画を相次いで打ち出したこともあり、教員養成が急務となった。7 月に堺県が出した布達には「管下年齢二十歳ヨリ三十五歳マテニテ、日本外史・国史略・十八史略ノ中一ト通り素読相済候者」のうち試験で選抜した 50 名を「六ヶ月中学ノ失費ヲ以テ入校致サセ」、「当時助教ニテ学業未熟入校志願ノ者」も中学で「六ヶ月間研業ノ上」、各小学区に派出するとある。さらに 20 歳以下でも才能がある者を中学へ入校させる場合があるとしており、短期間の研修で教員を充足させようとした状況をうかがうことができる（注 3）。

そうした状況は『熊沢友雄日記』内においてもみることができ、同年 10 月 11 日付の日記には次のように記されている。

午前十時区長保科来リテ、堺学校掛リ官員朝比奈何某ノ内命ヲ伝エテ、友雄ヲシテ河州枚方小学ノ助教タラシ（メ職カ）ントス、命忝シト雖トモ、家事紛擾、俄ニ遠地ノ移住ヲ難シ、且人ニ教ユルノ學術ナキヲ以テ、（宜カ）且ク猶予ヲ乞ヒ、閑ヲ待テ一時師範学校ニ入り、而シテ命ノ忝ヲ拝スヘキノ由申断リ置ケリ

当時の区長であった保科定寧から「堺学校掛リ官員朝比奈某」の内命として枚方小学校の助教を依頼された熊沢であったが、様々な事情から今の自分が小学校教員になることはできない旨を述べ、固辞したとしている。さらに同月 15 日付の日記には「朝ノ間、須藤与惣来ル、此人河州国分村ナル小学校ノ教師ヲ命セラレ、明日ヨリ出立ノ由」とあり、熊沢の親族であった士族の須藤が国分村の小学校教員になったことが記されている。具体的にどのような経緯で国分小学校の教師になったかは記されていないが、日記の時期から熊沢と同様に内命を受けたものであると思われる。

翌 1874 年（明治 7）3 月 12 日付の日記には「夜下津終始来ル（中略）同人此間堺中学校へ学業試験ニ罷出ノ由、小学ノ助教ノ員ニ備ヘシメンカ為、先頃ヨリ申勸メ置ク所也」とある。

これらの日記中の内容から、小学校増設などの事情により、内命を受けるかたちで教員に従事していた可能性があった点や、新たな生計を得る手段の一つとして教員を目指していた士族がいたことがうかがえる。

(iii) 県吏

県吏についても教員の方法と同様に堺県の「職員録」・「職員分課表」（注 4）と照合して旧岸和田藩士族の人数を調べた。その結果を教員のものとともにとまとめたものが〔表 2〕である。同表によると、とりわけ「邏卒」「巡査」をはじめとした警察関係職への就職が多くみられた。これは岸和田に限らず、どの藩の士族においても同様であった。また、県側も士族の人材に期待をしていたようであった。

たとえば、1877 年（明治 10）に西南戦争が勃発した際、全国で予備巡査の募集が行われた。堺県では同年 5 月 28 日に巡査 800 名を募集する布達を行った。同巡査の募集要項は 18 歳以上 40 歳以下の者が対象で、「強壯忍耐之者」が条件であり、通常巡査のような試験は行わなかった（注 5）。

同年 6 月 10 日付の『熊沢友雄日記』には、「今般堺県ヨリ新ニ臨時巡査招集ニ付、岸和田士族説諭之儀、区長保科来ツテ依頼有之、依テ県ノ達書不都合ノヶ条ヲ摘ミ意見ヲ申述置」とある。『大阪府警察史』ではこうした臨時巡査の募集には、士族が多く応募したことが指摘されているが、日記文中に「士族説諭」などとあることから、応募に至る以前の段階で優先的に募集が行われていた状況をうかがうことができる（注 6）。多くの士族が警察関連職に従事したのは、職業が従来の「武士」に近い要素を持っており、県側も優先的に採用を行っていたことなどが理由ではないだろうか。

このほか事務職員に関しては警察関係の職業に比べ人数が減るものの、租税関係などの職に従事する者などがいた。また、1878 年（明治 11）の『堺県職員録』には、各小区の事務所に勤める者の氏名が掲載されており、岸和田村に 4 名（「副区長」「戸長」「副戸長」「学区取締」）、佐野村に 1 名（「副戸長」）と近傍地で勤務し、地域の行政に携わる者の中に旧岸和田藩士族の氏名がみられた。

(iv) 煉瓦製造場、士族授産場

〔表 2〕をみると、教職に従事する者はおおむね 10～20 石の階層、警察を中心とした県吏に従事する者は 5～10 石の階層が中心であったことをうかがうことができる。反面、無禄～5 石までのいわゆる低階層の旧藩士はこうした職業に従事できていない傾向がみられる。貧困に陥った士族を救済するため、全国各地で士族授産場などの事業が行われたが、これは岸和田でも同様であった。岸和田で士族がかかわった事業としては、特に第五十一国立銀行、煉瓦製造所と士族授産場が挙げられるが、特に貧困層を対象にして展開された事業が後者の 2 つである。

煉瓦製造所は 1872 年（明治 5）に岸和田県大参事や堺県権典事などを勤めた士族の山岡尹方が練兵場跡に丸窯三基を築造して無職の士族を救済しようとしたのがはじまりであった。同製造所は同業他社の参入による煉瓦の供給過多などにより、一時経営難に陥ることになるが、のちに財界人の支援を受け「岸和田煉瓦株式会社」として地元の有力企業の 1 つへ成長していった。

士族授産場は堺県が大阪府と合併した後の 1886 年（明治 19）、政府からの貸付金に基づき、岸和田城内に設立された。この士族授産場は、和歌山県から専門家を招聘し、地元ではじめて綿ネルの生産を行ったことでも知られている。

以上(i)～(iv)の事例を取り上げた。こうした取り組みにより、旧岸和田藩士族の生活状況はどのようになったのだろうか。1898 年（明治 31）に大阪府が作成した『府治提要草案』内の「士族の現況」には、次のように記されている。

此地士族ハ固五百三拾五人ニシテ目下現住スルモノ百七拾八人ナリ余ハ他ヘ離散セリ氣風概ネ温和躰直ニシテ活潑有為ノモノ少ナク其十分ノ三余ハ官吏トナリ教員トナリ或ハ木綿機織ヲ以テ業トス故ニ生計上寛裕ナルモノアルナシト雖モ目下東西ニ呻吟シ饑餓ヲ訴フルモノ絶ヘテ之レナキカ如シ

「生計上寛裕ナルモノアルナシ」という条件がつくものの、「東西ニ呻吟シ饑餓ヲ訴フルモノ絶ヘテ之レナキ」としており、官吏、教員、木綿機織（士族授産場のことを指すと思われる）などに従事し困窮して生活が立ちゆかなくなるほどの者はいなくなったとしている。

旧岸和田藩士族の多くが家禄の削減により困窮する中で、新たな生活確立する必要に迫られた。そうした中、教員や警察関係職をはじめとした県吏を選択する士族が特に中間層を中心に一定数みられた。一方、無禄をはじめとした比較的低い階層の士族はこうした職にはあまりついておらず、岸和田では貧困層を救済する目的で、煉瓦製造や士族授産場などの事業が設立された。士族はこうした選択肢の中から新しい進路を選択し、生活確立していった。

第二章 岸和田城跡における旧藩主の顕彰と公園化

岸和田城は、廃藩直前の時期にはすでに財政難により、城郭の修繕が難しい届出を政府に上申していた。廃藩置県直後には城郭の堀などの埋め立ての実施が行われ、藩主がかつて居住していた二の丸御殿は岸和田県庁、堺県出張所を経て順次払い下げが行われた。

その他の建物などは1873年（明治6）の「全国城郭存廃ノ処分並兵營地等撰定方」により、廃城処分となったのちに陸軍省などから堺県へ所管が移管した。そして同年11月には、堺県が所有していた他の陣屋とともに地元住民に対して払い下げが行われた。払い下げが行われた「粃米蔵」や「櫓門」をはじめとした建物は、いずれも旧藩士ではない者が落札している（注7）。

旧岸和田藩士族と城跡がかかわる内容としては、堀跡などの土地を熊沢ら士族が借地していたと思われる記述が日記文中にある。また、1873年（明治6）12月に、政府は家禄・賞典禄100石未満の奉還希望者に対し、産業資金のための秩禄公債を与える太政官達を公布した。この際、政府は家禄を奉還して資本金を受け取る者に対して、農業・牧畜などの用途に限定されるものの、官有林の土地を原則として相当する価格の半価で払い下げする「産業ノ為メ官林荒蕪地払下規則」を同時に公布している。堺県におけるこの払い下げの対象地の中に「堺町口 岸和田城郭跡土手地」などの記述があり、岸和田城跡の一部も払い下げの対象地になっていたと思われる。1877年（明治10）11月26日には旧岸和田藩士族の寺西修吾ほか士族9名らが行った願出が聞き届けられ、城跡払い下げの資金を上納するよう指令が出された。12月7日には、岸和田村へ地代10円15銭を納める指令が追加で出されている（注8）。

こうした経緯を経て、明治10年代に入ると、岸和田では相次いで城郭跡を活用しようとする動きがみられるようになった。

まず企画されたのが神社の建立である。1880年（明治13）9月3日付の『熊沢友雄日記』には「岡部神社設立ニ付、内談会相開候旨ニ而参会之儀申来、但、明日午後第一時ヨリ本町元時習社ヲ仮会場トスルノ由」と記されている。当時堺県会議員だった熊沢は「県会残務用ニ而出堺スルニヨリ」この会議には参加しなかったため、どのような内談が行われたかは不明であるが、この時期に神社の建立が計画されていたことがうかがえる。

神社の名称が「岡部神社」となっていることから、藩主の顕彰を目的とした神社の建立を目指していたと思われる。当時、藩主の顕彰を目的とした神社を建立する動きは全国でみられ、岸和田周辺では、旧狭山藩の葛西神社（1874年（明治7））、旧尼崎藩の桜井神社（1882年（明治15））などが建立されている。うち葛西神社については1897年（明治30）に作成された史料に建立の経緯について「明治七年中、旧狭山藩臣等相謀リ、旧君家ノ恩徳ヲ懷想シ、尚ホ将来旧藩臣民ノ子孫ヲシテ、永世之レヲ景仰セシムル為メ創建セシ所」と記されている（注9）。

神社に直接関連する記事ではないが、岡部神社創建の記事がみられる 4 年前の 1876 年（明治 9）2 月 6 日付の『熊沢友雄日記』には、本徳寺でおよそ 200 名の旧岸和田藩士族が集会を行い、藩主の東京移住後「士族前途ノ会計ニ勞シ、一度東ニ向フテ大恩ヲ謝ス事能ハス、頗旧累代ノ恩ヲ忘ルハニ似タル事」を歎き、有志が積立金を行って東京の藩主に挨拶へ伺うことを企画した旨

が記されている。同年 4 月 8 日付の日記には「毎月六日ヲ例日トシ、右禪寺ニ集会シ、旧主累代ノ恩ヲ語り、就テハ同志中所業ノ善カラサルアレハ諱マスシテ忠告スヘク」などともあり、単なる積立金を目的とした集会ではなく、藩主への恩を語る中で士族間の結束を強める目的も意図されたものであったことをうかがうことができる。前述した葛西神社の事例からも、岡部神社の建立は士族間で結束を深め、旧藩を示す象徴として企画されたものなのではないだろうか。

翌 1881 年（明治 14）1 月 12 日付『朝日新聞』（大阪版）朝刊には、「予て噂の高き泉州岸和田の旧城内へ建築する岡部神社ハ旧藩士及び豪商農其他諸有志の醵金も夥多に嵩みたれば近日の中築造に着手すべし」とあり、旧岸和田藩士族だけではなく、幅広い層から寄付金を募り近日中に着工する予定であったと記されている。

しかし、結局のところ神社の着工はなされなかった。これ以上の史料がないため、詳細は不明であるが、おそらく岸和田城周辺には岸城神社と三の丸神社がすでに存在していたところが理由として大きかったのではないかと思われる。

この後、1882 年（明治 15）には記念碑建設の計画が持ち上がる。神社との直接の関連性は不明であるが、時系列を考慮するとおそらく神社建立の代替で企画されたものと思われる。同年 7 月 11 日付の『熊沢友雄日記』には「旧城記念碑醵金第二出壺円ヲ出ス、先日分ト合セテ式円ナリ」とあり、士族などから改めて寄付金を募っていたことが記されている。この後、同年 12 月 24 日付の日記には「旧城本丸ニ到リ、旧知事家ノ記念碑ヲ参観ス、起功未タ半ニシテ落成ニ到ルヘキハ尚十日余ヲ費スヘキノ由」とあり 1883 年（明治 16）前後に整備が完了したようである（注 10）。

そして、この前後から岸和田城跡は地域の行事などに活用されていった。一例を挙げると、1885 年（明治 18）4 月 18 日付の『熊沢友雄日記』には岸和田小学校増築落成式終了後に城跡を見学したとの記述があるほか、1887 年（明治 20）3 月 28 日には裏節句により「海辺及旧城郭天守台辺甚賑ヘリ」と記されており、天守台周辺が一般市民に向けて開かれた場となっていた様子がわかる。

同年には本丸一帯を仮公園として整備する計画が持ち上がった。9 月 11 日付の『熊沢友雄日記』には「北町宮内棟吾・南町石井幸三郎来ル、旧本丸趾ヲ公園地トナシ、氏神移転等ノ内議ヲ申来ルナリ」と本丸に公園、三の丸へ氏神移転をする企画がなされていた状況をうかがうことができる。このうち、氏神移転は実現しなかったようであり、翌 1888 年（明治 21）3 月 8 日に熊沢は仮公園を訪れ、「植付タル樹木ノ模様及道路取広ケ等ノ有様ヲ巡視」したと日記に記している。

そして、同年 4 月、旧本丸において「岡部氏記念碑記念祭并仮公園開設式」が開催された。4 月 24 日付の『朝日新聞』（大阪版）朝刊によると、当日は大阪府知事をはじめ、郡長や議員、戸長など 550 名あまりが出席し、旧藩士による「故式の調練」や各町より「踊家台」、花火の打ち上げなどが行われた。記念祭はその後も毎年 4 月に開催され、『熊沢友雄日記』には「旧主家紀年祭」などのかたちで記されている。

その後、1893 年（明治 26）の記念祭には旧藩主である岡部長職が出席することになった。岡部長職は、廃藩置県後、慶應義塾を経てアメリカへ留学し、外務次官などを務めており、当時は貴族院議員であった。4 月 18 日、当時大阪に寄留していた熊沢は岡部長職が明日梅田に着くという知らせを受け、地元と大阪在住の旧藩士らと難波の神戸屋に行き、打ち合わせをした。そして、翌日午前 5 時に大阪駅で岡部長職を迎えに行き、同氏は記念祭へ出席することとなる。当日の様子について熊沢は次のように日記に記している。

午前五時蓐ヲ出テ朝飯ヲ喫シ梅田ニ到、追々出迎人集合シ、六時過着車、直チニ神戸屋ニ案内シ朝飯ヲ呈シ、暫休息之上難波停車場ニ先導シ、大阪人ハ此所ニテ辞シ去、川井・佐々木・近藤及余ト五人随従、堺ニ到、当地ヘハ岸和田ヨリ凡五、六十名余ノ出迎アリ、午前十一時過岸和田着、暫ニシテ一旦我店ニ帰り、午飯ヲ喫シ、夫ヨリ旧主ニ從ヒ本日ノ旧本丸紀念祭場ニ出席ス、午後二時祭典始マリ、畢テ折詰ニテ祝酒始マリ、五時過相済、旧主滞在所朝比奈君宅ニ至リ、同所ニテタ飯ヲ喫シ、夜十二時過迄旧ヲ語り、帰ツテかしや町之店ニ臥ス

堺に岡部長職が着いた段階で「岸和田ヨリ凡五、六十名余」の出迎えがあるなど歓迎を受けていた様子をうかがうことができる。祭典終了後も、長職は旧岸和田藩士族らとの懇談をつづけたらしく、熊沢が「夜十二時過迄旧ヲ語り」と記していることから、士族らと交流を深めていた様子がわかる。

長職はその後も岸和田に滞在し、翌 20 日は岡部家の菩提寺である泉光寺へ参詣後、旧藩士のうち 70 歳以上の者らと懇談を行った。21 日は憲兵、郡長、警察署長らとの会談、22 日は学校、郡衙、紡績工場など岸和田の様子を巡覧した。23 日は二郡大懇親会が開催され、長職は演説を行った。この日には余興として花火の打ち上げも行われたという。そして 24 日、長職は岸和田を離れ、奈良へと向かった（注 11）。

神社の建立計画からはじまった城跡の利用構想であるが、その計画は記念碑の建設を経て、仮公園の整備、記念祭の開催へとつながった。そして、1893 年には旧藩主の長職が訪れるなど旧岸和田藩士族をはじめとした地元住民との交流の場へと整備されていったといえる。

なお、本丸などはその後、岡部氏の所有となったが、1928 年（昭和 3）に長職の長男である岡部長景が子爵になることを記念して市へ寄付された。1930 年（昭和 5）には昭和天皇の御大典事業の一環で、本丸跡は千亀利公園として整備された。

おわりに

以上の通り、第 1 章、第 2 章を通じて旧岸和田藩士族の動向の一端をみてきた。廃藩置県後、家禄の削減などに伴い士族は新しい生活をする必要に迫られ、一部の士族は教員や巡査を中心とした県吏に職を求めた。反面、こうした職業に従事できたのはおおむね従来の家禄を基準にすると中間層以上が中心であり、無禄など低階層の士族はあまりこうした職には従事することができなかった。教員・県吏などになれなかった貧困層の士族を救済する目的で、山岡尹方の煉瓦製造場や政府からの貸付金を元に士族授産場などが設立された。旧岸和田藩士族の状況について後に大阪府は「生計上寛裕ナルモノアルナシト雖モ目下東西ニ呻吟シ饑餓ヲ訴フルモノ絶ヘテ之レナキカ如シ」と評しており、極端な貧困状況に陥っている藩士はいなくなったとしている。

一方で、廃藩置県後も士族間の交流や、藩主と藩士の関係性は失われることなく続いており、士族の生活に一定の目途がついた明治 10 年代に入ると旧藩士ら地元の諸有志により、藩主の顕彰を行う動きがみられるようになった。当初、神社の建立が計画されたが、これは周辺の他藩の事例とは異なり実現しなかった。次いで、記念碑の建設が計画され、こちらは 1883 年（明治 16）初旬に整備が完了した。1888 年（明治 21）には仮公園の整備が行われ、同時期に「岡部氏記念祭」が開催された。この記念祭はその後も続けられ、1893 年（明治 26）には、旧藩主の岡部長職も記念祭に出席し、旧藩士ら地元住民と交流を深めた。明治 10 年代に入り、神社から「旧藩士及び豪商農其他諸有志」がはじめた旧藩主の顕彰事業はこれにより一定の成果をあげたといえる。

注

- (注1) 岸和田市史編さん委員会編『岸和田市史』第4巻近代編（岸和田市、2005年、49頁）
- (注2) 前掲『岸和田市史』第4巻近代編、85頁には「明治十三年刊行の『堺県教員録』によると、士族・卒の名が一一人みえる」とあり、本報告での人数と一致しないが、『岸和田市史』では士族の氏名を確認した史料が明示されていないため、本稿では改めて「岸和田士族名簿」と照合した人数を採用した。また、『堺県教員録』・「岸和田士族名簿」双方の史料を照合して一字違い（「廣瀬佐仲」と「廣瀬左仲」）など旧岸和田藩士族の可能性のある人物もいたが、それらはここでの人数に反映していない。
- (注3) 『大阪府教育百年史』第1巻概説編（大阪府教育委員会、1973年、144～148頁、231～232頁）。「小学校増設および教員養成につき達」（山中永之佑編『堺県法令集（2）』（羽曳野市、1993年、55～56頁））。
- (注4) 堺県職員録（職員分課表）については各書により人数・情報量にばらつきがある。本報告では、「堺県職員分課表」1872年10月調（岸和田市史編さん委員会編『岸和田市史』第8巻史料編Ⅲ（岸和田市、1980年）174～176頁）、「堺県職員分課表」1874年12月改（前掲『堺県法令集（2）』lxxii～lxxvii頁）、原孫二編『堺県職員録』明治11年7月改（村田辰刊、1878年）の3点と「岸和田士族名簿」との照合を行った。
- (注5) 「堺県下での巡査八百名招募につき達」（山中永之佑編『堺県法令集（3）』（羽曳野市、1994年、68頁））
- (注6) 大阪府警察史編集委員会編『大阪府警察史』第1巻（大阪府警察本部、1970年、243～245頁）
- (注7) 「岸和田城郭建物伯太吉見丹南狭山陣屋建物立木石類御払下高札取調帳」（「元狭山藩ノ民并ニ貫属士族陪徒ノ義同書写」大阪市史編纂史料312（大阪市立大学学術情報総合センター蔵））
- (注8) 相澤正彦『岸和田志』（和泉刊行会、1931年、179～180頁）
- (注9) 「葛西神社再建の経緯」（大阪狭山市史編さん委員会、大阪狭山市教育委員会教育部社会教育・スポーツ振興グループ市史編さん担当編『大阪狭山市史』第4巻史料編 近現代（2012年、687～690頁））687頁
- (注10) 記念碑は当初天守台の上に設置されていたが、後に移設され現存している。なお、記念碑自体の建立年月日には「明治十五年十二月」と記されている。
- (注11) 『大阪毎日新聞』1893年（明治26）4月26日付朝刊1面。なお、岡部長職はその後も岸和田を訪れている。一例を挙げると、1908年（明治41）の司法大臣在任時、1917年（大正6）の「岸和田藩治記念祭」開催時に訪れており、それぞれ訪れた際は地元から歓迎を受けた。司法大臣時代に岸和田を訪れたことを報じた1908年11月5日付の『大阪朝日新聞』朝刊では「式場は城内老松の下で旧藩の老若は恰も慈母を迎ふるが如く疾くも卓を設けて子爵（筆者注：岡部長職）の来場を待ちつゝある」「天皇陛下万歳は先子爵の口から唱へらるゝ四百余名の会衆は之に合唱する」など歓迎されていた様子をうかがうことができる。また、「岸和田藩治記念会」を報じた1917年5月16日付の『大阪朝日新聞』朝刊には「財源なる寄附金募集も極めて好成绩にて既に所期の金額に達せり」と藩治記念会に関する寄付金がすぐ集まったことが報じられており、長職が明治以降も地元で親しまれていた一端をうかがうことができる。

参考文献

- ・『岸和田教会百年史』（日本基督教団岸和田教会、1993年）
- ・相澤正彦『岸和田志』（和泉刊行会、1931年）
- ・大阪狭山市史編さん委員会、大阪狭山市教育委員会教育部社会教育・スポーツ振興グループ市史編さん担当編『大阪狭山市史』第4巻史料編 近現代（2012年）
- ・小川原正道『評伝岡部長職 ―明治を生きた最後の藩主』（慶應義塾大学出版、2006年）
- ・落合保『岸和田藩志』（東洋書院、1977年。初版1945年）
- ・岸和田市教育委員会編『熊沢友雄日記(1)』（2008年）
- ・岸和田市教育委員会編『熊沢友雄日記(2)』（2010年）
- ・岸和田市教育委員会編『熊沢友雄日記(3)』（2010年）
- ・岸和田市教育委員会編『熊沢友雄日記(4)』（2011年）
- ・岸和田市教育委員会編『熊沢友雄日記(5)』（2013年）
- ・岸和田市教育委員会編『熊沢友雄日記(6)』（2014年）
- ・岸和田市教育委員会編『熊沢友雄日記(7)』（2016年）
- ・岸和田市史編さん委員会編『岸和田市史』第3巻近世編（岸和田市、2000年）
- ・岸和田市史編さん委員会編『岸和田市史』第4巻近代編（岸和田市、2005年）
- ・岸和田市立郷土資料館編『秋季特別展 新島襄と山岡家の人々』（2001年）
- ・園田英弘、濱名篤、廣田照幸『士族の歴史社会学的研究』（名古屋大学出版会、1995年）
- ・深谷博治『新訂 華士族秩禄処分の研究』（吉川弘文館、1973年）
- ・藤谷春致編『堺県教員録』明治13年1月改（阪田一郎、1880年）
- ・森山英一『明治維新・廃城一覧』（新人物往来社、1989年）
- ・山中永之佑編『堺県法令集（2）』（羽曳野市、1993年）
- ・山中永之佑編『堺県法令集（3）』（羽曳野市、1994年）
- ・岩城卓二「岸和田藩家臣団について―元禄十三年『辰年御家中物成切米扶持方帳』の検討―」（『畿内譜代大名岸和田藩の総合的研究』平成14年度～平成17年度科学研究費補助金基礎研究（B）（1）研究成果報告書）
- ・岡田光夫「神宮・神社創建史」（『明治維新神道百年史』第2巻、1966年）
- ・草信好昭「士族授産に関する一研究 ―旧岸和田藩を中心にして―」（『史学会報』第18号、1967年）
- ・松好貞夫「大阪府の士族授産に就て」（『経済史研究』第10号、1930年〔『経済史研究（復刻版）』第2巻（新和出版社、1971年）を参照〕）
- ・『府治提要草案』（大阪府公文書館蔵）
- ・「元狭山藩ノ民并ニ貫属士族陪徒ノ義伺書写」大阪市史編纂史料312（大阪市立大学学術情報総合センター蔵）
- ・「岸和田士族名簿 附家族名前年齢」大阪市史編纂史料338（大阪市立大学学術情報総合センター蔵）

〔表 1〕現在の岸和田市域における旧岸和田藩士族の占有率

学校名	全教員数	士族			平民	士族占有率 (士族/全教員 数) × 100 (%)	旧岸和田藩士族 占有率 (旧岸和田藩士族/全 教員数) × 100 (%)
			旧岸和田藩士	その他堺県出身者			
春木小学校	2	2	2	—	0	100%	100%
高木小学校	5	3	¹ 《1?》	1	2	60%	20%
尾生小学校	3	2	1	1	1	67%	33%
新在家小学校	4	4	² 《1?》	1	0	100%	50%
三田小学校	2	2	1	1	0	100%	50%
稲葉小学校	3	1	1	—	2	33%	33%
内畑小学校	4	3	2	1	1	75%	50%
大澤小学校	1	0	—	—	1	0%	0%
岸和田南小学校	9	8	⁵ 《3?》	—	1	89%	56%
岸和田北小学校	10	9	8	1	1	90%	80%
西ノ内小学校	2	1	1	—	1	50%	50%
下松小学校	2	2	2	—	0	100%	100%
土生小学校	2	2	—	² (うち1名旧吉見藩士)	0	100%	0%
矢代寸小学校	3	3	3	—	0	100%	100%
矢代寸小学校分校	1	1	1	—	0	100%	100%
土生瀧小学校	3	3	3	—	0	100%	100%
河合小学校	2	1	¹ 《1?》※平民籍	—	1	50%	50%
総計	58	47	³⁴ 《6》	8	11	77%	57%

「岸和田士族名簿 附家族名前年齢」、『堺県教員録』明治13年1月調に基づき作成。岸和田市域の学校については『岸和田市史』第4巻近代編付図2「学校の変遷」を参照した。

(注) 一字違い等旧岸和田藩士の可能性のある人物は《●?》で士族欄に表記し、これらの人数は占有率の計算には含めなかった。

〔表 2〕 旧岸和田藩士族の転職先について

家禄	世帯数	①教職員		②県吏				
		1881年（明治13）		巡查等 警察関連職 （人）	県庁 職員 （人）	戸長等 （人）	師範学校 （人） ※事務含	県吏計
		小学校 教員 （人）	師範学校 教職員 （人）					
				1872年（明治5）				
				1874年（明治7）				
				1878年（明治11）				
30石以上	11	1 《1?》	-	-	-			-
				-	-			-
				-	-			-
20石以上30石未満	42	8	-	-	1			1
				-	-			-
				1	-	-	1	2
10石以上20石未満	292	61 《8?》 (3)	3(注3)	4	4			8
				10	4(注5) 《1?》			14
				6 《1?》	2	3	2	13
5石以上10石未満	349	20 《1?》 (6)	1	8 《1?》	1			9
				19 《4?》	2			21
				15 《4?》	2	2	3	22
1石以上5石未満	8	1	-	1	-			1
				2 《1?》	1			3
				1	-	-	-	1
無 録	106	1 《1?》 (1)	1(注4)	-	-			-
				《1?》	-			-
				1	-	-	-	1
				1	-	-	-	1
不 明	4	-	-	-	-			-
				《1?》	-	-	-	-
				-	-	-	-	-
総 計	812	92	5	13	6			19
				32	7			39
				24	4	5	6	39

「岸和田士族名簿 附家族名前年齢」、『堺県教員録』明治13年1月調、「堺県職員分課表」明治5年10月調、「堺県職員分課表」明治7年12月改、『堺県職員録』明治11年7月改を参照。

（注1）一字違いなど旧岸和田藩士の可能性のある人物は《●?》、平民籍で同じ氏名の見られた人物は（●）で表記し、就職先合計には含んでいない。

（注2）①教職員、②県吏について嫡子、隠居等により家禄の表記がない者は戸主の家禄の情報に拠り人数を集計した。

（注3）うち1名は族籍不明者

（注4）大阪府貫属者

（注5）うち1名は学校掛十等出仕と監察権中属と兼任

On Creating the Book 『Korea』 by the Swiss Armed Forces and Watanabe Shōzaburo

Rosa Jiyun KIM, M.A.
PhD candidate, University of Zurich,
Institute of Art History Section for East Asian Art History

[Abstract]

The book named 『Korea』 in the military library in Bern, Switzerland, was published in Lausanne in 1955 by Swiss soldier and editor Paul Eynard (1913-1986) to celebrate the second anniversary of Korean Armistice Agreement. In this book, there are ten woodcut prints. On those ten prints, there are nine seals of Kawase Hasui (川瀬巴水, 1883-1957), 7 seals of a Swiss painter Fred Bieri (1889-1971), one seal of Natori Shunsen (名取春仙, 1886-1960), and three seals of Sesson Ōta (雪村太田 or Kim Sulchon, 1922-2014). And at the end of the book, it is recorded that those prints were produced at a workshop of Watanabe Shōzaburo (渡邊庄三郎, 1885-1962) in Tokyo. Through this article, I would like to introduce the unknown Hasui prints and clarify a process of a collaboration between Switzerland and Japan for the publication of this book.

In 1953 just after the Korean War, Switzerland dispatched 96 soldiers to Panmunjom as a member of the Neutral Nations Supervisory Commission. Since then, the Swiss neutral country supervisory committee has been reduced in personnel, but has been stationed in Panmunjom until today. Paul Eynard and Fred Bieri who participated in this book met at Panmunjom in 1954. It was written in Bieri's diary that he did the first sketch for Eynard's book on February 14, 1954, thus already it seems to have had a conversation about the publication of the book between the two of them.

At that time, Swiss soldiers stationed in South Korea had their Base Camp in Tokyo, so holidays and contacts with home country were held mainly in Tokyo. On March 16, 1954 in Tokyo Fred Bieri reunited with Paul Eynard, who had left Panmunjom before him, and had lunch together. In order to talk about printmaking, they met Watanabe Shōzaburo, a famous printmaker Hasui and Korean painter Sesson Ōta. They discussed together about woodcut printmaking. One year after "Korea" was published in Switzerland on July 27, 1955, the 2nd anniversary of Korean Armistice Agreement, through a long process.

Eynard said in the preface of the book that he used the most rare Japanese paper, picked the most beautiful pictures, took the prints by traditional craftsmen in the traditional woodcut print shop, and for the cover used Shanghai silk. Two years after this book was published, Hasui would leave this world. Perhaps the woodcut prints posted here are considered to be included in his last works. It is also interesting to note that the names of all craftsmen who participated in the work on the last page were recorded by Eynard. According to the record, it seems that Bieri referred to the design of Shunsen without having met Shunsen.

At that time Swiss soldiers formed a variety of networks including Red Cross clubs in Japan, stationed Western military clubs in Japan and politicians. At that time the Shin-hanga(新版画) were not as popular as before, but it was as beautiful Asian art as usual to Westerners like the Swiss. Therefore, It seems that it was the best choice for Eynard to publish in Switzerland, in cooperation with Japanese publisher, Swiss, Japanese and Korean artists, partly impossible in destroyed Korea by war when he published the book and it's the book 『Korea』 I introduce here.

Special thanks to

Chris-ne Rohr-Jörg, Responsible for Special CollecRons (including the Korea collecRon) at the Library Am Guisanplatz Berne Switzerland

Dario Kuster, Honory President Swiss Korean AssociaRon, Member of Swiss DelegaRon Neutral NaRons Supervisory Commission 1965/66, Berne Switzerland

Giancarlo Bule, former lawyer in the Swiss Ministry of Defense, Member of Swiss DelegaRon Neutral NaRons Supervisory Commission 1971/72, Irgen/Berne Switzerland

Hugue Eynard, Son of Paul Eynard the editor of the book 『Korea』

Jean-Jacques Joss, Maj Gen ret, former Head of Swiss DelegaRon Neutral NaRons Supervisory Commission 2007-2012, President Swiss Korean AssociaRon 2011- , Muri/Berne, Switzerland

Toni Oesch, Member of the first Swiss DelegaRon Neutral NaRons Supervisory Commission 1953/55, Zollikofen/Berne, Switzerland

[論文]

スイスのベルンにある軍事図書館に所蔵されている「Korea」という本は、スイスの軍人と編集者であった Paul Eynard (ポール・エナアール、1913-1986) が 1955 年に韓国の停戦 2 周年を記念して、スイスのローザンヌで発行した本である。この本には 10 枚の木版画が載っている[図 1]。その中に、川瀬巴水 (1883-1957) の印が 9 つ、スイスの画家 Fred Bieri (フレッド・ビエリ、1889-1971) の印が 7 つ、名取春仙 (1886-1960) の印が 1 つ、そして Sesson Ōta (雪村太田、 김철춘: キムソルチョン、1922-2014) の印が 3 つ押されている[図 2]。そして本の最後には、この版画が東京にいた渡邊庄三郎 (1885-1962) の工房で製作されたと記録されている。本稿ではこの本を通じて、今まで知られていない巴水の版画を紹介し、この本が出版されるまでのスイスと日本の共同作業の過程を明らかにしたい。

韓国戦争直後の 1953 年にスイスは板門店 (パンムンジョム) に中立国監督委員会 (Neutral Nations Supervisory Commission) のメンバーとして、最初にスイスから 96 人の軍事使節団が派遣された。それ以来、スイス中立国監督委員会は、たとえ人員は削減されても、今日まで板門店に駐留している。この本に関与した Paul Eynard と Fred Bieri は中立国監督委員会のメンバーで 1954 年に板門店で出会った。彼らの名前は 1954 年板門店に駐屯したスイス中立国監督委員会キャンプのメンバーリストに記録されている (注 1)。

Paul Eynard は、スイスのロール地域で裕福な出版業者として、ここで紹介する本「Korea」の他にも、ドイツ出身のアーティスト Albert Flocon (1909-1994)、フランスの哲学者 Gaston Bachelard (1884 - 1962)、ロシア出身のアーティスト Alexandre Alexeieff (1901-1981)、フランスの詩人 Philippe Soupault (1897-1990) と一緒に本を出版した。彼の息子 Hugues Eynard は、筆者とのイン

タビューで、彼の父 Paul Eynard は若い頃からかなりのお金持ちであり、家族を養うために仕事をする必要がないほど非常に裕福であったと語った（注2）。

Bieri はスイス人の父とイギリス人の母の間に生まれた。ロンドンで生まれ幼少期を過ごしたので、英語を母国語のようにしており、板門店で記録した彼の日記もすべて英語で書かれている。Bieri は、ドイツのミュンヘンで美術を勉強し、スイスのベルンでグラフィックアーティストとして活動した。彼は 1954 年以前に、すでに一度韓国を訪問したことがある。1949 年の国際赤十字団の一名として韓国の捕虜収容所を見学し、当時の大韓民国大統領の李承晩大統領に収容の処遇を改善してほしいという手紙を送ったことがある。

Bieri は板門店で全 4 巻の日記を書いた。それらには日常のことが詳細に記録されていただけでなく、日記帳に直接描いた彼の部屋やキャンプ、風景などの図版と一緒に載っている。Bieri の日記で Eynard の本について最初に言及された日は 1954 年 2 月 14 日である。そこには Eynard 本のための最初のスケッチを描いたとあり、すでにその前から二人の間には、本の出版の話があったようだ（注3）。

当時、韓国に駐留したスイスの兵士たちは、ベースキャンプを東京に置いていたので、休暇や本国との連絡は東京を中心に行われていた。Fred Bieri は 1954 年 3 月 16 日に東京で自分より先に板門店を去った Paul Eynard と再会し、昼食をともにした。その昼食では版画の話をするために渡邊庄三郎や、有名な版画家である巴水と韓国画家の Sesson Ōta と会ったとの記録がある。彼らは一緒に木版画についての議論をした。そして、4 日後の 1954 年 3 月 20 日の日記に Bieri は Eynard と渡辺を訪ね、版画を持ってきた巴水に会ったとある。そして 5 日後の 1954 年 3 月 25 日に Bieri は雪村太田の図面 3 点を修正した。

Eynard がこの Korea という本に韓国人画家 Sesson Ota と記録し、同じ本に掲載された 3 つの版画に自分の名前を韓国語でキム・ソルチョン（金雪村）と残した人は、2014 年に韓国で僧侶として死んだキム・テシンという画家である。彼は 1922 年に東京で日本人の父、太田清藏と日本へ留学していた韓国人の母、キム・ウォンジュの間に生まれた。彼が生まれたときに父親がつけた名前は、太田政雄であった。彼の父は、日本の名門家出身であり、彼の母親は、韓国初の女性解放運動家の一人であった。二人は当時の時代状況によって別れてしまい、彼の父は彼を現在の北朝鮮の領土にある黄海道に住んでいた韓国人の友達に任せた。このとき、父親の韓国人の友達からもらった名前はソン・ヨンオプ（宋永業）であった。彼の父、太田清藏は後に朝鮮総督府の発令を受け、韓国に来て妻を探したが、彼女はすでに仏教の僧侶になっていた。キム・ソルチョンは、まず韓国の画家キム・ウンホ（金殷鎬）に美術を学んだ。その時金殷鎬から貰った名前がキム・ソルチョン（金雪村）で、その名前が Eynard の本 Korea の版画に彫られている。以後、日本に渡って、1941 年東京帝国美術学校に入学し、東洋画を専攻した。東京帝国美術学校に通う頃、長期休暇中に韓国の寺にいる母を見つけたが、母親は彼に冷たかった。彼は 1945 年に帰国し、38 度線以北の黄海道の父と家族に会うために故郷を訪問した時、北朝鮮保安隊に捕まってスターリンと金日成の肖像を描かなければならなくなった。その当時、彼が製作した 100 号（130x160cm）サイズの金日成の肖像画がまだ金日成総合大学にかかっている。当時、北朝鮮軍は彼や他の画家たちを集めて、北朝鮮全域を連れまわり肖像画を描かせた。ある日、肖像画を描くために故郷周辺へ行った時に、故郷の人の助けを借りて脱出し、韓国でしばらく絵を描いた。しかし、塗料の原料を手に入れるために日本に行った時に韓国戦争が起き、日本に残された。さらに、金日成の肖像画を描いたという彼の過去の行為から「共産主義者」と呼ばれるようになり、韓国に戻れなくなった。その後、彼は日本で画家や美術教師として活動し、音楽先生である同僚の女性と結婚し、三人の息子をもうけた。そして彼が 68 歳になった時、出家して母のような僧侶の道を歩み、2014 年に韓国で死亡した。したがって、彼が Eynard の本 Korea のために韓国の風景 3 点を描いた時期は韓国戦争で帰国の途が妨げられ、「共産主義者」と非難されるような濡れ衣を着せられ、

日本にとどまっていた時だったのである（注4）。

版画製作過程について Bieri の日記で見られる興味深い点は、彼の日記に残したスケッチがそのまま本に掲載された版画に使用された点である。彼は板門店に駐屯したスイスのキャンプから見える韓国の山をスケッチしておいたものをそのまま **Flag** というタイトルの版画の背景に使用した[図3]。非常に几帳面で写実的に **Flag** を描画した Bieri も一つ見逃しがあった。それは、フラグのすぐ下にある軍事境界線というハングル表記である。ハングルを知っている人であれば、読み取ることができない文字である。おそらくハングルを知らない Bieri が目に見えるままにコピーしたものだろう。この版画には Bieri と巴水の名前が並んで残されている。

この本に掲載している版画は Bieri の名前をすべて白禮という漢字名で彫っている。そして、自分の日記に漢字の名前を作った過程を記録していた。日記には彼が出会った中国兵士に Bieri を漢字でどう書くのかを尋ね、中国兵が書いてくれた白禮と白礼の二つの中から彼自身が白禮を選択したと記されていた。

Bieri だけではなく、Eynard もかなり几帳面な性格の持ち主として、この本の細かい部分をすべて記録している。特に、最後のページに Eynard が作業に参加したすべての職人たちの名前を記録したことも興味深い資料である。この本の最後のページを見ると、10枚それぞれの版画のタイトルと版画の構成、制作、板刻、プリントをした人の名前がすべて記録されている。そのおかげで、10枚の版画に参加したすべてのアーティストや職人の名前を検索し、（表1）を作成することができた。この表の網掛けで示している人々は皆、渡辺工房の人であることを確認した。なお、Eynard が職人の名前をすべてアルファベットで書いていたので再度確認のために、ハワイ大学で出版した **Guide to Modern Japanese Woodblock Prints** という本を参照している（注5）。

Bieri の日記の流れに沿って版画の制作過程を見ると、Bieri はこの本のための最初の作業を1954年2月14日に行った。その後、1954年3月16日に東京で Eynard、渡辺、巴水、キム・ソルチョンに会い、本制作の話をし、3月20日に Eynard と巴水とだけ個別に会い、3月25日にはキム・ソルチョンの図面3つを修正した。そして板門店で描いた **Flag** を3月29日に東京の渡辺に送る。翌月の1954年4月19日には、**Camp** という絵を東京に送り Eynard に経過を報告する。10日後の4月29日に渡辺から **Flag** とキム・ソルチョンの図一つを証明される。1954年5月2日には Eynard の検討を受けて1週後の5月9日に Bieri が担当した7つの図面すべてを終えた。10個の図面が、スイスの軍事メールによって板門店と東京を行き来しながら渡辺と Eynard の最終承認を受けるまでにかかった期間は4ヶ月であった（表2）。そして一年後の1955年の7月27日、韓国戦争の停戦の2周年記念日に「*Korea*」がスイスで出版された。この本が出版された2年後に巴水はこの世を去る。おそらくここに掲載された木版画は、彼の最後の作品の中に含まれるだろう。

Eynard が本の序文で、最も珍しい和紙を使用し、最も美しい写真を選び、伝統的な木版画工房で伝統職人の手で版画を彫り、そして表紙は上海の絹を使用したと述べた。それだけでなく、Eynard の息子 Hugue が今も保管している父の本製版材料を見ると、Eynard はスイスで本を彫って出すために、ハングル金属板を別に製作していた。

当時スイスの兵士たちは東京で赤十字クラブ、日本の駐留西洋軍人クラブ、政治家を含めさまざまなネットワークを形成していた。当時の新版画は、以前ほどの人気はなかったが、スイス人など西洋人たちにとっては相変わらず美しいアジアの美術であった。したがって、Eynard が韓国について本を出版したときに、破壊された韓国では不可能だった部分をスイス、日本、そして韓国のアーティストと一緒に日本の版元と協力して、スイスで発行することが彼にとって最良の選択だったと思う。それが、ここで紹介する本「*Korea*」である。

*この研究のために特別な許可とインタビューを許して下さった方々にもう一度感謝します。

注

- (注1) Bieri と Eynard についての記録は Bibliothek am Guisanplatz というスイスのベルンにある連邦軍図書館に保管されている。
- (注2) 2017 年 6 月 26 日 Paul Eynard の息子 Hugue Eynard とのインタビューを彼のスイスの自宅で行った。
- (注3) この報告論文で提示した 10 個の版画の制作過程の具体的な日付と場所は、すべて Bieri の日記の記録による。
- (注4) キム・ソルチョンの自伝 3 巻を参照し、整理した。金泰伸『라홀라의 思母曲 (ラフルラの思母曲)』(한길사, 1991 年); 『어머니 당신이 그리웁습니다 = Dear mother, I miss you』(문학와의식, 2002 年); 『화승, 어머니를 그리다: 일당 김태신스님 자전소설(畫僧、母を描く：日堂キムテシン自傳小説)』(이른아침, 2004 年)
- (注5) Eynard の記録に登場した職人の名前は次の本と比較対照した。Helen Merritt & Nanako Yanada, 『Guide to Modern Japanese Woodblock Prints, 1900-1975』、University of Hawaii Press、1995。

(表 1) 10 枚の版画に参加したアーティストや職人の名前

Nr	P.	Title	Editor of the prints	Composition "Composition"	Directives for execution	Execution "Exécuté"	Carved by "Gravé"	Printed by "Imprimé"	seals
1	4	Swiss flag in Korean sky	Shōzaburō Watanabe	Fred Bieri (Major)	F. Bieri	Hasui Kawase	Chōtarō Miyata	Haru Maruyama (Ho maruyama)	Bieri Hasui
2	33	Landscapes	Shōzaburō Watanabe	Sesson Ōta (Kim Sulchon)	F. Bieri	Sesson Ōta Hasui Kawase	Kenji Ōkura (Kenjo Ōkura)	Haru Maruyama	Kim Sulchon Hasui
3	41	Korean house	Shōzaburō Watanabe	Sesson Ōta (Kim Sulchon)	F. Bieri	Sesson Ōta Hasui Kawase	Kentarō Maeda	Gintarō Ōno	Kim Sulchon Hasui
4	49	Korean children	Shōzaburō Watanabe	Sesson Ōta (Kim Sulchon)	F. Bieri	Sesson Ōta Hasui Kawase	Kentarō Maeda	Gintaro Ōno	Kim Sulchon Hasui
5	55	Celebration of spring in Seoul	Shōzaburō Watanabe	Fred Bieri	F. Bieri	Hasui Kawase	Kentarō Maeda	Takejirō Itagaki	Bieri Hasui
6	61	Panmunjom (Swiss camp)	Shōzaburō Watanabe	Fred Bieri	F. Bieri	Hasui Kawase	Kentarō Maeda	Matashirō Uchikawa	Bieri Hasui
7	67	Panmunjom	Shōzaburō Watanabe	Fred Bieri	F. Bieri	Hasui Kawase	Kentarō Maeda	Matashirō Uchikawa	Bieri Hasui
8	73	Indian drummer	Shōzaburō Watanabe	Fred Bieri	F. Bieri	Hasui Kawase	Kentarō Maeda	Matashirō Uchikawa	Bieri Hasui
9	79	Map of Korea	Shōzaburō Watanabe	Fred Bieri	F. Bieri	Hasui Kawase	Chōtarō Miyata	Takejirō Itagaki	Bieri Hasui
10	89	In the Kabuki theatre	Shōzaburō Watanabe	Fred Bieri (using a print of Shunsen Natori)	F. Bieri	Nm(*)	Kentarō Maeda	Takejirō Itagaki	Bieri Shunsen

※網掛け：渡辺工房の人々

(表 2) Bierl の日記に基づく作業の過程

1954年 2月

月	火	水	木	金	土	日
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14 1st print sketching
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28

1954年 3月

월	화	수	목	금	토	일
1 Farewell Eynard	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16 Bieri, Eynard, Watanabe, Hasui, Sesson	17	18	19	20 Bieri, Eynard, Hasui	21
22	23	24	25 correction of 3 drawings of Sesson	26	27	28 Finished "Flag" drawing
29 3 Sesson & "Flag" sent to Watanabe	30	31				

1954年 4月

월	화	수	목	금	토	일
			1 "R. adn R." drawing	2 Working "R. adn R."	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17 Working "Camp"	18
19 Sent "Camp" to Tokyo. Report to Eynard	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29 Watanabe proofs "Flag" & "Sesson 1"	30		

1954年 5月

월	화	수	목	금	토	일
					1	2 Revised Circular Eynard
3	4	5	6	7 Working "Korean people"	8	9 Finished 7 drawings
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

参考文献

- 金泰伸 『라훌라의 思母曲 (ラフルラの思母曲)』 (한길사、1991 年)
- 金泰伸 『어머니 당신이 그리웁니다 = Dear mother, I miss you』 (문학와의식、2002 年)
- 金泰伸 『화승, 어머니를 그리다: 일당 김태신스님 자전소설 (畫僧、母を描く: 日堂ギムテシン自傳小説)』 (이른아침、2004 年)
- 金泰伸 『日堂 金泰伸畫集』 (美術文化院、2009 年)
- Helen Merritt & Nanako Yanada (1995). *Guide to Modern Japanese Woodblock Prints, 1900-1975*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Paul Eynard (1955). *Korea*. Lausanne: Fawer & Favre.

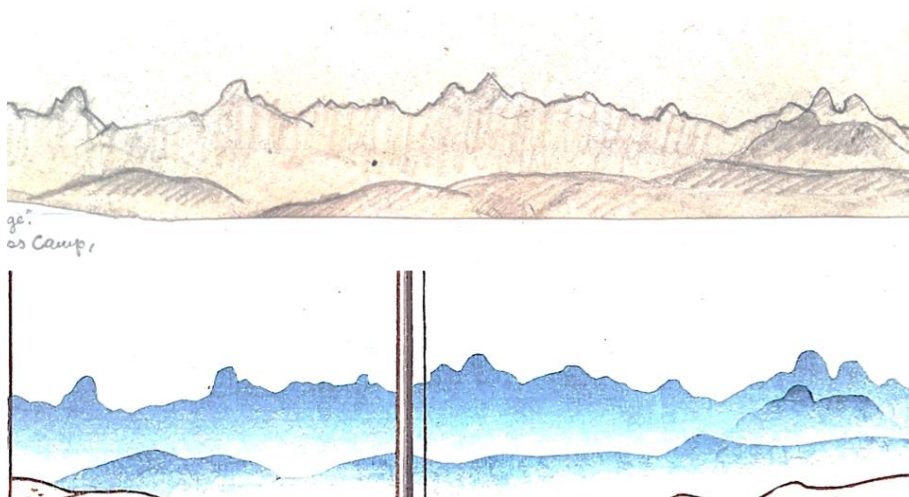
図版



[図 1] 『Korea』に掲載された 10 個の版画



[図 2] 版画に押された印たち



〔図 3〕 上 : Bieri の絵、下 : *Korea* の最初の版画 Flag の部分

図版出典

〔図 1, 図 2〕 Paul Eynard (1955). *Korea*. Lausanne: Fawer & Favre.

〔図 3〕 上 : Bieri の日記、下 : Paul Eynard (1955). *Korea*. Lausanne: Fawer & Favre.

菱田春草と朦朧体 —伝統と近代のはざまで—

田邊 咲智

関西大学大学院東アジア文化研究科 博士課程前期課程

[Abstract]

This paper discusses the *moro-tai* painting technique of HISHIDA Shunsō before he traveled abroad. HISHIDA Shunsō (1874-1911), along with YOKOYAMA Taikan (1868-1958) and others, aimed to create a modern Japanese style of painting at the Japanese Art Academy headed by OKAKURA Tenshin (KAKUZŌ) (1863-1913). In the Meiji painting circles that began with the opening of Japan in the Meiji period after over two-hundred years of national seclusion, there was a conflict between painters of the Western style, which was mainly composed of realism, and the conservatives, who sought to preserve Japanese traditions. In this milieu, Shunsō, Taikan, and Tenshin attempted to preserve the traditional parts of Japan while incorporating the good parts of the West to create a style of Japanese painting appropriate to the modern era.

Their first attempt was *moro-tai*, a term coined by a critic of the style. This painting technique is characterized by “expressions of air and sun rays,” “no traditional black lines,” and “shading of color.” However, *moro-tai* was not accepted by people of that time because it was regarded as an expression of unclear dim color, and an imitation of Western-style painting.

Shunsō pursued the painting technique of *moro-tai* according to the ideals of the Japanese Art Academy. The expression they aimed for did not use the modern method of shading. In other words, they aimed to express natural lyricism and the feeling of the subject by expressing light without using modern shading techniques. However, some of his paintings have expressions that differ from these expressions. For example, in works with different expressions, there are attempts to depict the stereoscopic effect of rocks and the texture of the fabric. He began to be interested in representing the three-dimensional nature of the subject. However, in his painting, there are attempts to express individuality while following the Japanese Art Academy.

His paintings have a different expression from the ideals of the Japanese Art Academy. In Shunsō's painting before his foreign travels, there is a conflict between his attempt to follow the ideals of the Academy and expressions of his own originality.

[論文]

はじめに

朦朧体とは、日本美術院で活躍した、菱田春草（1874—1911）、横山大観（1868—1958）、下村観山（1873—1930）らが試みた日本画の画風（技法）である。彼らの画風に「朦朧体」の言葉を当てはめたのは、当時の批評者たちであった。批評者たちは、侮蔑的な意味合いを込めて「朦朧体」と揶揄した（注 1）。一方、今日では、「美術史用語」（あるいは日本画の画風）として

用いられる。通説では、伝統的な筆墨の線描を排除し、色彩を空刷毛で暈すことで、空気や光を表そうとした「没線彩画」と解される（注 2）。しかし、春草が制作した作品の場合、これらの画風は、霧・雨・波などの、造形が曖昧な対象にみられる。また、人物が纏う着衣の「質感」や「立体性」を引き出す効果にもみられる。このように、対象によって表現目的が異なる画風を、一括りに「朦朧体」と論じてしまえば、春草の「独自性」は浮き彫りにならない。また、日本美術院の正員が朦朧体を追究した心理には、彼らを率いた岡倉天心（覚三）（1863—1913）の理想が、根底にあったことが考えられよう。以上の背景をふまえ、本論文では、日本美術院が目指した「理想」や「造形志向」に焦点をあて、その中で春草が見出した「独自性」を解明したい。ここでは、遊学前の作品を中心に検討を進める。

一節 先行研究における朦朧体の解釈と春草作品

まず、先学における朦朧体の解釈を整理する。通説によると、次のように定義される。

明治後半期の没線彩画の手法を用いた日本画の画風。横山大観・菱田春草らが、岡倉天心の指導と洋画の外光派に刺激されて、伝統的な線描を使わずに彩描を絵具をつけない空刷毛を用いてぼかすことによって空気や光線を表そうとした新しい表現の試み（中略）浪漫主義的風潮を背景に西欧絵画の造形と対決して近代的日本画に改革をもたらした意味で、その影響は大きかった（注 3）。

「（中略）」は筆者による

つまり、空気や光を表現するために、伝統的な墨の線描を用いず、乾いた刷毛で色彩を暈す画風である。しかし、「浪漫主義的風潮」という言葉で括られるように、朦朧体の発生から 100 年あまり経つ現在でも、画家自身がこの画風に投影した「志向」や「理想」は何であったのか、という核心的な部分が解明されていない。また、朦朧体のもっともな論点は、天心の理想が関わっていたことである。大観の証言によると、「空気を描いたらどうだ」という天心の指摘が契機となり、朦朧体が発生したという（注 4）。いずれにせよ、人々の痛烈な批判を浴びながらも、天心が朦朧体の表現を画家たちにすすめた理由には、自身の理想を実現させようとした可能性が考えられる。

朦朧体と天心の理想との関係について、佐藤道信氏は、以下のように指摘する。

空気の描写は、“和魂”（「道」）と“洋才”（三次元空間）の同時達成を意図していたと考えられるのである。回想からすれば大観は天心の示唆を主に、後者の“洋才”（技術論）として受け止めた感が強いが、天心の意図にはそれに加えて、“朦朧”に「道」の思想世界を表象させることにあったのだろうと思われる（注 5）。

氏によると、天心は、空気や光の描写に「東洋思想」と「西洋絵画の三次元性」の、二つの要素を春草らに表象させようとした、という。その東洋思想の表象には、天心が晩年に心酔した「相対」「無限」「不完全」「暗示」といった特質を概念にもつ、道教哲学の「道」の世界観が視覚化されたという。

一方で、佐藤志乃氏は、

「朦朧体」は、東洋とも西洋とも判じがたい、その両方が渾然一体となったものであった。また、朦朧体をもつ“あいまいさ”は、鑑賞者に自由に想像させ解釈をゆだねようとする、個人主義的な表現であったように思われる（注 6）。

と解釈する。そして、その個人主義的な表現には、天心が繰り返し主張した「東洋的ロマン主義」（注 7）が表現されたとする。

確かに、これらの研究は、天心の理想との関連や朦朧体の「近代性」について論じられたが、天心と画家との間にある理想の「共通性」や「乖離性」、そして、画家自身が朦朧体の表現にこめた「独自性」とは何か、といった所までは解明されていない。本論文では、この点に着目し、日本美術院が行った研究会や展覧会の分析を通し、春草が朦朧体の表現に見出した「独自性」を解明する。

二節 批評語としての「朦朧体」と技法的側面

具体的な作品分析を行う前に、日本美術院について触れておく必要がある。日本美術院は、明治 31（1898）年、東京美術学校（以下、「美校」と略する）学校長の座を追われた天心を筆頭に設立された在野の美術団体である。天心は、日本美術院の理想を「日本美術特有の長所を探り、近代の生活と産業に適応させる可能性を求めることこそが、この新派が解決しようとしている課題である」（注 8）と主張した。要するに、日本美術の伝統に西洋美術の長所をとり入れることで、新しい美術を創造する、といった理想である。その最初の挑戦に、朦朧体の画風が春草や大観に試みられた。

さて、ここからは、批評語としての「朦朧体」が当時どのように用いられたかを整理し、朦朧体の技法的な特徴を便宜的に定義していく。日本美術院が開催した展覧会＜日本絵画協会・日本美術院連合絵画共進会＞は、日本絵画協会と合同で行われ、明治 32 年から明治 36 年（1899 年—1903 年）までの間に、合計 10 回の展覧会を行った。「朦朧体」という言葉は、この展覧会を通じて発生した。先学でも指摘されるように、「朦朧体」を最初に評語として用いたのは、美術評論家の大村西崖（1868—1927）であった（注 9）。彼は、明治 33（1900）年、＜第 8 回日本絵画協会・第 3 回日本美術院連合絵画共進会展＞の、大観の《菜の花》や春草の《菊慈童》に、以下のように批評した。

名をつければ縹渺体とか朦朧体とか言ひたいやうな作ぶりだけれども、西洋画に所謂全体の色の根調といふものをやろうとして居る所とインプレッションの或一面の現されて居る所とは感心する（注 10）。

当初、西崖は、朦朧体の表現を西洋絵画に相当するイムプレッション（注 11）があると評価した。だが、細野正信氏が指摘するように、この西崖の批評以降、批評者は、「朦朧体」という言葉を誹謗中傷する意味へと発展させた（注 12）。例えば、同展覧会に寄せられた後の批評には

同校を去りて、別に旗職を立つるに及びては、ますます寄に走り、怪に陥りてとどまる所を知らず。遂に現今の朦朧的作風を構成するに至りしなり（注 13）。

という風な具合で、奇妙な画風を展開させた「朦朧的作風」と批判した。批評者側が「朦朧」にこめた意味について、佐藤志乃氏は「“いい加減”“怪しい”“意味不明”“ごまかし”といった（まるでペテン師を指すかのような）語り手の本音がこめられていた」（注 14）と指摘する。では、ごまかし、怪しいとされた表現は、どのような表現であったのか。「朦朧体」という言葉が最初に当てはめられた大観の、《菜の花》[図 1]を例に朦朧体の特徴を便宜的に示すことにする。

画面には、煙る湿った霧の中に、菜の花と蝶が描写されている。その霧は、緑を基調とした色彩で暈されている。特に、中景部分は、胡粉の白で光が強調されている。菜の花や蝶は、霧に覆われ、まさに「朦朧」の言葉が差すようにぼんやりと浮遊している。確かに、空気や光の雰囲気を表すために、墨の線描を用いず、色彩による暈しが基調とされている。これらの表現に対し、西崖は以下のように批評した。

光琳の石や樹の幹などの潑墨又は絵具のはねこみと、円山派の雲煙の暈染とを、餘り専ら用ゐ過ぎ、または寫眞だけで見た油絵の濃淡の調子や、水彩畫の潑ませたり洗ひ落とししたりした色彩の工合にほれ込んだり、剩さへ高野の二十五菩薩とやらいふものを有難がって、むやみと色の線を振廻したりしてとうとう現今のやうに、山水がゝつたものを描けば、山だか雲だかわからない潑墨と暈染とて持切り、人物などを描けば、日本画特有の描線は何處へ行つたか、色線は具入りの地色とべっちゃらになつてしまつて恰も司馬江漢の胡粉絵のぼけたやうなものそこでいやでも朦朧体といふ名を命じなくてはならぬのである（注 15）。

ここでは、伝統的な線描の排除、色線、色彩による濃淡などの表現を、すべて「朦朧体」の要素としている。特に、「日本特有の線描は何處へいったか」という一文からわかるように、伝統的な墨の線描を排除したことが、一番の批判要素となつた。この他にも、色彩表現を重視するならば、なぜ油絵や水彩画でやらないのか、という疑問も人々は抱いていた。以上の分析結果から、本章では、便宜的に朦朧体の特徴を

表現目的⇒光や空気の描出

技法⇒伝統的な墨の線描の排除（没線）・色彩を用いた量し（濃淡）
とし、考察を進めたい。

三節 絵画研究会と絵画互評会-日本美術院の造形志向

ここからは、日本美術院で行われた研究会を基に、彼らが目指した造形志向を分析する。日本美術院の主な事業は、研究部・制作部・展覧部の三部で構成された。研究部や制作部の活動の一環に、＜絵画研究会＞＜絵画互評会＞という二つの研究会が行われた。双方の研究会は、事前に設定された課題に作家が描く対象を考案し制作する、というものであつた。その内容は、季節の情緒を表す言葉、心情を表す言葉など、抽象的な画題をもとに作品が制作された。その作品を天心や画家らが評論する場も設けられた。

さて、研究会の評論を読み解くと、天心は明治 33（1900）年の第 1 回絵画互評会で、春草の《牡丹の図》に「少しく濃淡に慊焉たる所に、總べて評論はこの濃淡より来りしならん」（注 16）と指摘した。特に、この時期から「濃淡」という言葉を繰り返し、画家たちに発するようになる（注 17）。このことから、研究会全体の志向には、濃淡への課題意識が第一にあつたことが窺える。

春草は、第 8 回絵画研究会（第 1 期）の課題、「夏日旅行」に作品（《夏日旅行》）[図 2]を出展した。前景は、旅人が山の細道を登る様子、遠景は大きくとり、画面の半分以上を空で描写している。春草自身が、「空を主として題意を表さんとしたるものなり」（注 18）と自評する通り、空には、胡粉の白と薄墨の黒の、二色の濃淡を駆使することで、夏の夕立を思わせる、どんよりとした雰囲気全体に漂っている。そこには、雲に遮られる微かな陽の光がみられる。確かに、この作品からは、光への描出意識が窺える。しかしその表現は、「自然情緒」の描出のために用いられている。その証拠に、大観はこの作品に「夏日の情も、十分に於て、又旅行の意も十分なり」（注 19）と評した。佐藤志乃氏が「テーマとなっている言葉の気分や雰囲気をあらわすことが真の目的であつた」（注 20）と指摘するように、技術面の向上を図る、というよりも作品から主題に適した「情」が感じられるか、といったことに、主眼がおかれていたといえよう。

続いて天心は、明治 34（1901）年頃から「濃淡の工夫を要す。色の調和に注意ありたし」（注 21）「色も濃淡も不足なり」（注 22）などと、色彩の改良を盛んに促すようになる。光や空気に関する指摘はむしろ少なく、画家の間でもそれほど議論されていない。つまり、これらの研究会では、光や空気の描出を、第一の目的にしていない。むしろ、色彩や濃淡をいかに主題に効果的に用いるか、といった点に、主眼をおいていたといえよう。すなわち、日本美術院の志向は、三

次元性を兼ね備えた「光や空気」の描出を目指していた、というよりも主題の雰囲気や画家の精神性を鑑賞者に想像させる「暗示的な表現」を目指していたといえる。

第四節 春草の造形志向

ここからは、研究会で実践された朦朧体の志向が春草の志向にどのように展開されたかを繙いていきたい。

1. 暗示性の美

日本絵画共進会と合同で行われた展覧会は、研究会の成果を世間に発信する場であった(注 23)。春草は、明治 32 (1899) 年、＜第 8 回絵画共進会・第 3 回日本美術院連合絵画共進会展＞に、《菊慈童》[図 3]を出展した。この作品も没線と色彩による濃淡が特徴にあげられる。「菊慈童」という画題は、周の王朝で愛された慈童が罪を犯して深山に流され、その土地で菊の露をのんで不老不死になった、という吉兆性のある歴史画題である(注 24)。春草が描いた《菊慈童》は、主題の慈童が中景の陸に小さく配置され、その周りを紅葉した樹木がとり囲んでいる。批評者は、以下のように評した。

此圖は彩色がひどく穢ない。誰やら紅葉童じやと評したが、實にさうだ。而もその紅葉の色が赭色の焦げたやうなおまけに冴えない泥色と来て居るからたまらない。一寸見た所で古傳説の菊慈童といふ感じの浮かんで来ないには困る(注 25)。

全面の紅葉は色朽ちて見栄なし。併し江戸つ子の喜ぶ色なるべし。菊花所々に生へたり。而も遠近の差別少しもなく、童子が持てる菊も、傍なる菊も、敷丁の先きにある菊も、皆一樣なるは大に見苦し(注 26)。

このように、混色による色彩の是非を問う批判が一斉に寄せられた。また、主題の分かりにくさも批判的となった。「光や空気」の表現は、遠景部分の霧に強くみられ、そこには奥行感も感じられる。しかし、この作品でも三次元性を備えた造形の確立を、第一の主眼に描いていない。というのも、佐藤志乃氏が指摘するように、樹木を取り囲む霧に山の奥深さを濃淡や没線で表し、菊慈童の神秘性を描写したとも解釈できるからである(注 27)。主題の菊慈童が非常に小さく描かれたことも、このためであると考えられる。

また、濃淡は単に色彩を塗る、という表現だけではなかったようである。例えば、画面向って左側の木々の紅葉は、上の楓の葉の紅葉とは明らかに描き方が異なる。細筆で葉形を何度も塗り合わせ、色彩の変調をつけている。このように、画面が平板になることを避けるために、細かな工夫がほどこされている。《菊慈童》は、様々な色彩を用いていることから、色彩の試行錯誤を経て制作された作品であるといえよう。だが、その表現の中にも、筆致を残すなどし、画面全体が一定の表現にならぬように工夫が見てとれる。また、あえて主題である菊慈童を小さく描き、背景の霧や紅葉の描写に、菊慈童の「精神性」をもたせることで、鑑賞者の想像を促す、暗示的な効果が演出されている。これらは、絵画研究会や絵画互評会で行われた成果ともいえよう。

2. 現実性の美

研究会では、比較的に自然を主題にした作品が多く制作された。しかし、展覧会に出展された作品は、歴史画が大半を占めていた(注 28)。春草も、他の画家たちと並んで、歴史画を多く出展している。また、明治 32 (1900) 年に、天心と橋本雅邦(1835—1908)が読売新聞上で「社告懸賞東洋歴史課題募集」という懸賞展覧会を主催した(注 29)。佐藤道信氏は、日本美術院にとっての歴史画を「ナショナリズムに沸く当時の社会に、同院の存在意義を主張とするものであったから、少なくとも歴史画が同院の中心主題だった。」(注 30)と指摘している。すなわち、天心は歴史画をもって、日本美術院の存在意義を世に示そうとしたわけである。歴史画について簡単に補足しておく、維新以降における歴史画は、国家を象徴的に表す材料として盛んに描かれた。それは、日本画や洋画を問わず隆盛し、明治初期における画壇の特徴でもあった。

さて、春草は、＜第 10 回絵画共進会・第 5 回日本美術院連合絵画共進会展＞に《蘇李訣別》[図 4]を出展した。《蘇理訣別》は、中国故事を主題にした作品である。ここでは、まさに蘇武と李陵の対面の場面が描かれている。《蘇理訣別》は、数多くの解説では、朦朧体を代表する「没線彩画」の作品として位置づけられる（注 31）。しかし、具体的にどの部分が朦朧体を代表する要素なのかは、明確化されていない。

詳しく作品を観察すると、先に紹介した《菊慈童》とは異なり、人物の感情が表情により一層表れている。特に、蘇武の表情からは、その苦悩が辛辣に伝わってくる。また、両人物の着衣には、これまでとは異なる濃淡がほどこされている。着衣に注目すると、濃淡の色彩に調和する「色線」が用いられている。特に、李陵の着物には、際立って明るいコバルトブルーがほどこされており、墨の輪郭線に代わるような色線が同系色で見えてとれる（注 32）。この「色線」は、輪郭を強調するだけではなく「骨描き」としての効果もある。また、濃淡と併用して用いることで「かげ隈」のような効果を有している。これにより、衣服の「立体性」が引き出される。これらの表現によって、より現実性が増し、故事や歴史の「リアリティ」が強調されている。

また、翌年の＜第 12 回日本絵画共進会・第 7 回日本美術院連合絵画協進会展＞に出展した《王昭君》[図 5]にも、それらの要素が一層みられる。この作品も《蘇理訣別》に続き、中国故事を主題にしており、高潔な王昭君を敵国へと送り出す別れの場面を描いている。《王昭君》は、とりわけ人物の感情が繊細に描かれた作品であるといえよう。背景には、何も描写せず人物のみで構成されていることが決定的である。画面左側に立つ王昭君の眼差しからは、悲しみに暮れながらも、自らの運命を受け入れる意志の強さが見えてとれる。それに続く侍女や宮女は、泣く者、眉をひそめて小声で噂している者、皮肉な運命をあざ笑う者など、人物ひとりひとりの表情が豊かに表現されている。着衣には、「色線」はみられないが「隈取り」の効果によって、着物の襷がより繊細な立体性を帯びている。当時の批評者は、「顔料の塗抹頗る司馬江漢の典型に似た」（注 33）とし、顔料を厚く塗り込んだ洋風表現のようだ、と指摘した。

《蘇理訣別》や《王昭君》に用いた没線や濃淡は、三次元性をともなった陰影表現を感じさせる。つまり、歴史画や神話画は、場面にリアリティをもたせ、「現実性」が強調されたといえよう。

五節 波の表現

没線や濃淡の試行錯誤から、新たな造形を確立した対象を挙げるならば、「波」の造形であったといえよう。明治 35（1902）年、第 4 回絵画互評会の課題「雄快」に出展した作品《雄快》[図 6]がそれにあたる。聳え立つ巨岩にうちつける波の勇ましさと、鷗が自由に飛び回る平穏さが対比されている。春草自身が「岩へ海水の當る様を描きて、題意を表さんとしたものなれども、思ふに任せず」（注 34）と自評しているように、うねりを伴った海面の様子が藍と胡粉の白の融和によって流麗に表現している。発生する波の動きは、濃淡をリズムカルに施すことで、波の躍動感が感じられる。

若干年代は異なるが、天心は正員画家に水の表現について、以下のように指摘した。

東洋の水は線條の方面より来れるが故に、中には一筆にて丈をなすものあり。彼の馬麟なども線描の方にて、雪舟雪村等も亦線描の水たり。つまり一種の形式となれり（注 35）。

確かに、伝統絵画の波の表現は、狩野派、写生派（円山四条派）、琳派、浮世絵の大半が線描を用いて描き、形式化された造形が多い。天心は、色彩による濃淡を駆使することで形式化された表現から脱することを画家たちに促していた。《雄快》の波の表現は、線描から脱し、波の荒々しさや瑞々しさなどの、自然の本来の「精神性」が画面から感じられる。少なくとも、それまでの伝統絵画にはない、新しい波の表現を確立させたといえよう。つまり、日本画における新たな造形の創出に成功している。濃淡や没線による造形の確立がここに一つの完成を迎えたといってもよい。

おわりに

ここまで、日本美術院の志向と春草自身の志向に焦点をあて、分析を行ってきた。日本美術院の研究会では、言葉のイメージを造形化する課題制作を行っていた。天心や画家たちの志向は、技術面の向上を目指していた、というよりも作品から湧き出る「暗示的な精神性」が濃淡の表現にいかにも備わっているか、といったことを主眼においていたといえよう。「空気・光」に関する造形の確立は、天心や画家の間でもそれほど議論されていない。「暗示的な精神性」を重視する芸術性は、中国山水画による自然本来の生命や気の表現を表す、「気韻生動」の伝統的な東洋絵画の概念にあてはまる。このような状況の中で、春草は、天心や画家たちの意見を取り入れ、霧・雨・波などの表現の幅を広げていったようである。特に、《雄快》の波の表現は、それまでの伝統絵画にはない、新しい造形美を確立させた。このことから、朦朧体の表現目的とされた「空気・光」の描写は、必ずしも第一の主眼におかれなかったが、霧・雨・波などの対象を確立する一つの端緒になったといえよう。以上のことから、本章で紹介した作品を、今日通説で述べられる朦朧体の定義や日本美術院の志向に適合させるならば、《夏日旅行》《菊慈童》《雄快》が朦朧体の決定的な作品であるといえよう。

一方、歴史画のような、人物を主題にした作品は、「現実性」が重視されていた。《蘇理訣別》や《王昭君》で用いられた没線や濃淡は、対象の「質感・立体性」の創出へと化し、その効果は、歴史や伝説の一場面を表す「リアリティ」を際立てる表現へと達した。これらは、空間の再現や現実性を表現する、ルネサンス以降の西洋絵画の要素ともみてとれる。つまり、これまで考えられてきた、朦朧体作品の要素や日本美術院の造形志向とは異なる春草の「独自性」がみられる。春草は、日本美術院の理想や天心の指摘に賛同し、制作を行っていた。しかし、新画風の創出には、成功している箇所も確認できるが、画風が定まらない、といった欠点が浮かび上がる。東洋絵画の「伝統性」を重視するか、西洋絵画の「近代性」を重視するか、という葛藤があったことは間違いない。「朦朧体」と評された画風が今日でも明確に説明できない理由は、ここにあると思われる。つまり、「伝統」と「近代」のはざまに立つ中で、「東洋絵画の伝統性とは何か、西洋絵画の近代性とは何か」という理解がこの時点では、未熟だったのではなかろうか。そのため、画家の迷いが反映され、様々な表現の変化を伴ったといえよう。天心をはじめとする日本美術院の理想は、一貫性があったものの、その中にも、天心や日本美術院の造形志向とは異なる春草の「独自性」は確かに見出せる。彼の志向には、精神性を備えた「暗示性之美」と三次元的要素を備えた「現実性之美」が葛藤していた。換言すれば、伝統と近代のはざまの中で、自身の「個性」をどのように見出していくのか、という葛藤がそこに反映されたといえよう。

注

- (注1) 佐藤志乃『「朦朧」の時代—大観、春草らと近代日本画の成立』（人文書院、2013年）9-16頁参照
- (注2) 佐藤亮一『新潮世界美術辞典』（新潮社、1985年）1476-1477頁参照
- (注3) 前掲注2、1476—1477頁引用
- (注4) 前掲注1、92頁参照
- (注5) 佐藤道信「朦朧體論」（『国華』国華社、104（1）号、1998年8月）
- (注6) 前掲注1、274頁引用
- (注7) 「東洋的ロマン主義」とは、「暗示」や「想像」を意味する。前掲注1、222—232頁参照
- (注8) 岡倉天心「現代日本美術についての覚書き」（『岡倉天心全集第二巻』平凡社、1981年）55頁引用
- (注9) 細野正信「第二章前期日本美術院」『日本美術院百年史二巻上』（日本美術院百年史編集室編、1990年）405頁参照
- (注10) 無名氏（大村西崖）『東京日日新聞』（明治33年4月10日）
- (注11) ここでのイムプレッションは、白馬会の印象主義のことを指す。
- (注12) 前掲注9、405頁参照

- (注 13) 沙鳴羅王『秋田公論』(明治 33 年 7 月)
(注 14) 前掲注 1、272 頁引用
(注 15) 無名子(大村西崖)『東京日日新聞』(明治 33 年 11 月 2 日)
(注 16) 『日本美術』26 号(明治 34 年 1 月)
(注 17) 前掲注 1、89 頁参照
(注 18) 『日本美術』23 号(明治 33 年 10 月)
(注 19) 荒井経『日本画と材料近代に創られた伝統』(武蔵野美術大学出版局 2015 年) 86 頁参照
(注 20) 前掲注 1、94 頁引用
(注 21) 『日本美術』29 号(明治 34 年 6 月)
(注 22) 『日本美術』31 号(明治 34 年 8 月)
(注 23) 前掲注 5、34 頁参照
(注 24) 前掲注 33
(注 25) 無名氏『東京日日新聞』(明治 33 年、4 月 12 日)
(注 26) 『千代田日報』(明治 33 年 4 月 17 日)
(注 27) 前掲注 1、95—97 頁
(注 28) 前掲注 5、33 頁
(注 29) 『読売新聞』(明治 32 年 10 月 22 日)
(注 30) 前掲注 5、33 頁
(注 31) 永田芳男『アサヒクラブ別冊美術特集日本編 51 菱田春草』(朝日新聞出版、1987 年) 川口直宜、草薙奈津子解説 89 頁参照
(注 32) 荒井経『日本画と材料近代に創られた伝統』(武蔵野美術大学出版局 2015 年) 86 頁参照
(注 33) 『東京日日新聞』(明治 35 年 3 月 25 日)
(注 34) 『日本美術』40 号(明治 35 年 5 月)
(注 35) 『日本美術』56 号(明治 36 年 9 月)

主要参考文献

《単行本・全集》

- ・『日本美術院百年史第 1～4 巻上下』(日本美術院百年史編集室編、1989 年)
- ・『菱田春草正・続編』(大日本絵画、1976—1978 年)
- ・『原色日本の美術第二巻 日本美術院』(小学館、1979 年)
- ・岡倉天心『岡倉天心全集第 1～6 巻』(平凡社、1890 年)
- ・岡倉天心『東洋の理想』(訳:富原芳彰講談社、1986 年)
- ・岡倉天心『茶の本』(訳:村岡宏、岩波文庫、1961 年)
- ・宮川寅雄『岡倉天心論』(東京大学出版会、1956 年)
- ・齋藤隆三『日本美術院史』(中央公論美術出版、1974 年)
- ・高階秀爾、河北倫明『近代日本絵画史』(中央公論社、1978 年)
- ・河北倫明『河北倫明美術論集第四巻』(講談社、1974 年)
- ・勅使河原純『春草とその時代』(六藝書房、1982 年)
- ・佐藤道信『日本画の誕生』(大月書店、1993 年)
- ・佐藤志乃『「朦朧」の時代—大観、春草らと近代日本画の成立』(人文書院、2013 年)

《論文》

- ・佐藤道信「水墨の変容—フェノロサ・ビゲロー旧蔵二作を中心に—」(『美術研究』第 344 号、1-12 頁、1989 年、3 月 3 日)
- ・佐藤道信「水墨の変容(承前)」(『美術研究』第 345 号、16-28 頁、1989 年 11 月 2 日)
- ・佐藤道信「朦朧體論」(『国華』国華社、104 (1) 号、28-36 頁、1998 年 8 月)

《展覧会図録》

- ・『日本美術院百年史刊行記念展「近代日本画の夜明け」』(朝日新聞社大阪本社、監修:細野正信、1989 年)
- ・『菱田春草展』(朝日新聞社、監修:細野正信、原田平作、1989 年)
- ・『菱田春草展』(東京国立近代美術、日本経済新聞社、編集:鶴見香織、三輪健仁、2014 年)

《図版出典》

図1『日本美術院百年史第二巻上』（日本美術院百年史編集室編、1989年）

図2～6『菱田春草展』（東京国立近代美術、日本経済新聞社、編集:鶴見香織、三輪健仁、2014年）

図版



図1 横山大観《菜の花》
明治33年（1900）



図2《夏日旅行》明治34年
（1901）



図3《菊慈童》明治33年（1900）



図4《蘇理訣別》明治34年（1901）



図5《王昭君》明治35年（1902）



图 6《雄快》明治 35 年（1902）

News from the winter wonderland:

Yoshitoshi's representation of Saigō Takamori

Freya TERRY

Ph.D. candidate, University of Leuven

〔要旨〕

明治時代における錦絵の量産の繁栄を指摘する一つの例は明治十年に発生した西南戦争に関わる錦絵である。月岡芳年を始め、豊原国周、楊洲周延、安達吟光などという錦絵師が西南の役を中心とする三枚続きを多数描いた。Stevenson (2001)は、月岡芳年は西南戦争の描写のため最もよく囑託された浮世絵師であると主張している。そこで、本稿では、ベルギー王立美術・歴史博物館のコレクションに所属する芳年に作られた西南戦争の錦絵を課題にし、西南の役がどのように描写されたのかを考察する。さらに、芳年の西南戦争絵を垣間見ることで当時の世相が解明できるため、その錦絵を社会政治的な背景から解釈し、検討することも本稿の目的である。方法としては、「川尻出陣之雪」という一枚の錦絵を対象に事例調査を行う。そして、歴史的な文献調査を行うことによって、西南戦争の社会政治的な背景及び描写されているものを把握し、浮き彫りにする。以上の事例調査から芳年の美学を始め、錦絵の画題の正確さ、版元の役割が明らかになった。

[Thesis]

1. Introduction

On 12 September 1877 Kumagai Shōshichi (熊谷庄七) (?-?) published a nishiki-e triptych designed by Tsukioka Yoshitoshi (月岡芳年) (1839-1892) depicting Saigō Takamori (西郷隆盛) (1828-1877) and his rebel army surrounded by meters of snow. This winter wonderland design is one of the numerous events covered by Japanese woodblock prints that reflects the high production and sales of ukiyo-e during the course of the Meiji period (1868-1912). Although many artists such as Toyohara Kunichika (豊原国周) (1835-1900), Yōshū Chikanobu (揚州周延) (1838-1912) and Adachi Ginkō (安達吟光) (fl. 1873-1908) dedicated a large amount of triptychs to this topic, Stevenson (2001) claims that Yoshitoshi was the most commissioned artist to cover the portrayal of the Satsuma Rebellion (西南戦争, *seinan sensō*) (29/01/1877-24/09/1877). Several of his Satsuma's designs even made their way to Europe as Japan exported crates full of woodblock prints during the latter half of the 19th century. Sold by art dealers such as Siegfried Bing (1838-1905) and Hayashi Tadamasa (林忠正) (1853-1906), Japanese woodblock prints became available for purchase in the art centers of Paris and London.

In the collection of the Royal Museums for Art and History (RMAH) in Brussels, Belgium, the Satsuma designs are represented by Yoshitoshi. One of his designs will be the subject of this paper as it allows us to understand how the revolt's sweeping events were interpreted by the artist and the publisher. As both had a close-knit relationship in regards to the production of a print, an in-depth

analysis of this print will prove useful to shed light on the motives behind the making of Yoshitoshi's "The snow of leaving for battle at Kawashiri (川尻出陣之雪, *kawashiri shutsujin no yuki*)". Before plunging into the analysis of the woodblock print, this paper will first introduce the artist himself and the course of the rebellion. Thereafter, Yoshitoshi's winter wonderland will be analyzed to clarify the socio-political context of their production, their subject's authenticity, the role of the publisher and Yoshitoshi's aesthetics. Finally, the conclusion will amplify and further elaborate the results in order to provide insight into the inquiry above.

2. About the artist: Tsukioka Yoshitoshi

Born and raised in Edo, Tsukioka Yoshitoshi (月岡芳年) (30 April 1839 – 9 June 1892) became a resident student in the school of Utagawa Kuniyoshi (歌川国芳) (1798-1861) at the age of eleven. His given name Yonejirō (米次郎) consequently changed to Yoshitoshi (芳年) – a derivation of the second character of Kuniyoshi's name. Three years later, in 1853, he published his first print with reference to Kuniyoshi's work, hence it depicted a historical subject: a twelfth century naval battle between the Minamoto and Taira clans. After those three years of training, which included copying his master's work, drawing from life and studying western drawing techniques, it was normal for a student to publish a work close to the master's design because he was his apprentice and it would be the stepping stone to his own style. After the publication in 1853 Yoshitoshi's career is marked with five years of silence, which leads to the assumption he either ceased to produce designs or nothing survived. From that moment on he started publishing regularly individual prints or series with a wide variety of subjects such as modern-day events, *bijin*, kabuki actors, historical subjects, pictures drenched with blood, pictures for newspapers, Japan's and China's legends and myths and so on.

The 1860s were marked with the deaths of two people close to him: Kuniyoshi in 1861 and his father in 1863. Shortly after the death of Kuniyoshi he drew several portraits of kabuki actors and also immortalized the shogun's travel from Edo to Kyoto in *nishiki-e*. When his father died, however, he changed his signature to Tsukioka Yoshitoshi (月岡芳年), which suggests, according to Stevenson, that Yoshitoshi acknowledged a vague relationship between himself, his uncle's family and their eighteenth century Osaka painter Tsukioka Settei (月岡雪鼎) (1726-1786).⁽¹⁾ In this decade he also explored the folklore of Japan and China to the extent of historical figures. Towards the end of the sixties he went through a bloody period, namely from 1866 until 1868. Most famous is his series 'Twenty-eight famous murders with verse' (英名二十八衆句, *eimei nijūhasshūku*) (1866-1867), which is in collaboration with Ochiai Yoshiiku (落合芳幾) (1833-1904). Although these bloody pictures cover only three years of his lifework, it is often emphasized as a general representation of his oeuvre. Indeed his works from this period are violent and crimson, but these works reflect the political and social aspects of Japan's society at the time. Furthermore, Yoshitoshi embraced simultaneously the fascination and revulsion against the violence that was tearing at society⁽²⁾, and explored realism in a way no other *nishiki-e* artist had ever done before by focussing on the person and his expressions.⁽³⁾

In the beginning of the 1870s he fell into a depression, that was provoked by poverty and sickness. During his depression he started to explore the psychological and emotional side of his characters that

he was portraying, which became the standard theme for his later prints. Stevenson avers this in the following way: *He was breaking away from the old conventions of ukiyo-e and developed his own style: realistic and flamboyant, full of vigor and movement, well suited to the expression of emotion and passion.* ⁽⁴⁾ In 1873 he stumbled out of his depression – but he had two relapses in 1879 and 1890 because he got struck by sickness and poverty again – and started to sign his prints as ‘Taiso Yoshitoshi’ (大蘇芳年), meaning ‘the great resurrection’.

From the mid-seventies he expanded his repertoire by working for several newspapers like the Yūbin Hōchi Shimbun (郵便報知新聞), Eiri Jiyū Shimbun (絵入自由真文) and Yamato Shimbun (大和新聞). The aesthetic value of these pictures is often doubted, because they do not depict the traditional subjects of ukiyo-e, but sensational local events. However, ukiyo-e was evolving together with the Japanese society and are thus of great social value to understand these local skirmishes, although we have to consider these pictures with a grain of salt. These designs were issued as a monthly supplement for subscribers and were a great source of income that lasted until the latter half of the 1880s. Another civil disturbance that boosted the sales of Yoshitoshi’s designs, was the Satsuma Rebellion. With his expertise in battle scenes and historical events, he was – together with artists like Toyohara Kunichika (豊原国周) and Yōshū Chikanobu (楊洲周延) among others – a highly demanded artist for depicting the rebellion, even though artists never visited the scene of events.

In the 1880s he published several series that covered Kuniyoshi’s area of expertise, but fully developed his own style by focusing on the individuals and their expressions. He depicted them with an unseen sense of realism and flair for dramatic and heroic situation they were in. His series ‘Yoshitoshi’s Finest Warriors’ (芳年武者无類, *yoshitoshi musha burui*) (1883-1886) is an applicable example as is ‘One Hundred Aspects of the Moon’ (月百姿, *tsuki hyakushi*) (1886-1892) that dealt with figures from both Japanese and Chinese history and mythology, while the moon is its common factor. In 1888 he produced his finest prints of women in ‘Thirty-Two Aspects of Customs and Manners’ (風俗三十二相, *fūzoku sanjūnisō*) (1888) where women from different social classes were caught in typical moments of their quiet lives. ⁽⁵⁾ The following year he once returned to Japanese mythology with his ‘New Forms of Thirty-Six Ghosts’ (新形三十六怪撰, *shingata sanjūrokkaisen*) (1889-1892), which he designed until his death on 9 June 1892.

3. Yoshitoshi’s encounter with the Satsuma Rebellion

The Satsuma Rebellion, or ‘*seinan sensō*’ (西南戦争) took the Imperial Army approximately nine months to suppress that started on January 29 and ended with the Battle of Shiroyama on September 24 1877. Under the command of Saigō Takamori (西郷隆盛) (1828-1877) the rebel army marched towards Tokyo but never left the island Kyūshū. The rebels, together with Saigō Takamori, knew their origin in the Satsuma domain (薩摩藩, *satsuma han*) and left Kagoshima towards Kumamoto, resulting in a fifty-four-day siege of the castle and also a seventeen-day battle of Tabaruzaka. After the failed siege of Kumamoto castle the faith of the rebels was already sealed, but prolonged by continuous retreat of their troops to Hitoyoshi, Miyazaki, Miyakonojō, Nobeoka, resulting in the final battle at Shiroyama that ended in the early morning of September 24 1877. The death of Saigō Takamori also heralded the

end of any organized military resistance to the reforms by the Meiji government and any disbelief that only samurai were adequate for military service.

With the establishment of several Japanese newspapers in the beginning of the 1870s ⁽⁶⁾, news on the rebellion easily spread across the country. While journalists covering this scope travelled to the Kyūshū mainland, woodblock designers remained in the capital drawing their inspiration from newspaper articles and from their own imagination. This phenomenon did not exclude Yoshitoshi: he as well resided in the capital during the course of the rebellion. This is a crucial factor that we must bear in mind when looking at pictures of the Satsuma Rebellion. This, while also taking into account the mass-produced nature of Japanese woodblock prints: the entire production process had to be lucrative.

4. Yoshitoshi's winter wonderland

The table below [table.1] introduces the general information of the Yoshitoshi's design that could be found on the print itself. The nishiki-e [figure.1] can be found at the end of this paper.

Series title	Snow, moon and flowers in the southwest (西南雪月花内, <i>seinan setsugekka (no) uchi</i>)
Print title	The snow of leaving for battle at Kawashiri (川尻出陣之雪, <i>kawashiri shutsujin no yuki</i>)
Format and dimensions (height by width)	Triptych, ōban (大判), 72.1 X 37.2 cm
Artist's signature	Ōju yoshitoshi (應需芳年)
Artist's name	Tsukioka Yonejirō (月岡米次郎)
Artist's address	Tokyo Shinbashi Maruyamacho Gobanchi (新橋丸屋町五番地)
Publisher's name	Kumagai Shōshichi (熊谷庄七)
Publisher's address	Tokyo Kobunachō Sanchōme Jūichibanchi (小舟町三丁目十一番地)
Date's seal	12 September 1877 (明治十年九月十二日御届)
Price	Fixed price 6 sen (定價六錢)
Additional text from right to left	Saigō Kohee (西郷小兵衛/西郷小平) Saigō Takamori (西郷隆盛) Henmi Jūrōta (逸見十郎太) Kirino Toshiaki (桐野利秋) Shinohara Kunimoto (篠原國幹)

Commissioned by Kumagai Shōshichi (熊谷庄七), this triptych by Yoshitoshi is called “The snow of leaving for battle at Kawashiri (川尻出陣之雪, *kawashiri shutsujin no yuki*)”. As this print also reveals a series title, we could expect this print to be part of a larger series dealing with scenes of “snow, moon and flowers in the southwest (西南雪月花内, *seinan setsugekka (no) uchi*)”. Yet, the lack of any other prints in Yoshitoshi's oeuvre sharing the same series title tells us otherwise. Perhaps this means that the publisher intended to commission a series of prints by Yoshitoshi portraying the

rebels and their leader in a winter wonderland, but due to lack of success the remaining designs were cancelled. Another explanation could be that the other prints of this series never survived or are hidden somewhere in a private collection. A final explanation for this series title, is that in either of the above cases, this particular design is a reprint of an earlier series – whether it was cancelled or did not survive. The presence of the series title is not the only point of this print that is open to debate. As the print portrays the rebels in a snowy landscape, one would expect the print to have been published in the course of late February. However, the date's seal reveals that the print was published, not in February, but on 12 September 1877. Thus leaving us with the enigma why the publisher would commission a design by Yoshitoshi depicting the rebels in a snowy landscape in the beginning of September. One plausible explanation would be that the print was a reprint to remind the public of the beginning of the rebellion, when the end was near in September. This explanation, on the other hand, can be opposed by the presence of Yoshitoshi's signature that reads 'ōju yoshitoshi' (應需芳年), which reveals that the print was specially commissioned. This can be interpreted in two ways: either the publisher commissioned this design in February and we are dealing with a reprint here. Or the publisher commissioned Yoshitoshi in the beginning of September as an attempt to increase sales by reminding the public to the glory days of the Satsuma Rebellion and the national hero Saigō Takamori.

As can be deducted from the above table [table.1] and the print itself [figure.1], this designs brings a poetic scenery, as is suggested by the title, to life in a theatrical representation where the rebels are spread out in the snowy mountains. As each major figure in this triptych is accompanied with red cartouches, we are able to identify the main protagonists partaking in this winter wonderland. On the right, we see first of all Saigō Takamori on horseback. As Japanese woodblock prints are to be read from right to left, we understand that his presence is the most important one. Really close to him, we find his younger brother Saigō Kohee (西郷小兵衛) (1847-1877), who was the commander of the first battalion and the first platoon until his death on 27 February at the battle of Takase (高瀬). In regards to Saigō Kohee's name, there seems to be a minor spelling mistake as his name on the print is written as 西郷小平. This might correlate with the rapid speed of the production process of Japanese woodblock prints, as it seems that there was no time to check the correct spelling of the persons depicted on the designs. In the middle part of the triptych we see Henmi Jūrōta (逸見十郎太) (1849-1877), commander of the third battalion, overlooking the soldiers marching through the snow from the top of the hill. Down in the mountain pass, Kirino Toshiaki (桐野利秋) (1838-1877) and Shinohara Kunimoto (篠原國幹) (1837-1877) can be found guiding the rebels through meters of snow. Both were commanders of the battalions, respectively the fourth and the first.

Next to the identification of the main protagonists on this triptych, we can also determine “the date of the depicted landscape”⁽⁷⁾. The title already reveals that the rebels are leaving Kawashiri (川尻), where according to historical sources, the vanguard, which was led by Saigō Takamori himself, arrived on 19 February. The main body of the Satsuma Army joined them the following day. With the enforcement of the extra soldiers that included Shinohara, Kirino and other commanders, they advanced on Kumamoto Castle on 21 February. Therefore, we can say that this triptych elaborates the story of the rebel forces leaving Kawashiri on 21 February, which is “the date of the depicted

landscape”. More information on this date can be found in the cartouche that is on the left of the title of the print. This box contains the following text;

西郷隆盛桐野利秋篠原国幹等
政府へ尋問の事ありと号し明治
十年二月十五日兵一万五千を率ひ
薩州鹿児島を出発し肥後熊本
に到らんとす時に飛雪連日白銀
の世界のごとし隆盛三太郎峠に
到り鎮墓この嶮を守らず軍ハ
はや勝たりとて衆を励まし
易々此を越へしとらん

This can be translated as follows;

Claiming to have issues with the Government, Saigō Takamori, Kirino Toshiaki, Shinohara Kunimoto and others commanded on 15 February 1877 an army of 15,000 men and departed from Kagoshima in Satsuma Province trying to reach Kumamoto in Higo Province. At that time, there was a blizzard for days on end, and it was like a world mantled in silvery snow. When Takamori reached the Santarō mountain pass, the garrison was not defending this dangerous spot. His troops swiftly defeated it, and encouraging the masses, they were able to cross this place with ease.

From the above text, buyers of the print could paint a general picture of the rebellion with the provided information. It commemorates the heraldic moment where the rebels were able to swiftly move on to Kumamoto Castle, as the Imperial Army Forces were not defending this mountain pass called Santarō (三太郎). Interesting about this mountain pass, which is visualized in Yoshitoshi's design, is that this pass is not on the Kyūshū mainland, but is close to the city Amami (奄美), which is situated on the largest island within the Amami archipelago (奄美群島, *amami-guntō*) between Kyūshū and Okinawa. Therefore the writer of this text suggests that the rebel army was not leaving Kawashiri, but was even further away and on an island, while their intention was to advance on Kagoshima. One could say that the writer of this text had misspelled the name of the mountain pass, however, there seem to be no mountain pass in the vicinity of Kawashiri. This leaves us with two questions. First of all, why would Yoshitoshi depict the rebels in a non-existing mountain pass near Kawashiri? And secondly, why would the publisher commission a design that provides historically incorrect information?

From the above comparison between the content of the design and historical facts, we have so far determined “the date of the depicted landscape”. Furthermore, the authenticity of the subject was also revealed. As it becomes very clear from the above analysis, Yoshitoshi's print illustrates both correct

and incorrect information. Historical sources dictate that the depicted persons were indeed present at Kawashiri at that time of the year. However, there seems to be no mountain pass near Kawashiri, while the mentioned pass in this print is located far away from the Kyūshū mainland. This false information provided by Yoshitoshi – and consequently by the publisher – could uphold the claim that this print was not a reprint of an earlier design, but an actual commission in the course of September. It seems as though the continuous retreat and the inevitable defeat ahead instigated Kumagai to commission a design on the rebels in a situation where there was still hope for them, instead of another print on one of their overthrows. In addition, the publication of such a print would remind the public of the Satsuma rebels' heroic adventure and thus most likely increase his sales. This explanation also answers the questions regarding why such a print would be commissioned and designed in the first place, as it also aligns perfectly with the mass-produced and lucrative nature of Japanese woodblock prints.

As final part of the analysis of this print, Yoshitoshi's aesthetics, and in particular his depiction of Saigō Takamori will be discussed. What immediately catches the eye is that Saigō, in contrast to the other persons on the print, is still wearing his official imperial army uniform. This can be explained by the argument that his attire suggests his continuing loyalty to the emperor, while the attire from other men links them visually and ideologically with pre-restoration ideals⁽⁸⁾. In order to reinforce the above claim it is necessary to take a look at Saigō's motives towards the rebellion. The obscurity in which Saigō's incentives for the rebellion are involved, has induced many scholars – such as Tamamuro Taijō (主室諦成) (1958, 1960), Ikai Taka'aki (猪飼隆明) (1992) and Tanaka Sōgorō (田中惣五郎) (1980) – to assume that he aspired and plotted the revolt. However, an in-depth examination of Saigō's life before and after his retirement of the political scene in 1873 reveals that he avoided direct involvement in politics after this return to Kagoshima and did not aspire to start a conflict with the Meiji state – which was concluded by Ravina (2013) and Yates (1995). This is evident in Saigō's rejection to participate or to have any kind of involvement in the political disputes such as the Saga Rebellion (佐賀の乱, *saga no ran*) (16/02/1874-9/04/1874) and the Shimpūren Rebellion (神風連の乱, *shinpūren no ran/jinpūren no ran*) (24/10/1876-25/10/1876). His decision to confront the Meiji government, which was made on February 7, does not establish that he plotted the revolt. On the contrary, it proves that Saigō felt responsible for what had resulted from his passive support to the ex-samurai and the students of the private schools (私学校, *shigakkō*). For them he was a source of inspiration and when he agreed to lead the rebel army, he hoped that he could convince his former colleagues in Tokyo to modify some of their policies⁽⁹⁾. In addition, Saigō's call to leave behind a not sizeable force in Kagoshima to protect his rear or to repel any offensive launched against his main base, proves that he did not intend to prepare for a full-scale war⁽¹⁰⁾.

When looking at several depictions of Saigō Takamori by Yoshitoshi, we could come to the conclusion that Yoshitoshi himself was an avid believer that he did not plot the rebellion. Regardless of the situation in which Yoshitoshi portrays Saigō during the course of the rebellion, he is always wearing his official imperial army uniform – as can be seen in [figure.1], [figure.2] and [figure.3] – or his uniform is in close vicinity as in [figure.4]. Yet, we should take into account that Japanese woodblock prints were a product of joint-cooperation and that he was commissioned by a publisher with his own hidden agenda, namely to find a profitable income. In contrast to Yoshitoshi, other

designers seem to have applied the following rule: if Saigō is partaking in a battle scene, he should be portrayed in his official imperial army uniform – as can be seen in [figure.5], [figure.6] and [figure.7] – or in any other cases he should be wearing traditional samurai attire – as can be seen in [figure.8] and [figure.9].

One final thought can be said about Saigō Takamori's expression. Rather than showing a fierce look with determination in regards to the battle that lies ahead, Saigō's head is facing downwards and staring off into meters of snow that lie beneath him. It seems as if he is reflecting on some matter, or pounding on choices that he has made or still needs to make. Here, one of Yoshitoshi's most well-known features becomes apparent: his realistic style with great attention paid to the expression of emotion and passion of his depicted characters. If we interpret Saigō's expression as one of reflection, we might have found another argument to support the claim that this print was specially commissioned during the course of September. In this light, Yoshitoshi might have been asked to design a scene where we see the rebels in their glory days, but with their leader already knowing their unescapable faith.

5. Conclusion

This print by Yoshitoshi can elaborate a general presumption of Yoshitoshi's aesthetic, his style and interpretation of the topic. In order to fully comprehend Yoshitoshi's aesthetic, it is necessary to describe and explain his prints in light of the relevant socio-political context. As a result of applying this in the analysis of the print, and with a general introduction to the rebellion, the authenticity of the depicted subject, the role of the publisher and the difference between the date of publication and the date of the depicted landscape was clarified.

As has become clear from the above analysis, the authenticity of the depicted subject is a confusing matter. The persons depicted on the triptych were present at Kawashiri according to the historical timeline of the rebellion, but the mention of the mountain pass raises questions. Not only is the so-called mountain pass located far away, there is even no mountain pass in the vicinity of where the rebels are being depicted. In this light, the representation of the rebels in a non-existing mountain pass, aids to how powerful they appear in both the design as in the provided text. Not only did they outsmart the Imperial Army forces, they also surpassed a mountain pass covered in snow, thus ultimately, they claimed victory against mother nature. This heroic depiction contrasts against the pounding look on the national hero's face: Saigō Takamori. In contrast to other depictions of Saigō in the course of the rebellion, he is mostly seen with a determined face, ready for battle. Here instead, we see him looking away from the overview on the mountain pass, and staring off into the ground. Moreover, his face, besides the face of his younger brother, is the only one that we can see. All the other commanders and rebels are facing away from us, leaving for Kumamoto Castle. This highlights even more the emotional expression and draws all the attention towards him.

Another element that raises questions is the immense time between the date of publication and the date of the depicted event. While the portrayed scene takes place on February 21, the date seal takes

the date of September 12. This either implies that this print was a reprint of an earlier design or an actual commission in the course of September. The latter seems to be the correct answer, as it aligns with the emotional state of Saigō Takamori on the print. Furthermore, it agrees with the understanding that the publisher Kumagai Shōshichi commissioned a design on the rebels in a situation where there was still hope for them, instead of another print on one of their overthrows. As September was a time of continuous defeat of the rebels by the Imperial Army forces, an execution of the rebels in a victorious situation – here both the Imperial Army forces as mother nature – would most likely spike the number of sales and would maybe light a bit of hope in the hearts of Tokyo’s inhabitants.

Explanatory comments

- (1) John Stevenson, *Yoshitoshi's One Hundred Aspects of the Moon*, p.14.
- (2) Ibid, p. 19.
- (3) The human expression and emotions he explored further and mastered in the latter half of his work.
- (4) John Stevenson, *Yoshitoshi's One Hundred Aspects of the Moon*, p. 22.
- (5) Ibid, p. 42.
- (6) The Tokyo Nichichi Shinbun (東京日日新聞) in 1872 and Yomiuri Shinbun (読売新聞) in 1874.
- (7) This concept was introduced by Tanaka Kisaku (田中喜作) and is a methodological tool of the *keikan nendai* (景観年代), which is not the same as *seisaku nendai* (制作年代), the date of the actual production of the print.
- (8) Bruce Arthur Coats, Allen Hockley, Kyoko Kurita, Joshua S Mostow, and Ruth Chandler Williamson Gallery, *Chikanobu: Modernity and Nostalgia in Japanese Prints*, pp. 20-22.
- (9) Charles L. Yates, *Saigō Takamori in the Emergence of Meiji Japan*, p. 468.
- (10) James H. Buck, *The Satsuma Rebellion of 1877: From Kagoshima through the Siege of Kumamoto Castle*, p. 431.

Bibliographical references

- Buck, James H. “The Satsuma Rebellion of 1877. From Kagoshima Through the Siege of Kumamoto Castle.” *Monumenta Nipponica*, vol. 28 (1973): 427-446.
- Konishi, Shirō (小西四郎). 『西南戦争』 (*seinan sensō*, Eng: *Seinan War*): 『錦絵幕末明治の歴史』 (*nishiki-e bakumatsu meiji no rekishi*, Eng: *Brocade pictures, the history of Bakumatsu and Meiji*). Tokyo: Kōdansha (講談社), 1977.
- Ikai, Taka'aki (猪飼隆明). 『西郷隆盛—西南戦争への道』 (*saigō takamori – seinan sensō he no michi*, Eng: *Saigō Takamori – Towards the Satsuma Rebellion*). Tokyo: Iwanami Shoten (岩波書店), 1992.
- Ozaki, Hotsuki (尾崎秀樹). 『西郷隆盛と明治時代』 (*saigō takamori to meiji jidai*, Eng: *Saigō Takamori and the Meiji period*). Tokyo: Nihon Hoso Shuppan Kyokai (日本放送出版協会), 1982.
- Ravina, Mark. *The Last Samurai the Life and Battles of Saigo Takamori*. Hoboken, N.J.: Wiley, 2013.

Shioya, Shichijūrō (塩谷七重郎). 『錦絵で見る西南戦争: 西南戦争と福島県人』 (*nishiki-e de miru seinan sensō: seinan sensō to fukushima kenjin*, Eng: *The Satsuma Rebellion seen in nishiki-e: the Satsuma Rebellion and persons from the prefecture Fukushima*). Aizuwakamatsu: Rekishi Shunjū Shuppan(歴史春秋出版), 1991.

Stevenson, John. *Yoshitoshi's One Hundred Aspects of the Moon*. Hotei Pub., 2001.

Tamamuro, Taijō (圭室諦成). 『西郷隆盛』 (*saigō takamori*, Eng: *Saigō Takamori*). Tokyo: Iwanami Shoten (岩波書店), 1960.

Tamamuro, Taijō (圭室諦成). 『西南戦争』 (*seinan sensō*, Eng: *The Satsuma Rebellion*). Tokyo: Shibundō (至文堂), 1958.

Tanaka, Sōgorō (田中惣五郎). 『西郷隆盛』 (*saigō takamori*, Eng: *Saigō Takamori*). Tokyo: Yoshikawa Kōbunkan (吉川弘文館), 1980.

Yates, Charles L. *Saigō Takamori: The Man Behind the Myth*. London ; New York : New York: Kegan Paul International ; Distributed by Columbia University Press, 1995.

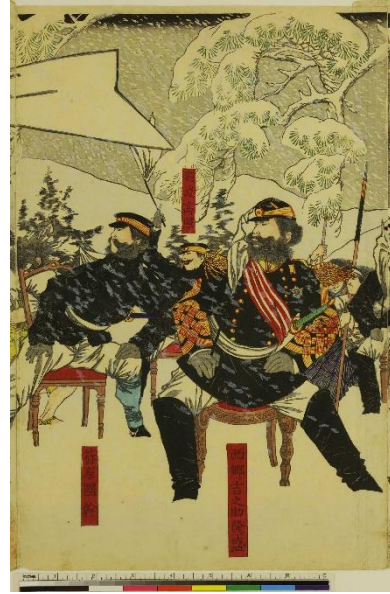
Illustrations



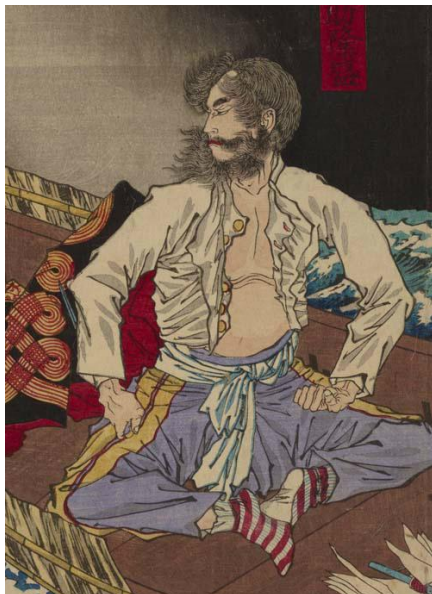
[figure.1] Tsukioka Yoshitoshi (月岡芳年). *Snow, moon and flower in the southwest: the snow of leaving for battle at Kawashiri* (西南雪月花内川尻出陣之雪, *seinan setsugakka kawajiri shutsujin no yuki*). 1877, nishiki-e. Brussels: collection Royal Museums of Art and History.



[figure.2] Tsukioka Yoshitoshi (1877)
Royal Museums of Art and History, Brussels



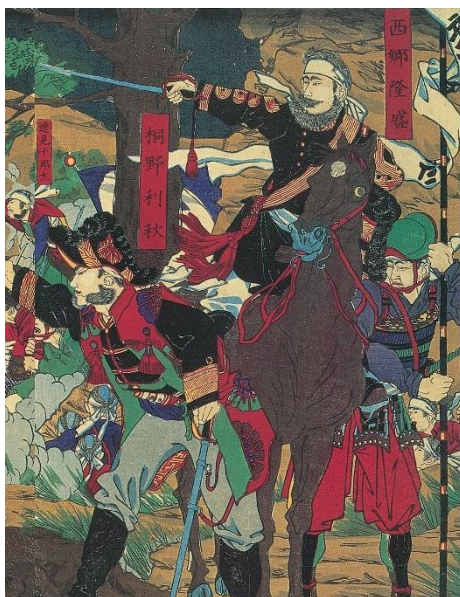
[figure.3] Tsukioka Yoshitoshi (1877)
Royal Museums of Art and History, Brussels



[figure.4] Tsukioka Yoshitoshi (1877)
Ōta Memorial Museum of Art (太田記念美術館)



[figure.5] Yōshū Chikanobu (1877)
National Diet Library (国立国会図書館)



[figure.6] Yamazaki Toshinobu (1877)
National Diet Library (国立国会図書館)



[figure.7] Utagawa Fusatane (1877)
National Diet Library (国立国会図書館)



[figure.8] Kawanabe Kyōsai (1877)
National Diet Library (国立国会図書館)



[figure.9] Yōshū Chikanobu (1877)
National Diet Library (国立国会図書館)

Source of the illustrations

[figure.1, figure.2, figure.3] Royal Museums for Art and History. All rights reserved.

[figure.4, figure.5] Konishi, Shirō (小西四郎). 『西南戦争』 (*seinan.sensō*, Eng: *Seinan War*): 『錦絵幕末明治の歴史』 (*nishiki-e bakumatsu meiji no rekishi*, Eng: *Brocade pictures, the history of Bakumatsu and Meiji*). Tokyo: Kōdansha (講談社), 1977.

[figure.6, figure.7] Shioya, Shichijūrō (塩谷七重郎). 『錦絵で見る西南戦争: 西南戦争と福島県人』 (*nishiki-e de miru seinan sensō: seinan sensō to fukushima kenjin*, Eng: *The Satsuma Rebellion seen in nishiki-e: the Satsuma Rebellion and persons from the prefecture Fukushima*). Aizuwakamatsu: Rekishi Shunjū Shuppan (歴史春秋出版), 1991.

[figure.8, figure.9] Ozaki, Hotsuki (尾崎秀樹). 『西郷隆盛と明治時代』 (*saigō takamori to meiji jidai*, Eng: *Saigō Takamori and the Meiji period*). Tokyo: Nihon Hoso Shuppan Kyokai (日本放送出版協会), 1982.

「役者絵から美人画へ：〈春信娘〉成立をめぐって」

Sabine BRADEL, M.A.
PhD candidate, University of Zurich,
Institute of Art History Section for East Asian Art History

[Abstract]

Around the globe, appreciators of *ukiyo-e* art connect Suzuki Harunobu's (1725?-1770) name not only to the invention of the full-colour *nishiki-e* printing technique but also to subtle works that are characterised by poetic compositions and finely balanced colour combinations. It is usually stated, that his graceful style in the depiction of female beauty was strongly influenced by artists like Nishikawa Sukenobu (1671-1750), Ishikawa Toyonobu (1711-1785) and Okumura Masanobu (1686-1764). In the past years, researchers have focused on pointing out the influence of these masters on Harunobu's *nishiki-e* works and have identified the publications from which the younger artist liberally adapted and appropriated motifs for his own purposes. However, not much has been stated about Harunobu's early, pre-*nishiki-e* works and why he was selected by his wealthy patrons to become the first artist to employ the newly developed full-colour printing technique in his publications. While we lack written evidence to explain these questions, another method to solve this issue may be found in stylistic analysis. In this context, one must especially note Torii Kiyomitsu (1735-1785), the third head of the famous Torii school that monopolized actor prints. After all, Harunobu closely followed Kiyomitsu's style in his own *benzuri-e* actor prints with which he presumably debuted in 1760. Kiyomitsu's influence becomes especially visible in Harunobu's depictions of the slender figures of female impersonators on the kabuki stage, most of all the popular *onnagata* Segawa Kikunō II (1741-1773).

The aim of this paper is to shed light on the development of the Harunobu's acclaimed *bijin-ga* style, which would eventually culminate in the graceful "*Harunobu musume*" ("Harunobu girl") as the defining term for feminine elegance in mid-18th century prints and whether this formula may not even have been developed much earlier in Kiyomitsu's prints.

[論文]

はじめに

明和2年に創始された吾妻錦絵の発明者の一人として鈴木春信（1725? -1770）が活躍したことは、日本においても西洋においてもよく知られている。彼の名前は世界中の浮世絵鑑賞者から、抒情的な構成と絶妙な色合いや、繊細さに溢れた作品といった表象に繋がられている。しかし、その錦絵印刷技術が展開するきっかけとなる絵暦交換会に春信がどのような理由で参加し、どのようにそこの指導者の目にとまることになったのか、そしてそこからどのようにして初めての浮世絵師としてその新しい印刷技術を利用するようになったのかという疑問は、春信研究において

未だ明確に解き明かされていない。それらの質問に答えるため、春信の初期紅摺絵における様式を詳細に検討する必要があると思われる。

一般的に、春信の絵の様式に顕著な影響を及ぼした人物として西川祐信（1671-1750）や石川豊信（1711-1785）、奥村政信（1686-1764）などの名前が挙げられている。近年、特に錦絵技術にて制作された春信美人画の一枚絵の研究が活発に進められ、春信の図用借用などの影響関係を詳らかにする調査が増えている。こうした調査において春信が他の著名な浮世絵師から様式的、また構成的な要素を自由に自らの作品に借用したり、転用したり、複写したりしながら、自分の様式を向上させたと解釈されている。しかし、この解釈は主に錦絵の美人風俗画に対して向けられたものである。春信の初期作品を観察すると、祐信のモチーフを模写した図様を確認できるが、さらに深い様式的あるいは形式的な影響はまだ認められない（注1）。

これに対し、春信が宝暦10年に浮世絵の世界に登場したばかりの見習期に板行した紅摺絵における人物描写の様式は、先に挙げた先行絵師の様式とは異なり、むしろ芝居絵を扱った鳥居派三代目家長である鳥居清満（1735-1785）の様式に似ている。春信の紅摺絵を評論する論文には鳥居清満の名が折々に挙げられているが、両者の作品を直接比較する調査は未だ見当たらない（注2）。それに加え、春信の初期様式にさらなる刺激を与えたのは、当時名声を博していた女形の二代目瀬川菊之丞（1741-1773）だと考えられている（注3）。菊之丞の姿は春信の役者絵作品の中で異例なほど多く現れ、彼の美貌が春信の中性的な人物描写の成立に深く関与していると推察される（注4）。つまり、春信が美女の日常風俗を描き始める前、すでに3、4年間芝居絵の絵師として経験を蓄積し、そのあと自己の様式を宝暦年間に打ち立てたと考えられる。

清満の様式自体は、浮世絵の草創期における芝居絵を席卷した二代目鳥居清信と二代目鳥居清倍の様式に倣う場合もあるが、特に女形の描写は先代の様式から離れ、よりしなやかな人物として描かれている。つまり、春信の錦絵期を代表する〈春信娘〉あるいは〈春信美人〉と呼ばれている可憐で繊細な遊女と市井女性の表現は、春信の初期紅摺絵にだけではなく、鳥居清満の役者絵にも起源をもっているのではないかと考えられる。こうした春信の美人画形式がもともと芝居絵から発達したという考え自体は新しいとはいえないが、これまでの美人画研究においてただ軽く触れられているだけで、未だ本格的に研究されているとはいえない。そして、清満の人物描写において女形が中性的に表現されており、これは春信の美人画表現を先取しているといえる。それゆえ、春信の華麗な表現と称賛される美人画様式は具体的にどのように展開したのかを、春信と清満の紅摺絵二枚を比較しながら明らかにしたい。

第一章 〈明霞名所渡〉

春信が瀬川菊之丞を初めて一枚絵の主題として描いたのは宝暦11年の〈明霞名所渡〉（東京国立博物館の画像番号 C0068694 参照）であり、版元は春信の多くの初期一枚絵作品を板行した鈴木伊兵衛であった（注5）。原作は「隅田川」（注6）という能の作品で、その内容は、失踪した息子を探すため都から隅田川を下っている途中に狂女になってしまう母親と、そこで出会う渡守との間で繰り広げられる物語である（注7）。現在までこの一枚絵はただ年代測定と物語の内容だけが論評されていただけであったが、詳細に検討すると春信の初期一枚絵について様々な重要な要素を指摘できる。その中で最も重要なのは判型と背景である。

まず判型について、初期浮世絵の多くが大判型で出版されていたが、宝暦年間までは役者絵制作に細判が好んで使用されるようになっていた（注8）。春信の初期作品も細判が使用されていたが、この作品では横大判型が選択され、図柄の空間を顕著に拡大されている。この絵が作られていた時代には横大判の判型は、主に名所絵や吉原の場面を主題とする「浮絵」に使用されているだけで、春信の選択はあまり例がないものであった。この選択により春信は、大胆で挑戦的な新しい表現を目指したのではないかと考えられる。

次いで背景に関して、この絵の背景に堤に隠れた様子で鳥居が見られるので、この場所は隅田川東岸にある三囲稲荷神社であると確認できる。三囲神社の向こうには新吉原があり、遊客が隅

田川を渡る前に向の墨堤地方をよく遊覧したと言われており、江戸の名所の一つである。しかしながらこのような素朴な自然の背景が芝居の一場面として選ばれるのは当時稀であったと思われる。

絵の構築を見ると、二人の役者は舞台のようにみえる船床に配置されている。構成が役者を囲む楕円形を基調にしているように見えながらも、いくつかの斜線の形が際立っていることが分かる。特に背景に見られる斜線は観察する者の視線を図様の真ん中に配置されている主題へと導いている。さらに、水面を表す線や船床、岸边における水平線は絵全体の構築に安定した基礎を与えている。この作品は春信の見習期に描かれているのにもかかわらず、構築は多種多様で複雑に描かれており、絵の中におけるそれぞれの要素の配置も無駄がなく、調和のとれた表現がなされている。この図にみられるある種の幾何学的な構図と対照的な形式によって革新的な描出方法を織り混ぜ、それによって絵に動きを与えながらもむらのない統一的な構図を実現している。

他の絵師との比較をすれば、春信のこの構図が、実は三つの異なる絵を手本にして描かれていたことを指摘できる。まず、鳥居派や特に鳥居清満の絵における特徴である鋭く尖った形状や、斜線と半円形との活発な対比が見られる（早稲田大学坪内博士記念演劇博物館の資料番号 013-0014 参照と〔図1〕）。また、清満の絵における初代中村松江（1742-1786）の姿を観察すると、春信の特徴となる柳腰のたおやかさと身体全体の柔軟さ、精巧な顔の表現が見出せる。つまり、清満の女形描写の様式が「春信娘」の原型であったのではないかと推察される。この清満の両図が春信のと大きく異なっているのは、観察者の視線がこの斜線に従って画像の外へと流れ、視線を構図の中にとどめるといふ要素を欠いている点にある。

清満の他、春信が坊主と馬子の姿を西川祐信の『絵本倭比事』から借用していることを指摘できる（早稲田大学坪内博士記念演劇博物館の請求記号文庫 31 E0454 第 87 画像参照）。春信がしばしば祐信の作品から要素やモチーフを借用していたのは周知の事実で、他の紅摺絵における例として宝暦 13 年あるいは明和元年に版行する「見立三夕 定家 寂蓮 西行」に描出された背景も祐信の同じ絵本から模倣したと指摘できる（注 9）。

このように他の絵師を手本にしながら、『明霞名所渡』は春信が絵師としてデビューしたわずか一年後の作品であるにもかかわらず、画面の全体に及ぼす背景の描出と、ある種の幾何学的な調和のとれた形に配置されている人物とを表現するに至っている。こうした特徴はのちの春信の作品にも見出され、すでに錦絵時代の特徴を予告していることが分かる。

第二章 《見立鉢の木》

春信の役者絵と彼の先行絵師の役者絵図様とを厳密に比較すれば、春信の様式発展をより一層明らかにさせられる。次の例として、春信の絵《見立鉢の木》（宝暦末期）〔図2〕と鳥居清広（生没年不詳）の絵《白たへ 中村富十郎》（宝暦8年）〔図3〕との比較を挙げる。両図は細判紅摺絵型である。春信画の制作時期が今なお不明であるが、宝暦末期と考えられている。もし春信の最初の一枚絵の制作が宝暦10年だと仮定すれば、宝暦10年から明和元年（1760-1764）の間の作品だと特定できる。この絵の由来になっている謡曲「鉢木」は江戸時代に浄瑠璃と義太夫節に改作され、当時人気の芝居になっていた（注10）。

まず、清広と春信の絵を見比べれば、構成が一見して殆ど同一であるように見られるが、厳密に観察すると、数多くの差異を両図の形式の中に見出せる。一番目に留まるのは、背景の建築の違いと春信の絵に追加された虚無僧である。春信は視界と点景を拡大し、原本である謡曲の叙述を忠実に描写している。主人公を見ると、清広の絵には初代中村富十郎（1719-1786）の名前が書き込まれ、衣装に中村家の家紋も折り込まれているが、春信のほうは人物を不特定の一人の娘として表し、歌舞伎舞台との関係を不明瞭にしている。人物の配置を見てみると、清広が描いた女形の振袖は背景における建築と同じ色に摺られている。このため、人物と建築が融合し、観察者の認知を乱す。それに対して、春信の美人は建築から離れ、柱の黄色が着物の色彩と違っており、人物が建築と重なっていない。さらに、清広の美人の姿態描写は体貌がずんぐりした、顔が小判

型で、軒いっぱい氷柱を拭くため腕が顎より上の方向に上がり、そのため首も伸びているので、全体的に硬い容姿を表示する。加えて、左手で着物の前結び帯の下を掴み、足の振りによって平衡を崩す動作を示しており、難儀している様子が表されている。これとは異なり春信の美人は、腕を肩の高さより上げていないため、身体全体が清広画より余裕があり、たおやかに見える。低い手振りにて襟首も伸ばさず、姿の楚々たる様子がより強調されている。清広と春信の美人がそれぞれ微妙に異なる姿勢に描かれており、構造的な配置の違いも合わさって、両者の構図全体から感じられる雰囲気はそれぞれ異なるものになっている。

両者の構築をさらに観察すると、清広の作品は鳥居清満の絵に多く見出される斜線の形状に沿って形成されており、観察者の視線はその斜線に従って画面の外へと流れ出ていることが分かる。それに対して、春信は背景における斜線と三角形を構造的に適用し、観察者の視線を常に美人の姿へと導いている。加え、背景における虚無僧の姿は雪の丘によって形作られる半円形に囲まれている。これにより、この虚無僧は前掲の《明霞名所渡》の背景における坊主と馬子のような単なる通行人としてではなく、むしろ「鉢の木」の物語の二人目の主人公として扱われていることが分かる。つまり、春信が構築の制作において斜線と三角形によって導かれる美人と半円によって焦点を当てられる虚無僧という対照的な形を扱いながらも、均衡のとれた構図を形成することで、観察者の視線を構図の中の重要な要素へと引き込み、留まるようにさせている。両図を比較すると、春信の絵は清広の絵より広い空間を描きつつも観察者の視線を拡散しないよう絶えず図の中心へと導いている。

最後に、両図の手本となっている鳥居清満の構図が指摘できる（ボストン美術館の資料番号 5 4. 345 参照）。この清満の絵には、清広が清満から借用した軒いっぱいの氷柱と縁側や竹で遊ぶ小鳥と、春信も清満から模写した葦垣と鉢とが描かれている。清満の構図に登場する主人公三人は春信の絵と同様に長細い身体と柔軟な線で表現されているものの、背景の建築物において構図が細判三丁掛に分離されており、着物の繊細に描かれた模様は色彩とともに背景と衝突している。加えて、左端の若衆と真中の娘の視線が触れ合うが、その途中に配置されている清満の落款がこの構図の均衡を崩している。このように見比べると、春信の構成は単純でありながら、緻密に造形されていることが分かる。

春信の紅摺絵《見立鉢の木》には彼の錦絵構図の特徴が全て表されている。それは、巧みな線の表現と、細目に現れる洗練された色彩の配置とその重ね摺りや、点景によって強調されている物語性である。さらに、能あるいは歌舞伎の脚本からの叙述を日常風俗に見立てることである。本図は宝暦末期に制作されていると考えられているため、錦絵技術の発展の直前に制作されていると推測される。つまり、春信は錦絵技術発展の前に既に成熟した技能をこの構図に表現させたといえる。錦絵でも春信はこのモチーフを数多く繰り返し、明和 4 年頃から本図のような紅摺絵に似た細判錦絵や、清満の構図に似せた背景に別れる恋人といった風俗画や、清広画にみられる円窓付きの建物と竹を主題の一つとしてもつ絵を版行している（注 11）。

第三章 美人画借用から合作へ

宝暦年間には春信は鳥居清満の役者絵だけではなく、美人画からも借用している。例として挙げられるのは石川豊信の様式に倣った清満の横大判紅摺絵《大名行列遊び》〔図 4〕である。春信はこの構図に登場する三つのグループのいくつかのモチーフを自らの錦絵に再利用し、独自の画題にしている。特に目に留まるのは真ん中に位置する大名行列で遊ぶ団体である。ホニホロあるいは実際の馬に乗る男の子に傘を差し出している美人の画題は明和 4、5 年に少なくとも三点の錦絵に描かれている（The Art Institute Chicago の資料番号 1925. 2092、1925. 2091、1935. 391 参照）。通常この春信の絵は蘇州版画〔図 5 のようなモチーフが明朝から流行していた〕を真似たものだと考えられてきたのだが、（注 12）、清満の紅摺絵からも大きな影響を受けていたことも考えられる。春信は清満と蘇州版画とのどちらを利用したのか、また清満が蘇州版画を手本としていたかどうかを調査することは今後の課題であるものの、春信が先行絵師や蘇州版画

の絵手本等を手に取るなどして先行絵師の描写伝統に倣いつつ、それをさらに洗練させようとしたことは明らかである。

錦絵時代への移り変わりにおいて、春信とは対照的に鳥居清満はその新しい印刷技術への対応に苦戦したようである。春信が既に中版判型に進行したのに対し、清満はまだ役者絵の伝統的な細判の判型に執着し、舞台面のような装飾的な背景を描き続けている。その上、清満は春信の特徴的な色合いを真似て、春信の後を追おうとしていた。春信は絵師としての頂点を極めた頃には清満の競争相手になっていたのだ。その様子を示すものとして春信と清満と鳥居清経（生没年不詳）との三者の合作が挙げられる〔図 6〕。この美人画細判三枚揃いを見ると、左側の清経の初代中村桑太郎（大阪）は回文歌の本を読み、意図的に春信と清満の間の競争から抜け出そうとしているように見え、その隣で、清満の二代目瀬川菊之丞（江戸）と春信の初代中村富十郎（京都）はまるで互いににらみ合っているかのようである。清満か春信か、誰が一番きれいな「春信娘」を描いたのだろうか。

結論

はじめに述べた春信の様式の展開に関する疑問とパトロンの目にとまった理由に関する疑問に戻ると、これまでの考察から次のような説明を与えることができる。春信の人物の姿は、明らかに鳥居清満の様式と同様に細長く、柳のような柔軟さを持つように描かれている。女形の特に二代目瀬川菊之丞のほっそりした顔が大人びた印象を与えていたのに対し、宝暦末期に描出された美女はふっくらとした頬によって一般に理解される「春信娘」の姿らしくなっていることが観察できる。春信は清満の作品構成から背景を吸収したが、錦絵時代に入ると逆に、清満の人物表現がのちの錦絵時代に代表的な「春信美人」と呼ばれている華奢な娘に倣っていく。それでも清満においては芝居絵に最適な構図が繰り返され、人物の姿態は硬直的である。色づかいに関しても清満は春信の美人画における色合いを模倣している。これに対して、春信は清満の模写から学んだ技術にさらに独自の要素をつけたし、創意に富んだ作品へと発展させている。おそらくこうした理由により春信は絵暦交換会などの集まりへと招かれるようになり、そこで菊廉舎巨川ら多くのパトロンの興味を引き起こすことになったと思われる。

注

（注 1）小林忠「鈴木春信の変貌－紅摺絵期から錦絵期へ」『國華』第 887 号、1966 年 6 月、参照（細判・中判型美人画様式に関する項目は特に p. 15f. を参照）。早川聞多『春信の春、江戸の春』2002 年、p. 45。

（注 2）春信の役者絵のみを扱う調査は主に、小林忠「鈴木春信の役者絵」『MUSEUM』233 号、1970 年 8 月、河野元昭「春信－錦絵への軌跡」の中の「紅摺絵と役者絵」下中邦彦編『浮世絵八華 1 春信』、1985 年、それらを比較して補足する滝沢優綾「習作期の春信－役者絵作品を中心に」『浮世絵芸術』127 号、1998 年 3 月、更に浅野秀剛「春信に役者絵－新出狂言絵尽と団扇絵を中心に」小林忠監修『青春の浮世絵師 鈴木春信－江戸のカラリスト登場』千葉市立美術館、2002 年が挙げられる。

（注 3）二代目菊之丞は江戸の大人気女形で、彼が出演する興業の多くは大成功であったと評価されていた。人気が上がることで歌舞伎においても、また日常生活など様々な領域においても模倣の対象となり、菊之丞は宝暦 3 年から俳名である路考と称されてから宝暦 13 年頃（1763）には〈路考鬘〉の髪型や、〈路考櫛〉の櫛、〈路考茶〉の染色、〈路考結び〉の帯などが流行した（野島寿三郎編『歌舞伎人名辞典』、2002 年、p. 330f. 参照）。従って、女性美に強い影響を与え、明和年間の菊之丞を〈理想の女性像〉の手本とする女性が〈路考娘〉と呼ばれていた（藤澤紫「浮世絵と美人－リアリズムとファンタジー」『聚美』4 号、2012 年 7 月、p. 78 参照）。小林忠は既に 1970 年代に春信の繊細な描写表現が美女の姿に限らず、役者絵の美男子においても現れることを指摘している。すなわち、小林は瀬川菊之丞の名声が春信の美人画を強く刺激しており、役者絵での菊之丞の描写様式が春信の美人画表現における中性性を成立させていると推察している（小林忠「春信芸術へのアプローチ」『浮世絵芸術』1966 年 1 3 号、同「鈴木春信の変貌－紅摺絵期から錦絵期へ」『國華』1966 年 887 号、同『春信』1970 年（1977 年新装版）、p. 8、同『浮世絵大系』第 2

- 巻、1975 年、p. 77 参照)。
- (注 4) 特に宝暦 14 年に菊之丞の役柄だけを描いた絵として 3 点が認められる：「二代瀬川菊之丞のけいせい梅ヶ枝」、「瀬川菊之丞のけいせい梅がへ」、「瀬川菊之丞のむめかへ」。
- (注 5) 滝沢優綾「習作期の春信－役者絵作品を中心に」『浮世絵芸術』127 号、1998 年 3 月、p. 4。
- (注 6) 享保年間に近松門左衛門によって歌舞伎舞踊に翻案された。
- (注 7) 狂女の目印は乱髪と手に持っている笹であり、この絵には菊之丞は「乱れ髪おせん」として、初代市村亀蔵は「京の二郎」として登場していることが分かる。
- (注 8) D. Jenkins (2011). Harunobu Reconsidered. In: M. Graybill (ed.). *The Artist's Touch, The Craftman's Hand: Three Centuries of Japanese Prints from the Portland Art Museum*. Portland (OR): Portland Museum, p. 98. Forrer はこれに加えて、享保 7 年に公布された法令によって、それまで浮世絵の印刷に使用されていた美濃紙の寸法が縮小させられ、判型が大判から細判に変更せざるをえなくなったことを指摘している。M. Forrer (2011). The Relationship Between Publishers and Print Formats in the Edo Period. In: *ibid.*, p.172.
- (注 9) ボストン美術館の資料番号 11. 19703 参照。背景の模写については田辺昌子「江戸の恋人たち」浅野秀剛・吉田伸之編『浮き絵を読む 1・春信』1998 年、p. 64 参照。林美一をはじめ、特に小林忠はその影響の証拠をいくつかを提供している。近年、主に田辺昌子と藤澤紫の春信美人画研究によって春信の借用の実態が明らかにされている(田辺昌子「鈴木春信の図柄借用－見立の趣向としての再評価」『美術史』128 号、1990 年 3 月、藤澤紫『鈴木春信絵本全集』2003 年、参照)。
- (注 10) 春信は「女鉢の木」として上演されて広がった芝居や「見立鉢の木」を度々錦絵の画題とした。見立絵の内容とそれら作品の一覧表は小林忠監修『青春の浮世絵師 鈴木春信－江戸のカラリスト登場』千葉市立美術館、2002 年、p. 35 参照。
- (注 11) 小林忠監修『青春の浮世絵師 鈴木春信－江戸のカラリスト登場』千葉市立美術館、2002 年、図 124 とミネアポリス美術館の資料番号 74. 1. 88 と P. 70. 135 参照。
- (注 12) 小林忠「春信と蘇州版画」田中優子監修『別冊太陽：平賀源内』(日本のこころ 65 号) 1989 年、p. 72f.

参考文献

- ・ 浅野秀剛・吉田伸之編『浮き絵を読む 1・春信』(朝日新聞社、1998 年)
- ・ 河野元昭編『浮世絵八華 1 春信』(平凡社、1985 年)
- ・ 小林忠「鈴木春信の変貌－紅摺絵期から錦絵期へ」(『國華』887 号、1966 年)
- ・ 同「春信芸術へのアプローチ」(『浮世絵芸術』1 3 号、1966 年)
- ・ 同「鈴木春信の役者絵」(『MUSEUM』233 号、1970 年 8 月)
- ・ 同『春信』1970 年(三彩社、1977 年新装版)
- ・ 同『浮世絵大系 第 2 巻 春信：湖竜斎/春重ほか』(集英社、1975 年)
- ・ 同監修『青春の浮世絵師 鈴木春信－江戸のカラリスト登場』(千葉市立美術館、2002 年)
- ・ 滝沢優綾「習作期の春信－役者絵作品を中心に」(『浮世絵芸術』127 号、1998 年)
- ・ 田中優子監修『別冊太陽：平賀源内』(平凡社、1989 年、日本のこころ 65 号)
- ・ 田辺昌子「鈴木春信の図柄借用－見立の趣向としての再評価」(『美術史』128 号、1990 年)
- ・ 野島寿三郎編『歌舞伎人名辞典』(日外アソシエーツ、2002 年)
- ・ 早川聞多『春信の春、江戸の春』(文藝春秋、2002 年)
- ・ 藤澤紫『鈴木春信絵本全集』(勉誠出版、2003 年)
- ・ 藤澤紫「浮世絵と美人－リアリズムとファンタジー」(『聚美』4 号、2012 年)
- ・ Graybill, Meredith (2011). *The Artist's Touch, The Craftman's Hand: Three Centuries of Japanese Prints from the Portland Art Museum*. Portland (OR): Portland Art Museum.

図版



〔図1〕鳥居清満
《市村亀蔵の京の次郎》
(宝暦末期) ハバード大学
芸術博物館蔵



〔図2〕鈴木春信
《見立鉢木》(宝暦末期)
©Trustees of the British
Museum



〔図3〕鳥居清広
《白たへ 中村富士郎》
(宝暦8年) ©Trustees of the British Museum



〔図4〕鳥居清満《大名行列遊び》
(宝暦末期) メトロポリタン博物館蔵



〔図5〕《年画:麒麟送子》(清朝末)
ハバード大学芸術博物館蔵



〔図 6〕 鳥居清経、鳥居清満、鈴木春信《回文歌》
(明和 5 年頃) メトロポリタン博物館蔵

図版出典

- 〔図 1〕 鳥居清満《市村亀蔵の京の次郎》(宝暦末期) ハバード大学芸術博物館蔵、資料番号 1933.4.1523
- 〔図 2〕 鈴木春信《見立鉢木》(宝暦末期)、大英博物館、資料番号 1907,0531,0.342
- 〔図 3〕 鳥居清広《白たへ 中村富士郎》(宝暦 8 年) 大英博物館、資料番号 1948,0410,0.7
- 〔図 4〕 鳥居清満《大名行列遊び》(宝暦末期) メトロポリタン博物館蔵、資料番号 JP695
- 〔図 5〕 《年畫：麒麟送子》(清朝末) ハバード大学芸術博物館蔵、資料番号 1935.36.17
- 〔図 6〕 鳥居清経、鳥居清満、鈴木春信《回文歌》(明和 5 年頃) メトロポリタン博物館蔵、資料番号 JP1502、JP1503、JP1504

第9回 EUワークショップ 実施報告

日程：2017年10月24日（火）～11月2日（木）

第9回 EUワークショップ in ルーヴエン大学
10月25日（水）・26日（木）実施

第9回 EUワークショップ in チューリッヒ大学
10月27日（金）・28日（土）・29日（日）実施

第9回 EUワークショップ in カレル大学
10月30日（月）・31日（火）・11月1日（水）実施



The 9th EU Workshop

25 October 2017

Kansai University
University of Leuven
Kansai University Japan-EU Research Center

PROGRAMME

Academic Presentation

East Asian Library

11:00-11:10 Chair: Prof. HARADA Masatoshi 原田 正俊

11:15-11:45 YOSHI Hiroaki 義 紘明 (MA. Student, Kansai University)

中世における興福寺と大和の武士

The Relationship between Kōfukuji Temple and Yamato *Bushi* in the Middle Ages

(in Japanese)

11:50-12:20 Naomi SCHOLTIS ナオミ・スコルティス (MA. Student, University of Leuven)

大正新教育運動の国家主義的な傾向をめぐる評価

The Taishō New Education Movement - A Critical Assessment of the Movement's

Nationalist Tendencies (in English)

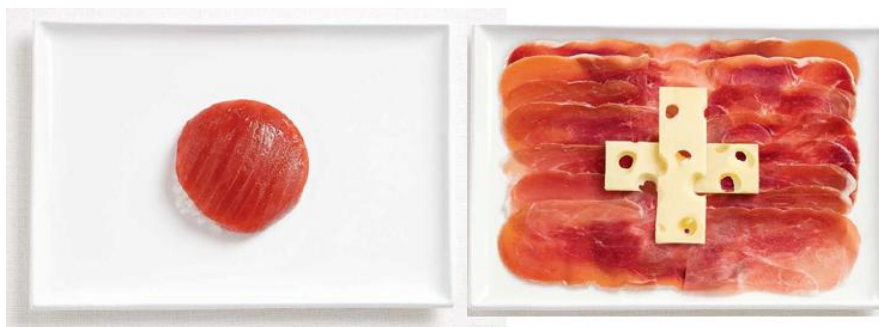
12:20 ~14:00 LUNCH TIME

ALMA1

- 14:00-14:30 SHINOMIYA Aiko 四宮 愛子 (Ph.D. Student, Kansai University)
「日支合辦語」の社会的機能
The Social Function of “*Nisshigōbengo* (日支合辦語)” (in English)
- 14:35-15:05 Jana HERMANS ヤーナ・ヘルマンス (MA. Student, University of Leuven)
日本における臓器移植・1997年に可決された法案の歴史
Organ transplantation in Japan - the road to and formation of the law of 1997 (in Japanese)
- 15:10-15:40 SAITŌ Yoshiko 斎藤 佳子 (Ph.D. Student, Kansai University)
小説における慶長遣欧使節—今東光『はぜくら』と遠藤周作『侍』の比較から
The Keicho era embassy to Europe in Novels-Comparison of *Hazekura* by Kon Toko
and *The Samurai* by Endo Shusaku (in English)
- 15:45-16:15 OKUNISHI Fusako 奥西 芙佐子(DD Program MA. Student, University of Leuven)
日本におけるモーリス・メーテルランクの演劇—高浜虚子の能『鉄門』を中心に—
The Theater of Maurice Maeterlinck in Japan- on Kyoshi Takahama's Noh play
"Testumon"- (in Japanese)
- 16:20-16:30 Comments by Prof. INUI Yoshihiko 乾 善彦

※10月26日(木)はゲント市内フィールドワークを行い、世界遺産のベギン会修道院見学や
聖バーフ教会の見学、ゲント美術館では「神秘の子羊」の修復作業見学も行った。

The 9th Annual EU Workshop at the University of Zurich



An International Workshop between the Sub-Major Curriculum EU-Japanology at the
Kansai University Graduate School of Letters
and the Section for East Asian Art History at the
University of Zurich

WORKSHOP PROGRAM

Seminar Room of the Section for East Asian Art History
Villa Schonberg, Gablerstrasse 14
Zurich, Switzerland

October 28, 2017

12:00 - 12:50 Lunch (Catered lunch in the Villa Schonberg Seminar Room)

Introductory Remarks

12:50- 13:00 HARADA Masatoshi 原田 正俊 (Professor, Kansai University)

Research Reports, Part 1

Chair: NAKATANI Nobuo 中谷 伸生 (Professor, Kansai University)

13:00- 13:30 NISHIGAKI Eriko 西垣 江利子 (Kansai University)
クリストファー・ドレッサーのデザインにみられる1862年ロンドン万博の影響
The London Exhibition of 1862 and Its Influence on the Designs of Christopher
Dresser (in English)

13:30- 14:00 Jeanne FICHTNER (University of Zurich)
A Life for *Ars Una* – the Eduard von der Heydt Collection in St. Gallen (in
English)

14:00- 14:30 KŌ Ekei 高 絵景 (Kansai University)
江戸時代の唐様書における明末書風の変化による影響
The Development of Late Ming Dynasty Calligraphic Styles and Its Influences on
Edo Period *karayō* Calligraphy (in English)

14:30-15:30 Pause with Viewing of Museum Rietberg

Research Reports, Part 2

Chair: Hans Bjarne THOMSEN (Professor, University of Zurich)

- 15:30- 16:00 Klaus FRIESE (University of Zurich and University of Munich)
Aesthetics of War -- Textiles and other Examples of Material Culture from the
ShōwaPeriod (in English)
- 16:00- 16:30 INOSE Ayumi 猪瀬 あゆみ (Kansai University)
与謝蕪村筆《奥の細道図》とその制作背景について
Information Relating to the Creation of *The Narrow Road to the Interior* by Yosa
Buson (in Japanese)
- 16:30- 17:00 Anjuli RAMDENE (University of Zurich)
Research on the Ryūkyū Kingdom Textile Collection at the Museum of
Cultures,Basel (in English)
- 17:00- 17:30 Final Discussions
- 17:30- 19:00 Closing Remarks, followed by Reception (Villa Schonberg Seminar Room)

※10月27日（金）はチューリッヒ市内フィールドワークを行い、チューリッヒ美術館やスイス国立博物館などを訪れた。また、29日（日）は岩倉使節団が約150年前に通ったルートでアルプスへ行き、久米邦武が書いた『米欧回覧実記』を読みながら、明治時代の日本人とアルプスについて学んだ。



The 9th EU Workshop

30 October 2017

Kansai University
University of Charles University in Prague
Kansai University Japan-EU Research Center

PROGRAMME

Academic Presentation

Introductory Remarks

16:00- 16:10 HARADA Masatoshi 原田 正俊 (Professor, Kansai University)

Research Reports

16:10-16:40 MIYACHI Haruna 三代地 春奈 (MA. Student, Kansai University)

『源氏物語』と平安貴族の婚姻 一紫の上を巡って—

The Tale of Genji and the Marriage among the *Heian* Nobles: Discussions Over Lady
Murasaki (in English)

16:40-17:10 Lucie MORNSTEINOVÁ ルチエ・モルシュタイノヴァー (Ph.D. Student, Charles University)
身分制の固定化、徳川時代寸前の被差別民（日本語）
The Solidification of the Status System the case of marginalized groups at the dawn of the Tokugawa period Japan

17:10 ~17:20 休憩 Coffee Break

17:20-17:50 WASHIO Arisa 鷺尾 亜莉沙 (MA. Student, Kansai University)
万葉集の書写形式の多様性と研究課題（日本語）
Variety in Writing Styles of *Man'yōshū* and the Research Task

17:50-18:20 ISHIDA Kaoru 石田 薫 (Ph.D. Student, Charles University)
旧チェコスロヴァキアにおける日本語教科書の特徴（日本語）
Characteristics of Japanese language textbooks in former Czechoslovakia

※10月31日（火）は南ボヘミア州にある世界遺産「チェスキー・クルムロフ歴史地区」を訪れ、フィールドワークを行った。また、11月1日（水）はプラハ市内フィールドワークを行い、プラハ城などを見学した。

第9回 EUワークショップ

報告要旨・論文

中世における興福寺と大和の武士

義 紘明

関西大学大学院文学研究科 博士課程前期課程

[Abstract]

The purpose of this paper is to consider the relationship between Kōfukuji Temple and *Yamato Bushi* in the middle ages. Yamato no kuni (Yamato Province) corresponds to present-day Nara Prefecture in Japan, which was an old capital of Japan until the end of the 8th century. Kōfukuji was a large temple that ruled most of Yamato Province through the force of lower monks called *shuto*. Furthermore, Kōfukuji organized a new kind of *Yamato Bushi* called *kokumin*. There are two differences between *shuto* and *kokumin*. First of all, *shuto* are monks. In contrast, *kokumin* are laymen. Finally, classes of *shuto* are higher than *kokumin* classes. In short, *shuto* and *kokumin* are class systems developed by Kōfukuji. This paper examines the changes *Yamato Bushi* under this system from the 15th to early 16th centuries. Specifically, *shuto* and *kokumin* claimed that they were *kunishū* (local lords of Yamato Province). The implication was unity of the *Yamato Bushi*.

At the top of two Kōfukuji organizations were *monzeki* (temples at which the head priest had always been a member of the imperial family or of the nobility). Kōfukuji had *Daijō-in* and *Ichijō-in*, the two biggest *monzeki* that had *gakuryō* (high-ranking priests), *roppō* (middle-ranking priests), *shuto* and *kokumin*. They were all ruled by the *monzeki*.

Daijō-in and *Ichijō-in* were hostile to each other in the middle of the 14th century, each *shuto* and *kokumin* were mobilized. On the other hand, they started fighting each other. To sum up, these internal conflicts that resulted in the decline of Kōfukuji.

On top of that, internal conflicts in the central government expanded the conflict. The Hosokawa clan, who were *kanrei* (shogun's administrative advisors) of the Muromachi shogunate, invaded Yamato to attack their enemy *shuto* and *kokumin*. Kōfukuji lost control of Yamato. The *shuto* and *kokumin* faced a serious crisis.

The result, however, was that the *shuto* and *kokumin* expressed themselves as *kunishū*. They insisted that they were also *Bushi* of the same Yamato Province and began a movement to join forces. They dissolved their long-standing antagonistic relationship, and tried to oppose foreign invasion.

In prior research, the union of the two groups in 1505 has been considered epoch-making. This paper, however, demonstrates through *Bunkinenjūki-utsushi* (new research materials) and analysis that the movement to join forces had already started in 1501.

[論文]

はじめに

本稿の目的は、中世大和国人について検討することである。大和国(現在の奈良県)には、8世紀まで日本の首都があった。山城国(現在の京都府)に遷都して以来、奈良周辺は「南都」と呼ばれ、興福寺や東大寺をはじめとする寺社仏閣が立ち並ぶ都市として、南都は繁栄した。

特に興福寺の発展はめざましく、春日社と一体化し、藤原氏の氏寺・氏神として栄えた。興福寺が強大化した背景には、朝廷の中枢を占める藤原氏の影響が大きい。藤原氏の尊崇を集めたことで、一貴族の私寺

にとどまらず、大和国を事実上支配する存在になっていたといわれる(注 1)。

中央の大寺社を中心に組織され、公家や武家の勢力とも対抗していた一種の社会的・政治的な勢力を「寺社勢力」として位置づけた黒田俊雄氏は、中世前期における寺社の位置づけを考えるうえで、実態解明に大きく貢献した(注 2)。しかし中世後期については、寺社勢力の衰退期として捉えられ、今後の課題となっている(注 3)。

寺社勢力の一角である興福寺についても同様で、興福寺を含む南都社会の全体像の追究が進んでいる。先行研究では、寺社の組織面に関する追究が多くある(注 4)。その一方で寺社組織の一部に組み込まれていた大和国人に関する研究は、近年停滞ぎみである(注 5)。

大和の国人については、「興福寺の支配機構を破壊せず、その組織に依存・寄生して」成長を遂げる存在として把握された(注 6)。その後の研究でも、中小国人たちが乱立するなかで、興福寺に寄りかかって成長を遂げるという視角は踏襲され続けている。戦国期に至っても、最終的には国外勢力の度重なる侵攻を受け、織豊政権に収斂されるといった形で、大和国人の存在は小さく扱われている(注 7)。しかし大和の国人たちを過小評価する動きは、一面的な評価に過ぎないといった意見も出されている(注 8)。

以上の問題関心から、同様の視角に頼ることなく、大和国人に対する見方を再考する必要がある。大和国内だけでなく、畿内の政治史にも大きな影響を与えた大和の国人を取り上げることで、中世大和国人の実態解明につなげたい。本稿では、15 世紀から 16 世紀初頭を主な対象とし、その間の変遷について考察する。

第一章 中世後期興福寺の大和支配と国人

本章では、興福寺と大和国人の関係を整理するところから始める。大和国では、幕府が任命する守護が設置されず、興福寺が事実上の守護として君臨していた。別当を頂点とする支配体系の下、興福寺の有力院家である一乗院・大乘院が大きな力を持っていた。とりわけ身分が高い「貴種」身分が入室する一乗院・大乘院の両門跡は、寺内でも異例の早さで昇進を遂げる特別な存在で、代々藤原氏の子息が入室する(注 9)。中世興福寺における寺内の構造は、世俗社会の身分秩序が反映されていたのである。

様々な集団で構成される興福寺には、学侶や六方等の様々な階層が存在していた。本稿の主眼である大和の国人たちは、「衆徒・国民」と呼ばれる身分秩序に編成されていた(注 10)。衆徒とは、いわゆる「僧兵」的な存在である。出家身分であるが、武力を行使する存在であった。そのため、寺内の警察・軍隊的な役割を担い、聖俗にわたる穢れを祓い清める機能を期待されていた(注 11)。衆徒身分の代表格が古市氏や筒井氏である。筒井氏は戦国期に筒井順慶を輩出した一族で、古市氏とは奈良支配の要である官符衆徒棟梁の座をめぐって、熾烈な争いを繰り広げた。

国民とは、非出家身分の俗人である。春日社末社の神主職を有し、衆徒の下位身分に位置づけられていた。国民の代表格は、越智・十市氏などである。「衆徒・国民」の間に身分的流動性はなく、大和国人たちは、興福寺が定めた身分秩序に規定されていたのである。

さらに国人たちは、両門跡の「坊人」として、一乗院・大乘院のそれぞれに分属していた。例えば衆徒の筒井氏と国民の越智氏は、同じ一乗院に属している(注 12)。

14 世紀はじめごろから国人たちが対立するようになり、国人たちの自立・台頭化が進展する。この変化に対し、寺社側も彼らを統制しきれなくなる。康暦元年(1379)に興福寺が強訴に及んだ際、国民・十市遠康の処罰を幕府に求めたのは、その一例といえる。

興福寺の支配体制が動揺するなか、足利義満期に事態が大きく変化する。義満は荒廃した興福寺の再建を目指し、明德 2 年(1391)に南都再興命令を下す(注 13)。実際に再建が本格化するののは、応永期(1394~1428)であった。例えば、現在境内にある五重塔や東金堂が再建されたのも応永期である。寺内の堂塔再建や儀式の再興などが進むなか、義満は次のような行動をとる。

【史料 1】『兼宣公記』 応永元年(1394)7 月 2 日条

二日、天晴、抑興福寺学侶三人列_レ参室町殿_レ之处、被_レ召籠_レ、被_レ預_レ大名三人_レ、於_レ兩人_レ者、即被_レ遠流_レ云々、今度学侶五人被_レ处_レ罪科_レ、彼等与同故云々、

【史料 1】は、南都に参詣した義満が学侶を追放した記事である。簡略な記事であるため、これ以上の詳細は明らかではないが、義満が寺社内外にわたって影響力を及ぼしたことがわかる。義満の行動は、寺社を従

属的支配下におこうとする強圧的なものであったと理解する見方が大勢を占めていた(注 14)。近年は義満自身に対する見直しが進み、義満が興福寺を支える動きとして把握されている(注 15)。第三章で取り上げる外部勢力の大和侵攻時と比較すれば、義満の行動は穏当なものであった。

義満の方針は、次代の義持にも継承される。応永 21 年(1414)、大和国人同士の争乱をやめさせるために足利義持は、国人たちを京都に召喚する(注 16)。義持は学侶・六方にも同様の命令を出し、僧俗を問わず厳しい処分を下そうとした。また本来興福寺別当の被官である官符衆徒を重用し、訴訟回路を限定することで、寺内の掌握を図ったとされる(注 17)。官符衆徒を軸とする幕府の政策は、その後も継続される。興福寺の支配体制は、幕府が補完する形で支えられていたのである。

第二章 大和国内の争乱と国人

本章では、15 世紀に活躍した越智家栄を中心に取り上げ、大和国内の争乱と国人たちの動向を追究する。寺社支配安定化のために義満・義持が支援を続けたものの、大和国人同士の争乱は、完全に消滅しなかった。争乱を繰り返す大和の国人たちに対し、幕府の停戦命令はあまり功を奏さず、幕府内でも大和放任論が広がった。大和国は幕府の緩やかな支配に甘んじる遠国と同様の位置づけにあるということで、「畿内の中の遠国」という評価を受けている(注 18)。幕府にとって、大和国はあまり関わりたくない面倒な地域であった。

正長 2 年(1429)7 月に(9 月に「永享」に改元)大和永享の乱が発生する。大和の国人である井戸氏と豊田中坊氏の衝突に起因するこの戦いは、その後 10 年に及ぶ長期戦となった。井戸氏には筒井氏、豊田中坊氏には越智氏がつくことで争乱は泥沼化した。乱の初期段階では、將軍足利義教の南都下向が実現するなど、平穏な様子もまだみられた。興福寺側の要請や伝奏万里小路時房の進言を容れ、義教は停戦命令を出す、この停戦命令は無視される。義教は当初筒井氏を支援するが、その筒井氏が敗北する。当初は消極的方針をとっていた義教だが、幕府の体面にもかかわるため、次第に積極策への転換を強いられることとなった(注 19)。幕府軍の本格的投入に踏み切った義教は、自ら出陣する意欲もみせるが、幕閣の大名たちの反対で実現には至らなかった。反幕府方となった越智維通は、幕府軍を相手に長年抵抗を続けるが、永享 11 年(1439)に敗死する。その後檜原氏が越智氏の跡を継承し、越智氏は一時滅亡状態となる。

しかし嘉吉の乱で義教が暗殺されたことで、状況は一変する。維通の遺児である春童丸(のちの家栄)が畠山持国の支援を受けて、復活したからである。家栄は越智(檜原)氏を追い出し、自ら惣領の地位につくことで、越智氏を再興した。

その後大和国内は、再び筒井派と越智派に分かれて対立する。大和永享の乱と異なるのは、畠山氏の家督争いが国人同士の争いに加わったことである。15 世紀半ばごろの畠山氏内部では、持国の跡をめぐり、畠山義就と政長が対立していた。応仁の乱の一因ともなった畠山氏の内訌によって、義就方―越智派と政長方―筒井派にそれぞれ分かれる。両勢力が入り乱れ、大和は新たな争乱の時代を迎える。

越智家栄は畠山義就と結びつくことで、筒井派と対峙した。さらに家栄は一国人でありながら、幕府とも直接つながりを有しており、その様子が次の史料から読み取れる。

【史料 2】『経覚私要鈔』宝徳元年(1449)6 月 23 日条

廿二日、播州来語云、越智家栄一昨日室町殿構見参御劔被^(足利義政)下、大方殿又被^(日野富子)下、少袖^(日野富子)之由申下云々、

將軍足利義政に謁見した時の史料である。後に応仁の乱で西軍についた家栄は、義政から東軍に参加するよう求められるなど、幕府側も無視できない存在であった(注 20)。また義就が幕府の追討対象となり、河内国嶽山城に立て籠もったとき、幕府から家栄に対し、追討に協力するよう命令が出ている。そのときの命令が次の史料である。

【史料 3】『経覚私要鈔』寛正 2 年(1461)2 月 10 日条

一、就^(足利義政)右衛門佐義就退治事、夜前門跡へ被^(日野富子)成^(日野富子)御内書云々、為^(日野富子)一見^(日野富子)給了、義就追罰事、方々申遣之處、于^(足利義政)今令^(足利義政)延引^(足利義政)之条、近日有^(足利義政)南方同意企坎之由其聞^(足利義政)候、併遅々故如^(足利義政)此之儀出来候、不^(足利義政)可^(足利義政)然、所詮不^(足利義政)移^(足利義政)時日^(足利義政)運籌略、可^(足利義政)誅^(足利義政)加^(足利義政)下^(足利義政)知和州衆徒・国民等^(足利義政)候、若有^(足利義政)難^(足利義政)洪^(足利義政)之族^(足利義政)者、随

「注進」可「處」嚴科「候也、謹言、

正月廿三日

(義政)
御判

(尋尊)
大乘院僧正御房

礼紙「大乘院僧正御房

一乗院 大乘院 興福寺 成身院 金峯山 多武峰 越智

(家榮)

(伊勢貞親)
五ヶ所へ伊勢守書遣云々、

【史料 3】から、家榮が金峯山や多武峰と同じく、幕府から軍事力の提供を求められる存在だったことがわかる。かつて反幕府方として行動した越智氏だったが、家榮は表立って幕府に逆らうことは控えていた。そのため、義就を支援する家榮にとって、この命令は受け入れがたい内容であった。微妙な立場におかれた家榮だったが、このときは消極的ながら義就を支援し、幕府側も気を遣って大和側からの攻撃は控えたようである(注 21)。しかしその後は義就を積極的に支援し、応仁の乱中は、義就とともに西軍として行動する。

応仁の乱が終結した文明 9 年(1477)には、大和にも大きな変化があった。河内国へ下向した義就は、瞬く間に同国を手中に収め、大和の国人たちにもその動きは波及する。義就方の越智派国人たちが筒井派の追い落としに成功し、敗れた筒井派の国人たちは、その後約 20 年に及ぶ牢人生活を余儀なくされたのである。その結果、15 世紀後半の約 20 年間は、古市・越智派が大和国内の主導権を掌握することとなった。その象徴として、越智家榮は七ヶ夜陪従神楽を奉納している。七ヶ夜陪従神楽は、本来春日山木の枯槁の時に実施されるものだったが、大和国内の支配者であることを示す祭礼として、16 世紀に筒井順興や松永久秀らによって実施されている。家榮は大和国人として初めて、神楽を奉納したのである(注 22)。

第三章 転換期を迎える大和と国人

本章では、15 世紀末から 16 世紀初頭にかけて、大きく変化した大和国人たちの動きを追うことで、その変化と対応について述べる。明応 2 年(1493)に勃発した明応の政変は、戦国期のはじまりを示す指標として扱われるなど、幕府にとって衝撃的な事件であった(注 23)。管領の細川政元は、足利義材を廃立し、香厳院清晃(義澄)を新将軍に擁立した。この政変には大和国人たちも参加しており、古市澄胤や越智家榮たちが細川方と事前に連絡をとりあっていた。政変後に澄胤と家榮が上洛したときの様子が次の史料からわかる。

【史料 4】『大乘院寺社雑事記』明応 2 年 5 月 19 日条

一、辰刻越智彈正京上、板輿、唐笠袋白、持_レ之、礼馬・乗替等引_レ之、堤中務・下騎馬也、其外打コミ濟々、自_二今市_一至_二傳害_一、自其衆徒・国民共各一騎打_レ之、共如_二主従_一也、年次第歟、但最末箸尾云々、可_レ至_二宇治_一歟云々、高田 岡 万歳 箸尾 小泉 井戸 楊本 戒重 森屋筒井 大西 郡山 高山 龍田 片岡 南郷以下無_二残者_一、越智一族事ハ中々不_レ及_二是非_一、希代不思議作法、中々不_レ及_二是非_一、去年故布施畠山右衛門督之騎馬打_レ之、希有之由申歟、於_レ于_レ今者其ハ上品面目事也、廿一日条

一、古市律師上洛、板輿也、直綴、引馬三疋前也、乗替一疋後、騎馬二人、其外打コミ濟々、椿尾・窪城・琵琶小路等一騎也、

【史料 4】の 1 か条目には家榮、2 か条目には澄胤が上洛したときの様子が記述されている。箸尾氏は、かつて大和永享の乱で越智氏と共に戦った国人である。家榮を頂点とし、同等クラスだった大和国人たちも配下の如く引き連れて上洛したその様子は、越智氏の最盛期を示す。一方の澄胤は、家榮の行列より小規模である。衆徒身分の国人として、澄胤は国民である家榮より上位の身分にある。しかし「惣大将ハ越智彈正忠家榮・古市播磨律師澄胤也、一国中此兩人応下知者也、」といわれる両者であっても、実力の面では大きな差があったようである(注 24)。その後も澄胤が上位の振舞いをしたため、両者の間に確執が生じるといった事態も生じている(注 25)。

政変後の畿内情勢は、そのまま足利義澄—政元政権の安泰にはつながらなかった。前将軍の義材が幽閉先から逃亡したからである。義材は越中。放生津に逃れ、再起を図る。また明応の政変で倒れた政長の遺

兄である尚順も紀伊に逼塞しており、義澄政権には予断を許さない状況が依然続いていた。

大和国内は、古市・越智派が抑えていたが、明応 6 年(1497)に状況が一変する。畠山尚順が河内国へ侵攻したことで、尚順与党の筒井派が復活の動きをみせ始めたのである。大和国内も動揺し、明応 6 年(1497)10 月に古市・越智氏らは没落する。文明 9 年以来、約 20 年に及ぶ古市・越智氏を頂点とする時代が終わりを告げた瞬間である。その後越智氏は、古市との方針の食い違いなどもあり(注 26)、古市氏から離反して、筒井派との提携を模索し始めるようになる(注 27)。筒井氏と官符衆徒棟梁の座をめぐって争った古市氏は、筒井氏との妥協が困難であった。しかし、国民である越智氏にはそのような障害がなく、提携を試みる事が可能であった。

しかし国人たちの対立が終わることはなかった。大和国内では、畠山尚順—筒井派の勢力が台頭していた。大和国内の所領を配下に給分として与えるなど、興福寺の支配権を否定する動きを尚順はみせる(注 28)。さらに越中の足利義材が復権を果たすために上洛を試みる。南北から挟撃される危機的状況に義澄政権は陥った。この危機に対し、政元は北の義材を撃退すると、大和を次の標的とする。明応 8 年(1499)12 月には、細川政元配下の赤沢朝経(沢蔵軒宗益)が大和に侵攻し、尚順—筒井派勢力を撃破する。宗益軍は奈良中にも乱入し、奈良は壊滅的な被害を受ける。奈良攻撃の理由は、六方衆が宗益の首に高札を掲げたからである(注 29)。寺内の動向が不鮮明だが、このとき六方衆には筒井派に加担する派閥が多数を占めていたのかもしれない。大和国人から唯一古市澄胤が宗益軍に加わり、澄胤はその後も宗益方に加担し続けている。古市氏は大和国人一揆にも参加せず、宗益方と行動を共にする。越智氏が筒井派との提携を考えるなかで、筒井派に勝利した古市澄胤は、細川方に加担する道を選んだ。宗益方の圧倒的な軍勢力に敗北した筒井派の大和国人たちは、再度没落する。

澄胤は家令(家栄の息)との提携継続に成功する。『文亀年中記写』には、その時古市澄胤らが連署した起請文案がある。

【史料 5】古市澄胤等連署起請文案

敬白 天罰連署起請文事

右、元者、夫和州一国者、一円不輸之神国、寺門御進上^(止)而国衆各可_(諸)レ応_(年)寺命之段、条々既事旧訖、然処、近年之為_(諸)レ体、動国衆面々忽堵寺門集議、寺門成_(年)者貢以下致_(年)無沙汰、殊諸代官之衆等、或押領、或無沙汰之条、神禁殊有_(諸)其恐、所詮、於_(年)自今以後者、更以不_(年)可_(年)レ背_(年)寺門御成敗、諸代官以下之儀、随_(年)寺門之御下知、嚴密可_(年)加_(年)其成敗、万一代官等不_(年)致_(年)承引_(年)族在_(年)之者、可_(年)レ処_(年)嚴科_(年)事

一、惣国寺社年貢等、無_(年)相違懈怠之儀、可_(年)令_(年)進上、同土打反米・反錢・諸進官以下、内外惣別寺門成事、可_(年)致_(年)慇懃沙汰、曾以不_(年)可_(年)有_(年)無沙汰_(年)事

一、寺門領并諸寺・諸山等之領地等之事者、為_(年)供仏施僧_(ママ)之資貯之処、無_(年)謂違乱、冥罰被_(年)二知々晴_(ママ)之条、不_(年)可_(年)成_(年)其煩、同非分公事事篇課役以下、不_(年)可_(年)申懸_(年)事

一、国中新関并兵士・橋賃等、堅以可_(年)令_(年)停止_(年)事

一、於_(年)寺門_(關カ)国所坊_(年)停止事、堅以可_(年)成由、其覚悟上者、同坊領等曾以不_(年)可_(年)致_(年)違乱、於_(年)国之破_(年)忿劇之砌、被_(年)帶_(年)兵具_(年)自国他国被_(年)走廻_(年)寺僧衆事者、既為_(年)寺門_(年)被_(年)定置_(年)掟旨上者、於_(年)国衆之面々、更以不_(年)可_(年)申_(年)遺恨_(年)事

一、就_(年)今度寺訴之儀、為_(年)寺門要脚、國中反錢以下之所役、可_(年)被_(年)相催_(年)之間、是又別而可_(年)致_(年)慇懃之沙汰、面々知行之在々所々、各嚴密可_(年)加_(年)下知_(密、下同シ)事

一、惣国私反錢・同反米・非分之課役等之事、堅以可_(年)有_(年)停止之旨、御寺命之条、成_(年)覚悟_(年)申候、同寄子・一族之衆等、各可_(年)加_(年)下知_(年)事、但近年依_(年)牢籠_(年)每篇迷惑之旨、種々_(難致)致_(年)難_(年)披露_(年)之間、自_(年)当年酉年_(年)迄_(年)同丑年_(年)五ヶ年之間、反錢最少分可_(年)申付_(年)段、可_(年)被_(年)処_(年)御無沙汰_(年)之間、由_(内)々得_(年)御意_(年)畢、於_(年)年季以後_(年)者、悉以可_(年)致_(年)停止_(年)、曾以不_(年)可_(年)有_(年)聊尔緩怠_(年)事

右条々、一事而モ令ニ違犯一者、罰文、
文亀元年辛酉六月八日
萬歳判
吐田遠光判
越智家令判
高田為長判
古市澄胤判

署判しているのは、越智派の国人たちである。[図 1]から、家令以外の万歳・吐田・高田氏らは、越智氏の拠点である大和国高市郡周辺の国人ということがわかる。澄胤のみ衆徒身分で、ほかのメンバーは全員国民である。一部の国人が参加しているだけで、惣国一揆ではない。澄胤らが掲げた起請文は、6 か条にわたる。1 か条目に「惣国寺社年貢等…」とあるように、内容は大和一国にわたるものである。澄胤らが主導する形で、大和国内の年貢等の税金賦課に関する取決めを誓約している。当時筒井派が没落し、澄胤たちが大和国内の頂点に返り咲いた。澄胤たちは、大和の国人たちを代表する形で、誓約したのである。旧来から続く興福寺の権威と政元方の軍事力を利用しながら、離反しかけた越智派の再統合と奈良支配のための官符衆徒棟梁の座を守ることに澄胤は成功したのである。

その他の条目は、寺領の違乱停止(2 か条目)や新関等の停止(3 か条目)といったもので、特に目新しいものではなかった。特徴的だったのは、5 年間(1501~05)で「最少分」という限定条件付きながら、国人たちによる私反銭賦課を認めてもらうよう興福寺側に要求した点にある(6 か条目)。長年の争乱や宗益の侵攻により、在地社会には大きな負担がのしかかっていたのかもしれない。

澄胤はその後一貫して政元方として行動する。『多聞院日記』永正 2 年(1505)2 月 4 日条には、「於ニ中院-国衆咄文在レ之、布施^{安芸守}、箸尾^{上野守}、越智^{彈正忠}、十市^{新次郎}、筒井^{良舜房}、」とあるように、旧敵である越智と筒井が一揆を結ぶ一方で、古市氏の姿は見られない。『大乘院寺社雑事記』永正 3 年(1506)8 月 16 日条で、「一、筒井跡官符之事、白土跡事、古市所望、大和申沙汰、自ニ細川-宗益方へ口入畏入云々、仍今日古市与宗益会合云々、」とあるように、宗益が再度大和へ侵攻したとき、澄胤自身は官符衆徒棟梁の座を確保することに努めている。

おわりに

最後に本稿のまとめと結論について述べる。第一章では、興福寺の大和支配と国人たちの動きについて整理した。寺内の混乱と国人の台頭により、興福寺の大和支配が動揺する。足利義満期から混乱が収拾されはじめ、堂塔の再建や儀式の再興などが進んだ。義満は官符衆徒を重用し、権門寺社内部に拠点を設け、直接対処する体制を構築した。この体制はその後継続し、官符衆徒側に何かあれば幕府の命を仰いだ。しかし幕府による興福寺の大和支配は、必ずしも順調に進んだわけではなかった。

第二章では、越智氏を中心に大和国人の台頭について述べた。大和永享の乱による長年の抗争や畠山氏の分裂に伴う大和国人間の対立が再燃化するなど、大和国人間の争乱が絶えなかった。やがて畠山氏の内訌は、応仁の乱の一因ともなり、大和国人たちも両勢力に分かれて対峙することとなった。対立を勝ち抜いた越智家榮と古市澄胤は、国人として大和国内の頂点に位置する。明応の政変にも協力し、大和国人として一時代を築き上げるまでに成長していた。身分上、衆徒の下位である国民身分の越智家榮は、七ヶ夜陪従神楽の奉納を通じてその立場を確立しようとした。以後神楽の奉納は、大和国内の静謐を願うとともに、祭礼の実施を通じて、国内の掌握を示す一大イベントとして活用される。家榮の行動は、その先駆けであった。

第三章では、筒井派の巻き返しと大和国人間に生じた変化について述べた。20 年に及ぶ牢人生活から筒井派が復活を果たしたことで、再び大和国内は混乱する。越智氏は、古市氏との方針の違いなどもあり、筒井氏との提携を模索しはじめた。古市澄胤は、自身の地位が脅かされかねない筒井氏との融和には賛成できず、細川政元らと結びつくことで立場を確保しようとした。そのため、政元配下の宗益が大和に侵攻したとき、澄胤は宗益方として協力する。以後一貫して澄胤は細川方として行動し、のちに形成される大和国人一揆にも参加しなかった。政元の力を背景に、澄胤は自ら主導して越智派を糾合し、自身の官符衆徒棟梁

の座を維持することに成功したのである。澄胤は、越智氏との提携が破れると、政元方につくことで、自身の立場を維持しようとした。

その後細川氏家中の混乱もあって、畿内の情勢はめまぐるしく変化する。こうした中央の政治動向の変化は、16 世紀において、松永久秀や織田信長といった外部勢力の伸長という形で大和国にも波及する。畿内の中でも特殊視されているが、大和国は中央の政治情勢に翻弄されやすい地域でもあった。

興福寺の支配を離れ、大和国人たちは独自に対立と抗争を繰り返し、他国勢力とも結びついていった。国人たちは、興福寺が定めた身分秩序に従いながら、自身の立場と勢力の保持に努めていたのである。寺社権力への寄生という形で否定的に彼らの行動を捉えるのではなく、旧来の秩序や他国勢力をうまく利用しながら生きるしたたかな一面があったと評価するべきであろう。

注

(注 1) 永島福太郎『奈良文化の伝流』中央公論社、1944 年

(注 2) 黒田俊雄「中世寺社勢力論」(『岩波講座日本歴史 6 中世 2』岩波書店、1975 年)

(注 3) 大田壮一郎「室町殿と宗教」(『室町幕府の政治と宗教』塙書房、2014 年、2012 年初出)

(注 4) 前掲(注 1)や稲葉伸道『中世寺院の権力構造』岩波書店、1997 年など。

(注 5) 熱田公『中世寺領荘園と動乱期の社会』思文閣出版、2004 年、解説

(注 6) 石母田正『中世的世界の形成』伊藤書店、1946 年

(注 7) 村田修三「大和の『山ノ城』」(岸俊男教授退官記念会編『日本政治社会史研究 下』塙書房、1985 年)

(注 8) 安田次郎「興福寺『衆中』について—その呪術的側面—」(『名古屋学院大学論集人文・自然科学篇』20-2、1984 年)

(注 9) 基本的には、一乗院には近衛家、大乘院には九条家から入るようになっていた。

(注 10) 衆徒・国民に関する説明は、前掲注 1 を参照。

(注 11) 前掲(注 8)

(注 12) 『大乘院寺社雑事記』康正 3 年(1457)4 月 28 日条

(注 13) 『寺門条々聞書』応永 21 年(1414)6 月 23 日条

(注 14) 永島福太郎「足利將軍家の南都巡礼」(『大和文化研究』10 卷 11 号、1965 年)、稲葉伸道「南北朝時代の興福寺と国家」(『名古屋大学文学部研究論集』44、1998 年)など。

(注 15) 大藪海「室町幕府と興福寺」(同『室町幕府と地域権力』吉川弘文館、2013 年)

(注 16) 『寺門条々聞書』応永 21 年 10 月 7 日条

(注 17) 前掲(注 3)

(注 18) 桜井英治『日本の歴史 12 室町人の精神』講談社、2009 年(2001 年初出)

(注 19) 前掲(注 15)

(注 20) (文明 3 年 6 月 25 日)「足利義政御内書案」(『足利義政発給文書(二)』585 号)

(注 21) 小谷利明「河内嶽山合戦の構造」(萩原三雄・中井均編『中世城館の考古学』高志書院、2014 年)

(注 22) 池和田有紀「戦国期の南都神楽—その費用と運営—」(『書陵部紀要』第 54 号、2002 年)

(注 23) 鈴木良一「戦国の争乱」(家永三郎編『岩波講座日本歴史 第 8 中世 第 4』岩波書店、1963 年)

(注 24) 『大乘院寺社雑事記』明応 2 年(1493)3 月 1 日条

(注 25) 『大乘院寺社雑事記』明応 2 年 6 月 29 日条

(注 26) 『大乘院寺社雑事記』明応 6 年(1497)6 月 29 日条。畠山基家(義豊)の守護代をめぐり、遊佐氏と菅田氏が争った。

遊佐方を古市氏、菅田方を越智氏がそれぞれ支援した。

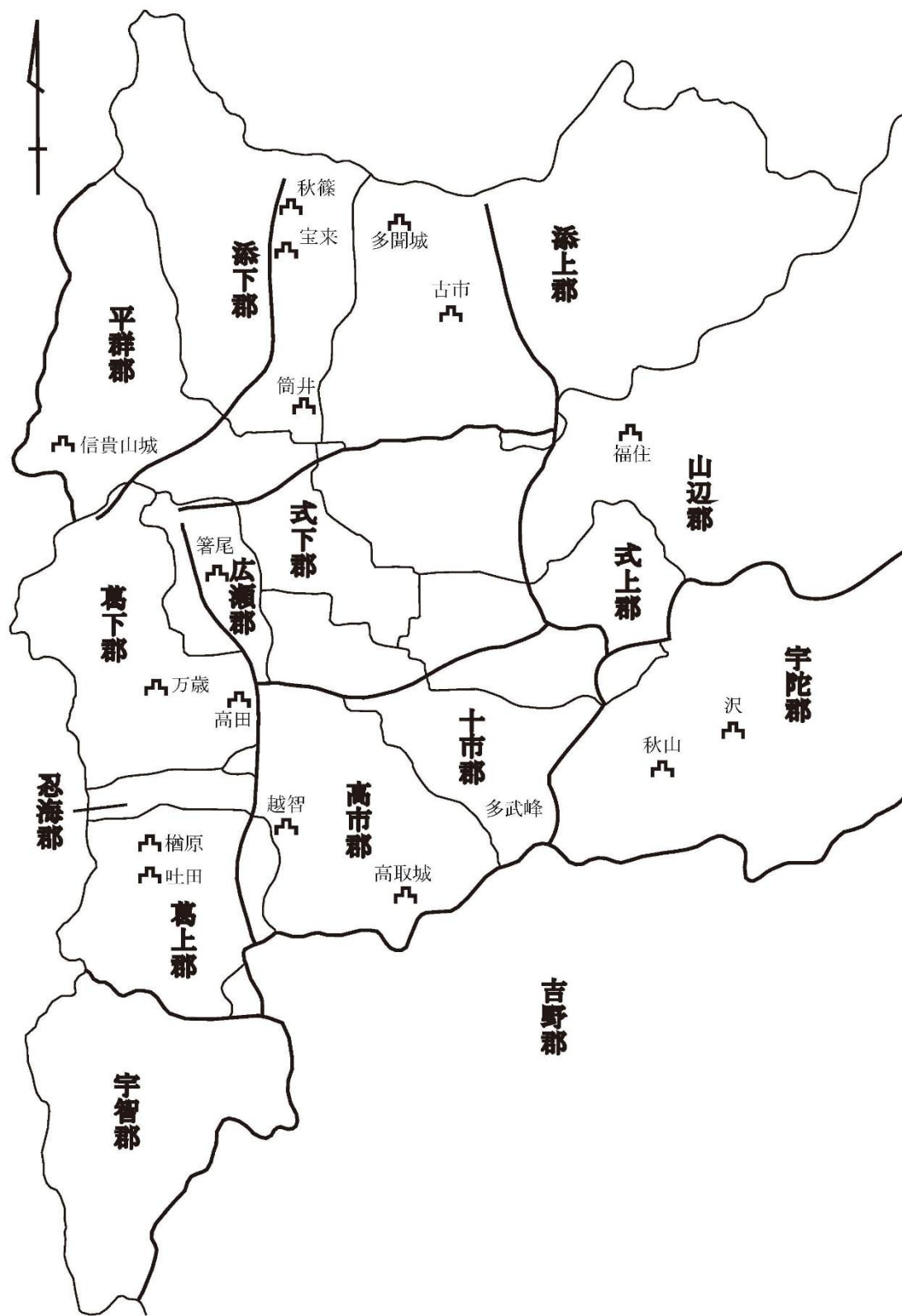
(注 27) 『大乘院寺社雑事記』明応 8 年(1499)10 月 26 日条

(注 28) 『大乘院寺社雑事記』明応 8 年 3 月 14 日条

(注 29) 『大乘院寺社雑事記』明応 8 年 12 月 18 日条

参考文献 ※ 注にあげたものは除く。

- 朝倉弘『奈良県史 第11巻 大和武士』名著出版、1993年
- 熱田公「筒井順永とその時代—『大乘院寺社雑事記』を通じてみた一土豪の生涯—」
（同『中世寺領荘園と動乱期の社会』思文閣出版、2004年、1958年初出）
- 綾部正大「大和国『国民』越智家栄の動向について—身分制の観点から—」（『高円史学』10、1994年）
- 稲葉伸道『中世寺院の権力構造』（岩波書店、1997年）
同「鎌倉期の興福寺寺僧集団について」（前掲著所収、1988年初出）
- 大藪海「室町幕府—権門寺院関係の転換点—」
（中島圭一編『十四世紀の歴史学—新たな時代への起点—』高志書院、2016年）
- 黒田俊雄『寺社勢力—もう一つの中世社会—』（岩波書店、1980年）
- 小谷利明「戦国期の守護家と守護代家—河内守護畠山氏の支配構造の変化について—」
（『八尾市立歴史民俗資料館研究紀要』3、1992年）
- 兄玉庸子「室町・戦国期大和国における領主権力の構造—大和国人越智氏とその『若党』を対象として—」
（『新潟史学』71、2014年）
- 鈴木良一『大乘院寺社雑事記—ある門閥僧侶の没落の記録—』そしえて、1983年
- 高山京子『中世興福寺と門跡』勉誠出版、2010年
同「室町時代の興福寺の門跡支配—幕府の介入とその後の変容を通して—」
（永村眞編『中世の門跡と公武権力』戎光祥出版、2017年）
- 高谷知佳『中世の法秩序と都市社会』塙書房、2016年
- 田中慶治『中世後期畿内近国の権力構造』清文堂出版、2013年
同「中世後期畿内国人層の動向と家臣団編成—大和国人古市氏を中心に—」（前掲著所収、1996年初出）
- 永島福太郎『奈良』吉川弘文館、1963年
同「足利將軍家の南都巡礼」（『大和文化研究』10巻11号、1965年）
- 西尾知己『室町期顕密寺院の研究』吉川弘文館、2017年
- 幡鎌一弘『寺社史料と近世社会』法蔵館 2015年
- 藤田明「大和武士」（日本歴史地理学会編『奈良時代史論』仁友社、1914年）
- 村田修三「古市氏と古市城」（『奈良市埋蔵文化財調査報告書』、1981年）
- 森田恭二「細川高国と畿内国人層」（『ヒストリア』、84、1979年、森田 a）
同「細川政元政権と内衆赤沢朝経」（『ヒストリア』、84、1979年、森田 b）
同「戦国期畿内における守護代・国人層の動向」（『ヒストリア』90、1981年）
- 安国陽子「戦国期大和の権力と在地構造—興福寺荘園支配の崩壊過程—」（『日本史研究』341 1991年）
- 安田次郎「興福寺『衆中』について—その呪術的側面—」（『名古屋学院大学論集人文・自然科学篇』20-2、1984年）
同「勸進の体制化と「百姓」大和の一国平均役=土打役について」（『史學雜誌』92-1、1983年）
同「永仁の關亂」（同『中世の興福寺と大和』第3章1節、1987年初出）
- 山田康弘『戦国期室町幕府と將軍』吉川弘文館、2000年
- 奈良市史編集審議会編『奈良市史 通史二』吉川弘文館、1994年
- 末柄豊「国立公文書館所蔵『文龜年中記写』—附、国立公文書館所蔵『別会付五師方引付』—」
（〔科学研究費補助金研究成果報告書〕『中世後期南都菟藏古典籍の復元的研究』2006年、解題）



〔図 1〕大和の国人・城郭分布図

(村田修三「城跡調査と戦国史研究」『日本史研究』211、1980 年)、香芝市教育委員会編『奈良県香芝市逢坂城跡第 1 次発掘調査報告書 香芝市文化財報告書第 2 集』、2000 年をもとに筆者作成)

※黒太線は村田氏案による国人勢力圏の区分

The Taishō New Education Movement

-A Critique Assessment of the Movement's Nationalist Tendencies-

Naomi SCHOLTIS
MA. Student, University of Leuven

[要旨]

明治維新に伴い、日本政府は日本を近代化するために富国強兵策を講じた。その一環として、教育に関する政策も近代化が図られた。1871年に文部省が設置され、その翌年に学制が公布され、義務教育推進運動が始まった。しかしながら、その教育制度は競争的・画一的・知識注入主義的であったため、大正デモクラシーを背景とした批判が生まれた。その運動は、子供の興味や関心を重んじた大正新教育運動・大正自由教育運動として知られるようになった。新教育運動は、教師を中心とする国家教育とは逆に、子供を授業に積極的に参加させることを目指し、子供の自発性や自主性を重視した。つまり、国家教育が知識注入主義的な教育方法であったのに対し、大正新教育運動は子供が批判的に考えることを勧奨したのである。この運動の思想は、ルソー、ペスタロッチ、デューイ、パーカー・ストやフレーベルなどの西洋哲学者や教育者の思想を基盤としていた。その一方、日本の伝統を近代化することで、教育を改革しようとする大正新教育の主唱者もいた。大正新教育の先駆者として、澤柳政太郎、小原國芳、野口延太郎、手塚岸衛、羽仁もと子などの教育者が挙げられる。

しかし、大正新教育の実践者は、教育方法の改革のみに努め、国家教育の国家主義的な内容そのものを改革しようとしたわけではなかった、という批判がある。そこで、本稿では、主に新教育運動の主唱者の国家主義的・帝国主義的な傾向、及び、新教育運動が実際に進歩的であったかどうかを明らかにする。

大正新教育の主唱者の中でも、日本で女性初の女性記者であり、自由学園という女子学校を創立して新教育を実践し、1908年に創刊した『婦人之友』を通じて女性解放運動を展開した羽仁もと子に特に興味を引かれた。修士論文では、日欧米の羽仁の教育思想に関する研究を比較検討することで、フェミニズムの視点から見た羽仁もと子の教育思想を明らかにしていきたい。

[Thesis]

Historical Background

The Meiji Restoration (1868) formed an important shift in the educational policy of Japan. Japan was no longer a feudal country and the Meiji government took steps to modernise to resolve the instability and weak position regarding the foreign powers ⁽¹⁾. Thus the government tried to hold a firmer grip on education as a means of building this modern nation and strong army or *fukoku kyōhei* 富国強兵 and to mould pupils into loyal and patriotic citizens ⁽²⁾. A first undertaking was the Iwakura mission (*Iwakura shisetsudan*, 岩倉使節団, 1871-1873) to Europe and the United States, led by Iwakura Tomomi (岩倉具視, 1825-1883) ⁽³⁾. In 1871 a Ministry of Education was established by the government to design a nationwide system of compulsory education ⁽⁴⁾. In 1872, in response to the publication of *Gakumon no susume* (*The Encouragement of Learning*, 学問のすすめ) by Fukuzawa Yukichi (福澤諭吉, 1835-1901) the *Gaku-sei* (Basic Code of Learning, 学制), which was the first national education system and made education compulsory, was established ⁽⁵⁾. Another milestone in Japanese education is the establishment of the Imperial Rescript on Education in 1890

and in 1903 national textbooks were introduced, a decision that was influenced by New Education advocate Sawayanagi Masatarō (澤柳政太郎, 1865-1927) ⁽⁶⁾. In the Meiji period (1868-1912) Western ideas also found their way through influential Western works by Samuel Smiles and Jean-Jacques Rousseau among others. Some Japanese publications as well advocated new ideas ⁽⁷⁾. However, education was still uniform and competitive, and knowledge was merely poured into the students' minds. Therefore, in a period of liberalisation and reform-mindedness called the Taishō Democracy, the Taishō New Education Movement arose ⁽⁸⁾. Many movements besides the New Education Movement arose during this time as well: the Dawn Society (*Reimeikai* 黎明会, 1918) and the New Man Society (*Shinjinkai* 新人会, 1918), amongst others ⁽⁹⁾.

The Taishō New Education Movement

The New Education Movement arose in Europe and the United States at the end of the nineteenth century. The movement strived for education concerning the child's interests, activities and self-expression while linking school with daily life. These child-centred ideas date back to the seventeenth and eighteenth century, when the famous French philosopher and writer Jean-Jacques Rousseau claimed that the true nature of a child was good, which was the opposite of the predominant Christian concept of ancestral sin. Moreover, research on children drastically increased in the nineteenth century ⁽¹⁰⁾. Pioneers such as Higuchi Kanjiro (樋口勘次郎, 1871-1917) and Tanimoto Tomerī (谷本富, 1867-1946) were the ones to introduce the New Education ideas to Japan ⁽¹¹⁾. Educational elements were taken from examples from the West. One example was the foundation of the New Education Fellowship in 1921 by Beatrice Ensor (1885-1974) at the Congress of Calais, which caused the establishment of another, Japanese, movement, namely the New Education Society, in 1930. This organisation collided strongly with the global network ⁽¹²⁾. Other influencing figures from the West were Johann Heinrich Pestalozzi (1746-1827), Friedrich Wilhelm August Froebel (1782-1852), John Dewey (1859-1952) and Helen Parkhurst (1887-1973).

One of the main characteristics of the New Education Movement is the focus on the children's individual personality, initiative and their creativity. Therefore, independence, self-study and self-reliance were the basic principles of this New Education Movement ⁽¹³⁾. Furthermore, the unilateral teaching method of *chūnyū kyōju* (注入教授), which merely forced knowledge upon the children, was replaced by developmental education (*kaihatsu kyōju*, 開発教授). This new teaching method allowed the child to develop freely with merely external guidance ⁽¹⁴⁾. Especially private schools were influenced by the *shin kyōiku undō*, since they otherwise risked government suppression ⁽¹⁵⁾.

The Taishō New Education proponents can be divided into two main groups. The first and largest group aimed for educational modernisation by taking over ideas from the West, the second group set reform through modernisation of Japan's own traditions as a goal. Well known traditionalists, belonging to the second group are Nakamura Haruji (中村春二, 1877-1924) and Ashida Enosuke (芦田恵之助, 1873-1951), amongst others. Educators such as Sawayanagi Masatarō, Obara Kuniyoshi (小原國芳, 1877-1987) and Natsume Soseki (夏目漱石, 1867-1916) mostly turned toward the West for inspiration ⁽¹⁶⁾.

The lecture meeting that became a symbol for the flourishing New Education Movement, is the Eight Greatest Educators Educational Advocacy Conference (*Dai nihon gakujutsu kyōkai* 大日本学術協会) of 1921. The meeting provided the abundant audience of more than two thousand listeners eight advocacies from, in order

of succession, Oikawa Heiji (about dynamic education), Inage Kinshichi (about creative education), Higuchi Chōichi (about self-learning education), Tezuka Kishie (about free education), Katakami Noboru (about education by art and literature), Chiba Meikichi (about education by impulsive satisfaction), Kōno Kiyomaru (about self-moving education) and Obara Kuniyoshi (about whole-man education) ⁽¹⁷⁾⁽¹⁸⁾.

New Education Pioneers

There are quite some people known for their role in the New Education Movement and among them were Sawayanagi Masatarō, Obara Kuniyoshi, Tezuka Kishie, Noguchi Entarō and Hani Motoko. **Sawayanagi Masatarō**, the founder of the New Education school *Seijō Gakuen* (成城学園, 1917), is one of the early New Education advocates and besides being an educator, he was also a bureaucrat. In *Seijō Gakuen* he incorporated four elements that he thought were essential for education, namely respect for individuality, familiarity with nature, education of the spirit and education based on scientific research. He also introduced the Dalton Plan, an educational theory from Helen Parkhurst, in *Seijō Gakuen*, along with other educational theories and practices ⁽¹⁹⁾. *Seijō Gakuen* also published a monthly magazine called Researching Educational Problems. Sawayanagi was mostly inspired by Johann Friedrich Herbart (1776-1841) and Pestalozzi ⁽²⁰⁾.

Another influential New Education proponent was **Obara Kuniyoshi**. He is known as the establisher of *Tamagawa Gakuen* (1929) and as the inventor of *zenjin kyōiku* or whole-man education (全人教育), which is still influential to this day. Zenjin education aimed at the optimal development of human beings as a whole person. This could only be achieved by liberal education, which allowed you to develop freely. The ultimate goal was striving to the highest degree of universal values and through this, the achievement of being in harmony with oneself and others. Obara differentiated six elements within Zenjin Education, namely truth, goodness, beauty, holiness, health and wealth. As a publisher, Obara created the Idea Shoin Press in 1923. He was influenced by several Western philosophers and educators, such as Rousseau, Pestalozzi, Froebel, etc. ⁽²¹⁾. However, he was also inspired by for example the Japanese educator Nishida Kitarō (西田幾多郎, 1870-1945) whom he encountered during his study years at Kyoto Imperial University ⁽²²⁾.

Noguchi Entarō (1868-1941) is primarily known for his commitment towards international education, his progressive ideas, which he put into practice by founding his own school, *Ikebukuro Jidō no Mura Shōgakkō* (Ikebukuro Children's Village Elementary School) and the publication of his magazine called Century of Education. Noguchi first came into contact with Western, progressive ideas in the form of books, which were then more and more available. Especially John Stuart's *Manual of Ethics* (1893, translated in 1901) formed the foundation of Noguchi's ideas. However, he also read Japanese publications on new ideas, such as The Practical Pedagogy (*Jissaiteki kyōikugaku*, 實際的教育学, 1909) of Sawayanagi Masatarō ⁽²³⁾. In 1919, Noguchi was appointed executive director of the Japanese Imperial Education Association (*Teikoku Kyōikukai*, 帝国教育会). Furthermore, he got in touch with several prominent New Education figures from the West, like English Beatrice Ensor (1884-1974) who was the co-founder of the New Education Fellowship ⁽²⁴⁾. Noguchi established the Century of Education Society (*Kyōiku no Seikisha*, 教育の世紀社) in 1924 and only a year later, the foundation of his own school named *Ikebukuro Jidō no Mura Shōgakkō* and his magazine called *Century of Education* followed ⁽²⁵⁾. Not being content with the general education which emphasised learning by heart, he opted for self-government and self-learning ⁽²⁶⁾.

Hani Motoko (1873-1957) was Japan's first female journalist and founder of both the magazine *Katei no tomo* (1903) which later became *Fujin no tomo* (1908) and the girls' school *Jiyū Gakuen*. She cherished the ideal of a harmonised family in which husband and wife complement each other and in which women had the key role in the enhancement of family life. This became the central idea behind *Fujin no tomo* and *Jiyū Gakuen*. She intended 'education which is life' (*Kyōiku sunawachi seikatsu*, 教育すなわち生活), which opposed learning through memorisation. It was a school based on Christian values, which goal was to develop individual personalities, create hard working students with self-reliance and self-esteem and to develop abilities which were useful for daily life. The campus was a warm, family-oriented environment giving the opportunity to learn from daily experiences. In other words, *Jiyū Gakuen* was a small projection of society⁽²⁷⁾. Each class represented a family and each student was a family member who had to cooperate with the other family members and take up responsibilities in the school society⁽²⁸⁾. In 1930 she founded the "Friends' Association" (*Tomo no kai*, 友の会), composed of *Fujin no tomo* readers, which still, as does the magazine, exists today⁽²⁹⁾.

A critical assessment of the movement's nationalist tendencies

However, there was also criticism on the movement. A first criticism from Kobari is that New Education and liberal education are considered as one and the same. Many of the ideas and theories are indeed included in new education but not all of them. For example, both *Seikei Gakuen* and Teikoku Elementary School valued the freedom and individuality of the child, but promoted on the other hand imperialism and nationalism during the Sino-Japanese War⁽³⁰⁾. Furthermore, he states that the movement merely focused on bringing about change in teaching methods, rather than in the content.

They criticised problematic issues of the existing education, limited for example to the problem of 'teaching to the test' regarding the competition in exam taking, and merely advocated and practiced New Education as an alternative plan of teaching methodology. Plans or intentions itself, that attempted to link education with society, in relation with the education objectives and content amongst others, were poor⁽³¹⁾.

It is indeed likely that the New Education Movement overly highlighted the need to change the methods rather than the contents of what was being taught, but then again they probably didn't want to follow the government in its curriculum in particular. As it is shown by the following excerpt from a 1923 manifesto on the Progressive Education Society a change in teaching methods was indeed a priority, but not necessarily the only item on their agenda.

The reform of the education system as a whole depends on initiatives in particular areas, so first of all we begin with the reform of methods, which is the first and most serious challenge. – Manifesto of 1923 of the Progressive Education Society – Noguchi Entarō⁽³²⁾

Furthermore, the historical context of nationalist New Education pioneers should be considered. Sawayanagi, for example, was already active in the Meiji period when the modern education system was still a work in progress and he saw state control as a handy tool to modernise education⁽³³⁾. He was nevertheless a progressive educator with a thirst to improve contemporary education and chose the state as the most effective way to achieve that. Also, the New Education Movement cannot be generalised, since there are two main

groups that can be distinguished: both pro-Western modernists and traditionalists. It is the latter group that is clearly nationalistic and loyal to the state.

New Education schools were also mostly located in urban areas and its students came primarily from the economically and culturally well-off new middle class. Therefore, the practice of the New Education Movement remained within the borders of some of the elite schools and didn't spread to public elementary schools and other social classes. Kobari (2015) also implies that the ideal of giving children the liberty to decide on what to learn themselves, did not become a reality. An example he gives, is the Dalton Plan:

What we must pay attention to here, is that even if the children chose their study subjects one by one in accordance with their interests and concerns, limitless freedom could not be given. (...) In the Dalton Plan, children were expected to learn based on a contract concluded between themselves and the teacher. Furthermore, since the framework of the study subject other than those planned and set up by the school or the teacher; or the time table (even if it was in a loose framework) were decided on, the freedom to study about subjects other than those, was most of the time not given. Freedom was merely guaranteed within the loose relationship between the school or teacher, and the children⁽³⁴⁾.

However, a certain guidance has not to be considered negative to the child's development. Of course, guaranteeing freedom to children instead of forcing them to learn things by heart is a good thing, but a happy medium is preferable. By giving them the freedom to choose subjects based on their own interests and needs, education becomes linked to their daily life and gives them the opportunity to put things they learned into practice. Nevertheless, to make sure they learn, the guidance of a teacher is not superfluous.

Another criticism comes from a contemporary. John Dewey, who was very influential for the Japanese New Education Movement, wasn't convinced that the Japanese clearly understood the message of his lectures. When he visited Japan in 1919 to give lectures, he noticed that democracy was in fact an endangered species in the nation. The main reason for that he saw in the religious and mythological imperial system, which overpowered democracy. Therefore, he feared that bureaucracy and militarism would reign, which indeed happened and lead to the Second World War⁽³⁵⁾.

Sawayanagi Masatarō is one of the proponents with a clear nationalist background. He had a nationalist vision prior to and during the First World War as can be seen in Sawayanagi Masatarō Zenshū (沢柳政太郎全集) which Lincicome quotes: "Japanese must take their cue from the Germans, recognize that the rest of the world has turned against them, and commit themselves to the survival and prosperity of their nation in the face of this adversity."⁽³⁶⁾ Over time Sawayanagi's nationalism turned into Asianism (*Ajiashugi*, アジア主義). However, after the Great War, he renounced this Asianism and nationalism, now that he had seen the consequences of militarism and despotism. He instead emphasised the importance of critical minds and knowledge about the outside world. Furthermore, he started to promote the adoption of democracy, justice and humanity. He supported the League of Nations and dedicated himself to the spreading of internationalism.

(...) I am fully convinced of one thing: that we must follow the slow but steady road of peaceful procedure. By means of new achievements and discoveries in art and sciences, and new development in political and social as well as industrial fields, we are determined to do our best in repaying our cultural debt to our sister nations of the world. – Sawayanagi Masatarō (1927)⁽³⁷⁾

Furthermore, he wanted to prevent any future wars by teaching the children in an international spirit and can thus be seen as a progressive New Education leader after the Great War.

Obara Kuniyoshi was also a patriot and nationalist. In Obara's *Kokumin Gakkō Plan* (*Kokumin gakkō an*, 国民学校案), his approval of the implementation of New Education elements in national education can be read.

The time of dawn has come. Finally, dawn breaks. (...) It was sometimes misunderstood, persecuted and regarded as dangerous, but magnificently the fact that it resulted in a draft and finally an implementation starting from next year, by the government and by the Education Council of the Ministry of Education, makes me completely happy from the bottom of my heart and I am filled with gratitude. Our benignant Emperor; our unparalleled national entity, our beautiful and distinguished citizens, our loyal ancestors, our abundant traditions, moreover looking young forever, and if we think about our qualities which excel other nations, our valuable blood, our morals of teacher and student filled with respect and affection (...), should not I thank heartily for the blessedness of getting this condescending job. – Obara Kuniyoshi (1940) ⁽³⁸⁾

Furthermore, Obara reportedly already supported the war regime after the Manchurian Incident (1931), striving for the training of the rising generation and girl education, and he justified liberalism within the frames of nationalism and militarism.

The citizens don't have to be endowed with absolute freedom by the government. Moreover, they don't have to start [giving freedom]. Because, the fact that the nation exists as one form, therein, each and every citizen of the nation should always obey to the authorities of that nation. – Obara Kuniyoshi (1923) ⁽³⁹⁾

But it is also said that Obara had a strong cultural identity and pride, but that he did disapprove of any form of nationalism that was in the way of the advancement of international understanding or respect amongst nations. Furthermore, he did not perceive human solidarity and national identity as opposites and that they both could be developed through education. That Obara loved his own country and imperial system is certain, but to what extent he understood that his country became more and more militaristic, is discussable. However, although it is highly probable that he indeed was nationalist, he also had a great influence on Japanese education, as his education theory is still present in education today ⁽⁴⁰⁾.

The aforementioned New Education proponents were not the only ones who did not criticize the government. Other New Education proponents too were happy to see their ideas implemented in the state education, without critically reviewing if they were adopted right. For example, upon the decision to use *gōka kyōju* (合科教授), an element of new education in national education, the Education Council amended in such a way that it could no longer be considered liberal. This institutionalised *gōka kyōiku* was renamed to *sōgō kyōiku* (総合教育).

Some New Education proponents distanced themselves from individualism. For example, Akai Yonekichi (赤井米吉, 1887-1974), a colleague of Obara during his time at *Seijō Gakuen*, was a supporter of the nationalist and totalitarian government and a defender of national mobilization. He renounced individualism in 1936 ⁽⁴¹⁾. Although it seems that indeed many New Education figures had nationalistic tendencies, not all of them were. For example, Shigaki Hiroshi (志垣寛, 1889-1965) who taught at *Ikebukuro Jidō Mura no Gakuen* which was founded by Noguchi Entarō, was against other New Education proponents who supported the System and tried to warn them for it, to point out the importance of reform of lesson contents. He matched

his words with deeds and did change the contents ⁽⁴²⁾.

The nationalism in the New Education Movement cannot be seen as the result of a shift towards it. New Education advocates were already positive towards the imperial system and nationalism as well as towards the *kyōiku chokugo* before the 1930s ⁽⁴³⁾. However, the positive reception of the imperial and nationalist system as well as of the Imperial Rescript on Education cannot be considered as a conclusive evidence that New Education adherents were nationalist and that this trend inhibited improvement in education.

Conclusion

The Taishō New Education Movement was very diverse, with many adherents, all with their own theories and practices. Their most significant lecture was “The Eight Greatest Educators Educational Advocacy Conference” ⁽⁴⁴⁾. The means of each New Education proponent was different, but the object was the same: renouncement of uniform, one-way teaching and the pursuit of child-centred education ⁽⁴⁵⁾. The development of children was now regarded as most important (*kaihatsu kyōju*) and learning by heart (*chūnyū kyōju*) was no longer the keystone in education ⁽⁴⁶⁾. Educational thoughts from Western pedagogues and philosophers such as Dewey, Pestalozzi, Froebel, Parkhurst and Rousseau amongst others, formed the foundation for new educational theories in Japan. However, not all New Education proponents sought educational reform through the importing of new ideas from the West. Some attempted to improve education through ‘internal enlightenment’, with Japanese traditions still at its core ⁽⁴⁷⁾.

Although some adherents had nationalist tendencies and did not always bring about change regarding content, this does not mean that they were not progressive. Some did reform education only regarding teaching methods, others aimed for a reform on all levels ⁽⁴⁸⁾.

NOTES

- (1) Kobayashi, Makoto. 2004. “Kuniyoshi Obara 1887-1977.” *Prospects* 34:2, p. 231.
- (2) Yamada, Takayuki 山田隆幸. 2016. “Taishō jiyū kyōiku – seikatsu kyōiku – seikatsu tsuzurikata kyōiku kara ‘zentaiteki hatatsu’ wo kangaeru: ‘Ikiru iyoku’ to ‘manabu iyoku’ wo jiku ni” 大正自由教育・生活教育・生活 綴り方教育から「全体的発達」を考える:「生きる意欲」と「学ぶ意欲」を軸に [From The ‘Liberal Education’, ‘Life Education’ and ‘How to Make a Living Education’ of the Taishō Period to Thinking about the ‘Overall Development’: Based on the ‘Will to Live’ and ‘Will to Learn’]. *Kodomogaku kenkyū ronshū* 子ども学 研究論集 [Essay Collection of Child Studies] 8, p. 27.
- (3) Platt, Brian. 2005. “Japanese Childhood, Modern Childhood: The Nation-State, The School, and 19th-century Globalization.” *Journal of Social History* 38:4, pp. 971-973.
- (4) McClain, James L. 2002. *Japan: A Modern History*. New York: Norton, p. 260.
- (5) Yamasaki, Yoko. 2010. “The impact of Western progressive educational ideas in Japan: 1868 –1940”, *History of Education* 39:5, pp. 575-577.
- (6) McClain 2002, p. 260.
- (7) Yamasaki 2010, pp. 576-578.
- (8) Kobayashi 2004, p.231.
- (9) Tipton, Elise K. 1997. *Society and the State in Interwar Japan*. London: Routledge, p.2.
- (10) Ozawa, Shūzō 小沢周三. 1996. *Kyōikugaku kīwādo* 教育学キーワード [Keywords of Education]. Tokyo: Yūhikaku, p.12.
- (11) Ikeno, Norio. 2011. *Citizenship Education in Japan*. London: Continuum International Publishing Group, pp. 89.

- (12) Kobayashi 2004, p. 232.
- (13) Okano, Kaori and Tsuchiya, Motonori. 1999. *Education in Contemporary Japan: Inequality and Diversity*. Cambridge: Cambridge University Press, p.25.
- (14) Lincicome, Mark E. 1995. *Principle, Praxis, and the Politics of Educational Reform in Meiji Japan*. Honolulu: University of Hawaii Press, pp. 3-10.
- (15) Okano and Tsuchiya 1999, p. 25.
- (16) Ozawa 1996, pp. 66-67.
- (17) Oikawa Heiji (及川平治, 1875-1939), Inage Kinshichi (稲毛金七, 1887-1946), Higuchi Chōichi (樋口長市, 1871-1945), Katakami Noboru (片上伸, 1884-1928), Chiba Meikichi (千葉命吉, 1887-1957), Kōno Kiyomaru (河野清丸, 1873-1942)
- (18) Hashimoto, Miho 橋本美保. 2015. "Hachidai kyōiku shuchō kōenkai no kyōiku shiteki igi" 八大教育主張講演会の教育史的意義 [The Pedagogical Significance of the Lecture Meeting of Hachidai-Kyōiku-Shuchō (The Eight Greatest Pedagogical Opinions)]. *Tōkyō Gakugei Daigaku kiyō. Sōgō kyōiku kagaku kei* 東京学芸大学紀要・総合教育科学系 [Bulletin of Tokyo Gakugei University. Educational Sciences] 66:1, pp. 55-56.
- (19) Mehl, Margaret. 2009. "Lessons from History? Obara Kuniyoshi (1877-1987), New Education and the Role of Japan's Educational Traditions." *History of Education* 38:4, p. 529.
- (20) Yamasaki 2010, p. 580 and Kobayashi 1990, p. 49.
- (21) Obara was known as the Japanese Pestalozzi. (Ito 2006, p. 99)
- (22) Kobayashi 2004, pp. 223-229 and Mehl 2009, pp. 528-530.
- (23) Uno, Mieko 宇野美恵子. 1985. "Noguchi Entarō no kyōiku shisō: jiyū kyōiku to chiten no kōzō" 野口援太郎の教育思想: 「自由教育」と「知天」の構造 [Noguchi Entarō's Educational Thought: The Construction of Liberal Education and Chiten]. *Kyōiku tetsugaku kenkyū* 教育哲学研究 [Research of Philosophy on Education] 52, p. 18.
- (24) Yamasaki 2010, pp. 577-578.
- (25) Lincicome, Mark E. 1999. "Nationalism, Imperialism, and the International Education Movement in Early Twentieth-Century Japan." *The Journal of Asian Studies* 58:2, p. 348.
- (26) Yamasaki 2010, p. 577.
- (27) Kahn, B. Winston. 1997. "Hani Motoko and the Education of Japanese Women." *Historian* 59:2, pp. 391-401.
- (28) Uniya, Michiyo 鵜丹谷三千代. 1980. "Hani Motoko sono seitachi to shisō keisei" 羽仁もと子その生い立ちと思想形成 [Mrs. Motoko Hani, Her Life and Philosophy]. *Seikatsu gakuen tanki daigaku kiyō* 生活学園短期大学紀要 [Bulletin of Seikatsu Gakuen Junior College] 3, p. 105.
- (29) Kahn 1997, pp. 391-401.
- (30) Kobari, Makoto 小針誠. 2015. "Taishō shin kyōiku undō no paradokkusu: Tsūsetsu no saikentō o tsūjite" 大正新教育運動のパラドックス: 通説の再検討を通じて [The Paradox of the Taishō New Education Movement: Through the Re-examination of the Prevailing View]. *Kodomo shakai kenkyū* 子ども社会研究 [Journal of Child Study] 21, pp. 19-20.
- (31) Kobari 2015, p. 28.
- (32) Yamasaki 2010, p. 582.
- (33) Kobayashi, Tetsuya. 1990. "Masataro Sawayanagi (1865-1937) and the Revised Elementary School Code of 1900." *Biography* 13:1, p. 54.
- (34) Kobari 2015, pp. 22-23.
- (35) Ito, Toshiko. 1999. "Die Vervollkommnung der Individualität. Erziehungsideal und Reformabsichten in Japan." *Zeitschrift für Pädagogik* 38, p. 227.
- (36) Lincicome 1999, p. 353.
- (37) Sawayanagi, Masatarō. 1927. "The General Features of Pacific Relations as Viewed by Japan." News Bulletin (Institute of Pacific Relations), p. 25.
- (38) Obara, Kuniyoshi 小原國芳. 1940. *Kokumin gakkō an* 国民学校案 [Elementary School Plan]. Tokyo: Tamagawa Gakuen Publishing Department, pp. 3-4.
- (39) Obara, Kuniyoshi 小原國芳. 1923. *Jiyū kyōikuron* 自由教育論 [Essay on Liberal Education]. Tokyo: Idea Shōin, pp. 325-

- (40) Kobayashi 2004, p. 232.
- (41) Kobari 2010, pp. 25-26.
- (42) Ito 1999, p. 230.
- (43) Kobari 2015, p. 26-27.
- (44) Hashimoto 2015, p. 55.
- (45) Kobari 2015, p. 20.
- (46) Lincicome 1995, p. 3.
- (47) Nakauchi 1986, pp. 28-32.
- (48) Kobayashi 2004, p. 232.

Bibliographical reference

- Hashimoto, Miho 橋本美保. 2015. "Hachidai kyōiku shuchō kōenkai no kyōiku shiteki igi" 八大教育主張講演会 の教育史的意義 [The Pedagogical Significance of the Lecture Meeting of Hachidai-Kyōiku-Shuchō (The Eight Greatest Pedagogical Opinions)]. *Tōkyō Gakugei Daigaku kiyō. Sōgō kyōiku kagaku kei* 東京学芸大学紀要・総合教育科学系 [Bulletin of Tokyo Gakugei University. Educational Sciences] 66:1, pp. 55-66.
- Ikeno, Norio. 2011. *Citizenship Education in Japan*. London: Continuum International Publishing Group.
- Ito, Toshiko. 1999. "Die Vervollkommnung der Individualität. Erziehungsideal und Reformabsichten in Japan." *Zeitschrift für Pädagogik* 38, pp. 215-238.
- Kahn, B. Winston. 1997. "Hani Motoko and the Education of Japanese Women." *Historian* 59:2, pp. 391-401.
- Kobari, Makoto 小針誠. 2015. "Taishō shin kyōiku undō no paradokkusu: Tsūsetsu no saikentō o tsūjite" 大正新 教育運動のパラドックス：通説の再検討を通じて [The Paradox of the Taishō New Education Movement: Through the Re-examination of the Prevailing View]. *Kodomo shakai kenkyū* 子ども社会研究 [Journal of Child Study] 21, pp. 19-32.
- Kobayashi, Makoto. 2004. "Kuniyoshi Obara 1887-1977." *Prospects* 34:2, pp. 223-239.
- Kobayashi, Tetsuya. 1990. "Masataro Sawayanagi (1865-1937) and the Revised Elementary School Code of 1900." *Biography* 13:1, pp. 43-56.
- Lincicome, Mark E. 1995. *Principle, Praxis, and the Politics of Educational Reform in Meiji Japan*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Lincicome, Mark E. 1999. "Nationalism, Imperialism, and the International Education Movement in Early Twentieth-Century Japan." *The Journal of Asian Studies* 58:2, pp. 338-60.
- McClain, James L. 2002. *Japan: A Modern History*. New York: Norton.
- Mehl, Margaret. 2009. "Lessons from History? Obara Kuniyoshi (1877-1987), New Education and the Role of Japan's Educational Traditions." *History of Education* 38:4, pp. 525-43.
- Obara, Kuniyoshi 小原國芳. 1923. *Jiyū kyōikuron* 自由教育論 [Essay on Liberal Education]. Tokyo: Idea Shōin.
- Obara, Kuniyoshi 小原國芳. 1940. *Kokumin gakkō an* 国民学校案 [Elementary School Plan]. Tokyo: Tamagawa Gakuen Publishing Department.
- Okano, Kaori and Motonori Tsuchiya. 1999. *Education in Contemporary Japan: Inequality and Diversity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ozawa, Shūzō 小沢周三. 1996. *Kyōikugaku kīwādo* 教育学キーワード [Keywords of Education]. Tokyo: Yūhikaku.
- Platt, Brian. 2005. "Japanese Childhood, Modern Childhood: The Nation-State, The School, and 19th-century Globalization." *Journal of Social History* 38:4, pp. 965-85.
- Sawayanagi, Masatarō. 1927. "The General Features of Pacific Relations as Viewed by Japan." *News Bulletin (Institute of Pacific Relations)*, pp. 24-27.
- Tipton, Elise K. 1997. *Society and the State in Interwar Japan*. London: Routledge.
- Uniya, Michiyo 鵜丹谷三千代. 1980. "Hani Motoko sono seitachi to shisō keisei" 羽仁もと子その生い立ちと 思想形成 [Mrs. Motoko Hani, Her Life and Philosophy]. *Seikatsu gakuen tanki daigaku kiyō* 生活学園短期大学 紀要 [Bulletin of

Seikatsu Gakuen Junior College] 3, pp. 93-109.

- Uno, Mieko 宇野美恵子. 1985. “Noguchi Entarō no kyōiku shisō: jiyū kyōiku to chiten no kōzō” 野口援太郎の 教育思想: 「自由教育」と「知天」の構造 [Noguchi Entarō's Educational Thought: The Construction of Liberal Education and Chiten]. *Kyōiku tetsugaku kenkyū* 教育哲学研究 [Research of Philosophy on Education] 52, pp. 16-29.
- Yamada, Takayuki 山田隆幸. 2016. “Taishō jiyū kyōiku – seikatsu kyōiku – seikatsu tsuzurikata kyōiku kara ‘zentaiteki hatatsu’ wo kangaeru: ‘Ikiru iyoku’ to ‘manabu iyoku’ wo jiku ni” 大正自由教育・生活教育・生活 綴り方教育から「全体的発達」を考える: 「生きる意欲」と「学ぶ意欲」を軸に [From The ‘Liberal Education’, ‘Life Education’ and ‘How to Make a Living Education’ of the Taishō Period to Thinking about the ‘Overall I Development’: Based on the ‘Will to Live’ and ‘Will to Learn’]. *Kodomogaku kenkyū ronshū* 子ども学 研究論集 [Essay Collection of Child Studies] 8, pp. 21-40.
- Yamasaki, Yoko. 2010. “The impact of Western progressive educational ideas in Japan: 1868 –1940”, *History of Education* 39(5): 575-588.

The Social Function of *Nisshigōbengo* (日支合辦語)⁽¹⁾

四宮 愛子

Ph.D. Student, Kansai University Graduate School of East Asian Culture

[要旨]

拙論は、中谷鹿二（1926）の小冊子『日支合辦語から正しき支那語へ』を主な研究対象とし、日本語と中国語の接触言語「日支合辦語」を言語的特徴と社会的機能の二つの側面から分析及び考察した。日本と中国という国家間の枠組みや、一般的な「ピジン」の言語学上の概念である上層語、基層語、傍層語、語彙提供言語という枠組みの範囲に捉われることなく、言語接触と文化交渉の観点から当時の日本人と中国人の相互認識について検討した。

1890年代から1940年代にかけて、日本の中国侵攻にともない、日本人と中国人の集団が接触をするとともに、日本語と中国語の接触が起きた。当初、日本人と中国人がやり取りをする際に、日本語と中国語を無規則に混交させた表現が、やがて独自の言語体系を有する「日支合辦語」が生成され、日本人と中国人との間のコミュニケーションの補助手段として使用される。「日支合辦語」は正則の日本語の語順に沿いながらも、積極的に正則の中国語の特徴を取り入れている。

しかし、「日支合辦語」で表現できる内容には制約があり、通用する範囲も限定的であったにもかかわらず、一定の影響力を備えていた。

「日支合辦語」の生成過程は、その言語的特徴においては「限定ピジン」の段階、社会的機能においては「ジャーゴン」の段階に位置していたと評価できる。また、それは日本人と中国人双方の交流によって生成されたというよりも、日本人からの単一方向の影響が強い。

こうした言語的機能と社会的機能の間の齟齬は、日本人と中国人の「日支合辦語」に対する捉え方の差異と関係が深い。日本人は「日支合辦語」を中国人と接する際に用いる言語として使用したが、その背後には、中国人に対する潜在的な日本人が使用する「日支合辦語」には、中国人に対する侮蔑的な意味合いも含められていた。他方、中国人は「日支合辦語」を「日本人が話す言葉」として認識し、日本人と対応する場合のフォリナートークとして利用した。

「日支合辦語」が、中国という新しい社会環境に慣れたいという当時の日本人の潜在的意識や姿勢に端を発し、必要最低限のやり取りができる言語手段として生成され、原初的な独自の言語体系を備えるに至ったものではあるが、同時に、中国人に対する優越感や蔑視に裏打ちされて使用されていたならば、到底、中国人社会に受容されるべくもなく、結果、日中の双方向のコミュニケーション言語としての地位を確立するまでには至らなかった。

そして、日本の中国からの撤退によって、「日支合辦語」が生成された言語及び社会環境が消滅したことで、その機能も失われた。

Keywords: 中谷鹿二、「日支合辦語」、言語的特徴、社会的機能、生成過程

[Thesis]

Introduction

1. The function of *Nisshigōbengo* (日支合辦語) in Japan
2. The function of *Nisshigōbengo* (日支合辦語) in China
 - 2.1 The creation of environment and the process of expansion of use
 - 2.2 Japanese attitudes toward *Nisshigōbengo* (日支合辦語)
 - 2.3 Chinese attitudes toward *Nisshigōbengo* (日支合辦語)
 - 2.4 The background of use of *Nisshigōbengo* (日支合辦語)

Conclusion

Introduction

During the First Sino-Japanese War (1894-1895) and Japan's defeat in World War II (1945), a Japanese-Chinese-mixed language originated, such as メシメシ進上; カイカイデガンホーヂ; ターターデポコペン; ニーヤブシンヂヤナイカ. These expressions were mainly used between Japanese and Chinese people. Nakatani Shikaji (中谷鹿二), a Japanese-Chinese interpreter and a teacher of Chinese, named such “odd language” *Nisshigōbengo* (日支合辦語), and consistently criticised it. But contrary to his intention, the use of *Nisshigōbengo* (日支合辦語) expanded. From the analysis, it can be said that *Nisshigōbengo* is placed linguistically on the level of a ‘restricted pidgin’. However, the use and attitude toward *Nisshigōbengo* is different between Japanese and Chinese speakers.

This paper examines the social function of *Nisshigōbengo* (日支合辦語): How was *Nisshigōbengo* created? What kinds of environments was it used in? How did Japanese and Chinese recognize it? Why did they use it?

This is one part of my Master's thesis, and based mainly on *From Broken Sino-Japanese to Correct Chinese* (日支合辦語から正しき支那語へ) written by Nakatani Shikaji (中谷鹿二) in 1926.

1. The function of *Nisshigōbengo* (日支合辦語) in Japan

The role of *Nisshigōbengo* (日支合辦語) is different in Japan and China. First, in Japan, *Nisshigōbengo* (日支合辦語) is used as a role language ⁽²⁾, which represents China or Chinese in entertainment magazines and comedy double acts. In comparison with China, where *Nisshigōbengo* (日支合辦語) was used as a communication tool, in Japan there were very few instances of it. On the other hand, Japanese writers, such as for entertainment magazines and novels, incorporated *Nisshigōbengo* (日支合辦語) as a presentation technique. Readers and audiences accepted it as one of the tools to learn about daily life in China.

Nakatani Shikaji (ナカタニ生)⁽³⁾ mentioned that from the Mukden Incident of 1931 and the Sino-Japanese War, novels using settings such as Manchuria (Manshū) and China (Shina) were popular. “Strange Chinese (Myō-chikirin na Shinago)” was used in these entertainment magazines.

然し全然支那語を知らない讀者が恰も鬼の首でも取った氣でその間違つた支那語を憶へ込んで得々としてゐる、一例を此處に拾ひ出して見ると言葉【ソーハー】 火車【ホーシヤ】 錢【セン】 中國話【ツンコーホワ】 の類だ、本文の筆者は最近内地を旅行し各地で此の種の妙な言葉を聞かされた(略)⁽⁴⁾

In Japan, *Nisshigōbengo* (日支合辦語) and the vocabulary of correct Chinese were assimilated as loan-words, but they did not keep the original style and grammar of *Nisshigōbengo* (日支合辦語). It can be supposed that these transformed *Nisshigōbengo* (日支合辦語) became one of the elements for learning about life in China. Later, these became related to the formation of stereotypes, prejudice and preconceptions.

2. The function of *Nisshigōbengo* (日支合辦語) in China

In China, *Nisshigōbengo* (日支合辦語) was used as a subsidiary tool of communication. However, Japanese and Chinese understanding of it is different.

2.1 Creation of the environment and process of expansion of use

In terms of conditions for creation of *Nisshigōbengo* (日支合辦語), it can be said that it was used where Japanese and Chinese interacted and knowledge of the two languages was limited.

Ushijima Haruko (牛島春子) writes about a conversation with a female prefectural officer.

私はすこしはにかみながらろくに知りもせぬ満語を、あれこれと工夫しながら懸命にあやつつて話題をさがし、二太々は満語を日本風に並べたり、知つてゐる日本語を間々にはさみ、手ぶり身ぶりをつかつてこれも却々社交的にふるまつた。私の経験によると満洲の婦人はまづ大抵年を訊く、それから結婚して何年になるか、子供はあるかないか、両親は達者か、さういふ質問から親密の糸口をひき出す。(5)

At the beginning, communication based on limited linguistic knowledge and nonverbals gave rise to expressions using irregular Japanese and Chinese. Later, this became the original language system called *Nisshigōbengo* (日支合辦語).

How did these expressions spread? Watarai Teisuke (渡會貞輔) wrote “Shinago language is so easy (支那語って簡単なものですね)” and mentioned a Japanese maid who learned Chinese from her Japanese mistress.

十數年前の事である、旅順のさる武官の家へ内地から新しく女中が來た、お爺さんやお婆さんから日清戦争の咄を聞いて居るから支那人其者に対しては臆氣ながら多少の理解を持つて居たし、又一方支那人の方も片言ながら日本語を話すので野菜你呀、魚屋你呀を相手に其日々々の御用を無事に勤めて來た、併し自分も満洲に來て居る以上少し位支那語を知つて置かねば日本娘の估券に關はると感付いてそれから一所懸命奥様を先生として簡単な支那語の勉強を遣り始めた「いらないといふ事は不要といふのだよ」と教へられ翌日かすがい幹活計が來た時早速ふ、えうと日本字音そのままで發音したが支那人は「左様ですか」と大人しく引下つたので彼女中氏はすつかり得意になり奥様に向ひ「支那語って案外容易しいものですね」と。(6)

From Watarai's quote, we can surmise that *Nisshigōbengo* (日支合辦語) spread orally to people who did not have deep knowledge of correct Chinese or Japanese but thought that the Chinese and Japanese expressions were correct.

2.2 Japanese attitudes toward *Nisshigōbengo* (日支合辦語)

How did Japanese think of *Nisshigōbengo* (日支合辦語) at that time? Kuraishi Takeshirō (倉石武四郎) mentions that the following expressions were neither Chinese nor Japanese (“支那語にもならない支那語”, “日本語にもならない日本語”):

In terms of Chinese, there were expressions such as *Buyao shuo ja naika* (I said I don't need it!); *Nide* (you) [Japanese pronunciation], *shōshō* (a little more), *man man de* (slowly) [Japanese pronunciation]. Japanese also incorporated irregular expressions, such as *tabako shinjō* (give cigarettes).

満洲に住む友人が、日本の婦人のつかふ満洲語のことを話してきかせた中に、満洲人のものうりが来ると、

「不要説ぢやないか」

といつて撃退する。満洲人はそのけんまくにあきれて退却するが、さて何のことかわからない。なるほど、支那語で考へれば「不要説」は「ものを云ふな」であるから、意味はわからうはずもない。しかし、支那語でこれを解かうといふのが、そもそもまちがつてゐるので、これを「不要（いらぬ）」と説（いつた）ぢやないか」と訓讀したら、すぐわかる。また、マンマンデといふことばは、満洲では「待て」といふ意味があるさうだ。満洲に長く住んでゐた日本人の婦人が、北京へ移つて、ボーイに子どもを抱かせて、自分は忘れものを取りにかへるとき、マンマンデと云つてをつたのに、ボーイは「ゆつくり」さきを歩いてゐたといつて、ひどくボーイを叱つたと云ふ。ある歸還の軍人にきくと、「ニーデ、ショーショー、マンマンデ」といふと、支那人はがつてんして待つてゐてくれますと云ふことである。

これは日本人の使ふ「支那語にもならない支那語」のことであるが、その反對に、支那人の使ふ「日本語にもならない日本語」がかなりあるらしい。その一番著名なのは、「タバコ、シンジョウ」であらう。日本人は大抵がつてんして、タバコを投げてはやるが、一種の好奇心も鼻につきすぎると、何かしらわりきれないものが残つて、歪んだ日本語の姿に不快の感情を起こす人もあらう。さういふものが、「日本語」といふ看板をかけて横行するのは、日本を笠にきて悪いことを働く支那人みたいに、むしろ、ありがたからぬ存在である。北京に住むある女性から、さういふ不愉快について、かなりまじめなてがみをもらつたことがある。⁽⁷⁾

Even though Japanese actively used irregular Chinese expressions (“支那語にもならない支那語”) without a thought, they showed displeasure when Chinese used irregular Japanese expressions (“日本語にもならない日本語”). In addition, there were cases in which *Nisshigōbengo* (日支合辦語) was not an accurate means of communication and misunderstanding arose through the discrepancies.

Japanese considered *Nisshigōbengo* (日支合辦語) to be a communication tool. Although the function and range of use of the language were limited, *Nisshigōbengo* (日支合辦語) had a certain influence among Japanese. The *Nisshigōbengo* (日支合辦語) that Japanese used contained nuances of contempt, which suggests that Japanese held latent feelings of superiority toward Chinese at that time.

2.3 Chinese attitudes toward *Nisshigōbengo* (日支合辦語)

Then, how did Chinese think of *Nisshigōbengo* (日支合辦語)? Nakatani Shikaji (大哈々生)⁽⁸⁾ introduced a column written by a Chinese about Chinese and mixed Sino-Japanese.

我們的同胞都會一種日本話、這話說出來是加幾個「的」字和幾個「什麼幹活計」便成、譬如說你上哪塊去這翻譯過來是

你的、哪邊去的幹活計？

我回家是！

我的家的回去、

諸如此類、然據說這日本人聽了就能懂的、因為是日本話、同樣地、日本人也是滿嘴幹活計、因為他們以為這就是滿洲話、

于是凡有日本人和滿洲人接觸的地方聽就有這路話通行⁽⁹⁾

Chinese considered *Nisshigōbengo* (日支合辦語) to be a language that Japanese used. Chinese used *Nisshigōbengo* (日支合辦語) as the need arose. They thought of it as “foreigner talk” rather than as a communication tool.

2.4 The background of use of *Nisshigōbengo* (日支合辦語)

As mentioned before, Japanese and Chinese attitudes toward *Nisshigōbengo* (日支合辦語) differed. What they had in common was that the range of use was extremely limited. *Nisshigōbengo* (日支合辦語) did not have mutual functionality. Japanese used it actively, while Chinese used it to adapt to Japanese.

So why did Japanese and Chinese choose to use *Nisshigōbengo* (日支合辦語), which was limited in both linguistic functions and social functionality rather than correct Japanese and Chinese? Why didn't *Nisshigōbengo* (日支合辦語) remain as simply a mix of Japanese and Chinese? Why did it continue to exist as a language system with its own rules?

Nakazawa Shinzō (中澤信三) explained why *Heitai-shinago* (兵隊支那語)[*Nisshigōbengo* (日支合辦語)] was used:

所謂兵隊支那語が割によく通じるのは何故か？相手が一生懸命になつて聽かう聽かうとしてゐるからである、何とかして單語だけでも意味を掴みたいと耳を傾け、頭を働かしてゐるからである。この理窟をよく考へて、單語を明瞭に發音し、今自分が喋つてゐるのは支那語であるといふことを、相手によく徹底させておいて進めなければならぬ。⁽¹⁰⁾

To sum up, first, Japanese at that time used *Nisshigōbengo* (日支合辦語) not with the intention or aim of engaging in culturally high level philosophical interaction. Rather, even as a form of communication, *Nisshigōbengo* (日支合辦語) did not go beyond the minimal level necessary for daily living. The premise, whatever intentional or subconscious, behind *Nisshigōbengo* (日支合辦語) was that it was sufficient and there was no need to go beyond it.

Second, the Japanese desire to become accustomed to living in China, a country with different customs than Japan, furthered the formation and use of *Nisshigōbengo* (日支合辦語).

It can be said that whenever it was necessary for Japanese and Chinese to interact, the expressions they learned for a minimal level of communication, or the Japanese and Chinese that they heard and transmitted, resulted in *Nisshigōbengo* (日支合辦語). Japanese considered *Nisshigōbengo* (日支合辦語) to be Chinese, while Chinese considered it to be Japanese.

The degree of use was different between Japanese and Chinese. But focusing on the fact that Chinese also used it allows us to evaluate it as a Chinese response to the Japanese psyche and attitudes. In addition, Chinese used *Nisshigōbengo* (日支合辦語) when dealing with Japanese and used correct Chinese on other occasions, showing that they consciously differentiated between the two types of communication.

Conclusion

In the general development process of contact language, *Nisshigōbengo* (日支合辦語) is placed linguistically on the level of a ‘restricted pidgin’ and at the same time socio-functionally as ‘jargon’.

Nisshigōbengo has both linguistic and social restrictions. Its sphere of use and linguistic function were limited, but we can appraise it as having been used as a means of communication.

However, the formation of *Nisshigōbengo* was more strongly influenced by Japanese speakers unilaterally than through mutual communication between Japanese and Chinese speakers.

This inconsistency between its linguistic characteristics and social function is considered to derive from the difference in the attitude toward *Nisshigōbengo* between Japanese and Chinese people. The former considered *Nisshigōbengo* as a language, which they used actively with Chinese. Contrary to Nakatani Shikaji (中谷鹿二)’s hopes, the language was influential among the Japanese-speaking community. Also, *Nisshigōbengo* as used by Japanese contained condescending discriminatory nuances. In contrast, the Chinese considered *Nisshigōbengo* “a language that Japanese speak” and used it as “foreigner talk” to adjust to the Japanese way of talking. In addition, they used *Nisshigōbengo* and correct Chinese and correct Japanese separately depending on the situation. In this sense, because Chinese at that time could use multiple languages, including *Nisshigōbengo*, they could be said to have practiced a more advanced communicative competence.

This paper argues that *Nisshigōbengo* began from the subconscious desire of Japanese who wanted to become acclimated to the new social environment of China at that time. It developed as a language tool for a minimal level of communication that was absolutely necessary, and became a unique, primitive linguistic system. At the same time, since it was used to substantiate Japanese attitudes of superiority and contempt toward Chinese (even if not all Japanese felt this way), ultimately, it was not accepted by Chinese society. Consequently, it never reached the level of a language that could be used for Sino-Japanese communication.

When the Japanese left China, the linguistic and social environment in which *Nisshigōbengo* had developed disappeared and the language lost its function.

This paper has mainly focused on the formation, transformation (changes), and proliferation of *Nisshigōbengo*, which developed through Sino-Japanese language contact. It attempts to transcend the framework of the two nations of Japan and China. It also aims to supersede the bounds of the linguistic concept of “pidgin”, including superstratum, substratum, adstratum, and lexifier language, and instead to understand the phenomenon through analysis using an intercultural perspective.

Nisshigōbengo is deeply related to the history of Japan and China. Through *Nisshigōbengo* we can get a glimpse into Sino-Japanese interaction in terms of linguistic contact between Japanese and Chinese.

NOTES

(1) This paper is one part of my Master's thesis (「日支合辦語」の研究).

(2) 『明解言語学辞典』(三省堂、2015 年)p.224

Role Language (役割語): the speaker's personality and the pattern of speech style (vocabulary, grammar, phrasing, the characteristics of speech sound and phonetics) which are related to stereotype.

(3) ナカタニ生 is one of Nakatani Shikaji's pen name.

(4) ナカタニ生「支那語無駄ばなし」(『善隣』9 月號、1939 年) pp.28-29.

(English translation)

...However, readers who don't know any Chinese take it into their heads that they do know Chinese even though their Chinese is incorrect! To give some examples, Japanese say things like “so-ha” for “shuohua”, “ho-sha” for “huoche”, “sen” for “qian”, and “Tsunkohowa” for “Zhongguohua”. I recently traveled to Japan and heard such strange expressions everywhere I went.

(5) 牛島春子「二太々の命」(『大陸の相貌』1941 年) pp.2-3.

(English translation)

A little bashful, I tried to find something to talk about in my poor Chinese, using every device I could, while Mrs. Er spoke in Japanese-style Chinese, sandwiching in whatever Japanese words she knew. Gesticulating to each other, we got along quite well. Based on my experience, Chinese women would first generally ask my age, how many years I had been married, if I had any children, or if my parents were healthy as a way to start a friendship.

(6) 渡會貞輔『支那語支那文 漫談(増補)』(善隣社、1938 年) p.29-30

(English translation)

Several decades ago, a new maid came from Japan to the house of a military officer in Port Arthur. She had heard from her grandfather and grandmother about the First Sino-Japanese War, so she had some vague understanding of Chinese people. Also, the Chinese spoke broken Japanese, so the maid was able to perform her tasks each day by saying things to her Chinese counterparts such as, yasai-niya (vegetable seller) or sakanaya-niya (fishmonger). But since the maid was in Manchuria, she thought she should learn at least some Chinese to be worth her salt as a Japanese woman, so she began studying in earnest simple words from her Japanese mistress, who became her language teacher. When she was taught that “I don't want any” was buyao in Chinese, when a salesman came the next day, she immediately pronounced the word in Japanese. When the seller said, “OK” and quietly left, the maid turned to her mistress, full of herself with her success, and said, “Chinese is easier than I thought!”

(7) 倉石武四郎「支那語になつた日本語」(『國語文化講座 第六卷 國語進出篇』朝日新聞社、1942 年)p.309-310.

(8) 大哈々生 is one of Nakatani Shikaji's pen name.

(9) 大哈々生「紙上談(日滿共同語)」(『善隣』3 月號、1942 年)p.49.

(English translation)

All of us Chinese speak some form of Japanese. To speak such a language all you need to do is add several de (的)'s or Shenme Kanhōji (什麼幹活計) and you're all right. Examples are: nide nabian qu de kanhōji (你的、哪邊去的幹活計?) [Where are you going?], Wode jiade huiqu (我的家的回去) [I'm going home!].

Everything is like this, but it seems Japanese can understand it. This is because when Japanese speak their own language, they always use kanhōji (幹活計), so Japanese think it is Chinese. So in all areas where Japanese and Chinese interact, they communicate with this language.

(10) 中澤信三「兵隊支那語より一步前進(六)」(『支那語月刊』11 月號、1944 年)p.7.

(English translation)

Why is it that the so-called Heitai-shinago (兵隊支那語)[Nisshigōbengo (日支合辦語)] was fairly understandable? That's because the listener would try very hard to understand what the speaker was saying. The Chinese would listen hard to try at least to understand the meaning of the vocabulary and use their mental acumen. The Japanese would think hard about the logic, pronounce the words clearly, and make sure their listeners know they were speaking Chinese.

Bibliographical reference

- ・『明解言語学辞典』(三省堂、2015 年)
- ・ナカタニ生「支那語無駄ばなし」(『善隣』9 月號、1939 年)
- ・牛島春子「二太々の命」(『大陸の相貌』、1941 年)
- ・渡會貞輔『支那語支那文 漫談(増補)』(善隣社、1938 年)
- ・倉石武四郎「支那語になつた日本語」(『國語文化講座 第六卷 國語進出篇』朝日新聞社、1942 年)
- ・大哈々生「紙上談(日滿共同語)」(『善隣』3 月號、1942 年)
- ・中澤信三「兵隊支那語より一步前進(六)」(『支那語月刊』11 月號、1944 年)

日本における臓器移植 —1977年に可決された法案の歴史—

Jana HERMANS

ルーヴェン大学日本学科 修士課程

[Abstract]

Worldwide thousands of organ transplantations take place every day. For some organs (e.g. the hearth), using a brain death donor is the only viable option. Using brain death donors, however, was considered illegal for a long time. While most Western countries produced legislation in the 80's, the first Japanese bill on this subject was submitted (and rejected) in 1994. From 1994 until 1997 the ever-changing ruling political parties in Japan were unable to reach an agreement. The first Japanese organ transplantation law was enacted only in 1997.

This paper aims to explain why legislation was approved only then. Why was a bill about this topic rejected in 1994 but accepted three years later? In what way did Japan's political landscape evolve over those three years? What exactly made it possible to pass a bill in 1997? Which (political) entrepreneurs played a crucial part in this process of policy-making? The reconstruction of the process of political agenda-setting and decision-making in Japan in the eighties and the nineties is crucial to answer these questions.

John Kingdon's Multiple Streams Model makes it possible to scrutinize how and when policy makers ideally combine problems and available solutions to create new public policy. In his book "Agendas, Alternatives and Public Policies", Kingdon states individual entrepreneurs are needed to create and exploit the coupling of the so-called problem stream, the policy stream and the politics stream to enable a window of political opportunity to open.

Since 1994, Japan had been through a period of political instability. Both medical and political circles were ambivalent about organ transplantation after brain death. A few partial policy windows opened up, but connecting with the politics stream failed. When Japan's political landscape briefly stabilized in 1996, the Japanese politician Nakayama was able to successfully create and exploit a policy window. Though organ transplants from brain death donors remained somewhat problematic, the first bill was passed in 1997.

[論文]

はじめに

世界保健機関によると、臓器移植というのは、臓器の機能が低下した人の臓器と他人の健康な臓器を取りかえて機能を回復させる治療のことである。初めて臓器移植を成功させたのは米国ボストンの病院に勤務するジョセフ・マレーであり、一卵性双生児間の腎臓移植であった。1954年のことである。1963年には世界初の肝臓移植、肺移植が行われ、1966年に同時に脾臓と腎臓の移植が行われた。次いで、1967年には心臓移植の一例（注1）も報告されている。

生きているドナーから提供された臓器の移植は、1954年から様々な国で実施されていると言われていた。一方で、脳死者からの臓器移植は長い間認められてこなかった。心臓の拍動が残っている脳死状態では本人の死を認めることができなかったのである。

現在の医学界では、生きているドナーから提供された臓器と脳死者から提供された臓器の両方ともが重要であるとみなされるようになってきた。なぜなら、心臓などの臓器は生きているドナーから移植できないからである。そのため、脳死者からの臓器移植はより重要視されるようになってきたのだ。

ヨーロッパ諸国が脳死者からの臓器移植に関する法律を1980年代に制定したのに対し、日本は1997年に制定した。1994年から法案が何度か提出されてはいたが、そのたびに否決されており、ようやく制定されたのである。

Feldman（2000年）は日本の法律が1994年には可決されず1997年に制定された理由として三つのことを述べている。一つ目は1968年に札幌の病院で臓器移植を行った和田寿郎という医師が人々に臓器移植に対する不信感を与えてしまったこと、二つ目は法案を可決する前には合意が必要であるということ、そして三つ目は日本人の伝統的な死生観が現代西洋医学の技術革新を視野に入れた死生観と異なっているということである。

本研究では、なぜ日本で臓器移植法が制定されたのか、そしてなぜ日本における臓器移植法が1994年に可決されず、1997年には可決されたのか、その理由を明らかにしていく。そのため、1994年から1997年にかけて日本の政界が不安定な状態であったことに着目し、政治的背景の調査・分析を行った。

研究にあたり、1980年代にキングドン・ジョンが自著“Agendas, Alternatives, and Public Policies”の中で説明している「アジェンダの設定」と「政策の窓」という理論を枠組みとして用いる。

第一章 キングドンの理論

キングドンと呼ばれる米国の政治学者が、なぜアジェンダに載る事柄と載らない事柄があるのかということを明らかにするため、1976年から1979年にかけて計250名の政治家、官僚、利益団体、記者、学者などに対しインタビューを行った。彼は国の政治における意思決定の場で「アジェンダの設定」がどのように行われるのかということを検討し説明するために、「政策の窓」を用いた。

キングドンは「政策の窓」が開けられている、つまり政策変更の危機がもたらされるためには、三つの大きな流れが同時に存在することが重要であると述べている。その三つの流れというのは、人々が問題を確認する過程である問題の流れ、人々が政策の変化を求め政治活動を起こす過程などの政策の流れ、そして政治家や市民団体などが具体的な政策を提言する過程などの政治の流れのことを指す。

キングドンによると、問題の流れにおいては、国会内部周辺の人々が条件に関して国で起こった出来事から変えていかなければならないことを学ぶこと（フィードバック）と、条件がうまく変わらなかった場合にそれを問題化することの二つが含まれているという。政府は既存のプログラムと変えていかなければならないことを対比し、そこで打ち出された方針をプログラムがよいものか判断するための具体的な統計資料の数値を含んだ指標として設定する。最後に、予算の優先順位付けがある。

政策の流れにおいては、主に専門家による政策コミュニケーションから生み出された政策アイデアが互いに混ざりあい衝突しながら数が絞られていき、決定アジェンダを形成していく。このプロセスにおいてアイデアを選別するための条件として三つの基準が示されている。三つの基準というのは技

術的な実行可能性、価値の受容性、そして将来実施することができるかどうかということである。

政治の流れにおいては国民のムード、組織化された利益、選挙結果つまり政府の変化が関係している。

そして、「問題の流れ」「政策の流れ」「政治の流れ」が合流した際に「政策の窓」が開かれる。つまり、問題が認識され、政策共同体が解決案を準備し、政治変化が政策変化のための好機を提供し、行動を制限する制約が厳しくないときに合流する。その際に「政策企業家」と呼ばれる人物の存在が重要な役割を果たす。また、この「窓」が開いている時間は基本的に短く、三つの流れのタイミングがきちんと合わなければ、「窓」は閉じてしまい、次の「窓」が開くまで待たなければならなくなる。

本研究では、「政策の窓」の理論を用いて、各関係者の行動を分析するとともに、臓器移植法に関する文献から集めた情報を三つの流れに分けて分析していく。

第二章 問題の流れ

上記のように、問題の流れというのは指標、出来事、フィードバックと予算などの条件が問題としてみなされ、どのように条件に関して学習する手段があるかということである。この研究においては、なぜ脳死移植が問題になるか、そして、どのようにしてその問題が政治アジェンダに表れたのかということをはっきりとすることが問題の流れを成立させている。

1980 年以前には二つの臓器移植に関する法律があった。一つ目は「角膜移植に関する法律」であり、1957 年に施行された。この法律においては本人の遺族から同意があった場合にのみ角膜移植を行うことができた。この法律は 1979 年に「角膜・腎臓移植法律」、いわゆる「角腎法」に取りかわった。角腎法では、受取人が誰かということをしらせないまま臓器移植を行うことができるようになった。

どちらの法律も臓器移植に関する法律だが、このときはまだ脳死移植は問題ではなかった。1968 年の和田事件から問題になり始めたのである。脳死の判断基準がきちんと定められていない中、和田医師は日本で最初の心臓移植手術を行った。それだけでなく、和田医師はその際に彼以外の医師の客観的な判断を得ないという重大なミスを犯し、1967 年 5 月に開かれた委員会（注 2）の決定がないまま、手術を行った。さらに、患者が手術の二日後に死亡してしまったのである。それにより、国民の臓器移植を行う医師に対する信頼が失われてしまった。

和田事件以降、様々な臨調構成調査会（臨調）が脳死による臓器移植と人間の命の密接した関係について検討してきた。また、日本の政界は 80 年代から徐々に脳死による臓器移植を認めようとする討論を進めてきた。

和田事件が重要視されるようになってきた一方、キングドンは一例だけでは偶然の出来事だと認識される可能性があるため、もう一例が必要であると述べている。その一例がつくば事件である。1984 年 12 月 22 日、つくば市の大学病院は脳卒中を起こした女子を脳死と判断した。その後、医師はその患者が臓器移植に同意する文書を残していたため移植を行ったが、その 90 日以内に日本弁護士連合会は医師を傷害致死罪で起訴した。後続の討論では患者の同意に焦点を当てる。ドナーが精神疾患だった場合、ドナーの同意は本当の同意となりうるのかということについて考える。また、脳死判定をするために、竹内クライテリアを用いたが、そのクライテリアはまだ認められるものではなかった。臓器移植手術が行われたころより脳死による臓器移植の討論が日本社会の中で起こり始めた。

脳死による臓器移植の討論は、脳死の概念に関するものとも言える。脳死後の臓器移植については、宗教的な視点や考え方からすると、人間の「生」と「死」に関する多くの難問が発生する。その中で重視されていることが脳死が人の死であるかどうかという問題である。古来より、日本の「死生観」は、人の死というのは、自律呼吸と心臓が停止することで脳の死となり、霊魂が体から離脱する、という「自然死」を基本としたものである。

また、神道においては、別の考え方がある。生前の身体は単なる物質ではなく、両親から生を与えられた尊いものであり、また死後の身体については、単なる遺体ではなく、人として扱うべきだという考え方である。したがって、死後の身体から臓器を取り除くという行為は、その考え方に反するものとなるであろう。

キングドンによると、この脳死による臓器移植の問題に関して二つの意見が対立しており、そのこと自体が問題に影響を及ぼしていると言う。この問題に関して積極的な団体とは、日本医師会、日本脳波学会、脳死・生命倫理及び臓器移植調査会（以降、脳死臨調とする）である。それに対し、消極的な団体は、患者の権利検討会、刑法学会、公益団法人精神神経学会である。

圧力団体だけでなく、1990年に設立された臨時脳死及び臓器移植調査会、いわゆる脳死臨調からも脳死による臓器移植に関する逆の意見が出ている。脳死臨調は、内閣総理大臣の諮問に応じ、脳死による臓器移植に関する諸問題について総合的に検討を加え、脳死による臓器移植の施策に関わる重要事項について調査を行い審議している。

一方、1991年に提出された報告書によると、脳死臨調で意見対立があったために、内部分裂を起してしまったという。過半数が脳死に関する合意を必ず得ることができると考えていたのに対して、その過半数の命に対する考え方は科学的な心理によるものではなく、生物学説によるものだと考え反対する少数派もいた。ただ、少数派は脳死による臓器移植事態に反対していたのではなく、法律によって、人の死を決めることに反対していた。また、最後に提出された報告書においても、「脳死は人の死である」というような異論が出ていた。

以上のことから、脳死による臓器移植には賛成意見と反対意見があることが明らかになった。反対派は脳死の定義と判断基準のために、患者の権利が危険にさらされるのではないかという心配をしていたのである。

第三章 政策の流れ

以上のことからわかるように、政策の流れにおいては、政治家が多様な政策アイデアの中から1つの政策を選び決定することが重要である。そのため、脳死による臓器移植に関する討論をしながら、どのような政策アイデアからどのような法案を制定するかということに焦点を置く。

1974年に日本脳波学会は脳死判定のためのクライテリアを提出した。それを以下に示す。

- (1) 深い昏睡
- (2) 同行の散大と固定
- (3) 自発呼吸の停止
- (4) 血圧が激減し、恒常的な低血圧になる
- (5) 平坦な脳波
- (6) 上記の項目を6時間以上保つこと

世間は上記のクライテリアに対して、あまり関心を持たず、1970年代には脳死に関する討論の記事はあまり発行されなかった。しかし、1980年代より再び脳死による臓器移植の問題の討論が起こり、政府がこれを明らかにするべきだという声が医学界から上がった。

そのため、1985年に生命と倫理に関する懇談会が設けられた。医師と自由民主党の議員である中山太郎が会長を務め、脳死と認めるための基準を設定することを目標とした。

同時に脳死に関する研究をする班である竹内班は、1985年12月から竹内クライテリアと呼ばれる脳死の判断基準を採用した。しかし、これは6歳未満の子どもには適用されない。

脳死脳波学会と竹内班は一般的に用いることができる脳死の判断基準を設けようとしたが結局それは叶わなかった。

そのため、1988年9月に脳死医師会生命倫理商談会と自民党の研究チーム、そして日本医師会は外国がどのようにして脳死に対処しているのかを知るために海外へ赴いた。その主導者は前述にある中山太郎であった。中山太郎は帰国後、脳死に関する問題を取り扱う組織を設立する法案を提案した。この法案は臨時脳死及び臓器移植調査会設置法と呼ばれ、これに従って1990年に脳死臨調が設立されることとなる。

次いで、脳死臨調は1991年6月14日に予備的な報告書を提出した。この報告書では意見が二つに

分かれてしまっていた。先ほど述べたように多数派と少数派、つまり賛成派と反対派に分かれたうえに、それにそぐわない異論も出てきたのである。

その後、1994年4月22日、第129回の国会で「臓器の移植に関する法律案」が衆議院に提出された。次いで、1996年6月14日の第136回の国会において中山案と呼ばれる修正案が提出された。中山案は同年9月27日に行われた衆議院解散のために、もう一度発案する必要があった。その後、総選挙特別国会を経て、第139回の国会で修正案が改めて衆議院に提出された。この法案は、1997年の第140回の国会より本格的な審査が始まったが、脳死を「死」とすることに反対する立場の議員から金田案と呼ばれる対案が提出され、それも同時に審査されることとなった。自民党の中山太郎が提出した中山案は1997年4月24日に衆議院本会議で承認され、参議院へ送付された。

参議院では臓器の移植に関する特別委員会が設置され、参議院委員から提出された猪熊案と呼ばれる対案とともに審査された。6月16日に中山案が再度修正され、特別委員会に提出され、関根案と呼ばれることになった。その後、ようやく、法案は6月17日に参議院本会議、衆議院本会議で可決され、10月16日に施行された。

第四章 政治の流れ

キングドンによると、政治の流れには、国民のムードと組織化された利益の存在と選挙結果が関係している。では政治変更や政党変化などはどのように影響を及ぼしているのだろうか。

(表 1)ー 首相の立て続け

首相	時期	政党
宮澤喜一	1991-1993	自由民主党
細川護熙	1993-1994	日本新党
羽田孜	1994-1994	新生党
村山富市	1994-1996	日本社会党
橋本龍太郎	1996-1998	自由民主党

由来： http://japan.kantei.go.jp/cabinet/0061-90_e.html

1994年4月22日、日本新党の細川護熙が首相である際に、初の法案が提出された。同月に羽田孜が新首相に選出されたが、二か月で退任した。次に、村山富市が1994年6月30日に選出され、1996年まで首相を務めた。その次に首相になったのは自民党員の橋本龍太郎である。このような激しい与党の移り変わりが脳死による臓器移植法の起草に多大な影響を与えた。それだけでなく、1996年9月27日の衆議院の解散も臓器移植法の可決が遅れる原因になったと言える。

次に、国民のムードが政治の流れに影響を与える例を紹介する。朝日新聞は1996年9月に世論調査を載せた記事を出版した。この記事では1988年、1992年、1996年の世論調査（表2）で脳死したドナーの臓器を用いることに賛成する人の数が増加していることが明らかになったということが述べられていた。

(表 2) — 脳死による臓器移植 (世論調査 1996 年の世論調査)

	臓器移植		脳死	
	賛成	反対	脳死を人の死と認める	心臓停止に限るべきだ
1992 年の世論調査	57%	26%	47%	41%
1996 年の世論調査	56%	28%	53%	38%

由来: 『医療現場へ一層厳しい日 脳死と臓器移植どうみる朝日新聞社世論調査』 [朝日新聞, 1996 年 10 月 1 日]

さらに、年代によって脳死に対する認識が異なる (表 3)。若者には脳死を「死」と認める人が多いが、大人は脳死は心臓停止したときに「死」とみなすべきだ考える人が多い。

(表 3) — 脳死者からの臓器移植に (1996 年の世論調査)

	賛成	反対
20 代前半	69%	19%
20 代後半	62%	27%
30 代前半	61%	21%
30 代後半	59%	24%
40 代	58%	28%
50 代	53%	33%
60 代	50%	32%
70 代以上	45%	32%

由来: 『医療現場へ一層厳しい日 脳死と臓器移植どうみる朝日新聞社世論調査』 [朝日新聞, 1996 年 10 月 1 日]

第五章 政策の窓

キングドンは、政策変更が転機を与え、三つの流れが同時に存在することが重要であると述べている。二つの流れしか存在しない場合には、部分的な合流となり、政策の窓を開けることはできない。それでは、これらの三つの流れ又は二つの流れはいつ合流するのだろうか。

1994 年 4 月 22 日に初の法案が提出されたが、その以前に様々な委員会と評議会が臓器移植に対する反対意見を打ち出していたため、意見が一致せず、窓が開いたにも関わらず三つの流れが合流することはなかった。なぜなら、問題がはっきりとしておりその問題を検討する法案も提出されていたが、不安定な状態であり、政治の流れが合流することができなかったからである。次に、窓が開かれたのは 1997 年である。この年には中山案が提出されたが、多くの修正を必要とした。ようやく、1996 年 9 月 27 日に衆議院が修正案を可決し、背景の窓が開いたまま、参議院に提出されたので、そこでも可決された。

では、政策企業家は誰だろうか。この話の中の政策企業家は中山太郎である。なぜなら 1985 年に設立された生命と倫理に関する懇談会の委員長であり、脳死を認めることに努力をつぎこんだ。または、1990 年に設立された臨時脳死及び臓器移植調査会設置法の制定に尽力したからである。

考察

1997年に制定された「臓器の移植に関する法律」においては、臓器提供のためには、本人の同意と遺族の同意の両方が必要であると定めている。しかし、この法律の下での脳死者からの臓器提供件数は少ない。(公社)臓器移植ネットワークによると、旧法の脳死者からの臓器提供は86例しかないという。2010年にその法律は脳死者からの臓器提供が増えるように改正された。本人に臓器提供に対する同意の確認がとれなくても、遺族の同意があれば臓器提供ができるようにしたのである。

その他にも日本政府は臓器提供を促進させるために様々な行動をとった。その例がドナーカードである。2010年に法律が改正されたのち、ドナーカードはより手にされるようになった。運転免許証や健康保険証にも臓器提供の意志を記入できる欄が設けられている。さらに、インターネットで臓器提供の意志表示をすることもできる。これらの方法により臓器提供の数が増加したのではないかと考えた人が多いであろうが、実はここまでしてもそこまで数に影響はなかった。将来的にこの少ない臓器提供数は問題になるだろう。

結論

本研究においては、なぜ日本における臓器移植法が制定されたのか、そしてなぜ1994年には可決されず、1997年には可決されたのかということを明らかにしてきた。

臓器移植法の制定過程を検討したことにより、日本の政界は1994年から不安定な状態であり、脳死による臓器移植の問題について医学界と政界の意見が一致していなかったということがわかった。政界が不安定だったことが法案政策過程で様々な関係者に影響を及ぼし、そのことが脳死による臓器移植に関する問題の解決に膨大な時間を要する原因となったのである。その後1996年に政界は安定し、1997年によりややく法律が制定されたが、その法律の中でも脳死の問題はまだ完全には解決しておらず、脳死の定義もあいまいなままである。

注

- (注1) クリスチャン・バーナードと呼ばれる臓器の医者であった。バーナードに移植された患者が手術の18日後に死んでしまった。
- (注2) 日本移植学会の会員も厚生省のメンバーも、法務省のメンバーもいる委員会である。

参考文献

- ・生駒教彰『私の臓器はだれのものですか。』（日本放送出版協会、2002年）
- ・福田孝雄「議員提案法制の立法過程についての考察—臓器移植法をれいとして」（『川崎医療福祉学会誌』15（2）、2006年）
- ・島田久美子「脳死臓器移植と科学情報課程論—市民社会不在の法制化」（『日本大学大学院総合社会情報研究科起要』17、2006年）
- ・『医療現場へ一層厳しい日 脳死と臓器移植 どうみる朝日新聞社世論調査』（朝日新聞、1996年10月1日）
- ・『自民復調、首相続投へ 自社さ連立継続めざす 心身後退、朱民は維持』（朝日新聞、1996年10月21日）
- ・『「金持ちだけ」の怒れ 臓器移植へ 脳死臨調答申後の課題：下』（朝日新聞、1992年1月25日）
- ・『生命倫理研究議員連盟が発足 脳死立法を目指す』（朝日新聞、1985年2月14日）
- ・Akibayashi, Akira. (1997). Finally Done: Japan's Decision on Organ Transplantation. The Hatsings Center Report, 27(5), 47.
- ・Bagheri, Alireza (2003). Criticism of "Brain Death" Policy in Japan. Kennedy Institute of Ethics Journal, 13(4), 359 – 372.
- ・Feldman, Eric A. (1994). Legal Transplant, Organ Transplants: The Japanese Experience. Social & Legal studies, 3(1), 71 – 91.
- ・Feldman, Eric A. (2000). The ritual of rights in Japan: Law, Society, and Health Policy. Cambridge: Cambridge University Press.

- Kimura, Rihito. (1994). Organ transplantation and brain-death in Japan. Cultural, Legal and Bioethical Background. *Annals of transplantation*, 3(3), 55 – 58.
- Kondo, Kazuya (2005). Organ Transplant Law of Japan – Past, Present and Future. *Journal of International Bioethique*, 16(1), 91 – 93.
- Kingdon John W (2003). *Agenda's, Alternatives and Public Policies*. New York:Longman.
- Watanabe, Akio (2016). *The Prime Ministers of Postwar Japan, 1945 – 1995: Their lives and Times*. London: Lexington books.
- Yasuoka, Maria-Keiko (2015). *Organ Donation in Japan: A Medical Anthropological Study*. London: Lexington books.
- (公社) 日本臓器移植ネットワーク。2018 年 1 月 4 日
http://www.jotnw.or.jp/file_lib/pc/datafile_brainCount_pdf/analyzePDF2016.pdf

Tha Keicho-era embassy to Europe in Novels

-By a Comparison of Haze-kura by Kon Toko to The Samurai by Endo Shusaku-

斎藤 佳子

Ph.D Student, Kansai University Graduate School of Letters

[要旨]

本稿は、日本でノンクリスチャンがどのようにキリスト教を受容したかを考察するため、カトリックの信徒であることを公言し、小説を書いていた遠藤周作『侍』(1980)と、天台宗僧侶である今東光『はぜくら』を比較し、今がどのように作中でキリスト教を捉えているか明らかにするものである。

日本では、クリスチャンは人口の約1パーセントしかいないが、キリスト教を題材にした小説が描かれることは少なくない。歴史小説においても、キリスト教と関わりのある歴史が小説の題材とされることは度々あった。カトリック作家である遠藤の創作の動機には、キリスト教を日本人に広めるという面もあり、『沈黙』(1967)『深い河』(1993)など、キリスト教信仰を問う作品が代表作にあげられる。遠藤は、度々歴史小説を書き、1980年には江戸時代のはじめに、メキシコと交易を結ぶことと、仙台藩でのさらなる宣教のため伊達政宗にヨーロッパに派遣された、慶長遣欧使節を題材にした『侍』を発表している。

しかし、慶長遣欧使節を題材に小説を書いたのは遠藤だけではない。管見するかぎり、慶長遣欧使節を題材にした作品は、劇やオペラ、小説などをあわせ8作品ある。戦後では、天台宗僧侶である今東光が『はぜくら』(1959)を発表している。遠藤は自身がキリスト教徒であり、執筆の動機にはキリスト教を日本人に伝えることを目的とする面もあったが、天台宗僧侶の今は、キリスト教徒が少ない日本で、なぜキリスト教と関わる歴史を題材として小説を書いたのだろうか。

先行研究では、慶長遣欧使節については松田毅一などにより史学的な研究がなされてきたが、慶長遣欧使節を題材とした小説に関しては、ほぼ遠藤の『侍』に研究が偏り、さらには慶長遣欧使節を扱った作品群を見通す研究は行われていない。しかし、慶長遣欧使節という共通する出来事を軸にし、クリスチャンの作家、そしてノンクリスチャンの作家がそれぞれ作中でどのようにキリスト教を描いたかを明らかにすることは、クリスチャンよりもノンクリスチャンが多い日本でどのようにキリスト教が受容されているかを考察する手がかりとなるだろう。

本稿では、その作品群に含まれる、遠藤『侍』と、今『はぜくら』を扱う。この二作品には、共に日本とヨーロッパ文化という二項対立に収まらない人物が描かれる。二作品のこの人物に焦点を当て比較することで、天台宗僧侶である今がどのようにキリスト教を描いたのかを明らかにし、ノンクリスチャンのキリスト教受容を考察したい。

[Thesis]

Introduction

Last year, a movie director, Martin Scorsese made a film called *Silence*. This is based on a Japanese novel, which has the same title. The novel was written by Endo Shusaku whom known as a Catholic writer in Japan. The number of the population of Japanese Christians is about 1 percent of the Population. Endo's theme for his works was to depict Christianity for Japanese people to understand easily. Endo often wrote novels based on Japanese history. One of Endo's works, *The Samurai*, which was published in 1980, is also written based on history. In the *Samurai*, Endo wrote about the Keicho-era embassy to Europe.

Endo is not only author who wrote a novel about the Keicho-era embassy. The reason why Endo wrote a novel based on the embassy is because the Keicho-era embassy had a strong connection with Christianity. Kon Toko, who was a Japanese author and a Buddhist monk, also wrote a novel based on the historical events of the embassy. The title of the novel is *Hazekura*, and it was serialized in a magazine, *Chuokoron* in 1959. So, two novelists from different backgrounds wrote about the same historical events. Although Kon was familiar to Christianity, he was a Buddhist monk. Then why did Kon write a novel based on the Keicho-era embassy?

The Keicho-era embassy was sent at the begging of seventeenth century by Date Masamune who was the feudal lord of Sendai. The embassy's objectives were to open trade with Mexico and ask for more Franciscan missionaries to preach Christianity in northern Japan. It is said that while Tokugawa separated trade and religion, and banned Christian missionary work in Japan, Date tried to combine trade and missionary work to establish trade relations with Mexico.

The Keicho-era embassy first went to North America, then went to Mexico and after that, they had to go to Spain, Italy and Vatican to get a response for opening trade with Mexico. Unfortunately, although it took 7 years for the embassy's mission, it ended without success. When the embassy came back to Japan, Christianity was strictly banned by the shogunate. The leader of the embassy, Hasekura Tsunenaga was baptized during the journey. Some researchers say that he was in an unfortunate situation after his return to Japan because of his baptism. After their return, the embassy and Hasekura were forgotten until Meiji period.

As far as I could find, there are eight fictional works that is modeled after the Keicho-era embassy such as novels, plays, and musicals. I would like to raise a question that is how Christianity is received in novels in Japan where Christians are few.

In previous researches, the Keicho-era embassy was studied by a historical point of view. However, it has not been studied on the fictional works about the embassy. There is no previous research about *Hazekura*⁽¹⁾. Only *The Samurai* by Endo Shusaku has been studied. It has been said that *The Samurai* is a novel that expresses how Endo had achieved his Christian Faith as a Japanese Christian⁽²⁾. Researchers also insisted that Endo depicted the Christianity in a way that Japanese people easily understand in the work⁽³⁾, but it has not mentioned about the relevance to other fictional works based on the Keicho-era embassy.

However, by considering why the Keicho-era embassy was made into fictional works, you can examine why there are novels mentioning Christianity in non-Christian country, Japan. Furthermore, this will be a key to understand reception of Christianity in Japan.

In order to understand why Kon wrote a novel about the Keicho-era embassy, I will clarify how Kon wrote about the experience of the Keicho-era embassy in his work, *Hasekura*, by comparing it to *The Samurai*. As I said before, the two novels, *Hazekura* and *The Samurai*, have different backgrounds, but they also share a common point. In each one of the novels, there is a character that does not fit the cultural dichotomy between Japan and Europe. I will focus on these characters to explore the difference between the two novels.

In this paper, I will first explain about the life and works of Endo Shusaku. Then, I will mention about Kon Toko. After that, I will explain about, *The Samurai* and *Hazekura* to compare the characters they have in common in order to examine how Christianity was received in Japan.

1 Endo Shusaku

Endo Shusaku is well known as a Catholic author. He was born in 1923. He was baptized when he was a child because of an influence of his mother. Some of the most famous works are *The Poison and the Sea* in 1957, *Silence* in 1966, and *Deep River* in 1993. His career started with a theme to depict Japanese mind of difficulty to believe in Christianity because Endo also was the one who felt the difficulty to have Christian faith⁽⁴⁾. Endo searched his own way to believe in Christianity by writing novels. Later on, his theme changed to how to interpret Christianity to Japanese culture shown in *Silence*⁽⁵⁾. *The Samurai* is also written by this theme.

2 Kon Toko

Kon Toko, who wrote *Hazekura*, was born in 1898. He started writing in his late teenage years and collaborated in the production of the magazine, *Shinshicho* 6th along with Kawabata Yasunari, and *Bungeishunju* with Kikuchi Kan. However, he left the literary circles and then became a Buddhist monk at the age of 33. Despite leaving the literary world, he kept writing and he won the Naoki prize for *Ogin-sama* in 1956. None of his works is translated into foreign language, but he was a rigid author. His activity was not only writing novels but also giving advice to magazine readers in publications such as the Japanese magazine *Playboy*.

3 *The Samurai*

The main character in *The Samurai* is Hasekura Tsunenaga. The novel's main plot is the conversion story of Hasekura. Previous research has looked at a fictional character, a Japanese renegade monk, who influences Hasekura to have Christian faith⁽⁶⁾. I will focus on the renegade monk in this section. This character is Japanese but used to be a Christian monk who could not accept the sort of Christianity that other European priests preached. According to the novel, it was "impossible" for the renegade monk to "feel close" to the priests because he found out that priests in Mexico "pretend that nothing ever happened" there. Even Indians were persecuted by the foreigners and lost their home, Priests "feign ignorance, and seemingly sincere tones preach God's mercy and God's love" and it "disgusted" the renegade monk. So he left the Church and went to live with Indians in Mexico⁽⁷⁾.

The renegade monk has a different understanding of Christianity. Although he left the Church, he identifies as a Christian. According to him, he believes in his Jesus. The Jesus he believes in is not found in palatial cathedrals, but in life with ordinary Indians. Sympathizing with the Indians' tragedy and living among them is his way of following his new faith. In other words, it means one must live like Jesus and by doing so, the renegade monk is able to feel Jesus's love. Furthermore, it is possible for the renegade monk to sympathize with the Indians because he has also lost his home——Japan.

The important point I would like to emphasize is that though the renegade monk does not fit in with the Catholic Church and he does not go back to Japan either. He says that this does not mean that he abandoned his Christian faith. Furthermore, he also identifies as a Japanese. Although the renegade monk keeps a distance from Europe and Japan, he still has his Christian faith that he got from European culture, and he also has a Japanese identity. The renegade monk is in an intermediate position.

In *The Samurai*, the renegade monk, the character that does not fit the cultural dichotomy between Japan and Europe, finds hope by having a new faith. And the faith is achieved by having two identities——Christian and Japanese.

4 Haze-kura

According to its plot, *Haze-kura* can be separated into two parts. The first part takes place mostly on the ship to Mexico. The latter part describes what happened after the embassy arrived in Mexico, and it focused on the interaction between some samurai and women in Spain and Italy where samurai visited. In this section, I will discuss about the latter part.

The main character in the latter part is Sato Daishiro. Sato is the character that corresponds to the renegade monk in *The Samurai*. Sato joined the Keicho-era embassy because his lord, Imaizumi Sakan was a member of the embassy. However, during the journey, Imaizumi is killed by Spanish men because he had a relationship with a Spanish woman. After Imaizumi's death, Sato starts to losing enthusiasm for continuing the journey as a member of the embassy. When the embassy visits Italy, Sato meets a woman named Rosalina, a prostitute born in Alexandria. She has many customers in Italy. One particular cardinal was Rosalina's customer, too. When the cardinal finds out that Sato and Rosalina are in a relationship, the cardinal was jealous that he tried to assassinate Sato. Finally, Sato decides to leave the embassy and go to Alexandria with Rosalina.

As the story goes on, Sato becomes a person that does not fit a cultural dichotomy between Japan and Europe. According to the novel, when he leaves Europe, Sato abandons his Japanese identity. Sato's leave to Alexandria is described as a new start.

This plot shows you that European man threatens Japanese man once Japanese has a relationship with women in Europe. This means that Imaizumi is allowed to be in Europe as long as he remains a tourist, but he is not allowed to live in Europe. Moreover, I would like to point out that the one who tried to murder Sato was a cardinal. Sato is rejected by European culture and Christianity. There is no religious way to make the situation better. In *Haze-kura*, abandoning the Japanese identity and transfer to new place is an only way to have a hope of living.

Conclusion

To summarize this paper, by comparing the two novels, *The Samurai* and *Haze-kura*, you can see the difference between the characters and their cultural dichotomy. The difference is the renegade monk in *The Samurai* combines two identities, Japanese and Christian, but Sato in *Haze-kura* abandons his identity so that he can have a new hope of living. Endo tried to adapt Christianity to appeal to Japanese way of thinking

because that was the theme of his work. On the other hand, Kon did not think of adapting Christianity to suit Japanese identity in *Hazekura*.

NOTES

- (1) Some researchers such as Ito Tsuyoshi has mentioned about *Hazekura* in the article(「今東光が書いた切支丹小説 河内キリシタンへの関心」(『大阪春秋』第169号、新風書房、2018年、80～81頁), but it remains a introduction of *Hazekura*, not an analysis of the work.
- (2) For example. Kasai Akifu insists that Endo wrote his process to achieve his Christian faith in *The Samurai* (笠井秋生『遠藤周作論』(双文社出版、1987年)).
- (3) Endo Shusaku had a theme to depict Christianity for Japanese people to easily understand since he wrote *Silence*. Sato Yasumasa says that *The Samurai* shares the same theme as *Silence* (遠藤周作・佐藤泰正『人生の同伴者』(講談社文芸文庫、2006年)). Kawashima Hidekazu also insists that that *The Samurai* takes over the theme from *Silence* (川島秀一「回帰への旅程」『遠藤周作〈和解〉の物語 増補改訂版』(和泉書院、2016年)).
- (4) 遠藤周作「有色人種と白色人種」『遠藤周作文学全集』第十二巻、(新潮社、2000年、209頁)
- (5) 遠藤周作「あとがき」(「解題」『遠藤周作文学全集』第十一巻(新潮社、2000年、354頁))
- (6) 李英和「遠藤周作『侍』論:日本人元修道士配置の戦略」(「文学研究論集」2007年、1～21頁)
- (7) Endo Shusaku, *The Samurai*, PETER OWEN PUBLISHERS, 2010ed, p. 120.

Bibliographical reference

Endo Shusaku (2010ed.). *The Samurai*. London: PETER OWEN PUBLISHERS.

伊藤健「今東光が書いた切支丹小説 河内キリシタンへの関心」(『大阪春秋』第169号、新風書房、2018年、80～81頁)

遠藤周作「侍」『遠藤周作文学全集』第三巻(新潮社、1999年)

____、「解題」『遠藤周作文学全集』第十一巻(新潮社、2000年)

____、「有色人種と白色人種」『遠藤周作文学全集』第十二巻(新潮社、2000年)

____、「年譜・著作目録」『遠藤周作文学全集』第十五巻(新潮社、2000年)

遠藤周作・佐藤泰正『人生の同伴者』(講談社文芸文庫、2006年)

笠井秋生『遠藤周作論』(双文社出版、1987年)

川島秀一「回帰への旅程」『遠藤周作〈和解〉の物語 増補改訂版』(和泉書院、2016年)

今東光『はぜくら』(中央公論社、1961年)

漢幸雄「今東光作品の系譜 その創作活動の軌跡(連載第一回)」(『彗相』創刊号第一巻第一号、2010年)

李英和「遠藤周作『侍』論:日本人元修道士配置の戦略」(『文学研究論集』2007年、1～21頁)

『仙台市史第28回配本全32巻特別編8 慶長遣欧使節』(編集仙台市史編さん委員会、仙台市、2000年)

矢野隆司「今東光:関西学院と東光の生涯」(『関西学院史紀要』11、2005年、1～87頁)

＊ 本稿を執筆するにあたり、八尾市立八尾図書館今東光資料館に、資料提供はじめ、多大なご協力を賜りました。御礼申し上げます。

モーリス・マールリンクの日本での受容 —近代劇を中心に—

奥西 英佐子
ルーヴェン大学日本学科 修士課程

[Abstract]

Theater plays written by Maurice Maeterlinck were got interest in Japan around the late 19th century to early 20th century, the Meiji and Tisho period. There are various translations, reviews and articles about a Belgium symbolist, Maeterlinck at that time. However there is only a tale of *L'oiseau Bleu* remains nowadays. Therefore the first question is why Maeterlinck was got that huge attention in Japan. Then how the Japanese people at that period received his works and understood it. In this paper, I would like to answer these questions by intercultural study of translation and theatre plays. Especially the theater plays *La Mort de Tintagiles* and *Monna Vanna* are the both plays which were translated often and performed in Kindaigeki movement so that by comparing the reviews, it will be possible to found out how the audience in that period watched and understood Maeterlinck.

At first this paper focus on the reception of Maurice Maeterlinck. From a chronological table of translation reveal the period when he was more popular and the tendency that what kind of works was chosen by Japanese audience. Then to explain about essence of theory of Maeterlinck's works, analyzing theater plays and essays from the begging to figure it out. Finally comparing the theater plays, *La Mort de Tintagiles* and *Monna Vanna* to analyze how Maeterlinck was adapted in Japan.

[論文]

はじめに

本論文は、日本の近代、明治、大正期における、ベルギーの詩人であり劇作家であったモーリス・マールリンク(Maurice Maeterlinck 1862-1949)(注 1)の受容について、主に劇作品に注目し、インターカルチャー研究を行うものである。

『青い鳥』*L'Oiseau Bleu* の作者として、現在でも新訳が出版され続けているモーリス・マールリンクだが、彼の日本での受容は明治期に始まっていた。明治維新後、急速に「近代化」を進めていた明治、大正期の日本において、西洋文化の研究、翻訳は大きな位置をしめていた。マールリンクの作品もその流れの中で象徴主義の詩人や劇作家として取り上げられていたのである。中でも新劇運動の中での彼の作品の受容は、当時の日本においてマールリンクがどのように受けとめられていたか知る上で重要だと考える。先行研究、資料を基にマールリンクの演劇作品を中心に、明治大正期の日本において彼の作品がどのように受容され、評価されていたかを見ていきたい。

マールリンクの日本での影響に関しては、日本文学の観点からいくつかの先行研究がでている。受容史に関しては菊田茂男氏の日本近代文学における比較研究がある。また演劇の分野では昨年の復曲もあり、高浜虚子の翻案能である『鐵門』に関する研究がみられる。詩の分野に関しては、白樺派の詩人への影響を研究した出口馨の論文、博士論文もマールリンクの作品がどのように日本の文壇に影響を及ぼしたか知ることが出来る。また、KULeuven のウィリー・ヴァンデワラ氏による『青い鳥』を中心とした受容研究も膨大な資料を元に緻密な研究が行われており、日本学の視点から「青い

鳥」が与えたイメージの広がりを見ることができる。

当時の翻訳資料に関しては、1999年にナダ出版センターから出た『明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》49 メーテルリンク集』などから彼の翻訳作品を俯瞰することが可能である。また読売新聞、朝日新聞のアーカイブからもメーテルリンクの当時の紹介のされ方を垣間見ることができるのではないかと考える。

それらの資料をもとにまず、メーテルリンクが当時の日本でどのように紹介され翻訳されていたのか、さらにその受容の傾向について分析したいと思う。さらにその中での演劇作品がどのように上演されそして評価されていたのかを見ることで当時の日本人の観客が彼の戯曲をどのように理解していたのか探りたいと考えている。

第一章

まず、モーリス・メーテルリンクについて簡単に紹介したい。モーリス・メーテルリンクは1862年にベルギーのヘント Gent の街で生まれた。ブルジョワの家で育った彼は、フランス語の教育を受け、大学では法学部に進んでいる。しかし、同時に学生時代にグレゴワール・ル・ロワ Grégoire Le Roy(注2)、シャルル・ヴァン・レルベルグ Charles Van Lerberghe(注3)に出会い、雑誌へ詩を投稿するようになる。その後大学を卒業後、パリでのマラルメ Stéphane Mallarmé やヴィリエ・ド・リラダン Villiers de l'Isle-Adam との交流を通し、本格的に詩人、劇作家として文筆活動を始め、「若きベルギー」*La Jeune Belgique* というベルギーの文学雑誌の同人となるなど、象徴主義の芸術運動の中に入っていく(注4)。1886年に『温室』*Serres Chaudes* という詩集を自費出版、同年に執筆した戯曲『マレーヌ姫』*La Princesse Maleine* がオクターブ・ミラボー Octave Mirbeau の目にとまり、一躍文壇の仲間入りをした。1942年になくなるまでに3つの詩集と26の戯曲、18の随筆集を出版している。

モーリス・メーテルリンクの名前が日本で最初に紹介されたのは、明治28年(1895年)だと言われている(注5)。上田敏は明治20年代後半からモーパッサンやゴーゴリなどの西洋文学の翻訳を始め、またフランス象徴詩の紹介に力をいれていた。その上田敏が微幽子という名で『帝国文学』に載せた「白耳義文学」という記事に、メーテルリンクを含めた、*La Jeune Belgique* の若い文人達の紹介と活動などが載せられていたのだ(注6)。菊田(1974)の研究からも、上田敏がメーテルリンクに深い関心を寄せ、若い文人たちである武者小路実篤や志賀直哉に紹介し、講演会や多くの評論で彼について言及するなど、日本の文壇にメーテルリンクの名声を広げる際に大きな役割を担っていたことは明らかである(注7)。この上田敏の紹介を皮切りに、メーテルリンクの翻訳、日本での受容が始まっていく。

では次にメーテルリンクの作品が明治大正期にどのように受容されていたのか、翻訳作品と新聞での記事からその傾向を見ていきたい。メーテルリンク作品の翻訳自体は、上田敏の紹介から7年後の明治35年(1902)年から始まった。最も早い翻訳は1月に大塚楠緒子という女流作家がタンタジールの死の第3幕までを訳し女学世界に乗せたものである。大空社の翻訳年表を元に、1902年から大正の終わり、までの翻訳数の表を作成した(表1)。同じ訳者による作品の再掲や単行本化もメーテルリンクの受容の在り方の一つとみることができるので、翻訳数にこれ、また梗概も一部翻訳の抜粋があるものも多く数にいられている。この表をみると徐々に翻訳作品数は増え、1913年にそのピークを見ることができる時系列でみると、1902年移行、10年間で毎年平均5作品の翻訳が行われており、1902年以前に出版された戯曲は全て翻訳されている。1913年、1914年には年に最も多く20作品近い翻訳が発表されている。この急激な翻訳数の増加は1911年のメーテルリンクのノーベル賞受賞による話題性も加味されていると考えることもできるだろう。その後メーテルリンクの作品は1920年を境に『青い鳥』やその続編である『婚約者』の翻訳を除くと全集や演劇集の収録が主になり、新しい作品が出版され続けているにもかかわらず翻訳数自体が減少し、1925年移行の作品の翻訳はほとんど訳されていない。明治後期から翻訳が始まり大正期の始めをピークに昭和に入ると『青い鳥』、それも子供のための童話として紹介されるものだけが残るようになっていく。

さらに新聞記事からも彼の受容の様子を伺い知ることができる。翻訳と同様、1902年から朝日新聞、読売新聞ともに、文化欄をメインに広告や作品紹介が載せられるようになる。また、他の演劇評論家

の批評の例えとしての名前が引き合いに出されたり(注 8)、ノーベル賞受賞やマーテルリンクの妻ジョルジュ・ルブラン *Georgette Leblanc* がアメリカへ巡業にわたり、船で毛皮のコート犬に咬まれたというような記事までが載せられたりしており(注 9)、マーテルリンクの名が一般にも認知されていたことができるだろう。

記事の件数では、朝日新聞では 1902 年から年に 1 件、2 件だったものが大正 2 年(1913 年)に 16 件、大正 3 年(1914 年)に 14 件と最も多く、読売新聞においても 1912 年に 17 件、1913 年には 30 件に上る記事や広告が載せられており、大正の初めにマーテルリンクに対する関心が最も高かった事が分かる。また、大正 9 年(1920 年)前後からは『青い鳥』に関する記事が増え、翻訳権を巡る問題や、児童劇団に関する話題などになっていく。このように新聞の記事からも、明治末から大正の初めには様々な作品や演劇について話題にされていたマーテルリンクの名前も大正の中頃から徐々に『青い鳥』の作者としてのみ残っていく過程を見ることができるだろう。

この当時の日本は、明治維新を経て積極的に西洋文化を取り入れ政治、教育面を始め文化や生活をいち早く近代化しようと国が動いていた時期である。大学での外国語教育も始まり、明治 20 年代から第一世代による積極的かつ本格的な文学作品の翻訳作業が進められていた(注 10)。また、海外演劇や文学作品論などの研究も始まり、象徴主義や浪漫主義といった文芸活動に高い関心があったことも分かる。マーテルリンクはその中でも話題の劇作家の一人として大正の初め頃をピークに、文壇を始めとし日本人の注目と関心を集めていたのである。

第二章

マーテルリンクの作品の中でももっとも多いのは戯曲である。そのため翻訳された作品のほとんども戯曲であり、この章ではマーテルリンクの戯曲を書かれた時期ごとに分け翻訳された数と照らし合わせることで、どのような作品が好まれていたのか考察したいと思う。

明治 35 年(1902 年)から大正 15 年(1926 年)までに翻訳された中で、もっとも多いのは『青い鳥』(1908)であるが、それについて『モンナ・ヴァンナ』*Monna Vanna*(1902)が多く、森鷗外を始め長谷川天溪、岩野泡鳴などによって翻訳されている。また、『群盲』*Les Aveugles*(1890)、『ペレアスとメリザンド』*Pelléas et Mélisande*(1892)、『室内』*Intérieur*(1894)、『タンタジールの死』*La Morte de Tintagiles*(1894)がそれぞれ 9 度訳されており、『侵入者』*L'Intruse*(1890)、『アグラベヌとセリセット』*Aglavaine et Sélysette*(1896)という作品が続いている。一方で、1919 年に書かれた『聖アントワヌの奇蹟』*Le Miracle de Saint Antoine*、『マグダラのマリア』*Marie-Magdeleine*(1913)は 4 度、『ジョアゼル』*Joyzelle*(1903)は一度のみである。

代表作とされる、『マレーヌ姫』、『ペレアスとメリザンド』は神秘主義的な色合いの濃いまた中世の雰囲気漂った作品になっている(注 11)。『群盲』、『室内』、『侵入者』は死の三部作というように表現されることもあるが、1890 年代後半に書かれた作品である。『タンタジールの死』、『アグラベヌとセリセット』は『室内』と同じ、マリオネットのための作品集に収録されていた作品であり、それぞれ死を運命づけられた姉弟や恋人の悲劇を描いている。このように、マーテルリンクの作品の中でも特に初期の作品が多数訳されていることが分かる。一方で、『聖アントワヌの奇蹟』は森鷗外によって訳されているが、1903 年から 1919 年の間に書かれたとされているこの作品は、聖書の逸話をもとに書かれたものであり、『マグダラのマリア』も同様である。このことから、マーテルリンクの特に初期の作品には高い関心を持たれていたことや、その中でも「死」を題材にしている戯曲の翻訳の数や再訳の数は看過できないと考えられるとともに、『青い鳥』をのぞいて『モンナ・ヴァンナ』以降の作品の翻訳は減少していることが分かる。

避けることの出来ない運命、特に万人に訪れる「死」というのはマーテルリンクの文学作品の主題であった。マーテルリンクは不可視である見えない「死」を伝えるために、直接的に「死」を示すのではなく、陰鬱な自然の風景描写、沈黙や観客に想像をさせるための会話を用いることで、象徴的に死の存在を登場させるという方法をとっている。

Maeterlinck uses the characters' responses to sounds/silences (footsteps, rustling of leaves, cessation of nightingales' singing, the sharpening of a scythe, etc.), temperature changes, the difficulty of closing a door, and the failing of an oil lamp as indices of the presence of Death as a (super)natural force rather than using an actor to embody Death as a character. Every change in circumstances which is read as a dark omen by the Grandfather (注12)。

また彼は『貧者の宝』*Le Trésor des Humbles* という随筆の中で「日常の悲劇」*La tragique quotidien* について論じている。決闘や戦争といったような劇的な場面で起こる「死」ではなく、ふいに日常の延長で訪れる「死」を感じ取ることができる者こそ人間的な深い真理を理解するのだというのが彼の理論であり、それを象徴や、神秘的な演出方法で表現しようとした(注13)。『室内』を始めとするメーテルリンクの1890年代の作品は、特にこのような特徴を顕著に表している。一方で随筆集『智慧と運命』*La Sagesse et la Destinée*(1898)の中では人智を超えた魂の在り方を悩む作家の様子がみられるが、この頃から作品にそれ以前とは違う明るい現実的な世界観に変化している(注14)。特に『モンナ・ヴァンナ』の中では、今までの暗い死を暗示するような特徴はみられない。

このように、メーテルリンクの作品は、運命と「死」を主題におきながらも作品の表現が変化していることが分かる。次の章では、特に反響が大きかった『タンタジールの死』と『モンナ・ヴァンナ』の二つの当時の日本での上演の様子を比べ、さらに作品の特徴を考えていきたいと思う。

第三章

メーテルリンクの翻訳が盛んになった、大正の初期は同時に日本での近代劇の始まりの時期でもあった。川上音二郎が筆頭に新派による翻案劇、小山内薫の率いる自由劇場や島村抱月の芸術座が新劇運動を起こし、近代劇運動が活発化していた(注15)。その中でメーテルリンクの作品も何度か上演されている。資料は多くは残っていないが、いくつかの資料から演劇が日本でどのように演じられようとしていたのか考察してみたい。

メーテルリンクの戯曲はまず、明治39年(1906年)に川上音二郎率いる一座によって、明治座で「正劇」の名のもとで『モンナ・ヴァンナ』が上演された。続いて1911年の自由劇場第四回試演では森鷗外の訳による『奇蹟(聖アントニウスの奇蹟)』、1912年に小山内薫監修のもと第六回試演として『タンタジールの死』が、翌年には島村抱月の芸術座によって『モンナ・ヴァンナ』と『室内』を10日間にわたって上演されたことが分かっている(注16)。

第三章一節

まずは『タンタジールの死』について見てみたい。この作品は最も早く訳された作品の一つであり、小川未明も訳しているが、前章でも述べたように、『タンタジールの死』は1894年に出版された『3つのマリオネットのための作品』と題された本に収録されている。物語は、離島に連れ戻された弟タンタジール Tintagiles と島に残っていた姉の会話から始まる。会話から徐々にこの二人は城の主である祖母の影で、何も暗い陰鬱な城に住んでいるということが分かる。城には他に男児は生き残っておらず姉のイグレース Ygraine とベランジェール Bellangère、そして老僕のアグロヴァール Aglovale が、末の弟を死から守ろうと抵抗するも、最終幕では鉄の門の奥に連れて行かれたタンタジールを取り戻すことができないという悲劇である。なぜ、どうして姉妹がこの島にいるのか、タンタジールはなぜ死なないといけないのか、いっさい明かされないまま、必死の抵抗も空しく無慈悲に幼い子供が連れ去られるというだけでなく、最終幕でのタンタジールとイグレースの必死の会話も場面の緊迫感を高め、運命に抵抗できない人間の無力さを観客にひしひしと伝えるものになっている(注17)。

小山内薫が率いる自由劇場には市川左団次を始めとする歌舞伎出身の役者が属しており、明治42年(1909年)から翻訳劇の上演を積極的に行い日本の演劇を刷新しようとしていた(注18)。全9回の試演を行っており、小山内薫の洋行後はモスクワ芸術座に影響を受け、チェーホフなどを上演しているが、その直前にメーテルリンクの『タンタジールの死』が演じられていた。役者は市川左団次がアグロヴァールを演じ、唯一ベランジェールを女優が演じている(注19)。上演に関しては、役者の技量が足り

ないという評価もあったが、島崎藤村らが鉄の門の存在に関して、マーテルリンクの象徴的な演出に感銘を受けたという風にも述べており(注 20)、また宮沢賢治や萩原朔太郎も作品の中で死の鉄の門について述べており、日本の文壇にも深い印象を残したと言える。

さらに、この演劇を観覧した高浜虚子による発言も一つの当時の評価として加味することが可能である。高浜虚子は、この作品は能に翻案した方が原作の本質を伝えることができるのではないかと考え、1915 年に『鐵門』(後に善光寺詣でに改題)という新作能を作成した。幼少期から能にしたしんでいた虚子にとって自然なことだったのではないかと山下(1990)は分析する。昨年の京都観世によって復曲された、能『鐵門』だが、高浜虚子ゆかりの演者達とともに節潰けされ、1916 年の鎌倉能楽堂での際に披露された。物語の筋は弟から姫に変わっているがそれは前年になくした高浜虚子の娘のことがあるのではないかと西野(2017)は述べている。しかし、タイトルにも明記されているように、生と死を分ける鉄の門が作品のなかで重要な位置を占めており、また会話による場面の暗示や、観客に五感を用いた想像を促す点、これは能の謡による場面説明とも類似しているといえる。この点でも高浜虚子がマーテルリンク作品のそういった演出を理解し再現したと言えるのではないだろうか。

第三章二節

一方『モンナ・ヴァンナ』はパリでの出版の翌年に森鷗外に紹介された後に、立て続けに翻訳されている。鷗外はドイツ留学の際に実際に観劇する機会を得、その時の印象とともにマーテルリンクについて講演会で紹介していた。その中で鷗外はモンナ・ヴァンナについて運命を明視し、運命を切り開く女性というように表現し、マーテルリンクの『智慧と運命』で論じられていた理論を表現する作品だと述べる(注 21)。

この物語はイタリアのピサを舞台にしたものである。15 世紀末のピサ共和国、フィレンツェ共和国の戦いの中で、国を救うためにピサの大将、ギドオ Guido の妻であるモンナ・ヴァンナ Monna Vanna が人質として一晚敵地に赴かなければいけないという条件が相手国の大将であるプリンシヴァリ Princivalli から出される。夫であるギドオは怒り、反対するがヴァンナは国を救うためならば、と“J'irais” 私は行きますと押し通す。二幕ではプリンシヴァリが実は幼い頃に会ったことがあり、その時からワナに思いを寄せていたと告白される。ワナは国に戻り身の潔白とプリンシヴァリの命乞いを頼むがギドオは聞く耳を持たない。幕はワナが復讐のためと偽り牢のカギを受け取るところで降りる。

川上音二郎もパリでその演劇を見た上で、彼はオセロの翻案で高評価を受け、この作品も上演可能だと判断し、明治 39 年(1906 年)に山岸荷葉の訳とともに、明治座で上演した(注 22)。役名は例えばワナを春那というように漢字表記にし、おおむねの筋はそのままに上演された。その前後に雑誌「歌舞伎」には写真やパリ観劇の感想なども掲載されている。しかし、評判は余り良いものではなかった。翻案劇にしなかったためか、演者の実力不足、原作の心情が表されていないという評価や、また女性からもモンナの心情が理解できないといった批判があったようである(注 23)。このように金子(1982)は、当時の日本に翻訳劇の上演がまだなじみもなく、旧劇の役者達の技量が近代劇を演じるのに不十分であったために、肝心の作品の本質であるモンナの行動力も観客に共有されなかったのではないかと

いう。さらにその 7 年後、大正 2 年(1913 年)に、『モンナ・ヴァンナ』は島村抱月の芸術座によってもう一度上演されている。松井須磨子がワナを演じ、朝日新聞にはその練習の様子が載せられている(注 24)。また小山内薫はその舞台を見た上で感想を朝日新聞に寄せている(注 25)。ここでも演者のたどたどしさ、全体の構成が引き締まっていないなどの厳しい評価もあるが、また同時に前回の上演よりも芸術性が増しているとの評価もある。

『タンタジールの死』も『モンナ・ヴァンナ』も、まだ旧劇から漸く役者が近代劇に写る過渡期に演じられていたため、役者の技量の不足を指摘されている。しかし、それ以上に『タンタジールの死』の世界観に比べて、『モンナ・ヴァンナ』の女性像に共感、理解できないという評価が目立っていた。

まとめ

以上のように、いくつかの資料を用いながら、日本におけるモーリス・マーテルリンクの受容について考察してみた。マーテルリンクの作品は陰鬱な悲劇から 1903 年あたりを境に、前向きな世界観を持つものへと変化している。日本では、明治からの翻訳の流れを受けマーテルリンクの作品も多数訳されるようになるが、彼の特に初期の演劇を中心に大正の初めに多くの関心と注目を集め受容されていたことが明らかである。『タンタジールの死』などの初期の作品が、普遍的な「死」を題材に、能に通じる会話と間、観客の想像を促すものだったのに対し『モンナ・ヴァンナ』などの作品は、運命に立ちむかう自由意志を描いており、とくに当時の日本の道德感とのすれ違いがあったと考えられる。日本ではほぼ同時期に同じような状況の劇団によって上演されたが、二つの作品の間には 8 年の差があり、その作品の方向性が変化していることが明らかになった。

明治、大正そして昭和に移行する日本社会のなかで、近代劇の運動の中で取り上げられていたマーテルリンクの演劇作品はその作風の変化とともに、子供向きの童話と変容して定着して『青い鳥』を除いて徐々に取り上げられなくなる。フランス語で書かれた作品ではあるが、ベルギー人の作家であるマーテルリンクの作品が持つ特徴は、フランス文学の受容とはまた違う側面をもっているだろう。当時の日本人の評価からみることで、再度日本での翻訳文学の意義を考えると共に、マーテルリンクの日本に与えた影響を考えていくことができらばと思う。

注

(注 1) Maeterlinck の日本語表記、発音に関してはいくつかあるが、この論文では現在ベルギー、オランダ語圏での発音「マーテルリンク」に統一する。

(注 2) ベルギーの象徴派の文筆家

(注 3) 同じく象徴派の劇詩人

(注 4) Capiteyn(2008) p.17,19

(注 5) 出口(2009)p.11

(注 6) 「白耳義の騷壇に一旗幟を樹てゝ時に隣邦仏蘭西の文界に侵畧を試むる一派あり、少白耳義 La Jeune Belgique と稱す。往年此派の驍將マアテルリンク新曲を抱きて巴里に遊ぶや、名聲漸く評家の間に喧傳し憂愁『ハムレット』の作者より深く情を寫し戀を描きては『ロオメオ』の曲をも凌くなど有りゆる賞嘆の辭を蒙りしも、一度其作の劇部に容られて場に上りしや文界の好尚にはかに改りし如く、(略)」微幽子「白耳義文学」『帝国文学』創刊号(明治 28 年 1 月 7 日)p.13、14

(注 7) 「日本の文学界への紹介と移植に積極的な役割を演じたのは上田敏であった。」菊田 1974 p.32

(注 8) 東京朝日新聞 1910 年 5 月 1 日朝刊 劇壇時言(三) 中村吉蔵 新しい演劇に関して「さしあたり、イブセン式とかショウ式とか...(中略)下つてはヒチロ式、マーテルリンク式やホフマンスタイル式も」

(注 9) 読売新聞 1912 年 4 月 13 日土曜朝刊 5 面 「青い鳥の夫人」

(注 10) 山田潤治 「明治二〇年代の翻訳と日本近代文学の《生成》」 p.20

(注 11) 塚越(1983)p.128

(注 12) Chamberlain (1997)p.27

(注 13) “On se rappellera dans Le tragique quotidien l’existence, à côté du dialogue banal,tant entre les personnages qu’entre les hommes, d’un autre dialogue, situé à un autre niveau et donnant accès à une autre signification.” Schurmans (2014)p.247

(注 14) 菊田(2003)p.32

(注 15) 溝渕 p.205

(注 16) 金子(1982)p.187

(注 17) Kwon 2011-2012 p.143

(注 18) 溝渕 p.206

- (注 19) 西野春雄「死の象徴、鉄の門」第四回復曲試演の会《鐵門》講演、2016 年 6 月 5 日配付資料参照
- (注 20) 西野(2017)p.125
- (注 21) 森鷗外「マアテルリンクの脚本」『心の花』1903 年 6 月
- (注 22, 23) 金子(1982)p.191
- (注 24) 「芸術座の舞台稽古」朝日新聞 東京朝刊 1913 年 9 月 18 日
- (注 25) 小山内薫 「モンナ、ワннаの不可思議」朝日新聞 東京朝刊 1913 年 10 月 2 日 「松井須磨子のジオワннаには匂ひ程の神秘もなかった、影ほどの不思議もなかった」

参考文献

- ・ Maeterlinck, Maurice (2015), *Trois petits drames pour marionnettes Intérieur, Alladine et Palomides, La Mort de Tintagiles* Edition établie et commentée par Fabrice van Kerckhove: Fédération wallonie-Bruxelle (original text from 1894)
- ・ Maeterlinck, Maurice Monna Vanna
- ・ Maeterlinck, Maurice (1908), *Le Trésor des Humbles*, Société du Mercure de France

- ・ 小山内薫訳「タンタジイルの死」自由劇場第六回試演用臺帳『三田文学』(1912 年 4 月 1 日)
- ・ 微幽子「白耳義文学」『帝国文学』創刊号(明治 28 年 1 月 7 日)

- ・ Capiteyn, André (2008) *Maeterlinck : un prix Nobel*, Stad Gent,:Snoeck
- ・ Edwards, Gwynne Neophilogus (1984)Valle-Inclan and the new art of the theater
- ・ Franc, Chamberlain (1997) Presenting the Unrepresentable: Maeterlinck's L'Intruse and the Symbolist Drama , *Contemporary Theatre Review*, 6:4, 25-36
- ・ Enache, Eugenia Le théâtre de Maurice Maeterlinck. Sous le signe de l'absence Studia Universitatis Petru Maior - Philologia, (2012), 13, pp.201-207
- ・ Evans, Calvin (1961)*Maeterlinck and the quest for a mystic tragedy of the twentieth century Modern Drama*, 4, Number 1, pp. 54-59. Published by University of Toronto Press
- ・ Meerzon, Yana (2008) *Actor-puppet-video projection-spectatorfantasmagorie technologique: Towards a theory for a new theatre genre*, Semiotica (168) pp.203-226
- ・ Kwon, Hyun-Jung (2011-2012) *Maeterlinck et le theater pour marionnettes: Alladine et Palomides, Intérieur, La Mort de Tintagiles*, Ninetheenth-century French Studies, Vol.40, No. 1&2, pp.127-150 University of Nebraska press
- ・ Fabrice SCHURMANS (2014) *Le tragique quotidien de Maeterlinck: de l'écriture théâtrale à la réflexion théorique*, Université de Coimbra
- ・ Williams, Christine Sustek (2015) *Intérieur by Maurice Maeterlinck* (review) *Theatre Journal*, Volume 67, Number 2, pp. 323-324 Published by Johns Hopkins University Press
- ・ Keene, Donald (1984) *Dawn to the west, Japanese literature of the Modern Era*, 2 vols, Holt, Rineheart and Winston, New York

- ・ 「メーテルリンクの受容(白鳥と天溪の周囲)」『明治翻訳文学全集メーテルリンク集』(大空社、1999 年)
- ・ 井上健 編『翻訳文学の視界-近現代日本文化の変容と翻訳-』(思文閣出版、2012 年)
- ・ 塚越敦子「メーテルリンクの神秘的象徴性—初期劇作品と『貧者の宝』」(『武蔵大学人文学会雑誌』、15 (1)、p.136-111、1983 年 10 月)
- ・ 塚越敦子「劇詩人メーテルリンクの原点-『メレーヌ姫』を中心に-」(『慶應義塾大学法学部法学会 教養論叢』93、p.134-110、1993 年 3 月)
- ・ 塚越敦子「戯曲集の《序文》解題:メーテルリンクの演劇理論について」(『慶應義塾大学日吉紀要、フランス語フランス文学』36、p.35-53、2003 年 3 月)

- ・宮内淳子「写実への抵抗—メーテルリンク「タンタジールの死」上演をめぐって—」(『國學院雑誌』105(11)、2004年11月)
- ・山下真由美「高浜虚子の新作能とメーテルリンク」(恒文社、『比較文学研究』(57)、p.206-215、1990年06月)
- ・菊田茂男「日本近代文芸におけるメーテルリンクの受容と展開・序説」(『宮城大学院女子大学大学院 人文学会誌』(4)、31-52、2003年3月)
- ・菊田茂男「上田敏とメーテルリンク」(『日本文芸研究会文芸研究』(79)p.30-39、1975年5月)
- ・出口馨「メーテルリンクと日本近代詩人の比較文学研究：北原白秋と同時代を中心として」(『大阪大学 文学研究科 文化表現論専攻 博士論文』甲第13099号、2009年3月24日)
- ・金子幸代「メーテルリンク受容をめぐって-鷗外における「運命」-1-」(『おうふう 言語と文芸』(93),p.119-138、1982年7月)
- ・溝渕園子「小山内薫の自由劇場-「模倣」と「創作」の間で-」(『近代文学試論』,(50),p.205-p.213、2012年12月1日)

図表

表1 翻訳年表

	翻訳作品数		翻訳作品数
明治35年	3	大正2年	29
明治36年	7	大正3年	18
明治37年	2	大正4年	4
明治38年	2	大正5年	4
明治39年	8	大正6年	5
明治40年	1	大正7年	4
明治41年	6	大正8年	8
明治42年	5	大正9年	7
明治43年	9	大正10年	5
明治44年	10	大正11年	5
明治45年	8	大正12年	5
大正元年	6	大正13年	4

クリストファー・ドレッサーのデザインと第二回ロンドン万博

西垣 江利子

関西大学大学院文学研究科 博士課程前期課程

[Abstract]

After Japan abandoned its long-term seclusion in the mid-nineteenth century and inaugurated contact with the West, its aesthetics and design elements were enthusiastically accepted by Western artists and designers. This phenomenon, known as Japonism, can be seen in Victorian England (1837-1901), where the nation's first comprehensive Japanese collection was shown in the London International Exhibition of 1862.

However, it has yet to be shown what exactly was displayed in the Japan Court of the Exhibition. It also remains to be elucidated what or whose work Victorian English artists and designers might have been exposed to, or what Japanese artistic elements were adopted by them.

For a better understanding of Victorian artists' perceptions and interpretation of Japanese aesthetics, this paper identifies some of the contents of the Japanese collection from the Exhibition. The Japan Court of the Exhibition was organized by Rutherford Alcock (1809—1897), the first British Ambassador to Japan. He formed a collection of more than 600 articles in Japan for the Japanese section. Based on these findings, the paper explores cases of designs by Christopher Dresser (1834—1904), who was one of the most prolific designers in the Victorian era. Dresser visited the Japanese section to make about 80 sketches and purchased a selection of Japanese art from the collection after the Exhibition. Taking this opportunity, he became involved in Japanese art and introduced its traditional ornaments into his industrial designs licensed for manufacturers. This thesis therefore demonstrates how the Alcock Collection inspired the art industry in Victorian England.

[論文]

はじめに

現在「ジャポニスム」として知られている 19 世紀後半に日本の美術作品や工芸品が西欧美術界に引き起こした日本趣味は、ヨーロッパや北米の広い範囲で、絵画、版画、彫刻、工芸、建築、写真など、あらゆるジャンルに及ぶものであった(注 1)。ヴィクトリア朝のイギリスでも、1862 年 5 月から半年間にわたって開催された第二回ロンドン万博において、イギリス国内では初となる大規模で網羅的な日本の美術品や工芸品の展示が行われた。機械による大量生産が加速する一方で、デザイン面ではヨーロッパ近隣諸国と比べて立ち遅れていたイギリスは、1830 年代より政府主導のもとで産業デザインの育成のためにデザイン教育の充実と産業見本市の開催に取り組んでおり、その機運の中にあったイギリスの芸術家や製造業者らは、博覧会という大規模なイベントをきっかけとして、革新的なデザインの着想を日本の美術品や工芸品に求めはじめたのである。

クリストファー・ドレッサー (Christopher Dresser, 1834—1904) は、19 世紀後半のイギリスで活躍したデザイナーである。ロンドンの官立デザイン学校 (School of Design) を卒業後、植物学の講師として母校に勤務した。デザイナーとしてキャリアをスタートさせてからは、陶磁器、ガラス・金属器、

家具、壁紙などの、生活空間を飾るあらゆる製品のデザインを手がけ、国内外の製造業者に提供された。他国に先駆けて産業革命を成し遂げたイギリスにおいて近代化の重要性を理解し、機械による生産に適合したデザインを生み出すための機能性や素材の選択を追求したことから、ヴィダー・ハーレンは、ドレッサーをヨーロッパで最初の工業デザイナーと位置付けている(注 2)。ドレッサーは、万博会期中に日本部門を訪れ、日本部門の代表者であったラザフォード・オールコック (Rutherford Alcock, 1809—1897) の許可を得て、展示物のうち約 80 点をスケッチし、万博終了後には出品物の一部を購入している。この万博を契機として、その後の彼の著述やデザインには、日本に関するものが多くみられるようになる。

本稿では、ヴィクトリア朝イギリスにおけるジャポニズムの一側面を明らかにするために、第二回ロンドン万博日本部門に展示された品とドレッサーのデザインに着目する。まず第 1 章では第二回ロンドン万博の日本部門とその展示物について述べ、イギリスにおける 1862 年の万博の位置付けと、ドレッサーのデザインソースになったと考えられる展示物について検討する。第 2 章ではドレッサーのデザインにみられる日本の美術的要素の翻案について、具体的な作例を挙げながら考察する。

1 オールコックと 1862 年第二回ロンドン万国博覧会

オールコックは、日本の開国期(注 3)にあたる 1859 年に初代の英国公使として横浜に赴任し、1862 年の第二回ロンドン万博に際しては本国からの命を受けて、日本部門に展示するための出品物を蒐集・選定した人物である(注 4)。第二回ロンドン万博では、万博史上初めて「日本部門」として独立したエリアが設置され、オールコックが蒐集した 600 点余りの様々な日本の出品物が展示された。彼自身日本の美術工芸の愛好家でもあり、日本の物品の公私にわたる大規模な蒐集や日本の芸術に関しての著述活動を通して、イギリスにおけるジャポニズムの火付け役の一人となった(注 5)。1878 年に著した『日本の美術と工藝 (原題 *Art and Art Industries in Japan*)』からは、彼が「美」と「用」を両立させる芸術に最も価値を置き、装飾芸術を重視していることがわかる。さらに、日本の装飾芸術にみられる特徴として、職人の「自然」に対する注意深い観察や、「等分割、規則性、反復、単調さ」の回避による芸術的効果を挙げている(注 6)。

オールコックが自ら編纂した第二回ロンドン万博日本部門の展示品リストは現存しており、展示品の特徴について簡潔な説明がなされているが、作者や産地についての信頼できる記述が非常に乏しい。日本の生活様式や日用品についての正確な知識を得ることが難しい状況下で、英語での説明を試みたものであるため、リストがどのような品を指しているのかを特定することは困難である。さらに、これらの展示品は、会期終了後にミュージアムや芸術家、コレクターらの手に渡って散逸しているため、その詳細については今なお不明な点が多い。そこで、筆者は拙著『日本の美術と工藝』にみるラザフォード・オールコックの日本美術観について」において、本書に多数掲載されている日本の美術品や工芸品の挿絵の出典を明らかにし、第二回ロンドン万博の展示物の特定とオールコックの蒐集傾向の分析を試みた(注 7)。現時点で明らかになっているオールコック・コレクションのうち、ドレッサーの作風に関係すると思われるものを以下に挙げる。

現在ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館に収蔵されている植木鉢〔図 1〕は、オールコックが第二回ロンドン万博に出品したものである (注 8)。呉須で染付された地に、霊芝雲や荒磯文と、躍動感のある波しぶき、吉祥を表す鶴やみの亀などが浮彫で表され、龍が手描きで描かれている。オールコックが作成した万博出品目録は、A から H のカテゴリーに分類されており、この植木鉢は C.—Specimens of China, Porcelain, and Pottery に属する 85 品目のうちのいずれかにあたると思われるが、作家および産地は明らかになっていない。オールコックが横浜に滞在していた年代と同じ頃の江戸において、ドイツ人医師フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト (1796—1866) も日本の物品を蒐集しており(注 9)、今なお現存するシーボルト・コレクションの中には、〔図 1〕と類似した形状の植木鉢〔図 2〕があり、こちらは三代目川本治兵衛作の瀬戸焼と同定されている。19 世紀以降、園芸ブームに沸いていた江戸では、このような染付磁器の植木鉢の需要が民衆の間で高まり、江戸で広く

流通していたという(注 10)。

『日本の美術と工藝』に掲載された挿図〔図 3〕は、金蒔絵の小さな飾り箆笥に取り付けられた三段の引き出し部分の前面を模写したものである。本書には箆笥全体の図は掲載されていないが、箆笥の大きさは、縦 3 インチ、横 3.5 インチで、花、鳥、木が描かれ、金属細工の鳥の取手が付いた三段の引き出しのほかに扉が付属し、サンゴや貝を惜しみなく使って装飾されているとの記述がある(注 11)。この品は前述のオールコックの出品目録のうち、A の Cabinets of lacquer and basket work mixed に属するものだろう(注 12)。これらの引き出しの前面は、破れ七宝繋ぎの文様で飾られている。七宝文とは、円輪をずらしながら一つの円内に 4 個重ねたものである。それを一単位として、連続してつなぎ合わせた幾何学文様を「七宝繋ぎ」という。最古のものは紀元前 1 世紀の西アジア地域で多く見られ、シルクロードを経て、唐代の中国で流行した。仏教思想では、一つの輪で囲まれた範囲を一つの世界とみなすことが多く、七宝文は、隣り合うものが空間を共有し、世界と世界をつなぐものとして吉祥文様とされた。日本では、古くは奈良時代の額縁裂にすでにみられる(注 13)。平安時代中期に唐風を脱し、和様化する過程で公家装束などに取り入れられ、近代以降も様々な形にアレンジされてきた。この挿絵の箆笥のように、七宝繋ぎが一部欠けているものは「破れ七宝繋ぎ」と呼ばれ、七宝文の紡錘形の中に花菱などの文様を入れたデザインとともに、江戸時代の工芸品にも多くみられるものである。シーボルト・コレクションにも、破れ花菱七宝繋ぎの蒔絵箆笥〔図 4〕が存在する。

オールコックが著作のなかでこの品を取り上げたのは、日本人の表面装飾の原理のひとつである単調な反復を回避する特徴の実例を提示するためであった。これらの引き出しの前面に施された破れ七宝繋ぎの文様は、一本調子にならないよう、それぞれの端を不規則に空け、部分的に装飾を施すことで変化を実現している。オールコックは、このような装飾上の工夫は西洋のシンメトリーの考え方とは異なっているが、決して未熟さから生ずる不均衡ではなく、異なる部分のつり合いをとることで全体的な調和が実現していると結論付けている(注 14)。

ドレッサーは、第二回ロンドン万博日本部門について、イギリス国民の趣味やデザイン学校、公共のミュージアムにとって良い効果をもたらしたと評価している。その規模の大きさから、日本部門の展示品がヴィクトリア朝の芸術家に与えたインパクトは大きいものであったといえるが、一方で、イギリス国内では 1862 年以前にも日本の美術品や工芸品の紹介が行われていた。1851 年の第一回ロンドン万博では、日本部門は存在しなかったが、中国部門の展示品と一緒に少数の日本の品が展示されていた。公式カタログの中国部門の項目を見ると、当時上海で領事の職にあったオールコックが送った日本の銅や樟腦のほか、漆器や屏風など、14 品目の出展が確認できる(注 15)。1854 年には、イギリスの芸術家にとって馴染み深いロンドンのオールド・ウォーターカラー・ソサエティにおいて、箆笥やテーブルなどの家具、陶磁器や美人画などの日本の物品が展示された(注 16)。この展示会はオランダ商人の企画で実現し、その目的は英国における日本製品のマーケティングリサーチであった(注 17)ことからわかるように、これらの品は、出島を通して輸出するために作られたものと推察される。

2 ドレッサーのデザインと著述

① 鶴・雲・波の文様

二枚のタイル〔図 5 および図 6〕は、ドレッサーがデザインし、1875 年頃にミントン社 (Minton & Co.) から発売されたものである。ミントン社とは、1793 年にイングランド中部のスタッフオードシャーのストーク・オン・トレントに設立された製陶業者であり、1871 年から 1875 年まではロンドンのサウス・ケンジントンに美術陶磁器専門の工房を構えていた。ドレッサーは、1860 年代の初め頃からフリーランス契約で同社へデザインを提供している。一般的な室内用のタイルは、耐火・耐水性のある被覆材として利用されてきたが、これらはその中でも比較的高価な「アート・タイル」と呼ばれるもので、床材タイルのように広い面を覆うものではなく、家具や暖炉、壁などの装飾に利用されていた。1 枚から数枚単位で売られ、特に中産階級向けの住宅で需要があったという(注 18)。生活空間の装飾を重視していたドレッサーは、これらのような装飾性の高いタイルの図案も制作していた。

霊芝雲を背景に飛び交う三羽の鶴などの構図〔図 5〕は、すでに複数の研究者が指摘しているように、〔図 1〕の第二回ロンドン万博に出品された植木鉢から着想を得たものであると考えられる。下部には、単調なリズムに置き換えられてはいるが、荒磯文を参考にしたと思われる波も描かれている。

2 種類のタイル作品からは、日本のモチーフを取り入れながらも、ドレッサー自身のデザインの特徴をみることができる。それは、シンメトリーへのこだわりである。日本の場合、意匠にシンメトリー性が認められるのは、神社仏閣などの信仰に関する建築の装飾や、家紋や国旗などの威厳や風格を示すためのものに多いが、〔図 5〕のように、太陽もしくは月を画面の中央に配置した構図は、民芸品の装飾や浮世絵の手法においては一般的ではない。第二回ロンドン博に展示されていた絵手本や浮世絵にも月を背景に飛ぶ鳥や月の見える風景画が含まれており、これらのいずれかが本作のイメージソースとなった可能性があるが、その作者である北斎や広重は、多くの江戸の浮世絵師がそうしたように、画面構成上のアクセントとなる月を画面の中心からあえて外して描いていたのである。〔図 6〕のタイルも同様で、3 匹のうち中央に配された鶴の脚は、画面をびったりと左右に等分割しており、上下にある花卉の図案を覆っている枠の図柄は、左右対称の形状で画面の上下部分をそれぞれ等分割している。さらに、〔図 5〕の図案にみられる波の表現にも翻案上の補整がみられる。〔図 1〕の植木鉢の荒磯文は、高巻く大波と小波が水しぶきを伴って激しく打ち寄せる風情を図案化したものであるが、〔図 5〕のタイルの波は、同じ高さで一定の韻律を保っている。このような等分割や均一性は、古典主義的な好み由来のものではないだろうか。〔図 7〕は、ヴィトルヴィアン・スクロールと呼ばれる古代ローマ様式の渦巻き波文であり、タイルに描かれた波と性質が類似している。イギリスでは、ローマ風デザインの再生はすでに 18 世紀後半に起こっていた。ドレッサー自身も、グランドツアーでイタリアの古典世界に学ぶ貴族や芸術家が多かった時代にデザインを学んでいたから、作風に合理的な秩序に基づいた古典主義的な傾向が見られるのも自然な成り行きかもしれない。前述のとおり、オールコックは日本人の装飾原理として、単調さを回避し、変化をつけるということを挙げていた。しかし、ドレッサーはその反対に、対称性や変化のない繰り返しを用いることで、統一性や安定感を演出しているのである。

② デザイン集 *Studies in Design*

①で述べたドレッサーの古典主義傾向の要因をさらに検討するために、彼が受けたデザイン教育について触れておこう。1874 年の著作 *Studies in Design* は、ドレッサーが自ら書いたデザイン論と、建築、家具、壁紙など、生活空間に関するデザインのパターン集であり、ドレッサーは、「落ち着きと調和を生み出すことが芸術の最高の目的である」と述べている。

〔図 8〕は、リチャード・レッドグレイヴ (Richard Redgrave, 1804—1888) の *Manual of Design* (1876) からの抜粋である。第一回ロンドン万博の審査員でもあったレッドグレイヴは、ドレッサーが在籍していたデザイン学校のカリキュラムを策定した人物で、装飾の源泉を植物にとらえ、それを平坦に描き替える訓練を導入した。ドレッサーが入学した 1847 年にデザイン学校の植物学の教師に任命されている。本書には「対称性の不在は原理上の誤りである」との記述があり(注 19)、デザイン学校の課程において、シンメトリーが非常に重視されていたことがうかがえる。〔図 9〕は、オーウェン・ジョーンズ (Owen Jones, 1809—1874) による *Grammar of Ornament* (1856) からの抜粋である。この本は、19 世紀後半をとおしてイギリスの美術学校で基本図書として扱われていた。ジョーンズは、全ての装飾美術は、均整や調和を備えるべきであると説き、そこから得られる結果は「落ち着き」と述べている。

以上の二人は、イギリスのデザイン改革を推進するヘンリー・コールと親交の深いメンバーであり、ヴィクトリア時代に流行していた自然主義的な植物等の浮彫デザインではなく、機械による製造を念頭に置いた、平面化や様式化されたデザインを奨励していた。ドレッサーはこの二人の考えを受け継ぎ、彼らの理論を実践に移した。*Studies in Design* に掲載されているデザインのサンプルは、〔図 10〕に挙げた例のように、植物のモチーフを様式化したものが多く含まれる。

③ 七宝文

ドレッサーは、第二回ロンドン万博の翌年の1863年5月にビルダー誌に掲載した論文で、日本の装飾について論じている。〔図11〕はその中の挿絵であり、この「菱形とそれを覆う文様のセットパターン」は日本の品に多く見られ、一般的な例では同様の文様が面の3分の2くらいを覆っていることが多いと述べている(注20)。さらに、「日本のキャビネットの引き出しの面は対角線上に分割して装飾される」との記述もあり、万博に出品された箆笥の文様〔図3〕を念頭に置いて論じている可能性がある。日本の表面装飾の特徴として、「とても小さい面でさえ、装飾されている部分とそうでない部分がある」「個々の文様はシンメトリカルで整然としたものであるが、その適用方法が不規則なのだ」と論じており、オールコックと共通する見方であるが、日本の植物のモチーフの非対称性に関しては、「粗野で破綻した作法」と批判しており、ここでもシンメトリーがいかに当時のドレッサーにとって不可侵なルールであったかがわかる。

ミントン社の製品である小花模様のティーカップ・セット〔図12〕には、等間隔に区切られた縁取りの装飾には七宝繫ぎがみられる。同じくミントン社の花瓶〔図13〕の表面のレイアウトも、前述のタイルのデザインと同様に、シンメトリックで安定感がある。七宝繫ぎは上部にみられるが、これは前述の「破れ七宝」のような無造作なものではなく、線対称の原則にのっとりたスペースを形成している。ロイヤルウースター社(Royal Worcester)の1877年制作のティーポット〔図14〕と1884年制作のプレート〔図15〕は、ドレッサーが日本から帰国したあとに制作したデザインである。ティーポットには、ドレッサー自身が当初「粗野で破綻した作法」と批判していた非対称的な構成で竹が描かれており、ふたの七宝文の配置のしかたも無造作に見せたものに変化している。プレートは、文様の一部を画面からはみ出させ、中心をずらしてシンメトリーの要素を排除するなど、より江戸時代の工芸品のデザインに近づいている。これらの作例より、ドレッサーは、1862年の第二回ロンドン博直後から1870年代、80年代と、デザイナー人生を通して七宝文様を使い続けていることがわかる。

おわりに

本稿では、1862年に開催された第二回ロンドン万博の日本部門の展示品のうち、ドレッサーのデザインソースになったと考えられる品に焦点をあて、ドレッサーが積極的に取り込もうとした要素と、関心を示さなかった要素について、具体的な作例や著述を検討することで、これまであまり論じられることがなかった第二回ロンドン万博とヴィクトリア朝イギリスの初期ジャポニスムデザインの萌芽の様相を明らかにした。

ドレッサーは、第二回ロンドン万博の展示品にみられる日本のモチーフを、アート・タイルや陶器の装飾に利用していた。さらに、日本部門の展示品にもみられる「七宝文様」に着目し、その後も自らのデザインに活用し続けていたことがわかった。一方で、当時のイギリスの工芸分野で支配的であったコール・サークルのデザイン理論の影響下において、彼がデザインに取り入れた日本的な要素はモチーフの古典主義的な翻案にとどまり、構図に関しては、見る者に「落ち着きと調和」を感じさせるデザインを創るという理念に合うようアレンジされていた。このように、当初は日本の装飾にみられる不規則さや非対称性について批判的であったドレッサーであったが、のちにこれらの要素も自身の作品に取り入れ、レイアウトをより日本的に変化させることとなる。

2002年に郡山市立美術館と他の3つの館で巡回して行われた企画展「クリストファー・ドレッサーと日本」でも取り上げられたように、多くの研究者がドレッサーの1876年の訪日とその後の彼の作品にみられる日本美術の影響について論じている。国賓として日本を訪れて国内を自由に旅行し、天皇のコレクションである正倉院の御物を見分するという経験が、彼の創作活動に多大なインスピレーションを与えた事は想像に難くない。しかし、ドレッサー本人が述べているように、彼が日本の美術や工芸に関心を示したきっかけは、1862年の第二回ロンドン万博を訪れて見たオールコックの日本コレクションであった。そしてオールコックに対し、以下のように謝辞を述べている(注21)。

「私の芸術性の形成に関して、あなたほど私に力添えをくださった人物はいません。あなたは私に初めて日本の芸術への愛と理解を教えてくださった方であり、私はその愛によって恩恵を得た者な

のです」

一人の外交官が形成したコレクションが、ドレッサーというデザイナーの審美眼を通して、ヴィクトリア時代の生活空間を彩ることになったのである。

注

- (注 1) 馬淵 明子『ジャポニスム—幻想の日本』ブリュッケ 1997 11 頁
- (注 2) Widar Halén “Truth, Beauty, and Power” 『クリストファー・ドレッサーと日本』郡山市立美術館編 2002 17-21 頁
- (注 3) 江戸幕府は 1854 年の日米和親条約締結を発端とし、その後相次いでロシア、イギリス、フランス、オランダの各国とも通商条約を締結した。オールコックは、1858 年に結ばれた日英修好通商条約に基づいて日本におくられた初代公使であった。
- (注 4) オールコック『日本の美術と工藝』(井谷 善恵 訳) 小学館スクウェア 2003 6 頁
- (注 5) 小野 文子『美の交流—イギリスのジャポニスム—』技報堂出版 2008 8-9 頁
- (注 6) オールコック、前掲書 20-27 頁
- (注 7) 拙著『『日本の美術と工藝』にみるラザフォード・オールコックの日本美術観について』『関西大学千里山論集』97 号 2016
- (注 8) V&A Search the Collections [<http://collections.vam.ac.uk/item/O130487/jardiniere-unknown/>] (最終閲覧日：2018 年 1 月 4 日)
- (注 9) シーボルトは、1829 年のシーボルト事件の処分が 1857 年に解除されて以降に、長男アレクサンダーと共に再来日した。1859 年から 1862 年の間にオランダの商社会社顧問や幕府顧問として勤めるかわり日本の物品のコレクションを形成し、それらをアムステルダムへ送って展示している。
- (注 10) 国立歴史民俗博物館編『よみがえれ！シーボルトの日本博物館』青幻舎 2016 122 頁
- (注 11) オールコック、前掲書 166-167 頁
- (注 12) R. Alcock, *The International Exhibition of 1862: The Illustrated Catalogue of the Industrial Department*, London: Clay, Son & Taylor, 1862, vol.4, pp.89-101
- (注 13) 岩崎 治子『日本の意匠事典』岩崎美術社 1984 8 頁
- (注 14) オールコック、前掲書 18、96、191 頁
- (注 15) *Official Descriptive and Illustrated Catalogue of the Great Exhibition of the Works of Industries of All Nations 1851*, London: William Clowes & Sons, 1851, vol.3, pp.1418-1425
- (注 16) “The Japanese Exhibition”, *The Illustrated London News*, Feb.4, 1854 pp.97-98
- (注 17) 谷田 博幸『唯美主義とジャポニズム』名古屋大学出版会 2004 47-49 頁
- (注 18) 吉村 典子「1870・80 年代イギリスのタイルにみる唯美主義」『美學』187 号 1996 27 頁
- (注 19) R. Redgrave, *Manual of Design*, London, Chapman and Hall Ltd., 1876 p.22
- (注 20) C. Dresser, “The Ornamental Art of Japan”, *The Builder*, May 23, 1863, pp. 364-366
- (注 21) C. Dresser, “The Art Manufactures of Japan, from Personal Observation”, *Journal of the Society of Arts*, Feb. 1, 1878, pp. 169-177

参考文献

- Official Descriptive and Illustrated Catalogue of the Great Exhibition of the Works of Industries of All Nations 1851*, London: William Clowes & Sons, 1851
- “The Japanese Exhibition”, *The Illustrated London News*, Feb.4, 1854
- Alcock, Rutherford *The International Exhibition of 1862: The Illustrated Catalogue of the Industrial Department*, London: Clay, Son & Taylor, 1862, vol.4, pp.89-101
- Alcock, Rutherford *Art and Art Industries in Japan*, London: Virtue And Co., Limited, 1878
- Alcock, Rutherford『日本の美術と工藝』(井谷 善恵 訳) 小学館スクウェア 2003
- Aslin, Elizabeth *The aesthetic movement: prelude to Art nouveau*, Praeger, 1969
- Dresser, Christopher “The ornamental art of Japan” *The Builder*, Vol. 21, No. 1059 (May 23, 1863) pp.364-366
- Dresser, Christopher *Studies in Design*, Cassell, Petter and Galpin, 1876
- Dresser, Christopher “The Art Manufactures of Japan, from Personal Observation”, *The Journal of the Society of Arts*, Vol. 26, No. 1315 (Feb 1, 1878) pp.169-178
- Durant, Stuart『近代装飾事典』(藤田 治彦 訳) 岩崎美術社 1991

- Halén, Widar *Christopher Dresser: a pioneer of modern design*, Phaidon Press, 1994
- Jones, Owen *The grammar of ornament*, Day and Son, 1856
- Newall, Diana & Unwin, Christina 『ビジュアル版 世界の文様歴史文化図鑑』(松平 俊久 監訳) 終風舎 2013
- Redgrave, Richard *Manual of design*, Chapman & Hall Ltd., 1882
- Whiteway, Michael *Shock of the old: Christopher Dresser's design revolution*, Cooper-Hewitt, National Design Museum in association with V&A Publications, 2004
- V&A Search the Collections [http://collections.vam.ac.uk/item/O130487/jardiniere-unknown/] (最終閲覧日: 2018 年 1 月 4 日)
- 岩崎 治子 『日本の意匠事典』 岩崎美術社 1984
- 小野 文子 『美の交流—イギリスのジャポニスム—』 技報堂出版 2008
- 藪 享 「初期ヴィクトリア朝におけるデザイン意識—「デザイン学校」と『ジャーナル・オブ・デザイン』誌を中心に」
『デザイン理論』38 1999 57-70 頁
- 原色浮世絵大百科事典編集委員会 編 『原色 浮世絵大百科事典』 第三巻 大修館書店 1982
- 郡山市立美術館編 『クリストファー・ドレッサーと日本』 印象社 2002
- 国立西洋美術館編 『ジャポニスム展』 美術出版 1988
- 国立歴史民俗博物館編 『よみがえれ! シーボルトの日本博物館』 青幻舎 2016
- 谷田 博幸 『唯美主義とジャパニズム』 名古屋大学出版会 2004
- 西上 ハルオ 『世界文様事典』 創元社 1994
- 西垣 江利子 『『日本の美術と工藝』にみるラザフォード・オールコックの日本美術観について』 『関西大学千里山論集』
97 号 2016
- 増田 毅 『幕末期の英国人—R.オールコック覚書—』 有斐閣 1980
- 馬淵 明子 『ジャポニスム—幻想の日本』 ブリュッケ 1997
- 吉村 典子 「1870・80年代イギリスのタイルにみる唯美主義」 『美學』187 号 1996 24-35 頁
- 吉村 典子 「イギリス 19 世紀後半の美術陶器運動: ミントン社の美術陶器製造を通して」 『デザイン理論』36 1997 29-42 頁

図版

〔図1〕

Blue and white jardiniere standing on tripod feet
1860-1862年
ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館蔵



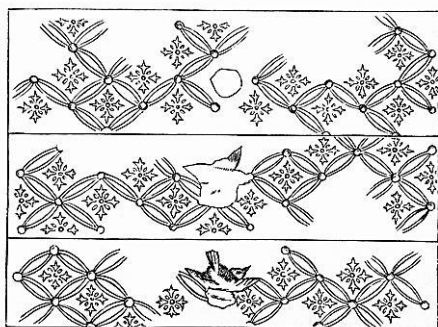
〔図2〕

瑠璃釉鶴文大植木鉢
川本治兵衛(三代)作 江戸時代末期
ミュンヘン五大陸博物館蔵



〔図3〕

Fig.104 金蒔絵の小さな飾り簞笥
Art and Art Industries in Japan (1878)



〔図4〕

破れ花菱七宝繫に菊枝散蒔絵簞笥
江戸時代
ミュンヘン五大陸博物館蔵



〔図5〕

タイル
ミントン社 1875年頃
20×20cm
メトロポリタン美術館蔵



〔図6〕

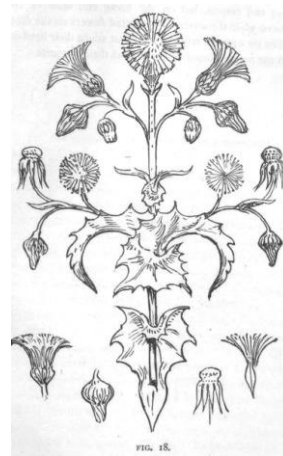
タイル
ミントン社 1875年頃
20×20cm
メトロポリタン美術館蔵



〔図7〕
ヴィトルヴィアン・スクロール



〔図8〕
Fig. 18
R. Redgrave *Manual of Design* (1876)



〔図9〕
Egyptian No.1, Renaissance No.7, Italian No.3 (一部)
J. Owen *Grammar of Ornament* (1856)



〔図10〕
Plate 9
C. Dresser *Studies in Design* (1874)



〔図11〕
fig.8 「菱形とそれを覆う文様のセットパターン」
C. Dresser "The Ornamental Art of Japan",
The Builder,
May 23, 1863

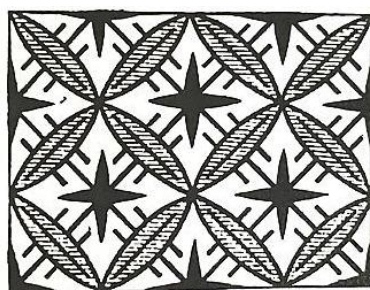


FIG. 8.

〔図12〕
小花模様のティーカップ・セット
ミントン社 1875年
東京国立博物館蔵



〔図13〕

花瓶

ミントン社 1872-80年

30.6 × 13.8 × 9.8 cm

メトロポリタン美術館蔵



〔図14〕

ティーポット

ロイヤルウースター社 1877年



〔図15〕

プレート

ロイヤルウースター社 1884年



図版出典

〔図 1〕 V&A Search the Collections [<http://collections.vam.ac.uk/item/O130487/jardiniere-unknown/>] (最終閲覧日：2018年1月4日)

〔図 2・4〕 国立歴史民俗博物館編『よみがえれ！シーボルトの日本博物館』青幻舎 2016

〔図 3〕 国際日本文化研究センター提供

〔図 5〕 Metropolitan Museum of Art [<https://www.metmuseum.org/art/collection/search/207966>] (最終閲覧日：2018年1月11日)

〔図 6〕 Metropolitan Museum of Art [<https://www.metmuseum.org/art/collection/search/232206>] (最終閲覧日：2018年1月11日)

〔図 7〕 Newall, Diana & Unwin, Christina 『ビジュアル版 世界の文様歴史文化図鑑』(松平 俊久 監訳) 柊風舎 2013

〔図 8〕 Redgrave, Richard *Manual of design*, Chapman & Hall Ltd., 1882

〔図 9〕 Jones, Owen *The grammar of ornament*, Day and Son, 1856

〔図 10〕 Dresser, Christopher *Studies in Design*, Cassell, Petter and Galpin, 1876

〔図 11〕 Dresser, Christopher “The ornamental art of Japan” *The Builder*, Vol. 21, No. 1059 (May 23, 1863) pp.364-366

〔図 12・14・15〕 国立西洋美術館編『ジャポニスム展』美術出版 1988

〔図 13〕 Metropolitan Museum of Art [<https://www.metmuseum.org/art/collection/search/658659>] (最終閲覧日：2018年1月11日)

A Life for *Ars Una* – the Eduard von der Heydt Collection in St. Gallen

Jeanne FICHTNER

PhD candidate, University of Zurich,
Institute of Art History Section for East Asian Art History

[要旨]

エドゥアルド・フォン・デア・ハイト (1882-1964) は 20 世紀のヨーロッパで最も重要な芸術作品収集家の 1 人だ。彼のコレクションには、セザンヌ、ヴァン・ゴッホ、ピカソの作品に加えて、ヨーロッパ以外の優れた芸術作品が含まれる。チューリッヒの有名なリートベルグ美術館には、寄贈されたフォン・デア・ハイトのコレクションが収蔵・展示されている。あまり知られていないことだが、規模の小さなスイスの美術館にもハイトが収集した芸術作品が展示されている。

ザンクト・ガレンにあるフォン・デア・ハイトのコレクションに含まれる 90 の芸術品の内、79 はオセアニアの芸術品であり、11 はアフリカの芸術品だ。コレクションの最大の見どころは、ハイトがハンブルグの商人ハインリッヒ・ウムラウフ (1868-1925) から買い取ったニュー・アイルランド島のウリ像である。民族学博物館の古い在庫目録によれば、フォン・デア・ハイトはもともとはウリ像を 5 体所有していた。現在、その内の 1 体がリートベルグ美術館に、もう 1 体がザンクト・ガレンにある。その他の展示品は、ベルリンの気象学者であるヴァルター・クノッヘ博士 (1881-1945)、および、ザンクト・ガレン出身のスイス人の美術品収集家であるハン・コーレイ (1880-1974) のコレクションである。

フォン・デア・ハイトの人生と人柄は多面的であった。ドイツの裕福な銀行家の家庭の息子として生まれたハイトは、数多くの旅をし、晩年はスイスで暮らした。ハイトが 1926 年にテッシン州のモンテ・ヴェリタ丘に開業したホテルは、瞬く間に芸術家、文学者、資本家、商人の集いの場になった。ハイトは、形式ばらない気楽な雰囲気の中で芸術について討論することを好んだ。彼はホテルに多くの収集作品を無造作に展示した。当時、ハイトほど、異なる時代、さまざまな文化の芸術品を幅広く所有している収集家は他にいなかった。収集家としての広範囲に渡る活動の基礎となった原則を、ハイトは「アルス・ウナ」と呼んだ。由来する場所や時代に関わらず、「唯一の芸術」があるのみだ。フォン・デア・ハイトはそのコレクションで芸術と生活を結合した。

[Abstract]

Eduard von der Heydt (1882-1964) was one of the most important art collectors in Europe in the last century. Alongside works by Cézanne, van Gogh and Picasso, he also left unique examples of non-European art. The foundation of the famous Rietberg Museum in Zurich owes much to his legacy. However, it is less well known that smaller collections in Swiss museums also contain pieces from Heydt's collection.

Von der Heydt's collection in St. Gallen comprises 90 pieces, of which 79 are Australasian and 11 African in origin. The star pieces in the collection undoubtedly include an Uli figure from New Ireland which von der Heydt bought from the Hamburg merchant Heinrich Umlauff (1868-1925). According to old inventory lists from the Museum of Ethnology, von der Heydt originally owned five figures one of which is to be found today in the Rietberg Museum and one in St. Gallen. Further pieces came from Dr. Walter Knoche (1881-1945), a meteorologist from Berlin, and Han Coray (1880-1974), a Swiss art collector from St. Gallen.

Von der Heydt's life as well as his personality were multifaceted. Born as the son of a prosperous banker's family in Germany, he travelled extensively and towards the end of his life, he lived in Switzerland. In 1926, he opened an hotel on Monte Verità in the Canton of Ticino, and it quickly became a meeting point for artists, writers, financiers and traders. He loved to talk about his art, as always in a casual, relaxed atmosphere. He exhibited many of his works in his hotel. No other collector at this time collected as widely and from so many different cultures and epochs as Eduard von der Heydt. He called the principle on which he based his wide-ranging collecting, "Ars Una". There is only "one art" regardless of where it comes from and from what epoch. With his collection, he celebrated the unity of art and life.

江戸時代の唐様書法に見られる明末書風 —董其昌の影響を中心として—

高 絵景

関西大学大学院東アジア文化研究科 博士課程前期課程

[Abstract]

Because of the *Nakasaka trade* between China and Japan ,a large number of Chinese painting and calligraphy works and rubbings were spread to Japan during the Edo Period.Among of these works ,there were a lot of works created by late Ming dynasty's calligrapher such as *Dong Qichang* and *Wang Duo* who not only broke though the ancient style but also advocated the new techniques and romantic style of calligraphy.

During the Edo Period of Japan ,the main culture was affected by *Confucianism* and also from the aristocracy class to the populace was influenced by this boom .Thus as a result of this boom Chinese calligraphic culture also highly praised by Japanese calligraphers.

The Edo calligraphy was divided into *Karayō* calligraphy and *Wayō* calligraphy.The *Karayō* calligraphy was based on Chinese culture and distinguished from the special Japanese style which was named *Wayō* calligraphy.According to documentaries, the Edo calligraphers such as *Ida Hyakusenand* ,*Nakai Todō* that who directly learned from *Dong Qichang* and laid the foundation of the epidemic stage and also they became the pioneer of the *Karayō* style.

On my research ,I trying to analyse why the late Ming calligraphy's style had changed and figure to look what the attempt they did in creation though the works and theory of the late Ming's calligrapher especially the *Dong Qichang's The Casual Literary Notes of HuaChanShi* .

As we all know, reproducing the master of pieces that is the only way to learn the techniques in the traditional painting or calligraphy .The "*Inventive Copying*" was created by Dong Qichang ,it not simply the copy of classics and as new form of creation of calligraphy .The ideas guiding artistic was popular in the romantic school of *Karayō* calligrapher.

At the same time I am going to compare the *Karayō* works with Dong 's works from the ink color to the shape of character to find out the connection between the *Karayō* calligraphy and Ming calligraphy.

〔論文〕

はじめに

書法作品において、風格を打ち破るという事態が生じることは、芸術の歴史において避けることのできない現象である。たとえば、明末に書風のいわば突発的な変化が見られた。それは董其昌による臨書の方法で、手本を見ずに記憶する作品を想い浮かべて臨書する方法や、傅山の「寧拙毋巧」（寧ろ拙なりとも巧なること勿れ）などがある。いうまでもなく、董其昌は、中国明代の美術界において領袖の地位にあった書家で、後世の数多くの書画家に影響を与えた人物である。「妙在能合、神在能離」（その妙は古人の精神を求めることにあり、古人の模倣から脱することにある）という境地を追い求めた。このような展開は、二王（王羲之、王献之）の成熟したシステムを基礎にしており、同時に明末社会の歴史と密接に関連していた。

明末から清初にかけての日本では、貴族や武家の間で発展してきた文化が民間にも浸透しつつあった。書道における和様と唐様の二つの様式が主流となり、特に唐様においては、董其昌ら明末清初の書家による影響が多く見受けられる。

江戸時代における長崎貿易を通じて、中国の膨大な書籍、特に書道資料と手本などが中国から日本に輸入されたことは周知のことであろう。董其昌が自ら選集し、それを刻した法帖『戲鴻堂帖』と、董其昌の書跡を蒐集した彼の専帖も日本に輸入された。

明が滅亡した後、董其昌の『画禅室随笔』は、日本へ亡命した朱舜水とともに日本にもたらされた。董其昌の著書は 1840 年に出版され、それは中国の書道が公開されるということで、日本の歴史的な記録の中で最古の書画理論である。そのため、書家や画家たちは、争って董其昌の書籍を所有しようとした。いずれにせよ、董其昌の臨書の観念は、江戸時代における日本の書道分野に大きな影響を与えたといえよう。

中田勇次郎編集の『書道芸術』には、以下のように記されている。

董其昌の書は清朝に入ると康熙帝が心から推賞し、自らもこれを習ったので、正統的な書として士大夫の間に広く行われた。彼の書風は、日本では新しい清朝の書として受けとられたのではなかろうか。（注 1）

そこで本論文では、明末書風の変貌を分析するとともに、江戸時代における日本書家によるその受容について明らかにしたい。

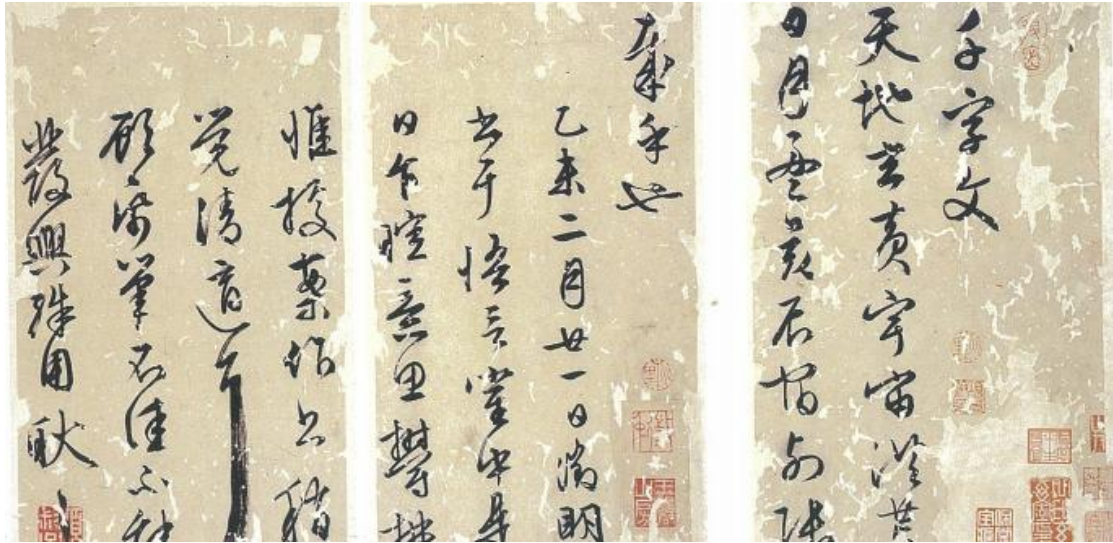
一、中国書に見られる時代性格の概要

（一）明代書風の変貌

中国のそれぞれの時代には、それぞれの書の風格が存在し、書作品には時代特有の性格というものが刻印されている。書の風格は書体の成立とともに備わったといつてよい。本稿では、主として明時代を議論の対象とするが、明時代は、1368 年に朱元璋が国を統治し始め、以後 1644 年まで続いた。その後 17 代を経て、中国本来の漢民族の王朝が、277 年という長い期間にわたって独特の新文化を創造した。この時代になると、新しい文化が急増して、文学と思想の上からも、特色ある明朝風を形成するに至る。そして、書画における鑑識、鑑賞、収蔵、購買の体制が旺盛となり、理論面においても、文人として詩書画三絶に専心する人たちが、それぞれ独特の論説を展開するようになり、ついに、六朝このかたの伝統的な理論の他に、新しい逸格の理論が起こるに至った。（注 2）

明の書は、書風によって三つの時期に分けることができる。

元末から明の初期にかけて（1368－1424）は、前代を継承して堅実な伝統を保持する時代である。この時期には、晋唐の書の神韻を尊び、趙孟頫の古典派を引き継ぐ書が得意とする文人が多く現れる。



文徵明『草書千字文冊』（1535年）台東区立書道博物館

成化から嘉靖（1488－1521）にかけては、急激に国勢が上昇してきて、とりわけ江蘇、浙江の地は、文人画が流行し、それに伴って、書作品も造形美術を追って、字態と字形を重んじるようになる。

万歴以後の明の後期は（1522－1619）、豊かな成化から嘉靖にかけての文化を基礎として、さらに、精神的な深さを加えることになる。文芸の上にも、中期の美しく華やかな趣味性だけではなく、さらに深い精神性の盛られたものが制作されるようになった（注3）。書における、董其昌と王鐸などの文人たちは、文徵明の様式主義とは異なる方法をとるようになった。呉派の書画は、文徵明の没後、日に日に形骸化し、行き詰まりを見せるようになった。そのような職業的な書道創作に抵抗し、書道の手本書を復興するため、董其昌は「妙在能合、神在能离」（その妙は古人の精神を求めることにあり、古人の模倣から脱することにある）という説を唱えた。つまり、様式主義による束縛から脱して、自らの創意によって、新たな書風を展開していったのである。そして、董其昌によって唱えられた浪漫主義は、万歴以後の明末から清初にかけての書道界の本流となった。

二、明末書風の変化とその原因

明朝になると、漢民族による王朝が成立し、伝統文化の保存のために一連の政策を取り、明の成祖（1402－1424）は、舎人二十八人を選んで、もっぱら王羲之と王献之の書を学び、専ら古法書の学習を奨励するのに力を注いだ。帖学が勃興して、優秀な書家が輩出されたが、中期になると書道界は徐々に様式化していくことになったが、この時代の高名な学者である馬宗霍の『書林藻鑑』には以下の説がある。

「帖學大行，故明人類行草，雖絕不知名者，亦有可觀，簡牘之美，幾越唐、宋。惟妍媚之極，易粘俗筆。可與入時，未可與議古。次則小楷亦能自振，然館閣之體，以庸為工，亦但宜簪筆干祿耳。至若篆隸八分，非問津於碑，莫由得筆，明遂無一能名家者。又其帖學，大抵亦不能出趙吳興範圍，故所成就終碑。偶有三數傑出者，思自奮軼，亦未敢絕塵而奔也。」（注4）

明中期の書は、行書と草書においては晋人の書に及ばないが、そこには鑑賞的性格と独自の趣味があり、簡牘の美しさは唐、宋の書を超えている。ただ、妍麗に過ぎるため、いわゆる俗筆になる。

明代後期の文人にとっては、書が晋、唐、宋、元において発展して、いくつかの書の頂点に達したため、それら前代を踏み越えるために、突破の糸口を見つける必要があったが、それは容易なことではなかった。そして、董其昌や王鐸などの文人たちは、さまざまな新しい試みを企てた。

2-1 臨書の観念とその方法

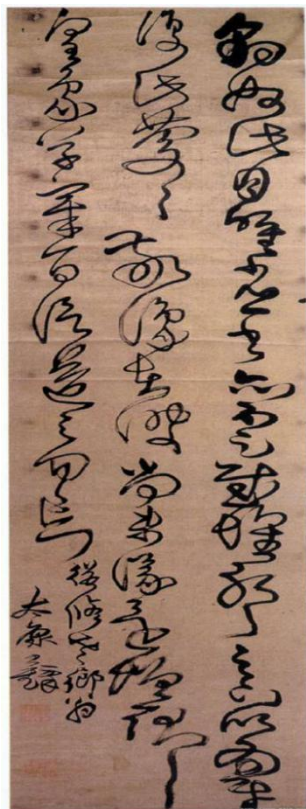


図1 王鐸の『草書臨王獻之豹奴帖軸』

中国の各時代には、それぞれの臨書観念が存在したが、臨書の作品にも自ずから各時代によって、時代特有の性格というものがある。最も早い臨書の観念についての著述の存在は、南北朝ごろまで遡ることができる。元代から明の中期にかけて、南宋の臨書観念を継承して、元の書法を集大成した書家として趙孟頫は、二王を尊び、手本を完全に再現した。趙氏の臨書作品は手本と比べると、線や構図という点では特に異ならない。趙氏の臨書観念は元代のそれに従った。その影響は明の中期まで続いている。明の中期の祝允明（1460—1526）は、「国朝第一の書人」と呼ばれ、元の趙孟頫以来の第一人者と称せられている。祝氏の『論述帖』は、前人の評論を引用して、趙孟頫の臨書観念に賛同していた。

「臨古不使毫髮出法度外，故動靜無遺失。」（注5）という意味は、臨書の時に厳しい法度を離れず、原本の形や精神など、その全容を把握しているということである。「沿晋游唐，守而勿失。」（晋を承けて、唐を承けて、寧ろ伝統を守って失うこと勿れ）（注6）と指摘している。

明末になると新しい臨書方法が現れた。すなわち、臨書する者は、原本を暗記し、主観的な意識に基づき、原本と大きく異なるという創造的臨書が現れ、それは「臆造性臨書」と呼ばれている。そうした臨書法は、董其昌から始まり、発展して王鐸に至って頂点に達した。図1に示されているのは明末の王鐸の『草書臨王獻之豹奴帖軸』の抜き刷りである。

王鐸の臨書は、図2に示す王献之の豹奴帖を臨書した長条幅であるが、字形と内容を見ると、原本と大きく異なるところがある。それは「豹奴・此・月・唯・省・一・書・亦・不・足・慰・懷・深・悉・足・下」において特に甚しい。原帖と比べると、「情・素・耳」の三字は略され、「以……鐸」の三十八文字は原本にはない。連綿のところは、原帖では「豹奴」、「此月」、「以下」の二文字ずつ三カ所見られるが、王鐸臨では「豹……書」の八文字、「慰……慶」の十二文字がそれぞれ続けて書かれている。作品を全体的に見ると、とにかく自由な感じを示す、自己の技法で創造した臨書である。

迫真の臨書から、創作としての臨書まで幅広く見られ、このような種類は、中国の臨書の観念の古今分水嶺となっている。同時に、明末の書論も、特に臨写については、古い理論を打破して、新しいコンセプトを発展させた。董其昌は、この転機期の重要な人物であり、書画家というだけでなく、有名な鑑賞家でもあった。董其昌の筆録『畫禪室隨筆』は全四巻で、その第一巻は、論用筆、評法書、跋自書、評旧帖という四部によって構成されている。

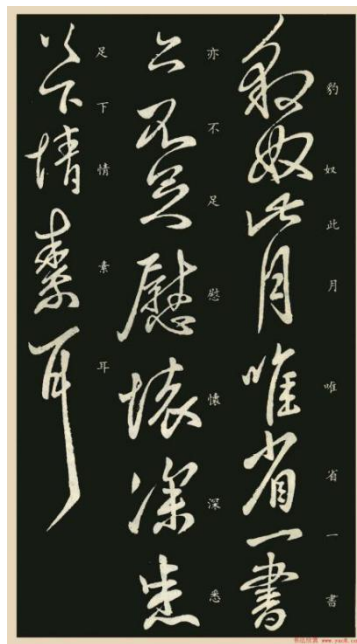
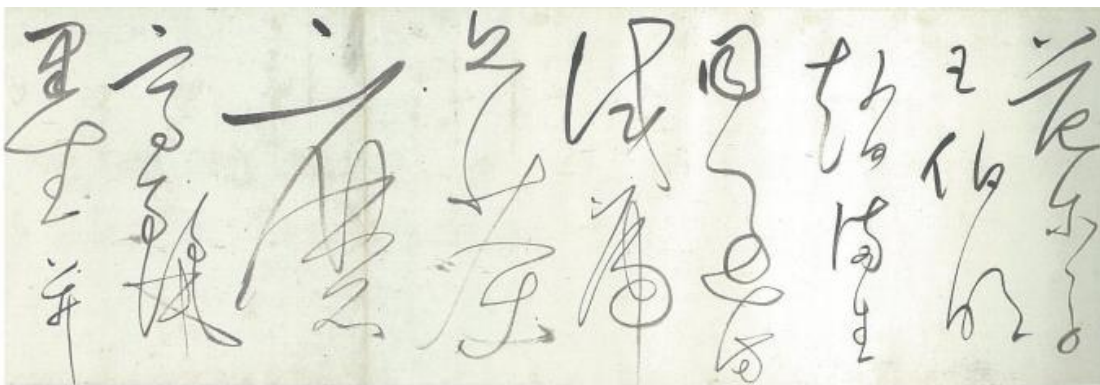


図2 王献之『豹奴帖』

台湾の学者の朱恵良著『臨古之新路—董其昌以後書学發展研究之一』と白謙慎著『傳山的世界』など、多くの著述において、董其昌を臨書觀念の古今分水嶺とみなすことができる。董其昌は、一生、臨書活動を続けており、その著『画禅室随筆』や『容台別集』には臨書に関する著述が数多くある。万歴七年（1579年）董其昌は25歳で『破邪論冊』を臨写し、自らの感想を記したことがある。

「余少時學虞書，忽于臨寫時，得其用筆之訣，橫斜曲直，無不合者。他書則不尔，已復去而學《黃庭》，《内景》，絕無虞法矣。偶友人持《破邪論》相示，遂為臨此。近代王雅宜一生學永興書，獨于發筆不似，若其形模，已十得六七矣。固知古人長處，須悟后可學也。」（注7）



董其昌『行草書羅漢贊等書卷』（1603年）東京国立博物館

董其昌は、幼い時に虞世南の書を学び、虞世南の技法を書く秘訣を会得したと思われるが、其の他の原本を臨写し、虞法は全く見られない。これによって、古人の長所を知って、自己の理解をもとに学習する。伝統を継承しつつ、伝統の中で自己の創意をつぎ込んで、そうして、古法を突発することができる、ということになる。

このような「臆造性臨書」は、明末臨書觀念を変化させ、書家らの自己意識を覚醒させる結果となったのである。

2-2 明末思想の解放と禅宗の影響

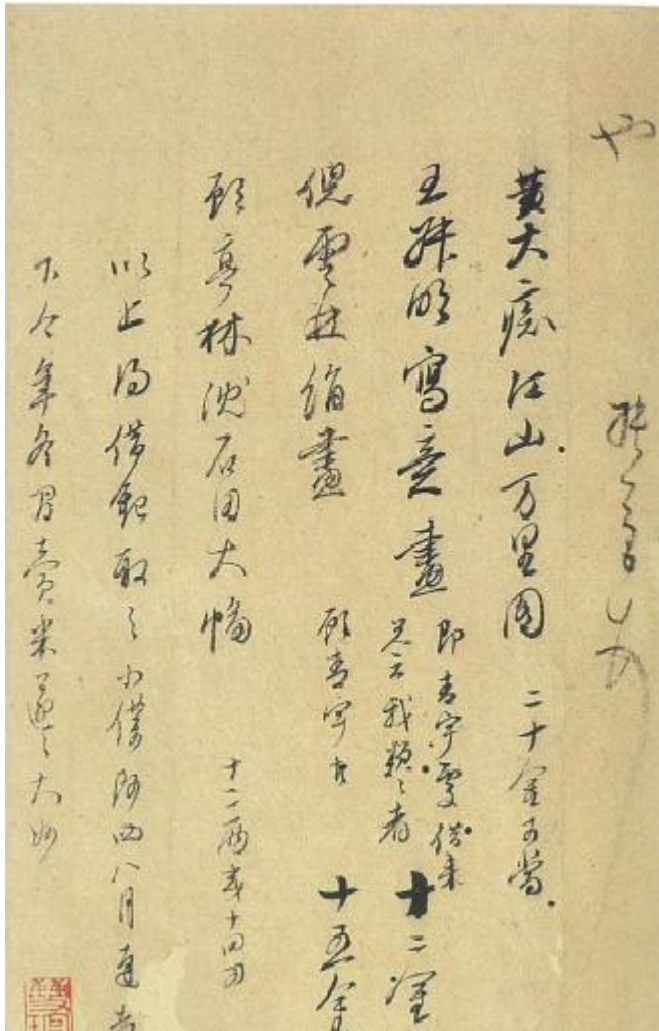
中国においては、思想と書とは、深い関連性がある、思想の変遷にともなって書風も同じように変化している。

明末、すなわち万歴以降（1572年）の思想において最も特筆すべきは、王陽明による陽明学の成立である。陽明学では、心即理・知行合一・致良知が唱えられ、主観的能動性（個人が自発的に外界に対して変化や発展を働きかけること）を強調する。明末の書家らは創作を通じ、権威主義的な経典を排除し、精神趣味を追及した。明末以前は、文人を支配していた儒教における中和の精神によって法度を遵奉し、平正典雅の典型的な美しい書風を形成していた。明末になって、逆に礼楽の束縛から逃

れた個性的な作品が制作された。書の風格や章法が大きく変化し、書道作品の形態が多様になった。

「この明末清初という動乱の時代、書では明の烈氏や遺民たちが長条幅の形式に連綿草を用いた逸格のスタイルが展開されました。」（注8）と指摘されている。

宋代以前の書道では、文字の支持体は、主に碑文、文書、手紙などの形態であった。さらに、明末以前では、巻物と手札が中心となり、作品の寸法も小さく、文人たちは「人撰一卷，以为秘玩」と記した。その要因は、明代以前の中国民居は、主に低層住宅であったが、明代中期における礼法の崩壊によって、一部の富裕層が政府の禁令に違反して、高い住宅を建設したことにある。つまり、住宅の天井が高くなるにつれ、大幅の掛幅作品が現れた。作品の寸法が巨大化してゆき、掛幅作品の文字が小文字から大文字になって、章法と墨法（墨の使用方法）の規則も変化した。その一つとしては、文字が小文字から大文字に変わったために、筆鋒が短い狼毫（イタチの毛で作った毛筆）と兔毫から、長い兼毫と羊毫に変わった。文字が大きく書かれるようになった結果、極めて細かい部分を表現することができなかったのである。



董其昌『草書尺牘冊』京都国立博物館

ところで、文字の大きさを拡大せずに、完璧な視覚効果を得るためには、手本をまるごと臨写するやり方が重要である。さらに、文字の間隔と行間の把握に注意する必要がある。最後に、巻物と手札等の古典的な書道作品は、純粋な墨を用いて墨書するが、掛幅作品の場合、純粋な墨を用いると、作品全体が鈍くなりがちである。墨は「焦」、「濃」、「重」、「淡」、「清」という五色に分けられる。薄い墨で大きな文字を書くことができれば、視覚的な圧迫感が緩和されて、豊富なグラデーションが強調され、明瞭さが際立つことになる。大幅の作品を鑑賞する時に目を引くのは、作品全体であり、細かい部分ではない。加えて、明末の書画市場において、視覚的なインパクトを持つ作品が大衆に歓迎されることになり、そうした傾向が書家の創作にも影響を与えることになった。

元代に趙孟頫によって築かれた古典文化の基礎の上に、明末以前の書家が厳正な晋唐の書風によって精巧な楷書を書くようになってきた。明の後半期になると、とりわけ文人は草書を愛するようになる。草書には他の書体とは違って自由な芸術性が具えられており、行書と楷書の厳正な筆法、字法、墨法の規則を離脱し、運筆が書家の感情の変化に伴って自由になる。王鐸の行草作品を見ると、王羲之、顔真卿の技法を学び、胴を十二分に張っており、字の形は穏当ではないが、全体的に見て、静謐、活動、力、勢、変化が統一されている。運筆は速めにし、緩急抑揚をつけ、線の方向も多面的だから、

四方へと勢いを及ぼしている。墨はかなりの濃墨で打ち込み、書き続けていくことで、墨が全部なくなることになる。墨色が虚実をつけて書かれ、章法の疎密が明るくなって、芸術的な観賞に富むものとなっている。

広い幅の作品創作に成功するのは、明末書道とそれ以前の書道との最も重要な区別になる。これは明末の書家らが共に努力して創造に励んだ結果であり、時代の書風の標識でもある。

三、日本への影響

江戸時代まで日本の書は和様と唐様に大別されている。江戸時代の唐様書法の起源については、鎌倉時代に培かれた中国の書の精神主義に遡ることができる。鎌倉時代以降、禅宗寺院では宋学が学ばれ、五山文学に伴う漢詩文の教養が蓄えられてきた。殊に、禅僧の間では、おのずから書法にも宋の風が強く反映されていた。仏教から儒学が切り離され後も、この中国風の書が受け継がれることになった。

江戸時代の唐様書法は、初期、成立期、流行期の三つの階段に分けて考えられている。まず、江戸初期には、江戸幕府の開設に伴って、朱子学は文教政策として普及されたので、漢詩漢文を作る儒者が起こった。書の場合には中国の法帖がほとんどなくて、まだ宋の蘇軾や黄庭堅を学んだ儒者が多く、とくに新しい書風は現れなかった。

石川丈山は、宋人の隸書体をよくして、まず唐様流行の端を開いたが、明の隆慶二年（1568年）、黄鑒・黄鉞兄弟によって編纂された『内閣秘伝字府』が、永字八法を書の基本として七十二筆勢に展開し、寛文四年（1664年）京都において翻刻された。

十七世紀後半から十八世紀にかけて、『内閣秘伝字府』を基本とする唐様が京都を中心に展開しつつあったことが了解される。この本には伝統的書法と書論を記載しているが、極めて通俗なもので、まだ本格的な唐様として物足りないものである。唐様が流行する第一段階として京都地方に行われた極めて初期の唐様の姿をこれによって見ることができる。（注9）

その後、中国の文人の多くが明末の乱を避けるため、日本に逃亡した。朱舜水をはじめ、1661年（寛文元年）に隠元は、幕府の許可をえて、京都宇治に中国の様式に倣って、黄檗山万福寺を建立した。黄檗山の創立とともに、即非、独立、独湛、木庵、心越、高泉が続々帰化して明の書風を伝えたので、唐様書道の盛行を迎えたのである。隠元らが董其昌や張瑞図の肉筆を将来したことはよく知られ、これらは現在まで伝わっている。

唐様の成立は長崎を門戸として流れ込んだ中国の文化に基づいて、儒者たちは書によってその敬仰する学問の道を広め、漢詩漢文をしたため、翰墨の趣味が高まった。熊本藩に仕えた儒臣の北島雪山が、直接には明人兪立徳から文徵明の書法を授かったといわれ、唐様の第一人者と世に喧伝されている。北島雪山の新しい書法は、門下の細井広沢（1658—1753）によって広められ、唐様の流行の基礎を築き上げた。細井広沢は、中国の伝統的な執筆法を唐様の正格の技法として、五十七歳の時『紫微字様』を著し、永字八法、一百六十書法を図示して、唐様の淵源を明らかにした。そして、六十八歳の時に『観鵞百譚』を著して、唐様の書法は文徵明から元の趙孟頫、さらに晋の王羲之にさかのぼって、彼の書及び書論は江戸唐様書法を推進する原動力になった。

また、正保年間（1644—1648）に朝鮮を通して日本において流布した法帖は、宋の蘇軾や黄庭堅の陽刻版のものであった。享保の改革によって、長崎貿易の禁令が徐々に緩和され、現存する資料によると、およそ元禄（1688—1704）、正徳（1711—1716）から元文（1736—1741）のころにかけて、法帖の出版が増加して文徵明や祝允明の法帖が現れている。宝暦（1751—1764）、明和（1764—1772）のころになると、日本では法帖の出版が急に増え、殊に趙孟頫、祝允明、文徵明、董其昌の法帖が圧倒的に多かった。そこで、法帖を学ぶによって書家は旧派と新派の二つに分かれ、晋唐の書を学ぶのが旧派と呼ばれ、元明の書を学ぶ人々は新派と呼ばれた。

晋唐派の書家は松下鳥石をはじめ、細井広沢に学んだといわれ、晋唐の正しい書の伝統を守っている。彼の門に韓天寿があり、集帖を翻刻したことで、この時代の第一人者として、晋唐の正格な書風を発揚した。

明和三年（1766）唐の孫過庭と宋の姜夔の撰した正統書書譜が鳥石の序文を冠して刊行されているのを見ても、鳥石によって書論の上からも晋唐派の基礎づけが行われていたことを如実に示している。（注10）

元明派の能書者の中には儒者が多く見られ、荻生徂徠を頂点として、漢学による復古学を唱え、書においては宋・元以来、明の諸家の法帖を体得しながら、新しい傾向を追って独自の境地を開いたものである。とりわけ、徂徠は明の祝允明の草書を研学して、江戸時代の唐様書法に明人の草書のうまみを入れていたことを示している。しかし、法帖から脱却して自分の書を創造する点においては欠けるところがあるように思われる。

それに対して、池大雅、寂庵、慈雲、良寛は、逸脱派と呼ばれる天才的な書家である。

唐様といえばたいていは元明の趙、文、祝、董を学んでひたすらその模倣につとめ、とかく低調な趣味の書に陥るのが普通である。このような法帖にとらわれることなく、それから脱却して、よく自分の書を創造することは、本来技能を目的とする書の性質からみても、なかなか困難なことである。（注11）

「法帖から脱却する」というのは法帖の伝統を継承しつつ、伝統の中で自己の創意をつぎ込んで、それによって古法を突発できることであろう。南画の第一人者と称えられる池大雅は、書においても画と同じく天性の才能を恵まれていた。元明の法帖を始め、晋唐にさかのぼり、天真爛漫な風格を示し、当時の儒者の伝統的な唐様から抜け出した特別な存在である。寂庵、慈雲、良寛は釈家に属するが、これまた儒者のひらくことのできなかった書の芸術境を開拓した。（注12）

文化・文政期（1804－1830）の間に、漢詩文が全国的に流行して、その風潮が、漢字に対する関心を持っていた漢学者もますます多くなった。文人たちはしばしば書画会を開催し、豊富な法帖資料に恵まれ、興にのって、即座に詩幅や画卷などを多く作ることができた。つまり、文人趣味の翰墨遊戯の中に溶け込んで書が生きていたのである。（注13）当時、上方における文人の中心として活動していた頼山陽は、少年期から家伝の書法を学んだ、自ら董其昌の書を模倣して宋の米芾に傾倒した。

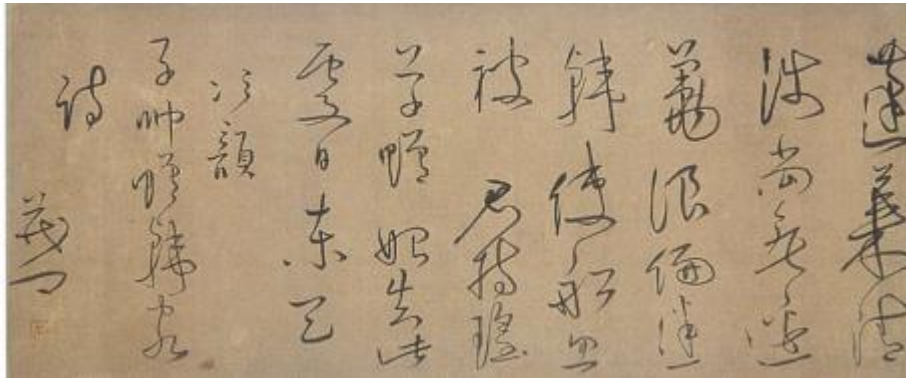
やがて幕末（1853－1869）ころになると、唐様書法も全盛期を迎えた。「幕末の三筆」と併称されるのが、江戸の市河米庵と巻菱湖、そして京都の貫名海屋である。この三大家によって、江戸時代を通じて盛行した唐様が頂点に達したといわれる。市河米庵は、長崎で清の胡兆新より筆法を授かり、宋の米芾を始め、明の董其昌に私淑して、明清の真跡を範として日夜臨摹に励んだという。それに反して巻菱湖は、晋唐碑帖の臨摹に全力を傾けて、趙孟頫や董其昌などの書の範囲を超えたので、その新鮮な書風は多くの人々を引きつけて、書法を学ぶために多くの門下生が巻菱湖の下に集まった。その三家の中で、最も名高いのは、儒者また漢詩人として知られる貫名海屋である。彼は始めに宋の米芾の書法を学んだが、中年ころに空海の実跡を見て感銘し、その後に晋唐以来の法帖に熱中した。その上、日本の平安時代の名跡の正法を加えて、ついに格調高雅な一家の風格を完成した。

江戸時代の中国文化を背景とする唐様は、和様の形式的書体に満足できない知識階級の憧憬の的となり、革新的書風として受容され、儒者を中心として町人にまで広まった。

おわりに

日本の書は、中国文化の影響を受けて発達してきたものである。従って、中国の書の特性はほとんどそのまま日本の書へも流れこんでいる。すなわち、飛鳥時代の隋唐書道、奈良時代の晋唐書道、平安前期の唐書道。鎌倉時代の宋書道、鎌倉末期および南北朝の元書道、室町時代の明書道、江戸時代の唐様、明治大正期の碑学派の書道といったように、日本においては、大陸書道が大きな力となって各時代に影響を及ぼしてきた。(注 14)

明末から清初に対応する日本では、貴族や武家の間で発展してきた文化が民間にも浸透しつつあった。書道における和様と唐様の二つの様式が主流となり、特に唐様においては、董其昌ら明末清初の書家による影響が多く見受けられる。



荻裕徂徠『草書詩卷』台東区立書道博物館

1654 年、明の滅亡に伴う戦乱を避け、黄檗僧の隠元隆琦が、同時琦に木庵性瑫、即非如一、独立性易らがそれぞれ来日し帰化した。彼らが携えてきた明時代の書跡や法帖が広く日本全国に伝えられた。隠元により創建された黄檗山万福寺には、文徵明、祝允明、董其昌、張瑞図らの作品が残された。

江戸時代における、大量の法帖が長崎貿易を経由して流入し、唐様を支えたわけである。元禄元年(1688 年)の『唐本目録』には『淳化閣帖』が、『商舶載来書目』には沈荃『賜金帖』、文徵明『停雲館帖』、陳繼儒『燕喜堂帖』などが記載されており、特に董其昌の書は多く、『紅授軒帖』『戲鴻堂帖』『小玉烟堂帖』『伝経堂帖』『清暉閣蔵帖』『汲古堂帖』『百石堂蔵帖』など、その人気ぶりを見てとることができよう。流入した法帖などは日本でも重版され、董其昌の場合、天保年間に『画禅室随筆』の和刻本が出版されていることから、書のみならず、その理論も日本で広く受け入れられたことが明らかとなる。水戸藩では、およそ 29 年をかけ独自に編集し、歴代の名跡と編者の跋を収めた『垂裕閣帖』が刊行されたが、この集帖には董其昌の書が収録され、当時、董其昌の書がいかに数多く普及したかが一目瞭然となる。

董其昌の影響を示す一例として、中井董堂(1758—1821)という書家がいたが、号が示す通り董堂は、董其昌に私淑して書と詩を学んでいる。唐様の全盛期になると、幕末の三筆と並称される市川米庵、巻菱湖、貫名海屋が現れている。米庵は長崎で清の胡兆新より筆法を授かり、董其昌に私淑して明清の真蹟を範とした。日本の書家らの間では、董其昌をはじめとする明清の書画が尊ばれたことが判明している。知識階級の書家をはじめとする文人たちは、革新的な書風を受容し、実作と理論の両方において絶大な支持を得ていたのである。

注

- (注1) 中田勇次郎編集の『書道芸術』第八巻、「祝允明・文徵明・董其昌」中央公論社、1976 年、186 頁。
- (注2) 中田勇次郎編集の『中国書道史』明巻、中央公論社、1976 年、104 頁。
- (注3) 中田勇次郎編集の『中国書道史』明朝巻、中央公論社、1976 年、518 頁。
- (注4) 馬宗霍『書林藻鑑』、台湾商務印書館、2013 年、198 頁。
- (注5) 祝允明『論述帖』、上海博物館蔵墨跡。
- (注6) 祝允明『祝氏集略』奴書訂、台北中央図書館、1977 年、1977 年、12 頁。
- (注7) 徐邦達の『歴代流伝書画作品編年表』、上海人民美術出版社、1963 年、90 頁。
- (注8) 台東区財団法人『董其昌とその時代』、東京国立博物館、2017 年、53 頁。
- (注9) 中田勇次郎『日本書道の系譜』、木耳社、1970 年 9 月 20 日、183 頁。
- (注10) 中田勇次郎『日本書道の系譜』、木耳社、1970 年 9 月 20 日、186 頁。
- (注11) 中田勇次郎『日本書道の系譜』、木耳社、1970 年 9 月 20 日、187 頁。
- (注12) 中田勇次郎『日本書道の系譜』、木耳社、1970 年 9 月 20 日、187 頁。
- (注13) 中田勇次郎『日本書道の系譜』、木耳社、1970 年 9 月 20 日 188 頁。
- (注14) 中田勇次郎編集の『中国書道史』書の時代性巻、中央公論社、1976 年、257 頁。

Aesthetics of War

-Textiles and other Examples of Material Culture from the Shōwa Period-

Klaus J. Frieese

PhD Candidate, University of Zurich and Ludwig-Maximilians-University, Munich

[要旨]

伝統的な形式に従いながらも近代戦争のモチーフを提示する衣装が初めて現れたのは 1894/95 年の日清戦争のときである。1931 年から 1942 年の間の昭和期に戦車や飛行機、兵士を模様にした繊維製品が大量生産されていた。「戦争柄着物」とよく呼ばれていた繊維製品は特に昭和初期に流行していた広範囲の戦争柄の物質文化の対象の一つである。

その製品の流行とその時代の感性はどのようにつながっているのか。カント派の伝統によれば「感性」という言葉は度々美と結び付けられているが、兵士あるいは兵器の画像は「美しい」と判断されうるのだろうか。これらの製品の意味と影響を深く理解するため、本論は衣装や物品、色彩、建物などを含めた人々を囲う様々な要素から生み出される感覚的経験を言及する「社会美学(感性学)」という概念を使用する。

「爆弾三勇士」という戦争神話の例と繊維製品やそのほかの子供のための製品の役割の例を調査することで、昭和初期における日常的な戦争の感性と社会への強い影響を一瞥することができる。こうした戦争柄をその時代の社会美学の不可分の一部として考察すれば、戦争柄の意味をもっと理解できると考えられる。

[Thesis]

Introduction

Japanese textiles are commonly considered very beautiful and valued as real works of art. The marketing of “vintage” items dating back to Meiji, Taishō or early Shōwa times through specialized stores and the internet seems very successful both in Japan and foreign countries: Under the umbrella term of “kimono” those textiles are promoted as not only representing a traditional Japan but also as being a cornerstone of the overall Japanese concept of aesthetics and beauty.

Unfolding and touching a *haori* (formal coat) ⁽¹⁾ produced during late Meiji times (about 1905) it is easy to share this enthusiasm: The outer silk has a classy rich black color, the silk feels smooth but strong to the touch. Detailed ornaments are visible on the gold colored damast lining inside the sleeves and the *haura* (lining) shows an intricately woven and carefully designed picture. But there is a catch: The images show the opposite of what commonly could be considered beautiful or aesthetic, they all relate to war. The damast lining depicts the Japanese, the Russian and the red cross flag and the gates to a walled city as seen in China. The central motive resembles a postcard showing cavalry officers preparing for an attack. Marching soldiers can be seen at the border of the *haura* as well as flags and a *kinshi kunshō* 金鵄勲章 (medal of the Order of the Golden Kite) [figure.1].

There exist many more striking examples of this contrast between material excellence and traditional beauty on one hand and war scenes on the other hand which cause astonishment or rejection as “unaesthetic” by many modern viewers. A *haori* ⁽²⁾ dated about 1894/95 shows a war ship firing its cannons and a burning

village in the background. Another *haori* from about 1937/38⁽³⁾ depicts fighter planes attacking, soldiers and explosions. Those textiles with war motives are not one of a kind or especially rare, quite a large number is preserved in various collections⁽⁴⁾. Production began during the first Sino-Japanese war (1894/95), but the largest part can be dated to early Shōwa times (mainly the period from about 1931 to 1942). Of course, martial motives with depictions of historical or mythical figures (e.g. historic samurai heroes or Empress Jingu) can already be found on earlier textiles⁽⁵⁾. However the war motives on the textiles central to this article relate directly to current events at the time of their production, so that the Japanese tailoring (i.e. *wafuku* 和服 in contrast to Western clothing) is the only (or most prominently) visible link to a historical tradition.

Beauty and Aesthetics: theoretical approach

The large number of preserved examples and the fact that those items were actually advertised by department stores like Mitsukoshi makes it clear that those textiles were popular items and part of what today is called fashion: However, that term also is associated with the idea of beauty or aesthetics. How can we reconcile that seemingly contradiction between beauty and war? Or is there no contradiction? Do we have to assume that the buyers and wearers of those textiles actually found those guns, explosions, fighter planes etc. beautiful and aesthetic?

Trying to answer these questions it is necessary to take a closer look at the term aesthetics. Kant defined beauty as what is pleasing to everyone in his “Kritik der Urteilskraft” (Critique of Judgment) first published in 1790⁽⁶⁾. According to Kant considering something as beautiful is the result of an overall aesthetic judgment which is not directed by personal interests but given with the expectation that it is shared by the society as a whole. In the Kantian sense this aesthetic judgment is a result of the reasoning of an individual. However is it really the individual all alone who is making that decision? Under the headline of “social aesthetics” the anthropologist and film maker David MacDougall advocates “a sensitivity to the aesthetics of community life—to forms and resonances that are often as complexly interlaced as the rhymes and meanings of a poem”⁽⁷⁾. For MacDougall, “‘Aesthetics’ in this context has little to do with notions of beauty or art, but rather with a much wider range of culturally patterned sensory experience”⁽⁸⁾, which leave its “distinctive material signature”⁽⁹⁾, but do not depend on an individual “valuation of a sensory experience”⁽¹⁰⁾. The social aesthetics of a group, regardless whether this group is small like the Indian boarding school MacDougall did research in, or large like the Japanese society of early Shōwa times, cannot be understood by isolating individuals or objects: Rather it encompasses the whole field of objects of everyday life, e.g. clothing or tableware, but also all other aspects of sensory experience like food or music.

As Roland Barthes⁽¹¹⁾ has shown, fashion carries distinct meanings. That most certainly is true for kimonos with war motives. However, applying the concept of social aesthetics to them reaches further, as this concept does “not mean a system of signs and meanings encoded in ... life, but rather the creation of an aesthetic space or sensory structure”⁽¹²⁾. Social aesthetics are actively created but unlike in a theater play where there is a clear distinction between actors and audience, this strict separation does not exist in the overall aesthetic field: For example by wearing and displaying a textile a consumer is part of the same aesthetic production as the designer or manufacturer of that textile. Although it has a multitude of actors, the aesthetic field cannot be

disentangled from the field of politics, rituals and history of a society. It is embedded in a whole web of power relations. Using the example of urban planning and development in the Indian city of Delhi Ghertner locates "sensory experience as a vibrant site of political contestation" ⁽¹³⁾ through which "any social order - the distribution of parts and positions in a community - produces and is produced by an aesthetic order" ⁽¹⁴⁾.

Another important point of distinction between a Kantian view on aesthetics and the approach taken in this paper is that Kant always situated the aesthetics within the subject and not the object. However, objects take on a (social) life of themselves, they become actants in a relationship with the human actors. This basic principle of the Actor-Network-Theory (ANT) developed by the French philosopher Bruno Latour ⁽¹⁵⁾ can be summarized as follows: "In simple ... terms, people or objects don't act in isolation, but instead have complex relationships at different moments across time and space that sometimes create things or make things happen. It is these relationships that 'perform' agency, not isolated humans or solitary objects" ⁽¹⁶⁾.

Therefore the title of this article "Aesthetics of war" makes reference to the much broader concept of social aesthetics. It is an attempt to bring together the different actors (both objects and persons) to better understand the social dynamics of the war periods within recent Japanese history, mainly early Shōwa times. While using war motive textiles as focal point of the research, it is necessary to broaden the view to all other aspects of material culture and also art, music, film, newspapers and commerce to achieve that holistic understanding.

The field of research: What are war motive kimono?

Before following this theoretical approach with two examples from Shōwa times, some overall background on the research field of war motive kimonos is necessary. The primary object of this inquiry are textiles cut in a traditional Japanese style and showing motives related to modern warfare, e.g. tanks, cannons, airplanes or patriotic symbols like the flags of Japan or Manchukuo ⁽¹⁷⁾. The types of textiles are mainly *nagajuban* (undergarment), kimono (both formal and informal types) and *haori* (an outer garment resembling a jacket or short coat), but some other objects e.g. *obi* (belt), or *omiyamairi* kimono (dress worn by small children on their first visit to a shrine) are also part of the collections surveyed (see note 4).

Most objects were produced during the following three periods: The period of the first Sino-Japanese war (1894/95), the timeframe of the Russo-Japanese war (production starting in 1904) and the 15 year war with production dates from 1931 to about 1942 after which rather few of those textiles were produced due to shortage of raw material and stricter state regulation. The textiles were not only used by men. Also women and quite frequently children wore them. Unfortunately photographic evidence is limited to a few images showing children. This may be due to the fact that on the adult textiles the motives were not on public "display" but often on *nagajuban* undergarments or on the inside (*haori* lining) hidden from view. However clear traces of heavy usage on some of the objects show that they were regularly worn and were not reserved for ceremonial or special occasions.

The type of cloth used varies broadly: While for the early samples from Meiji times mainly quite expensive silk textiles with complicated weaving and decoration techniques were used, during Shōwa times a great variety of materials was used, e.g. cotton, muslin, rayon and other artificial fibers, but also silk. They were

(mainly) printed, sometimes dyed. Certainly during Shōwa times industrial mass production was possible. Evidence of this mass production is the fact that for some pattern more than one identical piece is preserved (in different collections). In other cases the same pattern exists in different color or fabric choices. Also the same cloth sometimes has been used for different types of garment, e.g. for an adult *nagajuban* and a child's kimono. The textiles were sold through department stores and specialized textile dealers. They seem to be a product geared towards the middle class, as they were not cheap as advertisements show. Common additional motives are depictions of skyscrapers, fast trains or electric trams which convey a rather modern and urban or even international feeling. The target market of the textiles probably was the urban consumer in big cities and the fashion conscious upper class of smaller towns.

Bakudan Sanyūshi : Multimedia aesthetics

A common wartime motive originates in an event that took place on Feb. 22, 1932. The Japanese army attacked a Chinese position in the vicinity of Shanghai, where a barbed-wire blockade stopped the progress of the Japanese. Three engineer soldiers were ordered (or according to other versions of the story they volunteered) to carry a bomb to that blockade and clear a way for the troops with the explosion. They died when the bomb they carried in their hands exploded, either because they advanced so bravely or because the fuse supplied by the army was too short. The army publicized the event as a successful, heroic suicide mission. This story was immediately taken up by the leading newspapers. Because the confirmed facts were sketchy various different stories were reported by the newspapers⁽¹⁸⁾. Soon after the incident the newspapers coined two separate labels for the patriotic heroes they promoted to the public: Yomiuri Shinbun named them *bakudan sanyūshi* 爆弾三勇士 (the three bomb heroes) while Asahi Shinbun used the name *nikudan sanyūshi* 肉弾三勇士 (the three human bullet heroes)⁽¹⁹⁾.

The 1932 story obviously had a huge appeal to the public: Not only were countless newspaper articles published, and the story was also frequently retold in popular magazines, but many additional cultural productions were triggered. Within few weeks after the incident at least six different movies were produced, various books were published and theater plays soon put on stage⁽²⁰⁾. All of those productions were advertised in newspapers and also reviewed by the same newspapers. Thereby continuously further media attention was generated. Because no actual photographs of the event existed, the media created its own iconic image that showed three soldiers with helmets running in a line and carrying a long (cigar or torpedo shaped) bomb between them. This image was so frequently reproduced that it could be called a “logo” for the “brand label” *bakudan* or *nikudan sanyūshi*.

To fuel additional public interest, the media expanded the topic in a way that allowed for public participation: Both Mainichi Shinbun and Asahi Shinbun launched song writing contests in March 1932, less than three weeks after the incident. Over 200.000 entries to the two contests were mailed in and the winners announced with large headlines in the two newspapers. The winning songs from the public (as well as many other compositions related to this topic) were published as records. Like the books and films also those records needed to be advertised in the newspapers: The story of the *bakudan sanyūshi* generated not only newspaper sales, but also additional advertising revenues.

Other industries wanted to participate in this market: Toys, e.g. dolls, were produced which allowed children to play (with) the incident ⁽²¹⁾. After drawing on the sense of visual perception with newspapers and films and the auditory sense with the music, a tactile experience was made possible by the toys. To engage the gustatory and olfactory sense, *bakudan sanyūshi* themed food was created and sold e.g. in department store cafeterias ⁽²²⁾. Cookies baked with a form shaped like the three soldiers combined the heroes' "taste" with sight, while plates and cups decorated with the iconic image of the torpedo bomb allowed to transfer the *bakudan sanyūshi* "taste" to all kinds of food or sake ⁽²³⁾.

The textile industry did not want to be left out of this commercial success: The *bakudan sanyūshi* motive was used in at least 15 different designs for *haori* and *nagajuban* ⁽²⁴⁾. The textiles with those motives must have been very popular, often identical textiles can be found in more than one collection. All of those textiles show the image of the three soldiers with the bomb. This motive which could be called the logo is sometimes supplemented with a map of the location, a *kinshi kunshō* medal, barbed wire designs etc. While each of the media or objects mentioned in the previous paragraphs engage only one or two senses, the textiles actually allow for a complete embodiment: They make the wearer an avatar of the story. However, many of the textiles refer as much to the media popularizing the event as to the actual event itself. A common motive are newspaper "fragments" showing headlines about the event, or even further removed from the actual event, headlines about the song contest. Nearly half of the pieces surveyed show the musical scores of the songs. In many cases these scores can be identified as the songs from one of the newspaper contests [figure.2]. When considering the textiles as agents to facilitate the embodiment of a story one cannot but wonder who and what was actually embodied: the dying soldiers, patriotism and love of the fatherland or the popular media "stars" and dreams of winning a contest. Certainly the luxurious materials, e.g. black silk, and the elegant design of various pieces would make the wearer feel more like a star and less like a poor soldier about to die.

The popular hype over the *bakudan sanyūshi* soon died down. By mid 1932 the flood of newspaper articles on them was replaced by other stories of popular interests like a large number of lover suicides ⁽²⁵⁾. Nevertheless the topic never completely disappeared during the war years, as the following example shows. In 1934 a large bronze statue of the three soldiers was unveiled in the Tokyo temple Seishouji 青松寺 ⁽²⁶⁾. It was a three dimensional representation of the iconic "logo" of the soldiers. The statue fast became a popular motive for postcards. It also spawned the production of a miniature metal copy used as a gift for frequent shoppers of the sweets company グリコ Glico [figure.3]. The cycle of creating merchandise related to the heroes which was originally started by the newspapers continued. As a food manufacturer became involved also here more than only the sense of visual perception was engaged. Starting in 1932, the whole spectrum of media, music, and material culture with the *bakudan sanyūshi* motive became so ingrained into everyday live creating a real multisensory experience of this (war) story that it clearly exemplifies the social aesthetics of war.

Wearing, playing and learning war: Children's Worlds

Children were frequently at the center of the war aesthetics ⁽²⁷⁾. On one side children (and of course their parents; one can suspect it was mainly the mothers who did the actual shopping) were targeted as consumers:

Various war motive toys, e.g. toy guns, military trumpets, helmets and toy uniforms exist, but also items of everyday usage like pencil cases or school bags with war motives could be bought. An especially large quantity of war motive garments for children has been preserved, i.e. kimonos, *nagajuban*, vests etc. tailored in children's sizes with guns, battleships and similar images. Children's wear makes up about half of all the war motive garments in the collections surveyed.

What made war so popular for children? One explanation can be found in the media. Japanese magazines for children and young boys, e.g. *kodomo no kuni* or *shonen kurabu*, frequently published very colorful and graphically appealing images of war hardware, e.g. tanks, airplanes, battleship. Textile designers considered those images interesting, eye catching or fashionable, and used them as a readily available template for their own designs, so that similar images were reproduced on the textiles. Another reason for the popularity can be found in a reinvention (or updating) of traditions: Warrior motives, e.g. samurai helmets, were historically a popular theme for textiles for boys used for special events, e.g. *omiyamairi* (first shrine visit) and *shichi-go-san* (7th, 5th or 3rd birthday). Depictions of samurai heroes also were common on *nobori* (flags) used for *tango no sekku* 端午の節句(boys' day). The desire underlying the usage of those images of strength was to transfer those traits to the body of the wearer, i.e. make the boys as strong as a samurai. The image of soldiers with guns represents a visual modernization of the "traditional" samurai image but the function of the image remained basically unchanged. This visual modernization was not limited to *omiyamairi* kimonos. Another example are *nobori* for boys' day, which were updated in Shōwa times with a *bakudan sanyūshi* motive ⁽²⁸⁾.

Children were wearing clothes with soldiers and other war motives not only on special occasions but also when playing in the street. The concept of strength transfer can explain the popularity for everyday situations as well: Images of advancing soldiers or tanks made the children feel stronger or "empowered". Parallels can be drawn to the popularity of present day fashion motives, e.g. T-shirts with superman images.

In addition children themselves and their toys became a frequent design motive. Often soldiers on textiles have boys' faces, the horses are wooden rocking horses and the guns are toy guns [figure.4]. This representation cannot only be found on children's wear, but is also common in adults' clothing. By using children as motives in the aesthetics of war, war looked more like a game and less threatening. It seems that using children as actors served to create a more modern and somewhat future oriented image of war.

Finally when analyzing the role of children in the aesthetics of war the clear interest of the state in the (national) education and health of children has to be considered. The children should learn to be good soldiers and obedient citizens, they also needed to be healthy for the war. The motive of children studying which can be seen on propaganda posters ⁽²⁹⁾ was also used by textile designers, e.g. by producing textiles showing children with toy helmets studying in front of a blackboard. In addition sports motives in combination with war themes or flags link the bodily health of the wearer to the nation's success. Those children related textiles were not only engaging the mind but the whole body and all senses of their owners, and in that way contributed similar to the *bakudan sanyūshi* themed articles to the social aesthetics of war.

Conclusion

Looking at the motives from today's perspective could suggest that wearing such clothes was a conscious and active propaganda or a clear sign of committed love of the fatherland. However a key point of the theory of social aesthetics is that aesthetic assemblages function on a rather unconscious sensory level. When MacDougall writes, "nor would such meanings [of the school aesthetics] necessarily be understood by the boys themselves"⁽³⁰⁾ this can be transferred to the war motive textiles. Looking from this perspective of social aesthetics at the textiles it is quite possible that wearing them simply felt good, novel, urban - in short fashionable to their owners. The textiles could also help to convey personal strength on the bearer as evidenced by the children's wear, but do not necessarily imply a conscious support of war politics by the owner.

The textiles were part of a larger consumer culture (up to the literal consumption of war branded foods and cigarettes). Their production was mainly driven by commercial interests, although the original (underlying) stories were sometimes provided by the army e.g. in the case of the *bakudan sanyūshi*. Probably it is safe to assume that the government most often did tacitly approve of the commercialization of those motives, but it did not actively interfere in the production⁽³¹⁾. Those objects were created not by clearly visible state bodies, but were designed, produced and "performed" by many different actors, e.g. newspaper companies, textile producers, stores and the individual buyers and wearers. However, that does not imply that those designs did not help to draw the Japanese population towards war. All those actors together with the objects as actants and the media created an overall sensory aesthetic assemblage, which made war appear less terrible and helped manage the fears on an unconscious level.

The relevance to present times of studying the material culture of Japan's war periods lies in the subtle, but omnipresent and quite efficient workings of the (social) aesthetics of war: Similar mechanisms and power structures promoting political goals like war through material culture can be found in many present day societies all over the world.

NOTES

- (1) Museum Five Continents, Munich, number 2017-64-58
- (2) Museum Five Continents, Munich, number 2015-73-89
- (3) Museum Five Continents, Munich, number 2017-64-50
- (4) As part of my research I have reviewed various collections and seen more than 500 Japanese textiles with motives related to modern war. My special thanks goes to the Munich Museum Five Continents which supports me in my research and to Prof. Inui, Sapporo, for sharing her collection and knowledge with me.
- (5) Historically they were often used for *tango no sekku* 端午の節句(boys' day), see e.g. the early descriptions of Müller 1911.
- (6) "Das Schöne ist das, was ohne Begriffe als Objekt eines allgemeinen Wohlgefallens vorgestellt wird" (Kant 1922:48)
- (7) MacDougall 1999:4
- (8) MacDougall 1999:5
- (9) MacDougall 1999:4
- (10) MacDougall 1999:5
- (11) Barthes 2014[1985]
- (12) MacDougall 1999:9
- (13) Ghertner 2015:15
- (14) Ghertner 2015:17
- (15) Latour 2005
- (16) De Leon 2015:39f
- (17) Research has not (yet?) uncovered Western style clothing for adults showing war motives, which was produced during early Shōwa times in Japan. For Western style children's clothing, however, war motives were used, e.g. a child's sweater with a warship silhouette is preserved in a private collection in Tokyo. Also play uniforms (for example shown on the title of アサヒグラフ *Asahi Guraifu* of 02.03.1938) were relatively common for children.
- (18) Various authors describe the incident and its medial treatment, e.g. Inui 2007:94ff, Young 199:77ff. The topic is also comprehensively addressed in a forthcoming paper by Kramer and Kramer – special thanks to Prof. Kramer, University of Hawaii, for sharing this manuscript.
- (19) No guns or bullets were relevant for the attack. However the term "human bullet" probably was used because of its fame from the Russo-Japanese war. "Human Bullet" was the title of a highly successful novel written by Tadayoshi Sakurai in 1906 according to Shimazu 2001:69.
- (20) Young 1999:77
- (21) Yomiuri Shinbun 28.03.32
- (22) Young 1999:78
- (23) These cookie forms and cups are still frequently advertised on web sites, e.g. Ebay, by antiques dealers.
- (24) Those textiles can be found in various collections, e.g. the Ruf collection (now distributed between the Munich Museum Five Continents, the Linden Museum Stuttgart and the Völkerkundemuseum Heidelberg), the private collection of Prof. Kramer, Hawaii, or the private collection of Prof. Inui, Sapporo (see also Inui 2007:94ff.). The *bakudan sanyūshi* garments were mainly worn by men, but within the Ruf collection also a *haori* for a woman (JPK010) is preserved.
- (25) Young 1999:78
- (26) Asahi Shinbun 23.02.1934
- (27) For a full review of the topic see Frühstück 2017.
- (28) Inui 2007:95 image 120
- (29) Tajima 2016:58 image 59
- (30) MacDougall 1999:9
- (31) Only in the early 1940s the government did start to encourage the production of war motive textiles. However, as

those textiles were often luxury items and also allowed for a certain ambiguity (or at least the motives were difficult to control) the government pretty soon changed its approach to clothing: Rather than individuality the uniformity of a people's uniform *kokuminfuku* 国民服 was actively promoted.

Bibliographical reference

- Barthes, Roland (2014). *Die Sprache der Mode*. Frankfurt am Main: Suhrkamp.
- Frühstück, Sabine (2017). *Playing War. Children and the Paradoxes of Modern Militarism in Japan*. Berkeley: University of California Press.
- Ghertner, D. Asher (2015). *Rule by aesthetics. World-class city making in Delhi*. New York, NY: Oxford University Press.
- Inui Yoshiko (2007). *Zusetsu kimonogara ni miro sensō 図説 着物柄にみる戦争. Images of War; Kimono*. Tōkyō: Inpakuto Shuppankai.
- Kant, Immanuel (1922). *Kritik der Urteilskraft*. Fünfte Auflage. Leipzig: Felix Meiner.
- Kramer, Hanae Kurihara and Scott Kramer (forthcoming). *Mistaken for Martyrs: The Story of Japan's Most Beloved Suicide Bombers*.
- Latour, Bruno (2005). *Reassembling the social. An introduction to actor-network-theory*. Oxford, New York: Oxford University Press
- León, Jason de (2015). *The land of open graves. Living and dying on the migrant trail*. Oakland, California: University of California Press.
- MacDougall, David (1999). Social aesthetics and the Doon School. In *Visual Anthropology Review* 15 (1), pp. 3–20.
- Müller, Wilhelm (1911). Japanisches Mädchen-und Knabenfest. In *Zeitschrift für Ethnologie* 43 (H. 3/4), pp. 568–580.
- Shimazu, Naoko (2001). The Myth of the 'Patriotic Soldier'. Japanese Attitudes Towards Death in the Russo–Japanese War. In *War & Society* 19 (2), pp. 69–89.
- Tajima Natsuko (2016). *Puopaganda posuta ni miru nihon no sensou プロパガンダ・ポスターにみる日本の戦争*. Tokyo: Benseishuppan.
- Young, Louise (1999). *Japan's total empire. Manchuria and the culture of wartime imperialism*. Berkeley: University of California Press.

Figures

[figure.1] *Haori* showing soldiers on horses, silk and damast lining, about 1905, Museum Five Continents, Munich, number 2017-64-58.



[Figure.2] *Haori* showing *bakudan sanyūshi* soldiers and music, silk, about 1932, Museum Five Continents, Munich, number 2017-64-11.



[figure.3] Glico miniature stature of *bakudan sanyūshi*, about 1934-1937, metal, 4,5x10x2cm, author's private collection.



[figure.4] Detail from a boy's kimono, 1930s, cotton, author's private collection.



与謝蕪村筆《奥の細道図》とその制作背景について

猪瀬 あゆみ

関西大学大学院東アジア研究科 博士課程後期課程

[Abstract]

Yosa Buson (1716-1783) was a remarkably talented haiku poet and artist of *bunjinga* (Japanese Literati Painting) and *haiga* (*haikai* paintings) in the Edo period. He created many scrolls and folding screen based on the famous work by Matsuo Basho (1644-1694), *The Narrow Road to the Interior*. These productions were related to the revival movement of Basho's poetic style during the late 18th century.

This article examines the context in which Buson's extensive output of works inspired by Basho. Buson's efforts were not so much based on an inherent respect for Basho's work as on Buson's own economic needs, as works based on Basho's writings proved to be lucrative at the time. Opinions on Buson's motives vary among scholars. This paper also looks at whether Buson's painting style from scrolls differed from that for the screens and introduces the idea that Buson didn't just depict Basho's screen because they were popular, but that Buson showed respect for Basho through selection of Basho's *haikai* that reflected Basho's worldview.

The paper concludes that Buson maintained a fragile balance in his works between ideal of showing respect for Basho and the reality of needing money to live.

[論文]

はじめに

本研究は、江戸時代に画家であり、俳人でもあった与謝蕪村（1716-1783 年）が描いた《奥の細道図》に焦点をあて考察するものである。この作品は松尾芭蕉（1644-1694 年）著『おくのほそ道』（1702 年刊）を題材に描かれた作品であり、蕪村が描いた他の絵画作品とは異なり独自の画風を示すものである。蕪村は安永から天明期、50 代後半～60 代にかけて 10 数点の《奥の細道図》を制作したと考えられており（注 1）、現存する作品は主に画卷や屏風形式で遺っている。これには、芭蕉への俳風回帰を理想とする「蕉風復興運動」が大きく関わっていた。この運動は、《奥の細道図》が集中的に描かれた安永期から天明期にかけて盛行し、制作の要因として見逃せないものである。そして制作のきっかけに関して、先行研究では、尊敬する芭蕉への想いという理由以外にも、売るため商品という意見が存在する。この論文では、改めて《奥の細道図》を描いたきっかけについて、芭蕉への想いか、あるいはお金を稼ぐためだったのかどうかを考察する。そして作品の挿画（注 2）を検証するとともに、そこから浮かび上がる蕪村の芭蕉への想いを検討し、制作の要因について明らかにしたい。

具体的には、画卷と屏風形式の作品を比較して、描き方が異なっているかどうかを考察していく。また、芭蕉『おくのほそ道』の数ある場面のなかで、蕪村がなぜこれらの場面を選定して描いたのかを推察する。一般的には当時人気のある場面を描いたと考えられているが、蕪村の俳諧からの観点、あるいは芭蕉への想いが含まれていることを紹介し、知識人である蕪村が売り絵という理由だけでこの作品を描かなかったことを解明する。

また、当時生活費を稼ぐために作品を制作することは、絵師にとって何らおかしいことではないが、それだけが蕪村の制作背景だったと言い切れないことを論述する。そこにはお金という「現実」と、芭蕉への想いという「理想」が複雑に絡み合う微妙な問題が存在するため、先行研究では、少し極端

に言いすぎる面があるのではないかということ指摘する。そして、〈奥の細道図〉は蕪村の理想と現実が、危うい均衡を保ちながら制作された作品であるということを明らかにしたい。

第一章 先行研究の紹介

まず初めに、〈奥の細道図〉に関する先行研究のなかでも、制作背景・俳画について言及しているものを中心に紹介したい。

岡田利兵衛氏は「蕪村の俳画」（注3）のなかで、

蕪村は、こんな手間のこむ長篇物を、いくら評判がいいからといって、なぜそんなに次から次と多作したのであろうか。画料を得るためであれば、むしろ南画を描いた方がよかったのではないか。しかし彼はそうではなく、非常な情熱をこの画卷揮毫に燃やしているのである。彼の書翰の一つに「最早愚老生涯の大業」（安永七年七月五日付来屯宛）と、この画卷について書いている一節があるが、何が彼をしてそうせしめたかについて私はこう考えるのである。

すなわち、芭蕉の残した偉大なる俳文紀行を心から敬慕し—それは芭蕉その人への尊敬と相まって—その紀行「おくのほそ道」が亡失することがあるのを恐れて、一つでも多く各所に残しておきたいと念願しつつ画をかき入れて仕上げたのであると、こう思う。その先輩尊崇と顕彰の抑えきれない心の発露である。昔の作家は皆このように、心から先進者を大切にした。これはいつの世にも、後学の以て他山の石とすべきことであろう。

と述べ、蕪村が〈奥の細道図〉を描いた制作背景には、画料を得るために描いたのではなく、芭蕉への尊敬、原作『おくのほそ道』の亡失を恐れて残したいという想いからだったと言及した。

また、鈴木進氏は『蕪村と俳画』（注4）のなかで、〈奥の細道図〉に関する蕪村の書簡を紹介した後で、

このように安永年間だけで同一主題による作品を、かなりの数遺しているわけであるが、その理由は定かではない。といって、それを単に依頼による濫作とするには、蕪村の手紙の言葉のはしばしにもらされる自信からみても、いささか無理があろう。蕪村の気持をここで推しはかるのはまことに無理なことではあるが、あえていうならば、第一に明和七年（一七七〇）夜半亭二世を継ぐころから俳人・画人として、ようやく落ち着きをみせはじめる、いよいよその窮極ともいべき境地をさがしはじめたことで、周囲の事情も、蕪村の名声があがるにつれて、それを許すようになったこともあろう。

さらには、俳人として江戸で師宗阿に師事した以外は誰にもつかず、ただ芭蕉を慕って江戸中期の俳壇に新風を巻きおこした蕪村としては、芭蕉の代表作『奥の細道』を絵画化し、永く世に伝えようと考えたとしても、また当然のことであつたろう。

として、蕪村が俳人・画人として名声があがったことと、岡田氏と同様に原作『おくのほそ道』を永く世に伝えようとしたことを制作の理由に挙げている。

その他の意見としては、蕪村の俳画について狩野博幸氏「蕪村の俳画について」（注5）のなかで、

鈴木進氏の「蕪村論考」があつて、ちょっと興味深い文章が目をつく。（中略）「具体的にいえば中国明清画の影響と模倣を、あらわにみせる作品よりは、かつて『和臭』ありと惜しまれた作品（中略）、高く評価されるようになっている」（中略）これは蕪村の俳諧の再評価した正岡子規の時代のことでない。第二次大戦後の昭和三十八年、東京オリンピックを翌年にひかえた年に、第一線の蕪村研究者が書いた文章なのである。（中略）ほかならぬ日本人の作品のなかに「和臭」があるからといってそれ

を「惜しむ」という批評スタンスが、この時代まで続いていたことに対して、いうならば不穏な気持をすら覚えたのだった。

(中略) 蕪村画のなかに「わづかに」「あらはるゝ」「誹気」(注6)とは、要するに、かれの文人画風作品(南画というべきか)のなかに認められる「和臭」を意味しているが、蕪村の精神の運動として注目すべきなのは、「わづかに」どころではなく、「正しき画などかゝむには」「けっしてよろしからざる」「誹気」のみで成立する作品を、ある時期から意識的に多作するようになったことである。

いうまでもなく、私はかれの「俳画」のことをいっている。(中略) 一見すれば単なる省筆の戯画のごときものが、実は、蕪村にとっては、これまで幾多の画人(それも日本ばかりでなく中国においてすら)が、まったく試みたことのない新しい絵画なのである。だが、「尋常」(注7)の絵を見慣れている者たちには、その蕪村の揚言はあまりにも事々しく思えるにちがいない。だから、描き始めたばかりのこの絵に対する自分の思いは、今はまだ他言無用に願いたい、というのであろう。

(中略) 蕪村の俳画は、日本の絵画とは何かということについての、それまでの絵画への異議申し立てだったのであり、さらには、中国第一というドグマから脱けだすことを夢にも思わず、文人趣味のぬるま湯に浸りきった者たちの喉元に突きつけた、一本のあいくちだったのである。

と言及し、鈴木氏の論文について、江戸時代における竹洞のような批評スタンスが戦後まだ続いていたことを指摘し、日本人が「和臭」について残念に思うことに対して疑問を呈した。また蕪村の俳画について、当時中国を第一とする風潮から逸脱した、「あいくち」のような新しい絵画であると考察している。

次に、谷地快一氏は『与謝蕪村の拝景—太祇を軸として—』(注8)において、前述の岡田氏に意見に反対している。

蕪村の言説に添うかぎり、略筆淡彩や俳味をその要素としたり、南画の点景を手掛かりに人物画を俳画の典型と説くのは事実と異なる。俳画の落款には俳号を用い、奥の細道画卷などの大作が『おくのほそ道』という作品の亡失を恐れて遺されたというのも最層の引き倒しである。俳諧物の草画の範囲を逸脱する作品は風俗画や人物画等の系譜で説き直せばいいのである。

蕪村は職業画家であった。彼は絵画を売った収入で生計を立てる町絵師である。だから注文があれば何でも描いた。(中略) 俳諧物の草画も売れたから描いたのである。

谷地氏は<<奥の細道図>>を含めた蕪村の俳画を、芭蕉への尊敬ではなく売れたから描いた、と明確に述べている。

また、辻惟雄氏が「駆けめぐるマルティ芸術家の創意—蕪村展案内」(注9)のなかで、

手紙からうかがえるように、蕪村にとって俳画は、他の絵と同じく売るためのもの、商品でした。同時にそれは、即興の戯画であり、かれの多忙な生活の息抜きであつたと思います。日本の風物をほとんど描かなかった唐物趣味の蕪村にとって、俳画は、画題の和漢のバランスをとるための機会でもありました。(中略) 蕪村の俳句のすばらしさに対し、絵の方はともすれば軽い即興に傾き過ぎるのではないのでしょうか。

と言及している。辻氏も谷地氏と同様、蕪村の俳画は売るための商品であり、日本の風物を描くことによって、他の画題とのバランスをとっている(息抜き)、とした。

以上の先行研究をみていると、1960~70年代の研究(岡田・鈴木氏)では、蕪村は芭蕉への尊敬の想いから描いたことが制作背景に挙げられるが、1990年代以降になると(狩野・谷地・辻氏)、それ

までの先行研究に対する考え方への批判、また売り絵であったという意見に変化していく。谷地氏の言葉を借りると、1960～70年代における「最良の引き倒し」に対する反対意見が挙げられていくのである。

蕪村俳画の代表作として挙げられる<<奥の細道図>>は、「芭蕉への想い」か「売り絵」のどちらが制作背景にあったのだろうか。蕪村は絵画を売って生計を立てていたため「芭蕉への想い」だけとはいえない部分もある。なぜなら、『おくのほそ道』を後世に遺したいのであれば、手間のかかる画卷や屏風ではなく、扇面図や掛軸でもよかったわけである。<<奥の細道図>>に関して、高額取引を期待するような書簡も遺っているため、単純に尊敬する想いで10数点描いたと結論付けることはできない。また、蕪村は依頼内容によっては、依頼者に画題の変更を勧めるような書簡も存在し、何でも見境もなしに描いたわけでもないようである。そうすると、「売り絵」が制作背景とも言い切れなくなっている。そのため、実際に作品を見ながら、制作背景について考察していきたい。

第二章 画卷・屏風の挿画について

この章では、<<奥の細道図>>の画卷と屏風において、描き方の違いがあるかどうかを比較していく。現存する作品は以下の4点である。（模本について、この論文では言及しない）

- 〔図1〕 <<奥の細道図巻>>、紙本墨画淡彩、一巻、28.7×1843.0cm、安永7年6月、海の見える杜美術館蔵（以下、海杜本）
- 〔図2〕 <<奥の細道図巻>>、紙本墨画淡彩、上下二巻、（上巻）32.0×955.0cm・（下巻）31.0×711.0cm、安永7年11月、京都国立博物館蔵（以下、京博本）
- 〔図3〕 <<奥の細道図屏風>>、紙本墨画淡彩、六曲一隻、139.3×350.0cm、安永8年秋、山形美術館蔵（以下、山形本）
- 〔図4〕 <<奥の細道図巻>>、紙本墨画淡彩、上下二巻、（上巻）28.0×925.7cm・（下巻）28.0×1092.7cm、安永8年10月、逸翁美術館蔵（以下、逸翁本）

主に画卷と屏風の2種類の形態で制作されているが（注10）、形態によって鑑賞の方法が異なることは明らかである。画卷は、実際に作品を両手で掴んで次々と画面を開いて進めていき、個人的な空間で視覚と触感を使い、視線の動きが右から左へと進んでいく鑑賞方法となる。また屏風は、一度開いてしまえば、鑑賞者が複数いても同時に全体像を把握することができ、その部屋の空間を非日常的に変化させ、美しく飾り立てる役割も担う。このような形態の違いを含めて、<<奥の細道図屏風>>と<<奥の細道図画卷>>について考察していく必要がある。

屏風の筆致をみると、離れて鑑賞することを考慮し、人物の輪郭線が画卷と比較すると、よりはっきりと濃く、表情もわかりやすく明確に描いている。具体的な例を挙げるとすれば、「那須野」〔図5・6〕、「末の松山・塩竈」〔図7・8〕を比較すると（注11）、「那須野」では、芭蕉を追いかけてくる子供たちは、屏風は衣服や表情をより濃い輪郭線で描き、画卷では、筆致は簡略化されている。少年においては屏風のように笑っているのかどうかまでは判別しにくい。また少女は、筆致によって屏風の方がより大人びた印象を与える描き方になっている。

そして、「末の松山・塩竈」では盲目の琵琶法師は、屏風では衣服の輪郭線がはっきりとした筆遣いで、顔の輪郭線や表情に関しても明確に濃く墨で描かれている。それに対し、画卷に関しては、衣服の輪郭線を薄墨でとり、表情も髭や眉などを繊細な筆遣いで描いていることがわかる。屏風の方がはっきりとした筆致で髭も描かれていないため、より若々しい人物として仕上げている。これは屏風と画卷に優劣があるわけではなく、蕪村が形態を意識して描いているからであり、画卷は目と近い距離で作品を鑑賞するため、繊細な筆遣いでも問題なく挿画が完成する。

次に、<<奥の細道図>>では、一作品のなかでも芭蕉の表情が描き分けられていることを紹介したい。<<奥の細道図>>全体を比較すると、後期になるにつれて、その傾向がみられるようになってくる。特に最も後期に描かれた逸翁本をみると、芭蕉の表情が明確に描き分けられている場面もみられ、「別離」のように場面によっては厳筆とは言い難いような表情もみられる。「旅立ち」〔図4〕の場面では、

今から旅立とうとする芭蕉の表情が、凛々しく描かれており、「尿前の関」〔図9〕では、番人に怪しまれる芭蕉が困惑した表情となり、弟子の曾良によりかかるように弱々しい印象を与える。次に「別離」〔図10〕においては、曾良との別れの場面を、より濃厚な墨で描き、威厳のある人物とし仕上げ全体的に荘厳な印象を与える。最後の場面「大垣」〔図11〕では、無事に長旅を終え、安堵の表情をした芭蕉を薄墨で描き、周囲の人物と比較すると、別格の人物として浮かび上がるような構図になっている。もし売り絵であれば、このように表情を描き分けず、ある程度決まった形式で描けば、もう少し楽に制作できるはずである。このように蕪村が趣向を凝らして描いていたことをみると、単純に売り絵と言い切れないような側面がある。また、辻惟雄氏のいったような「軽い即興」とも言えなのではないだろうか。次は、原作『おくのほそ道』から作品について、考察していきたい。

第三章 原作『おくのほそ道』からの考察

蕪村は<<奥の細道図>>のなかで、芭蕉の『おくのほそ道』をどのように描いていたのだろうか。原作の内容と、蕪村の描き方を検証していく。

<<奥の細道図>>の特徴として、原作のクライマックスといわれる「平泉」の場面を描いたのは、制作年が最も後期となる逸翁本1点のみとなっている。その反面、比較的目立たない場面といわれる「須賀川」(注12)は全作品に描かれている。この点に注目して、蕪村がなぜそのような場面選定をして描いたのかを考察していく。

まず、原作『おくのほそ道』における「平泉」と「須賀川」の内容について、簡単に説明したい。「平泉」は、不易流行(永遠と流行は根元において一つであるとする芭蕉の俳諧理念)の思想が色濃く表現された自然と人間の営みを示した場面である。芭蕉は、藤原三代の栄華や義経の悲劇と、廃墟となった平泉の実景を重ね合わせて、人生も自然とともに恒久的に流転していくという感慨に浸っている。次に「須賀川」においては、俗世間を避けて隠栖する僧・可伸が、芭蕉の憧れの人物・西行(1118-1190年・平安後期の歌僧)を想像させる人物として登場し、芭蕉は可伸の隠者的な生き方に共感している場面である。

「平泉」〔図12〕では、挿画だけみると、一見どの場面か判別できないような仕上がりになっている。同じ逸翁本の「別離」〔図10〕と比較すると、似た構図になっており、全体的にあっさりとした挿画になっている。原作のピークともいえるこの場面を蕪村は1作品にしか描かず、挿画も人物のみで背景は描いていない。

「須賀川」〔図13・14〕をみると、「平泉」や他の場面と比較して、全作品において背景をしっかり描き、爽やかな色遣いになっている。似たような構図の「福井」〔図15・16〕をみると、旧友・等栽の家を訪れる芭蕉の様子を描いている。この「福井」では、芭蕉を描いているにもかかわらず、「須賀川」の場面では、どの作品にも芭蕉が描かれていない。〔図13・14〕は、作品の文章を読んだ鑑賞者がこの挿画をみることによって、芭蕉も共感した可伸の隠者的な生活を想像し、文章と合わせて西行のイメージへと想いを馳せるような重層的な構造を持つ挿画となっている。つまり、文章(俳諧)と挿画を合わせることにより、鑑賞者は西行を想像するような別世界を思い起こし、感慨に浸ることができるのである。

このことにより、原作の目立つ場面は描かない、またはあっさりとして描いて文章にまかせるような場面に仕上げ、目立たないといわれる場面では、背景を描く、またあえて芭蕉を描かずに暗に西行を示すような挿画にして、趣向を凝らした場面に仕上げている。ここでも、一つ疑問がでてくるのは、売り絵であればもっとわかりやすく芭蕉を描くことや、また目立つ場面を描けばよかったのではないだろうか。このようにして、「須賀川」をみると、あえて芭蕉を描かなかったことに蕪村のこだわりを感じることができるのである。

おわりに

こうして作品をみていくと、知識人であり画家でもあった蕪村は、屏風と画卷の形態を意識して描き分け、また一つの作品のなかでも、芭蕉の表情を変化させ、手間のかかる作品として仕上げている。また、場面の内容によって挿画に趣向を凝らし、芭蕉をあえて描かずに、蕪村が原作内容を汲み取ったような構図で描いていることがわかる。「平泉」だけでなく「象潟」のような有名な場面を描かずに、目立たない場面を描いたことに蕪村の芭蕉への想いを感じざるを得ない。場面選定は依頼者の意向もあったはずだが、前述したとおり芭蕉を描かずに、文章と挿画が相伴って別の世界を想像するような構図は、蕪村の芭蕉作品へのこだわりが反映されていると考えられる。第三章で述べたように、単なる商品であれば、もっと単純に描けばよかったはずである。

そして、先行研究では、〈〈奥の細道図〉〉の制作背景を「お金（売り絵）」または「芭蕉への想い」としているが、少し極端に言い過ぎるのではなかろうか。狩野氏のいったような「それまでの絵画への異議申し立て」を蕪村が意識していたかどうかかわからないが、単なる商品としてではなく、知識人である蕪村はそれなりの想いと自負の念を持って描いていたはずである。また、「尊敬する想い」というだけでは少し理想化されていて、蕪村の〈〈奥の細道図〉〉を冷静に評価できていない面もある。単純にお金とは言いきれないが、蕪村も生活費を稼ぐ必要があり、当時そうやって生活していたことは民間絵師の生き方として何らおかしいことはないのである。

こうして考えていくと、〈〈奥の細道図〉〉は蕪村自身の「理想（芭蕉への想い）」と「現実（お金）」という問題が複雑に絡み合って存在していることがわかる。先行研究のように、明確に制作背景がどちらとも言いきれない、「理想」と「現実」が危うい均衡を保ちながら制作された作品だったのである。そして、このような背景で描かれた〈〈奥の細道図〉〉は、現在も見る者を惹きつけてやまない蕪村の代表作として存在している。

注

(注1) 岡田彰子「蕪村筆奥の細道画卷について」『サピエンチア』、22号、英知大学論叢、1988年、248頁。

(注2) 蕪村が〈〈奥の細道図〉〉に描いた絵画について、先行研究では「挿図」、「挿絵」という言葉で表現されていることが多い。しかし、蕪村作品の「俳諧」と「絵画」の立場は対等であるにもかかわらず、「挿図」・「挿絵」という言葉では文章に絵画が添えられた印象を与え、「絵画」の立場が「俳諧」よりも下に位置すると捉えられかねない。そのため、本研究では、「俳諧」と「絵画」が対等であるということを明確に示すため、「挿画」という言葉を使用する。

(注3) 岡田利兵衛「蕪村の俳画」八木書店、1997年、37-38頁。

(初出:「蕪村の俳画」『日本美術工芸』、第302号、日本美術工芸社、1963年)

(注4) 鈴木進『蕪村と俳画』小学館、1976年、83-84頁。

(注5) 狩野博幸「蕪村の俳画について」『俳画の美 蕪村の時代』柿衛文庫、1996年、66-69頁。

(注6) 中林竹洞『画道金剛杵』(享和2年)より(前掲論文5より引用)

そは何があしきと云に、今の世に俳諧とかいへるものの気味、わづかに画中にあらはるゝを失とす。(中略)正しき画などかゝむには俳気けつしてよろしからず。

(注7) 蕪村書簡・安永5年8月11日付几董宛(前掲論文5より引用)

白せん子御さいそくのよし、則左之通遣申候。

かけ物七枚

よせ張物十枚

右いづれも尋常の物にては無之候。はいかい物之候。はいかい物之草画、凡海内に並ぶ者覚無之候。下直に御ひさぎ被下候儀は御容赦可被下候。他人には申さぬ事に候。貴下ゆへ内意かくさず候

(注8) 谷地快一『与謝蕪村の拝景—太祇を軸として—』新典社、2005年、268頁。

(初出:「蕪村—俳画と俳諧と」『江戸文学』26号、ベリかん社、2002年)

(注9) 辻惟雄「駆けめぐるマルティ芸術家の創意—蕪村展案内」『与謝蕪村—駆けめぐる創意—』MIHO MUSEUM、2008年、16頁。

(注 10) 『蕪村事典』(桜楓社、1990 年)によると、蕪村は画卷・屏風以外に、『おくのほそ道』に関連する作品を扇面図と掛軸形式で描いている。

(注 11) 場面名は『新版おくのほそ道』(瀬原退蔵・尾形仿訳注、角川学芸出版、2003 年)を参考にした。

(注 12) 藤田真一「蕪村の『奥の細道』—『壺碑』のえがき方—」『國文學』、89 号、関西大学国文学会、2005 年、27-44 頁。

参考文献

- ・岡田利兵衛「蕪村の俳画」(八木書店、1997 年)
- ・鈴木進『蕪村と俳画』(小学館、1976 年)
- ・鈴木進「蕪村論考」(『日本美術工芸』、日本美術工芸社、1963 年)
- ・柿衛文庫編『俳画の美 蕪村の時代』(柿衛文庫、1996 年)
- ・谷地快一『与謝蕪村の拝景—太祇を軸として—』(新典社、2005 年)
- ・MIHO MUSEUM 編『与謝蕪村—駆けめぐる創意—』(MIHO MUSEUM、2008 年)
- ・『蕪村全集』(講談社、第 6・9 巻、1998・2009 年)
- ・九州国立博物館編『国宝 大絵巻展』(九州国立博物館、2008 年)
- ・堀切実編『「おくのほそ道」解釈事典—諸説一覧』(東京堂出版、2003 年)
- ・瀬原退蔵・尾形仿訳注『新版おくのほそ道』(角川学芸出版、2003 年)
- ・楠元六男・深沢真二編『おくのほそ道大全』(笠間書院、2009 年)

図版



【図 1】



【図 2】



【図 3】



【図 4】

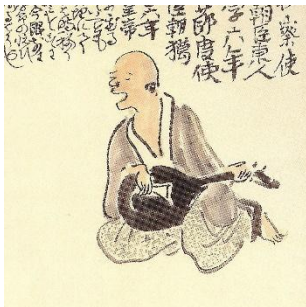
※【図 1・2・4】は、場面「旅立ち」部分



〔図 5〕（屏風・山形本）



〔図 6〕（画卷・京博本）



〔図 7〕（屏風・山形本）



〔図 8〕（画卷・逸翁本）



〔図 9〕（逸翁本）



〔図 10〕（逸翁本）



〔図 11〕（逸翁本）



〔図 12〕（逸翁本）



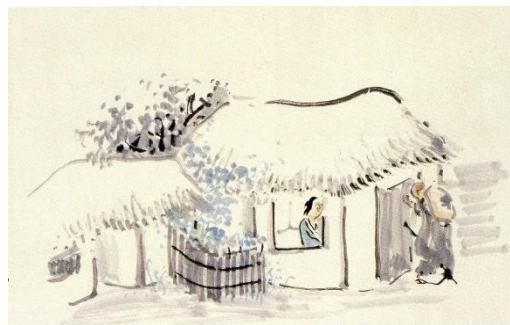
〔図 13〕（海杜本）



〔図 14〕（京博本）



〔図 15〕（海杜本）



〔図 16〕（京博本）

図版出典

〔図 1-9、11、13-16〕 逸翁美術館・柿衛文庫編『没後 220 年 蕪村』（思文閣出版、2003 年）

〔図 10、図 12〕『奥の細道画卷』（便利堂、〔1989 年〕）

Research on the Ryūkyū Kingdom Textile Collection at the Museum of Cultures, Basel

Anjuli RAMDENE

PhD candidate, University of Zurich,
Institute of Art History Section for East Asian Art History

[Abstract]

The Museum der Kulturen Basel (museum of cultures) holds one of the first ethnological collections of Europe, it consists of around 300'000 objects from all over the world. The collection boasts a large number of textile objects, many of which are still unresearched.

In August of 2017 a Survey headed by Prof. Dr. Yanagi Yoshikuni of the Okinawa Prefectural University of Arts took place at the museum. Its aim was to document and digitize the Ryūkyū textiles of the collection. Ryūkyū is a specific subset of textiles that were produced in Okinawa and its surrounding islands; they draw their name from the Ryūkyū kingdom. They can be categorised in two categories: *orimono* textiles and *bingata* textiles.

Orimono textiles are woven, the patterns and designs found in them are achieved through the *ikat* technique before the weaving of the cloth. Characteristic materials used in the Ryūkyū *orimono* are *Bashōfu*, banana fibre cloth, or *tombian*, a fibre whose origin is still scholarly contested. *Bingata* textiles are dyed with the use of a reserve paste and stencils (*katagami*). This technique gives them their characteristic white edges in the patterns. The *bingata* textiles are most commonly made of cotton but other materials can be used as well.

Both types of textiles are found in the museum collection, with multiple examples of *bingata* and *orimono* kimonos, as well as textile fragments. The kimonos are found in both Japanese and Okinawa style cut, the latter being a larger and looser style of garment. The collection offers an insight into the Ryūkyū textile world through its variety of garments in both style and pattern. The well-preserved state of the collection, its size, and its largely unknown status makes it a research subject well worthy of exploration.

The Tale of Genji and the Marriage among the Heian Nobles **: Discussions over Lady Murasaki**

三代地 春奈

MA Student, Kansai University Graduate School of Letters

〔要旨〕

平安貴族の婚姻は、通常、男性が正妻の家で同居するという形態を取っていた。また、当時の男性は、正妻の家に住んでいても他の女性の元に通うことができた。男性が関係を持った複数の女性の中で優位な地位にある妻が正妻とされ、それ以外の妻は正妻でない妻（妾‘しょう’）とされていた。このような婚姻慣習とは異なり、『源氏物語』において、最愛の妻である紫の上は、源氏に引き取られ、以後源氏と同居し続けるという婚姻形態を取っている。そのため、『源氏物語』における紫の上の地位を明白にしていくには、紫の上の妻としての地位を考察していくことが重要になる。したがって、本研究においては、平安時代の婚姻慣習の調査を元に、『源氏物語』における紫の上の妻としての地位について考察する。

近年の研究によると、平安時代には多様な婚姻形態が存在していたことが判明している。そのような多様な婚姻形態の中で、紫の上のように夫側が住居を用意する場合、妻は経済的、もしくは実家の勢力や身分の上において弱い立場にあったと指摘されている。また、身分が低く実家からの支援がなかったために、紫の上が自身の妻としての地位に苦慮する様子が、「朝顔巻」や「若菜上下巻」で描かれている。これらから、源氏以外に頼るものがない紫の上の立場は、不安定なものであったと言える。

しかし、源氏は、紫の上の喪に際して、かつて正妻であった葵の上の喪の際に着用したものよりも濃い色の喪服を着用している。当時は、喪服の色の濃さは死亡した人物との関係の深さと関わりがあったため、源氏は葵の上よりも紫の上と深い関係を結んでいたと言える。その上、正式な妻でなければ、喪に服する必要もないと法律で定められていた。したがって、源氏と紫の上は当時の慣習とはかけ離れた関係であったと言える。また、紫の上は、天皇から正妻のみが受けられる待遇を受けていたことから、紫の上が世間から源氏の妻として認められていたことが窺える。以上から、紫の上は、不安定な立場にあるものの、源氏の寵愛を勝ち得た、社会通念上の正妻、妾の区別からは逸脱した存在であったと言えるのではないだろうか。

紫の上は、身分の上での妻としての地位は決して優位ではなかったが、源氏に寵愛され世間からも認められていた妻であったと言える。以上から、『源氏物語』においては、不安定な立場にありながら源氏から生涯誰よりも愛されるという、現実にはありえない紫の上と源氏の関係が創作されていることが読み取れる。このような紫の上の姿によって、当時の女性の不安定な生き方と源氏の純粋な愛情が表されていると考えられる。

[Thesis]

1. Introduction

It is thought that Lady Murasaki was the dearest wife of Hikaru Genji but she was not his lawful wife. However, there have been various research about the position of Lady Murasaki. Lady Murasaki and Genji did not marry formally, so several studies were focused on the relationship between the form of marriage and the position of Lady Murasaki. Originally, *Kakaishō* (河海抄)⁽¹⁾ said that Lady Murasaki was not his lawful wife because they did not marry formally in consideration of Chinese marriage custom. Based on this opinion, previous research proposed that Lady Murasaki was not his lawful wife. However, 胡(2001)⁽²⁾ pointed out that there were difference between Chinese marriage custom and Japanese marriage custom. She thought that

formal marriage had no relation to the position of wife. Therefore, in terms of the marriage customs, it remains unclear whether she was in the superior position over the characters. In *the Tale of Genji*, Lady Murasaki was adopted into Genji since her childhood and lived at his home. In the end, she was recognized as Genji's precious wife around her. However, recent investigations have demonstrated that there are many types of marriage in the *Heian* period and the wives who lived in husbands' home were powerless. For example, McCullough (1978) said that wives at that times usually gave her husbands a residence. In addition, Several studies have reported that a wife's house owed the first responsibility of child support and training. Also, there was a gap among wives. In those days, a family of wife had to take care of her husband. However, 胡(2001)⁽³⁾ and 青島(2015)⁽⁴⁾ have demonstrated that there were many types of marriage. For example, in a matrilineal marriage (妻問婚), a wife usually prepared a residence. However, in case of a powerless wife, a husband prepared a residence like Lady Murasaki.

Most of all, noblemen seemed to want to get married with wealthy and high position women in those days. For example, Sakon-no-syosyo(左近少将), who was a fiancé of Ukifune(浮舟), realized that Ukifune was not the biological daughter of Hitachi-no-suke(常陸介). He broke off his engagement with her and made another engagement with the biological daughter of Hitachi-no-suke because he want financial support of Hitachi-no-suke⁽⁵⁾. On the other hand, Lady Murasaki was not wealthy and without her parents' support. She had no one but Genji to depend on. Moreover, Genji got married with the Third Princess who was the highest position woman in Genji's wives in his later years. However, she was loved by Genji during his whole life. As described above, there is a difference between the marriage customs in those days and *the Tale of Genji*.

This paper discusses the position of Lady Murasaki in *the Tale of Genji* based on the marriage customs of the *Heian* period. Firstly, I describe the outline of *the Tale of Genji* to confirm the position of her. Secondly, I focus on the marriage among the *Heian* nobles and organize previous research. Finally, I review the position of Lady Murasaki in *the Tale of Genji*.

2. The Outline of *the Tale of Genji*

Genji was born as a child of Emperor Kiritsubo and Lady Kiritsubo. Lady Kiritsubo was delicate in health. Therefore, she died when Genji was three years old. Genji was a perfect man at everything. However, his mother, Lady Kiritsubo was not a woman of good social position. Therefore, he was not able to become emperor. After Lady Kiritsubo died, Emperor Kiritsubo married Lady Fujitsubo. Lady Fujitsubo was said to resemble Lady Kiritsubo by people around Genji. Genji had interested in her because he had pursued his mother's image since he lost his mother. Meanwhile, he began to love Lady Fujitsubo although she was his mother-in-law.

However, while Genji has secret feelings for Lady Fujitsubo, he got married lady Aoi because his father, Emperor Kiritsubo recommended this marriage. Thus, their marriage didn't last long. At that time, Genji met Lady Murasaki. He adopted her because he knew that Lady Murasaki was Fujitsubo's niece and she was in an unhappy situation. Her mother died, and her father rarely visited her. Genji came to be attracted to Lady Murasaki while living together. Therefore, after Lady Aoi died, he got married Lady Murasaki. However, in Genji's later days, he got married the Third Princess of Emperor Suzaku because Emperor Suzaku asked him to take care of her. The Third Princess was the highest position woman in Genji's wives. Therefore, Lady Murasaki felt uneasy.

As I mentioned, Genji adopted Lady Murasaki since her childhood, and got married her when she grew up to be a woman. After that, Genji had to leave the capital because the scandal was disclosed. When he moved to Suma: It was pretty far from the capital, he met Lady Akashi, and he had a daughter by her. Their daughter was called Princess Akashi. After Genji came back to the capital, Lady Murasaki adopted Princess Akashi because Genji wanted Princess Akashi to enter Imperial court. Genji wanted to give Princess Akashi good education. He thought that Lady Murasaki deserves to be a trainer of Princess Akashi. She brought up her with deep affection and care. Later, Princess Akashi became to enter Imperial court.

However, in Genji's later days, he got married the Third Princess of Emperor Suzaku. She was the highest position woman in Genji's wives. Lady Murasaki felt uneasy because she thought that the Third Princess came to threaten the position of her as Genji's wife. After all, Genji loved Lady Murasaki as before. Although Lady Murasaki was not able to trust Genji because he made an effort to get along with the Third Princess outwardly. However, Lady Murasaki got sick with anxiety and passed away with Genji at her side.

Lady Murasaki was brought up by Genji and she was loved by him all her life. However, she kept worrying about his relationships with women because her position is based only on Genji's love. She had no one but Genji to depend on.

3. Difference Between the Marriage of *Heian* Nobles and *the Tale of Genji*

A lawful wife in the *Heian* period had three features as follows. First, a husband lived in a lawful wife's home. Second, a lawful wife's family was wealthy and finally, her parents were in a high position at the court society. A nobleman seemed to want to get married with a woman as high position as possible because he wanted to use the wife's family power to succeed in life. On the other hand, Lady Murasaki was adopted into Genji since her childhood and lived at his home. Recent investigations have demonstrated that a wife who lived in husband's home was powerless. Moreover, Lady Murasaki was not wealthy and without her parent's support. She was inferior to the Third Princess in the lawful wife's position. However, Genji loved her during his whole life. From the above result, the marriage between Genji and Lady Murasaki was different from a typical form of marriage. Thus, most of previous research mentioned a form of marriage and it has not been clarified whether Lady Murasaki was a lawful wife or not. This study was performed to determine the position of Lady Murasaki by how she was treated. For examining the position of Lady Murasaki, I provide the difference between the marriage customs at that time and *the Tale of Genji*.

Lady Murasaki was allowed to get on *Teguruma*(輦車) [figure.1] by the Emperor Reizei when Princess Akashi, her daughter-in-law, entered Imperial court. *Teguruma* is a kind of palanquin for carrying people. And *Teguruma no Senji*(輦車の宣旨) means emperor allows to get on it. The Chapter of *Fuji no Uraba*(藤裏葉) says as follows:

出でたまふ儀式のいことによそほしく、御輦車などゆるされたまひて、女御の御ありさまに異ならぬを、思ひくらぶるに、さすがる身のほどなり。……(3: 451)

At that time, a lawful wife was only allowed. 増田(2007) said that it was a honorable treatment for Lady Murasaki in view of historical facts.

Moreover, when Genji went into mourning for Lady Murasaki, he wore a mourning dress in a darker

color than for his first lawful wife, Lady Aoi. In the *Heian* period, when people lost the closer person, the color of the mourning dress became darker ⁽⁶⁾. For example, when they lost their parents or their masters, they wore a black mourning dress. When they lost their sister or brother, they wore a grey mourning dress. Also, when they lost wife, they usually wore a grey mourning dress. In Chapter of *Aoi*(葵), Genji made a poet when Lady Aoi died:

限りあれば薄墨衣あさけれど涙ぞ袖をふちとなしける (2: 49)

According to the custom, there was a regulation in the color of the mourning clothes. It was a custom in the *Heian* period. Then, Chapter of *Minori* (御法) says as follows:

「薄墨」とのたまひしよりは、いますこしこまやかにて奉れり。……(4: 516)

This means that, when Genji lost he wore a mourning dress in a darker color than for his first lawful wife, Lady Aoi. Further, as I mentioned, when lawful wife died, husband must wear mourning dress for 3 months. On the other hand, when non-lawful wife died, husband didn't need to wear mourning dress.

In addition, it can be said that Lady Murasaki was an able wife because Genji and people around them recognized as Genji's wife. It is predicted from the following three points. The first point is that even when Genji leaves the capital in order to retreat to Suma, she protected the residence. When Genji retired to Suma, she secured the employee and property without losing it. It seems that Genji arranges for management of the residence when leaving the capital, but it can be said that her personality also has a big influence. Even though *Suetsumuhana*(末摘花) thought from the fall of the father after the death, she seems to be an able person trusted by servants. The second point is that she nurtured Princess Akashi and let her enter Imperial court. Originally, Genji picked her as a foster mother of Princess Akashi. It is a proof that she had won the trust of Genji. In fact, she grew Princess Akashi well. Later, Princess Akashi kept receiving love affair and became empress after the entrance. The result of her education is appearing. As Princess Akashi loves her like a real mother, it can be said that she has raised Princess Akashi with affection.

(明石の姫君は) しばしは人々求めて泣きなどしたまひしかど、おほかた心やすくをかしき心ざまなれば、上 (紫の上) にいとよくつき睦びきこえたまへれば、…… (Usugumo 薄雲, 2: 435-436)

This means that, Princess Akashi lived tears immediately after she was taken over by Lady Murasaki, but it is a scene of gradually embracing her favor with her gradually. It can be read affectionate figure of Lady Murasaki for Princess Akashi. The third point is that, even after the Third Princess get married with Genji, she kept a gentle attitude at least on a superficial level, and was also close to the Third Princess. People around her sometimes make her rumors, but she continues to stay in an unchanging attitude. When Genji cannot love the princess and visits her, she acts by acting as a reminder of Genji that he must visit the Third Princess.

In that respect, Yūgiri, the son of Genji, thought that it is no wonder that Genji cannot become serious against the Third Princess, comparing the Third Princess whose childish part is conspicuous and Lady Murasaki with excellent qualities .

かやうのことを、大将の君も、げにこそありがたき世なりけれ、紫の御用意、気色の、ここの年経ぬれど、ともかくも漏り出で、見え聞こえたるどころなく、しづやかなるを本として、さすがに心うつくしう、人をも消たず身をもやむごとなく、心にくくもてなしそへたまへることと、見し面影も忘れがたくのみ思ひ出でられける。…… (Wakana: Jo 若菜上, 4: 134)

Yūgiri was also loved Lady Murasaki during his whole life because of her excellent qualities. After Lady Murasaki died, Yūgiri remember her excellent personality.

From these reasons, it can be said that Lady Murasaki was a special wife for Genji.

4. Conclusions

In the court society, Lady Murasaki was a powerless wife because she was not able to depend on her parents. However, in light of the evidence, she was separated from a conventional wisdom and accorded privileged treatment as Genji's dearest wife. In spite of her dominant position, her inner heart often driven by uneasiness when Genji got the hots for Lady Asagao and got married with the Third Princess. The reason is that they were rather on the social dominant position in the relationship with Lady Murasaki. On the other hand, it is clear that Lady Murasaki was acknowledged as a lawful wife of Genji although she didn't have support of her family. When Genji went into mourning for Lady Murasaki, he wore a mourning dress in a darker color than for his first lawful wife, Lady Aoi. As noted above, in the *Heian* period, when people lost the closer person, the color of the mourning dress became darker. Further, Lady Murasaki was allowed to get on *Teguruma* (輦車) by the Emperor Reizei. At that time, a lawful wife was only allowed to get on it.

To sum up, Lady Murasaki was acknowledged as a lawful wife of Genji for the following reasons. First, when Genji leaves the capital in order to retreat to Suma, she protected the residence. It showed that she was a person whom servants felt able to trust. The second reason is that she nurtured Princess Akashi and let her enter Imperial court. It is a proof that she had won the trust of Genji. In fact, she took care of Princess Akashi well. Later, Princess Akashi kept receiving love affair and became empress after the entrance. This success was the result of education by Lady Murasaki. The third point is that, even after the Third Princess got married with Genji, she kept a gentle attitude at least on a superficial level, and was also close to the Third Princess.

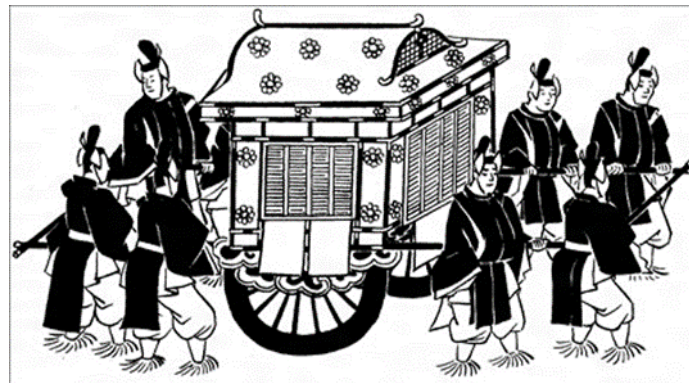
All of this points to the fact that Lady Murasaki was an ideal wife suitable for Genji. Understanding her high-position in Genji's wife can help reveal that Genji loved her deeply. The relationship between Genji and Lady Murasaki represents unstable lives of women in the *Heian* period and Genji's true love for Lady Murasaki.

NOTES

- (1) 高群(1966), 高群(1967).
- (2) McCullough(1978)
- (3) This text are taken from 新編日本古典文学全集 (2006).
- (4) 増田 (2007).
- (5) 阿部 (1994) 新編日本古典文学全集 源氏物語, 6:24-25.
- (6) 阿部 (1994) 新編日本古典文学全集 源氏物語, 4:449.

BIBLIOGRAPHICAL REFERENCES

- ・会田範治『註解養老令』(有信堂、1964 年)
- ・青島麻子『源氏物語 虚構の婚姻』(武蔵野書院、2015 年)
- ・江守五夫『物語にみる婚姻と女性：『宇津保物語』その他』(日本エディタースクール出版、1990 年)
- ・木村佳織「紫上の妻としての地位—呼称と寝殿居住の問題をめぐって—」『中古文学』第 52 号 (1993 年)
- ・胡潔『平安貴族の婚姻慣習と源氏物語』(風間書房、2001 年)
- ・マッカロー、ウィリアム「平安時代の婚姻制度」(『社会科学』24 号、1978 年)
- ・増田繁夫「紫上の妻としての地位—十世紀末の貴族社会の結婚・夫婦関係—」(森一郎、岩佐美代子、坂本共展編『源氏物語の展望 第一輯』三弥井書店、2007 年)
- ・西田直敏『敬語・五 敬語の語彙と表現形式』(山口明穂『国文法講座 2・古典解釈と文法—活用語』明治書院、1987 年)
- ・小学館国語辞典編集部『日本国語大辞典 第二巻』(小学館、2006 年)
- ・高木和子『源氏物語の思考』(風間書房、2002 年)
- ・高群逸枝、『招婿婚の研究』(理論社、1966 年)
- ・高群逸枝、『日本婚姻史；恋愛論』(理論社、1967 年)
- ・玉上琢彌『紫明抄 河海抄』(角川書店、1991 年)



[figure.1] Teguruma (『日本国語大辞典』)

身分制の固定化

—徳川時代寸前の被差別民—

Lucie MORNSTEINOVÁ
カレル大学哲学部日本研究科 博士課程

[Abstract]

In this paper, I would like to briefly introduce the institutional and social processes as well as some of the Laws and Decrees which helped to set apart the marginalized groups from the commoners and peasants at the end of 16th century Japan.

As is well-known, the marginalized groups suffered an increasing degree of official discrimination throughout the Tokugawa period at both state and local level. Towards the end of the 18th century and at the beginning of 19th the frequency of issuing decrees pertaining to their housing, clothing, hairstyles, was rising. Theories about their non-Japanese origins were drawn up and the discrimination often continued even into the afterlife.

In the course of this paper, I am going to try to shed some light on the following questions:

- 1) When did the process of solidification of the premodern marginalised groups status begin?
- 2) Did the marginalised groups also share in the public space of Tokugawa Japan?

The contents of the paper consist of:

- Brief introduction to the late Sengoku period marginalised groups and quick introduction of their connection to the ancient concept of ritual defilement *kegare*.
- Socio-political climate in the second half of the Sengoku period - the case of Suruga domain.
- Some of the legal measures leading to solidification of the status order, mainly legal measures promulgated by Toyotomi Hideyoshi.
- The settlements of marginalized groups in the new geography of Tokugawa period - use of discriminatory language in the Tokugawa period maps.

The topic of this presentation is also a starting point for my dissertation thesis, in which I am going to research in some detail the Laws and Decrees pertaining to outcaste groups during the Tokugawa period promulgated in the Kantō area.

はじめに

本論文において徳川時代寸前の身分制の固定化に影響を与えた社会的で制度的な事情を手短に紹介したいと思う。ただし、社会全体の発展を取り扱うのは少々難しいため、現在、被差別民、未開放部落、被差別部落などと呼ばれている団体の先祖に集中することにした。そのようにして、戦国時代において社会的な階級がいつ、どうやって区別されたかを論じたいと思う。

被差別民の団体が徳川時代において幕府政権や地域権威によって徐々に上昇する差別装置の対象になったことはよく知られている。家の広さ、服装、髪形などに当てはまる様々な制限が次々と発布された。その上、徳川中期から被差別団体の他国由来の仮説が現れ(注 1)、18 世紀から戒名にも差別的な字「皮など」を付け、差別が後生にも続くようになった(注 2)。

本論文では次の問題を中心に進めたい。第一の問題は「身分制の固定化はいつ始まったのか」。第二の問題は「被差別民の団体はどこに存在していたのか」。言いかえると、思考上に徳川時代の社会全体が同じ(抽象的な)スペースを共用したのか、あるいは身分制の固定化によって、被差別民の団体はどこか他のスペースに移動されたのかということである。

徳川時代の被差別民と身分制の固定化というトピックは著者の博士論文の題目でもある。これからの博士論文において徳川時代の関東地方の被差別民に対して発布された町触れや法令などを分析し、発布された理由を研究する予定だ。

なお、これらの研究はカレル大学助成金制度 GA UK No. 806217 によって援助された。

第一章 先行研究

徳川時代の社会的な構造、ケガレ観念や近世の被差別民の生活条件について論じた研究の中で影響力のある著作(注 3)は網野善彦『Rethinking Japanese History』(Center for Japanese Studies, University of Michigan Ann Arbor, 2012 年)、宮田登『ケガレの民俗誌』(人文書院、1996 年)、Herman Ooms『Tokugawa Village Practice: Class, Status, Power, Law』(University of California Press, 1996 年)、David Howell『Geographies of Identity in Nineteenth-Century Japan』(University of California Press, 2005 年)や山梨大学のGerald Groemer「The Creation of the Edo Outcaste Order」(Journal of Japanese Studies, Vol. 27, No. 2, 2001 年夏)などがある。また朝尾直弘編『身分と格式、日本の近世第七 編』(中央公論社、1992 年)も非常に有用な研究であり、Daniel Botsman『Punishment and Power in Making of Modern Japan』(Princeton University Press, 2005 年)も非常に興味深い論文である。

第二章 戦国時代の被差別民・簡略的な紹介

様々な職人の団体が古代から賤視され、ケガレ観念と繋がっていたことがよく知られている。ケガレ観念は元々日本列島の民族宗教のアスペクトの一つで、民族宗教が様々な影響を受けながらケガレ観念も変化させ続けた。そのため7世紀以前に消極的な側面も積極的な側面があっても(注 4)、数百年後にはこの積極的な側面が殆ど消えたのだ。平安時代に移ると、ケガレ観念の社会的な役割が変化し、宮中における政治的な折衝に直接影響を与えるようになり(注 5)、安土桃山時代や江戸時代の始まりになるとケガレ観念の社会的な重要性が前より低くなった。同時に職業や職人団体との繋がりが時代に連れて強くなったり、弱くなったりすることもあり、ケガレ観念は決して不変的な観念ではなく、場面によって変化し、ある条件が満たされなければ当てはまらない複雑な観念であった。その性質を描写する二つの例を挙げたいと思う。

一つ目の例は、徳川時代より五百年ほど前の平安時代の清潔感である。当時、道端に横たわる死体や死んだ動物の遺体の横を通り過ぎるのはケガレにはならなかったが、悪病にかかった人や死にかけている人の住宅を訪問した場合、ケガレとされた。なお、この時のケガレは伝染病のように人から人へと移ると考えられていた。(注 6)。

二つ目の例は、社会的な差別が固定化を迎えた安土桃山時代において、エタやヒニンの身分の人が正式に命令を受けて旅をした場合、刀を持ったり、武士が利用する旅館での宿泊が許可されたということである(注 7)。

さて、戦国時代後半の被差別民はどんなグループであったかを手短かに紹介するため、ケガレ観念との繋がりを基にして被差別民の団体を次のカテゴリーに区別した。いうまでもなく、以下のカテゴリーには問題が多く、著者の理解に基づいた整理にすぎない。

職業との繋がり	—	カワタ、カワラモノ、漁師など...
犯罪や刑罰との繋がり	—	ハウメン、ヒニン...
迷信や超自然との繋がり	—	エタ、エトリ、きよめ、童、癲病者、葬式の僧侶...

本論文では、主に上の一行目と二行目のグループに集中して分析していく。なぜなら、徳川時代に入る前の三行目の迷信や超自然との繋がりのある団体は少々特別であり、今の段階では著者には参考文献が足りないのである。

なお、ここで主張したい点が二つある。一つ目は、徳川時代において被差別民の団体の名付けが変化し、おおそ全ての被差別民の団体がエタやヒニンと呼ばれるようになったこと。二つ目は戦国時代の被差別民の団体はあまり固定化されておらず、戦国時代や安土桃山時代において、社会的な移動はある程度であれば可能であったということである。言いかえると、ケガレ観念と繋がった職人が賤視されたのは、ケガレ職業を続ける限りで、他の職業に就けば、ケガレ観念とのつながりが消されたのである(注 8)。

第三章 戦国時代後半の社会的・政治的な背景

次に、戦国時代後半の社会的、又は政治的な背景を短く説明したいと思う。日本人であればご存知だと思うが、戦国時代後半は争いが多く、個人や村や国の間の諍いが少なくなかった時代である。当時の生活条件を明確にするため、いくつかの例を挙げたい。その一つは当時「ヒトカドイ」(注 9)という現象が起こっていた。「ヒトカドイ」は基本的に誘拐だが、一人の人間ではなく、村全体の誘拐だった。目的は、国の農業生産を高めることだった。いうまでもなく、そのことから田舎にも銃や武器が大量に普及していったことが理解できるだろう。

他方で、いくつかの商人が多い町は「楽市」という自由な町に進展した。「楽市」は場合によってはお寺と繋がっており、他の権威を認めなかったのである。楽市は戦国時代後半の取引のセンターになり、その上、喧嘩の相手が交渉できた中立的な地帯でもあった(注 10)。

続いて、被差別民の団体(この場合は主に革職人)の生活条件を明らかにするため、戦国時代後半の駿河国の「カワタ」政策を分析してみる(注 11)。駿河藩は今川家の領域であり、現代の静岡県に当たる。

今川氏親朱印状によると、今川氏親が 1526 年(大永六年)に駿河藩府中西方にある川原新屋敷の所有権をある彦八という皮革業者に与えた。だがその条件は、毎年必ず「皮のやく」を提出することだった。今川氏親朱印状は同時に、川原新屋敷が永く彦八の屋敷であったことと、彦八がおそらくある時点で、そこに定着させられたことを暗示する。今川氏親後室寿桂尼朱印状によると、1528 年(享禄元年)に今川氏は、彦八に急用の時には国を走り回り皮革を調達すべきである。と命じた。1543 年(天文十三年)にたくさんの行商人が駿河国で皮革を買い、他国へ持ち出して売買していることが明らかになり、対策として今川氏が皮革を差し押さえることを命じた。1548 年(天文十八年)に今川氏が「皮作商売」を八郎右衛門と彦太郎の独占にしたのである。そして、緊急の場合は二人が今川氏の命令に従うよう定めた。このようにして今川氏が皮革商売に統制を加えた。今川氏はさらに 1559 年(永禄二年)に急用につき次年度分の皮革の調達を命じた。その翌年、今川氏は桶狭間の戦いで織田信長軍に敗れたのである。

上記の事例で二つの大事なポイントが見えてくと思う。一つ目は戦国時代後半の皮革と革製品の重要性である。当時の革職人が社会思考でケガレ観念と繋がっていても、革職人の団体自体の有無や彼らが作った製品がある意味で資産になったことは明らかだと考えられる。

二つ目のポイントは、先に説明した通り、皮革と革製品の流動に統制を加えることは非常に重要だったことである。(桶狭間の戦いの前に革製品の需要が上昇した。)革製業を統制するには、先ず革職人を治めることであったため、戦国の領主が革職人を決められた土地に移動させたのだ。それが結果的に、その後の革職人の社会的な地位や位置づけに強く影響を与えたとも言える。

第四章 身分制の固定化に関する法令

ここではいくつかの豊臣秀吉が發布した法令を手短に分析しようと思う。以下の法令は戦国時代末期、社会全体を治めて、安定させるために發布した法令である。

1587	喧嘩停止令	(天正 15 年)
1588	刀狩	(天正 16 年)
1588	海賊停止令	(天正 16 年)
1591	太閤検地帳	(天正 19 年)
1591	身分統制令	(天正 19 年)

簡単に説明すると、喧嘩停止令は個人や村の間の争いを禁止し(注 12)、海賊停止令は漁師又は海賊に向けられ海賊を制限するように發布された法令であった(注 13)。次々と作成された太閤検地帳はいくつかの目的があり、最大の目的は人口と農業産出の管理と機能的な土地税制を作ることであった。太閤検地帳では、被差別民の団体に属する人々が初めから差別用語を名前に付けて記録された(注 14)(カワタ、カワヤなど)。天正 19 年の身分統制令は正式に武士と町民や百姓という社会的な階層を区別し、社会的な移動を禁止したのである(注 15)。

豊臣秀吉の政権には複数の目的があった。国又は人民を治めるために、地方の非武装化と着実な土地税制の樹立が優先され、さらにそれだけに止まらず、各社会的な階層の身分を区別し、各身分に特定の義務を与えた。歴史家の考えによると(注 16)、豊臣秀吉が身分統制令を發布した実際の理由は文禄・慶長の役のために必要な素材を集めることだった。だが、豊臣秀吉が身分統制令を慶長の役のあとに解除しなかった(注 17)(そのつもりが元々なかった可能性もある)。その代わりに身分統制令は新たな社会的な構造の基礎になったのである。

上記の法令や徳川時代初期に發布された法令がどのように被差別民の団体に影響を与えたか、当時の田舎の事情を見てみよう。

徳川時代初期に發布された法令により、被差別民の村落の法律上の自治権と、地方権威に陳情できる権利が無くなった(注 18)。それに加えて、被差別民が住んでいた村落が一番近い百姓の村の支配下に置かれたのだ。それにより、百姓の村の村長が被差別民の村長になったのである。他方で、皮作りや牢番などになると、別の支配構造が存在した(注 19)。

検地帳の中で差別語を使って、個人の名前にカワタ、カワヤ、エタという名称を付ける習慣は、被差別民固有の宗門改め帳「エタ宗門帳」の作成にも影響を与えた可能性がある。エタ宗門帳が身分の境を以前よりもっと主張し、エタ・ヒニンの身分を世襲制度にしたとも考えられる(注 20)。違う身分の人々の間での結婚が禁止されたが、それでも徳川時代中、身分の違う結婚はごく普通に起こり、発見された場合は結婚が解消され、元の身分の高い方が(心中を企て、失敗した人と同じく)ヒニンにされた。この習慣は「ヒニンテカ」と呼ばれていた(注 21)。

第五章 徳川時代の地図に表れる被差別民の村落

被差別民が住んでいた村落は、よく徳川時代中に描かれた地図に差別語を使って記録された(注 22)。その理由はおそらく、地域の行政機関、旅人や他の身分に属する人々に注意するためだったと考えられる。その上、地図に記録された被差別民の村落が元禄時代まで、人口の減増に関係なく、戦国時代のままの大ききで保存され、徳川時代初期に新しく作られた村落は地図に記録されなかった可能性もあったのである(注 23)。村落だけでなく、被差別民が住んでいた町の部分も差別語(エタ村、非人村、皮田村、革田村、ヒニン小屋など)を使って記録されていた(注 24)。

当時、旅をする際に、被差別民の村落を通らなければならない場合は、旅の時間や距離に被差別民の村を通るのに必要な時間や距離を加えない習慣があった(注 25)。他にも、迷信に基づいた様々な習慣があった(例えば、被差別民の村落を通過する時、村人と火を決して共用しないことなど)(注 26)。

まとめ

本論文では次の問題について述べた。第一の問題は身分制の固定化はいつ始まったのかという問題だ。この点については日本人の歴史家、三浦圭一や脇田修と同意見で(注 27)、近世の身分制の固定化の始まりは遅くとも秀吉政権の時代だったと思う。無論、身分制が徳川時代中にも発展し、大きく変化した。徳川時代の初期五十～七十年間における発展は、基本的に徳川時代寸前に作られた枠組みの中で起こったと考えられる。

これまで述べた通り、被差別民の団体が徳川時代初期に法律上の自治権を失い、住んでいた村落が差別語を使う名称(エタ村、皮田村)を使って記録された。著者の考えでは当時の幕府が意識的にケガレ観念を利用し、それによって効果的に社会階級を区別した。そして、人々が土地一揆を行うときに組まないようにし、万が一大きな土地一揆が起こった場合、武器が百姓などの手に簡単に入らないようにしたのではないだろうか。

前に述べた通り、戦国時代後半には革職人の団体がケガレ観念と繋がっていても、重要な資産になった。それに比べて、徳川時代中は新しい傾向が見られる。被差別民がその前の(戦国時代)の重要性を失い、末梢的な団体になった。当時の記録の中で、差別語を使って登録され、それが結局、被差別民の新しい身分や身分の境をますます主張した。

第二の問題は被差別民の団体はどこに存在していたのかという問題である。言いかえると、身分制の固定化によって被差別民の団体はどこに移動させられたのか。上記の内容を考えると、被差別民が徳川時代の思考上で特別な位置づけの対象になった。抽象的な段階で、被差別民は当時の社会から少し離れた所に存在したのではないだろうか。被差別民が知覚上の「他者」にされ、彼らの身分をより主張するため、当時の国主がケガレ観念を再発見し、意識的か無意識的に利用したと考えられる。革製品の流動などを治める必要性をかわきりに、被差別民を場所的又は観念的に区切って、世襲制度になるようにしたのだ。

注

- (注 1) Ooms Herman 『Tokugawa Village Practice, Class, Status, Power, Law』(Berkeley: University of California Press, 1996 年、283-284 頁)
- (注 2) Hane Mikiso 『Peasants, Rebels, Women, and Outcasts: the underside of modern Japan』(Rowman & Littlefield Publishers, 2003 年 2nd Edition、149 頁)
- (注 3) 残念ながら、このトピックに関する論文はヨーロッパでは簡単に手に入らず、先行研究で記述した論文はヨーロッパでも入手可能な論文である。
- (注 4) 西田晃一「記紀におけるケガレ観念の構造と両義性」(先端倫理研究、2008 年、36 頁)
- (注 5) Nagahara Keiji 「The Medieval Origins of the Eta-Hinin」(『Journal of Japanese Studies』、1979 年、387 頁)
- (注 6) Abe Chikara 『Impurity and Death: A Japanese Perspective』(Dissertation.Com.、2003 年、5 頁)
- (注 7) Ooms Herman 『Tokugawa Village Practice, Class, Status, Power, Law』(Berkeley: University of California Press, 1996 年、280 頁)
- (注 8) Nagahara Keiji 「The Medieval Origins of the Eta-Hinin」(『Journal of Japanese Studies』、1979 年、401 頁)
- (注 9) Nelson Thomas 「Slavery in Medieval Japan」(『Monumenta Nipponica』、2004 年、479 頁)
- (注 10) Amino Yoshihiko 「MEDIEVAL JAPANESE CONSTRUCTIONS OF PEACE AND LIBERTY: MUEN, KUGAI AND RAKU」(『International Journal of Asian Studies』2007 年、6 頁)
- (注 11) 井上光貞、永原慶二、児玉幸多、大久保利謙編集『日本歴史大系3近世』(山川出版社、1988 年 444-445 頁)
- (注 12) Berry Mary Elizabeth 「Public Peace and Private Attachment: The Goals and Conduct of Power in Early Modern Japan」(『The Journal of Japanese Studies』1986 年、245 頁)
- (注 13) De, Bary W. T, Yoshiko K. Dykstra, Carol Gluck, Arthur E. Tiedemann 『Sources of Japanese Tradition』(New York: Columbia University Press、2006 年、458 頁)

- (注 14)井上光貞、永原慶二、児玉幸多、大久保利謙編集『日本歴史大系3近世』(山川出版社、1988 年 456 頁)
- (注 15)井上光貞、永原慶二、児玉幸多、大久保利謙編集『日本歴史大系3近世』(山川出版社、1988 年 446-447 頁)
- (注 16)井上光貞、永原慶二、児玉幸多、大久保利謙編集『日本歴史大系3近世』(山川出版社、1988 年 446-447 頁)
- (注 17)井上光貞、永原慶二、児玉幸多、大久保利謙編集『日本歴史大系3近世』(山川出版社、1988 年 448 頁)
- (注 18)辻達也、朝尾直弘編集『日本の近世(第7巻)身分と格式』(中央公論社、1992 年 255 頁)
- (注 19)Ooms Herman 『Tokugawa Village Practice, Class, Status, Power, Law 』(Berkeley: University of California Press, 1996 年、249-250 頁)
- (注 20)Ooms Herman 『Tokugawa Village Practice, Class, Status, Power, Law 』(Berkeley: University of California Press, 1996 年、282 頁)
- (注 21)Howell David L. 『Geographies of identity in nineteenth-century Japan 』(University of California Press、2005 年、29 頁); Ooms Herman 『Tokugawa Village Practice, Class, Status, Power, Law 』(Berkeley: University of California Press, 1996 年、278 頁)
- (注 22)Hane Mikiso『 Peasants, Rebels, Women, and Outcastes: the underside of modern Japan』(Rowman & Littlefield Publishers, 2003 年 2nd Edition、142 頁); Weiner Michael 『Japan's minorities : the illusion of homogeneity』(Routledge, 2008 年 2nd Edition、63 頁)
- (注 23)Hane Mikiso『 Peasants, Rebels, Women, and Outcastes: the underside of modern Japan』(Rowman & Littlefield Publishers, 2003 年 2nd Edition、142 頁);
- (注 24)浦本誉至史『江戸・東京の被差別部落の歴史 : 弾左衛門と被差別民衆』(明石書店、2003 年、62 頁)
- (注 25)Hane Mikiso『 Peasants, Rebels, Women, and Outcastes: the underside of modern Japan』(Rowman & Littlefield Publishers, 2003 年 2nd Edition、142 頁)
- (注 26)Ooms Herman 『Tokugawa Village Practice, Class, Status, Power, Law 』(Berkeley: University of California Press, 1996 年、300 頁)
- (注 27)井上光貞、永原慶二、児玉幸多、大久保利謙編集『日本歴史大系3近世』(山川出版社、1988 年 450 頁)

参考文献

- ・Abe Chikara『Impurity and Death: A Japanese Perspective』(Dissertation.Com. 、2003 年)
- ・Amino Yoshihiko「MEDIEVAL JAPANESE CONSTRUCTIONS OF PEACE AND LIBERTY: MUEN, KUGAI AND RAKU」(『International Journal of Asian Studies』2007 年)
- ・Berry Mary Elizabeth「Public Peace and Private Attachment: The Goals and Conduct of Power in Early Modern Japan」(『The Journal of Japanese Studies』1986 年)
- ・De, Bary W. T, Yoshiko K. Dykstra, Carol Gluck, Arthur E. Tiedemann 『Sources of Japanese Tradition』(New York: Columbia University Press、2006 年)
- ・Hane Mikiso『 Peasants, Rebels, Women, and Outcastes: the underside of modern Japan』(Rowman & Littlefield Publishers, 2003 年 2nd Edition)
- ・Howell David L. 『Geographies of identity in nineteenth-century Japan 』(University of California Press、2005 年)
- ・Nagahara Keiji「The Medieval Origins of the Eta-Hinin」(『Journal of Japanese Studies』、1979 年)
- ・Nelson Thomas「Slavery in Medieval Japan」(『Monumenta Nipponica』、2004 年)
- ・Ooms Herman 『Tokugawa Village Practice, Class, Status, Power, Law 』(Berkeley: University of California Press, 1996 年)
- ・Weiner Michael 『Japan's minorities : the illusion of homogeneity』(Routledge, 2008 年 2nd Edition)
- ・井上光貞、永原慶二、児玉幸多、大久保利謙編集『日本歴史大系3近世』(山川出版社、1988 年)
- ・浦本誉至史『江戸・東京の被差別部落の歴史 : 弾左衛門と被差別民衆』(明石書店、2003 年)
- ・西田晃一「記紀におけるケガレ観念の構造と両 義性」(先端倫理研究、2008 年)
- ・辻達也、朝尾直弘編集『日本の近世(第7巻)身分と格式』(中央公論社、1992 年)

万葉集の書写形式の多様性と研究課題

鷺尾 亜莉沙

関西大学大学院文学研究科 博士課程前期課程

[Abstract]

Composed entirely of Chinese characters, *Man'yōshū* is the oldest poem collection in existence, dating back to the end of the 8th century. *Man'yōshū* manuscripts fall into two types: those that follow a system created by Sengaku, who wrote an influential text critique in the 13th century, and those who did not (non-Sengaku type). The value of the latter type is high, as it preserves the readings from before Sengaku's text critique. By examining manuscript types, it is possible to pursue the original version of *Man'yōshū*.

There are four main writing styles of the *Man'yōshū* manuscripts, distinguished by the position of the reading relative to the original sentence (Chinese characters) of the poem and if *hiragana* or *katakana* was used. Especially in earlier eras, *hiragana* and *katakana* differed in application from their respective characteristics, so the nature of the manuscript differs depending on the writing system used.

Hirosebon Man'yōshū, owned by Kansai University, is an important non-Sengaku manuscript. The basic writing style is *katakana betteikun*, but various places involve all four types of writing styles. In addition, it is also a manuscript involved with Fujiwara no Teika, an authority on medieval poem literature. Through *Hirosebon Man'yōshū*, which is related to the *Man'yōshū* collection, it is possible to know how *Man'yōshū* was received in the era (12-13th century) he was active. Furthermore, thinking about the differences in the writing styles of *Hirosebon Man'yōshū* can lead us to reconsider the writing style of other manuscripts. By clarifying these differences, we can help elucidate the data nature of each document, such as the previously unconsidered environment and objective of copied manuscripts, and how to receive the *Man'yōshū* collection of each era.

[論文]

1. はじめに

多くの古典作品は、原本は残っておらず、ほとんどが書写されたものか、それを版本にしたものとして残っており、写本類は様々な系統のものとして今日まで残っている。

8世紀末ごろに成立したといわれ、現存する日本最古の歌集である万葉集も多くの写本が残っている。万葉集は全二十巻で、歌の数は約4500首の作品となっている。そして、万葉集ができたころ、ひらがなやかたかなはまだ成立しておらず、中国から入ってきた漢字によって、すべて書かれている。後にひらがなやかたかなができると、だれにでも訓めるようにするため、漢字の横にひらがなやかたかなで歌の訓みを示すようになった。これを訓という。

〔図1〕は、万葉集の写本の一つである『西本願寺本万葉集』である。それぞれの漢字の横に訓み方がカタカナで、「キミマツト ワカコヒオレハ ワカヤトノ スタレウコカシ アキノカセフク」と書かれている。この歌は漢字の意味と日本語の訓み方が一致しているため、漢字と訓み方がそれぞれ対応した訓となっている。

万葉集の写本では、このように訓をどの文字で、どの位置に書くのかが重要になってくる。本稿では、万葉集の系統および写本の書写形式、関西大学が所蔵する万葉集の写本の書写形式を例に書写形式から見えてくる研究課題を提示する。

2. 万葉集の写本の系統

現在、私たちが読んでいる万葉集は複数の写本を参考にして復元されたものである。万葉集の写本は古くても 11 世紀ごろのもので、日本では平安時代と呼ばれる時代に書き写されて残ってきたものである。

万葉集の写本は大きく「仙覚本系統」のものと「非仙覚本系統」のものの 2 種類に分けることができる。「仙覚」は、13 世紀ごろの学僧で当時、存在していた万葉集の写本を集め、校合した。また、ことばの意味をより理解しやすくするための注釈も行なっている。その仙覚が校訂した本文を写したものを「仙覚本系統」と呼び、それ以外のものを「非仙覚本系統」と呼ぶ。「仙覚本系統」のものには、仙覚が従来の訓を独自に変えた訓があり、また、それまで訓がなかったものに仙覚が新たに訓を付けたものがある。一方、「非仙覚本系統」は仙覚の影響を受けていないので、古い万葉集の姿を残しているものが多い。そのため、資料的な価値が高いのである。しかし、価値が高い「非仙覚本系統」であるが、一つの写本ですべての巻が揃っているものが一つだけしかなく、全体的な姿を見ることが難しいという欠点がある。

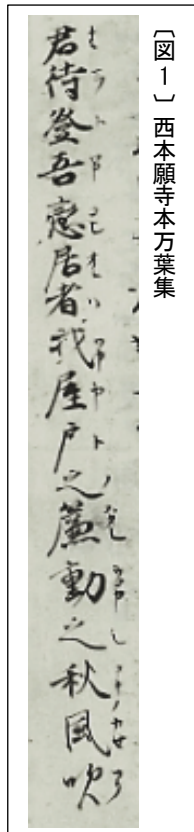
3. 万葉集の書写形式の種類

万葉集の写本の書写形式は、原文である漢字に対して、訓がどの文字で書かれ、どの位置に付されているかで大きく 4 種類に分けられている。

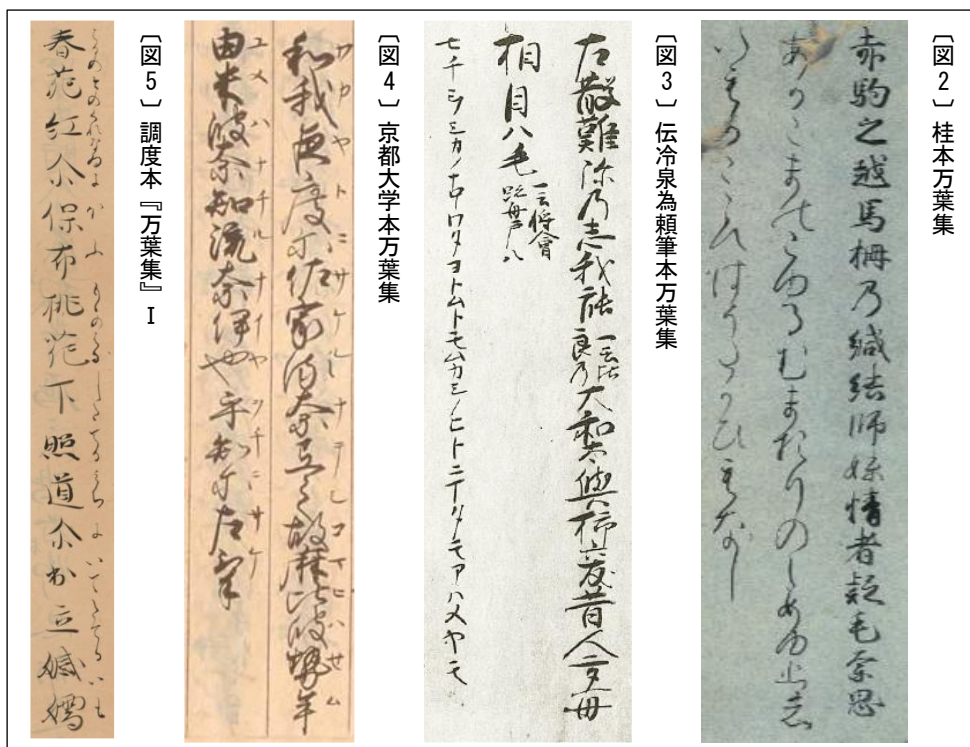
まず一つ目は、「平仮名別提訓」。これは原文である漢字の別の行にひらがなで訓が書かれた形式で、11 世紀から 12 世紀の平安時代の写本に見られ、最も古い書写形式である。〔図 2〕が平仮名別提訓の例であり、平仮名別提訓の写本の多くは装飾が施された美しい紙に書かれている。〔図 2〕の紙には鳥が描かれている。

二つ目は、「片仮名別提訓」。これも平仮名別提訓と同じく原文である漢字の行とは別の行に訓が書かれているが、訓にはカタカナが用いられている。片仮名別提訓は、冷泉家本系統と呼ばれる系統の本のみにみられる珍しい形式である。〔図 3〕が片仮名別提訓の例であるが、平仮名別提訓のような装飾がほどこされた紙ではなく、無地の紙に書かれている。

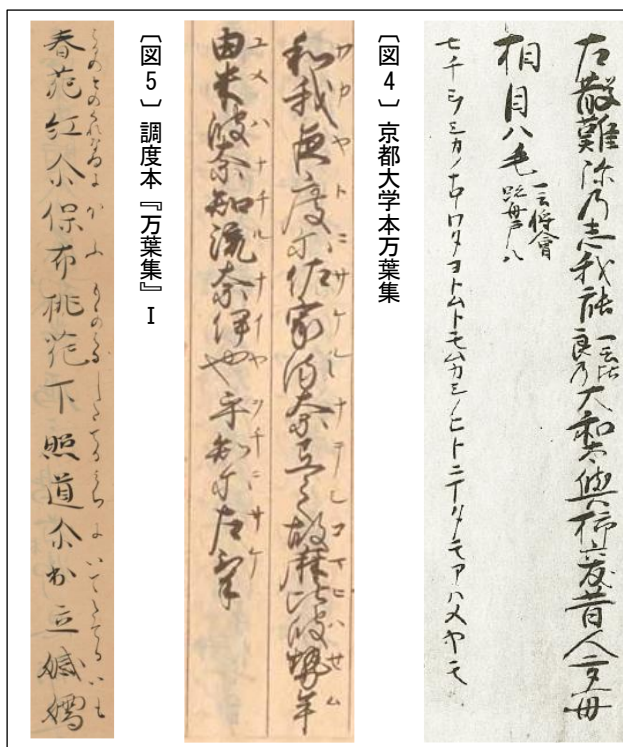
三つ目は、「片仮名傍訓」。傍訓は別提訓とは違い、訓が原文の横に書かれているのが特徴である。そして、片仮名傍訓は訓がカタカナで書かれている。この書写形式は仙覚の影響を受けている「仙覚本系統」に多く見られる形式で、〔図 4〕をみるとわかるように訓



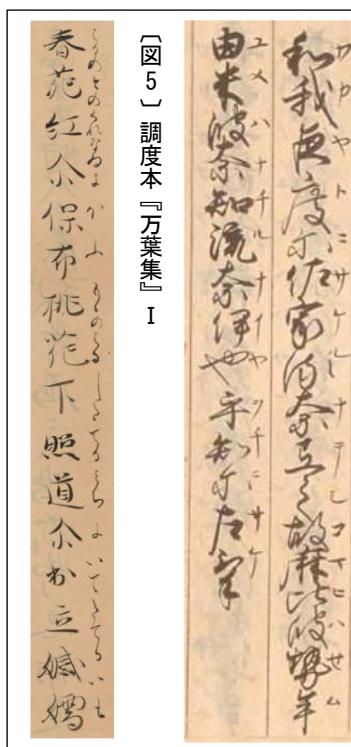
〔図 1〕 西本願寺本万葉集



〔図 2〕 桂本万葉集



〔図 3〕 伝冷泉為頼筆本万葉集



〔図 5〕 調度本『万葉集』I

〔図 4〕 京都大学本万葉集

を原文の横に小さめに書くため、別提訓よりも使う紙の量が減るというメリットがある。片仮名別提訓と同じく、紙は無地のものや罫線が入ったものが使われている。

最後の四つ目は、「平仮名傍訓」。片仮名傍訓は訓がカタカナであるが、平仮名傍訓は〔図 5〕のようにひらがなで書かれている。この書写形式も「調度本」と呼ばれるものにみられる珍しい形式である。調度本とは、嫁入りの際に持っていくものであったり、特別な贈り物とされたりするものである。装丁は豪華であるが、紙は装飾性がない無地のものが使われている。

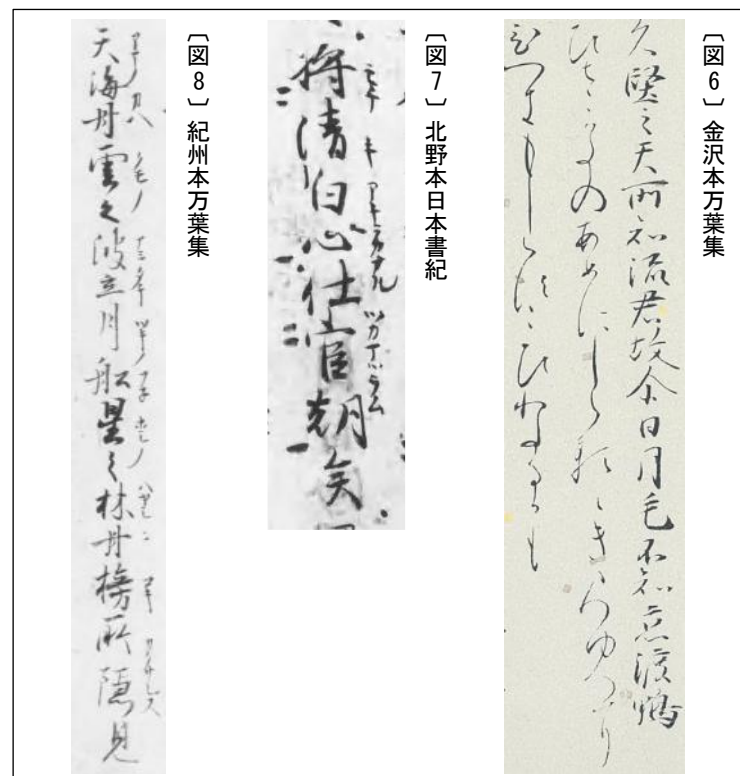
4. ひらがなとカタカナの用途と特徴

万葉集の書写形式には、4種類のものがあるということを述べた。訓をひらがなとカタカナのどちらを用いるのか、原文である漢字に対して、どの位置に書くのか、という違いで書写形式を分けることができるのである。

ひらがなとカタカナは、書くときの用途によって使い分けられていた。次に、その用途の違いと特徴についてみていく。

古くひらがなは、歌や物語、消息すなわち手紙などを書く際に多く用いられていた。ひらがなには、連綿と呼ばれる文字を筆で流麗に続ける書き方があり、美しく芸術性の高い文字であるといえる。〔図 6〕には連綿が用いられ、紙も料紙のため、芸術品のようである。

一方、記号のような文字であるカタカナは漢文訓読という漢文を日本語で訓むときに使われたり、語などの説明である注釈を書くときに用いられったりする文字であった。万葉集と同時代に成立した日本の歴史書に、日本書紀というものがある。これは漢文で書かれているため、日本語で訓むことが難しい書物である。〔図 7〕は『北野本日本書紀』であるが、漢字をどのように訓むのかを考え、訓み方を横にカタカナで書いている。〔図 8〕の片仮名傍訓である『紀州本万葉集』も漢字の横にカタカナで訓が書かれており、漢文訓読に近い形である。以上のことから、カタカナは学術的な文字であることがわかる。



5. 関西大学が所蔵する万葉集の写本

万葉集の写本は日本の各地に多数あるが、関西大学も万葉集の写本を多く所蔵している。その中でも、近年注目を浴びている3つの写本について紹介する。

まず、一つ目は〔図9〕の「調度本」万葉集Ⅰ（注1）である。「調度本」は調度品の一つで、かつて嫁入りの際に所持していた本や特別な贈り物として扱われた本のことであることは先に述べた。関西大学が所蔵する調度本Ⅰは表紙が紺色をベースにしたもので、金色の装飾が施されている。この表紙だけでも、高価で、華やかなものだということがわかり、調度品として適切なものであったこともわかる。

この本は、前述したように原文である漢字の横に平仮名で訓を書く「平仮名傍訓」という珍しい書写形式である。書写年代は17世紀から18世紀の江戸時代であることが判明しており、この表紙と似た調度本は関西大学以外でも所蔵されている。

二つ目は〔図10〕の「調度本」万葉集Ⅱ（注2）である。Ⅰと同じく調度本であるが、Ⅰの表紙と違って、綾布を用いた地味な表紙となっている。書写形式はⅠと同じく「平仮名傍訓」である。

調度本ⅡもⅠと同じく、書写年代は17世紀から18世紀にかけての江戸時代である。表紙は金色が用いられていない分、華やかさに劣るが、綾布は高価な繊維である絹を使ったもののため、高級であることがわかる。調度本Ⅱと装丁が似たものは現時点では、見つかっていない。

平仮名傍訓の写本は現在、調度本しか存在しない。その珍しさゆえ、調度本の研究も近年注目を浴びているため、紹介に至った。

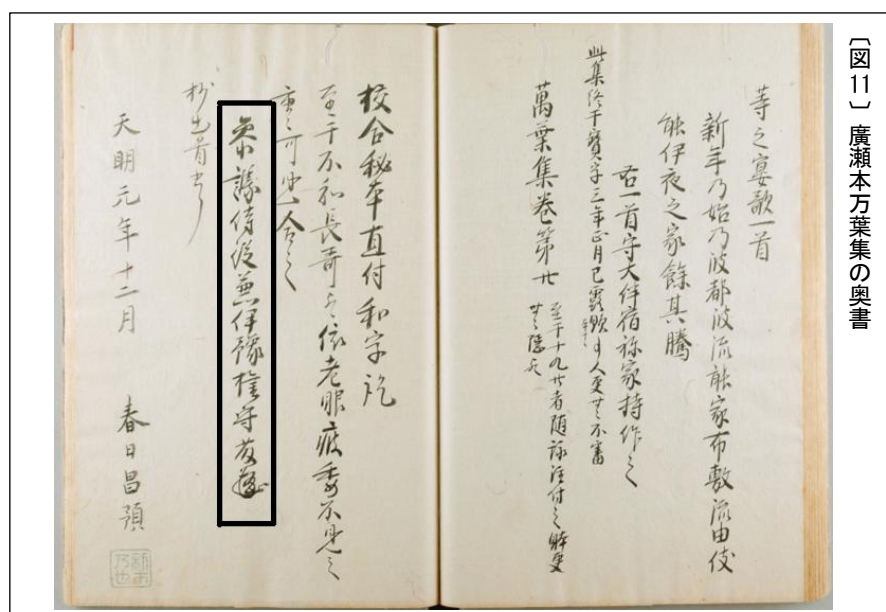


三つ目は『廣瀬本万葉集』と呼ばれる写本である。この写本は、約20年前に一般的に公開されるようになったもので、万葉集の写本研究では近年、特に多くの注目を集めている写本である。

非仙覚本系統の写本は仙覚の影響を受けておらず、資料的価値が高いということを前述した。そして、現存する非仙覚本系統のものですべての巻が揃った写本は一つということも指摘したが、そのすべての巻が揃った写本がこの廣瀬本である。すべての巻が揃ったものを完本といい、廣瀬本は唯一の非仙覚本の完本とされている。

写本は一つのものを書き写し、その書き写したものをさらに書き写して、縷々として他の人や後の時代に伝わっていくのである。そして、この廣瀬本を書いた人物が写した本というのが、藤原定家と呼ばれる人物が持っていた本と関わっていたことがわかっている。なぜ、このようなことがわかるのかというと、〔図11〕の四角で囲った部分に書かれている「参議侍従兼伊豫権守藤」から判明した。こ

れは藤原定家のことを指している。さらに行の最後の「藤」の下にあるものは花押といい、現代でいう本人のサインにあたる。これも藤原定家のものであることがわかっているため、藤原定家との関係は絶対的なのである。



〔図11〕 廣瀬本万葉集の奥書

藤原定家は、12世紀から13世紀、日本では鎌倉時代と呼ばれている時代の人物で歌人であり、古典文学の研究者でもあった。定家は後鳥羽上皇の命によって作られた歌集である『新古今和歌集』に入れる歌を選んだ一人であり、『小倉山荘百首和歌』という今は百人一首やカルタと呼ばれて、親しまれている百首の歌を選んだ人物でもある。

また、彼は『土佐日記』や『源氏物語』、『更級日記』など多くの日本の古典作品を書き写している。彼がこれらの作品を書き写していなければ、現在私たちはこれを読むことができなかったかもしれないと言っても、過言ではない。廣瀬本は書き写されたのが1781年（江戸時代後期）と新しいものだが、この藤原定家の書写した本の系統の唯一の完本として貴重な本なのである。

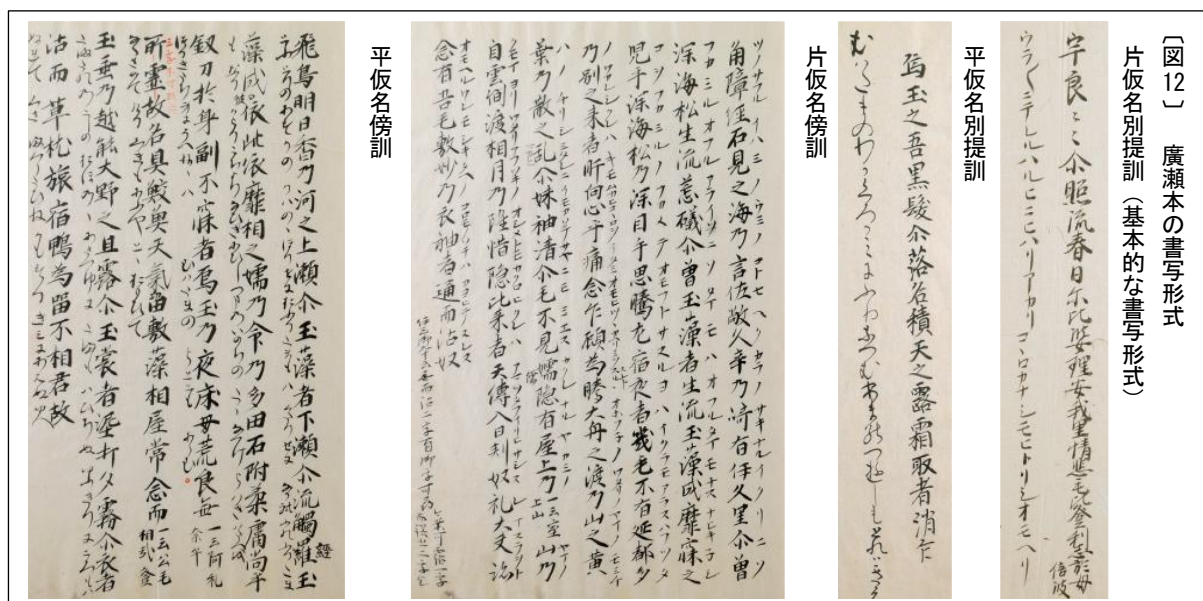
廣瀬本は資料的価値の高い非仙覚本系統の完本であるばかりでなく、藤原定家という歌の世界で有名な歌人が関わっている写本という点においても高い価値を持っている。さらに廣瀬本は基本的な書写形式は片仮名別提訓（注3）であるが、前述した4種類の書写形式をすべて含んでいるという特徴を持っている。基本的に万葉集の写本は最初から最後まで基本的な書写形式が変わらず、いずれかに統一されている。しかし、廣瀬本は片仮名別提訓を基本的な書写形式としながらも、〔図12〕のようにすべての書写形式を含んでいるというとても奇妙な写本なのである。

以上、関西大学が所蔵する三つの万葉集の写本を挙げた。他にも所蔵されている万葉集の写本は多数あるが、それらの実態や素性も明らかにされることで、より万葉集の享受史を知ることができるであろう。

6. 研究課題

万葉集の写本の書写形式には4種類ある中、廣瀬本は片仮名別提訓を基本としながらも、すべての書写形式を使用して、書かれている。また、一首の歌の中でも仮名つまり文字もひらがなとカタカナの両方が使われている場合がある。

さらに、このように多様な書写形式をもつ廣瀬本をきっかけに、万葉集の写本の書写形式にはそれぞれ、どのような違いがあるのか、使われている仮名文字の用途はなにか、を考え直すことで、万葉集の写本が書き写されたときの環境や目的、そして当時の人々が万葉集をどのようなものとして受け取っていたのかが明らかになっていくのである。



7. おわりに

万葉集には大きく二つの写本の系統があることと写本の書写形式、仮名の用途、関西大学が所蔵する写本を例に書写形式の多様性について述べた。

大正時代に完成した『校本万葉集』の存在を機にあまり目を向けられなくなっていた万葉集の写本研究に再び注目が集まったのは、廣瀬本が出現してからともいわれている。万葉集の原文や訓、表現の研究は作品を理解するにあたり、とても重要であることは言うまでもないが、万葉集が現代までにどのような人々によって作品が読まれ、研究がなされてきたのかを明らかにすることも万葉集研究の一つである。その手掛かりの一つとして、書写形式に目を向ける必要があることを本稿では提示した。

注

- ・掲載している画像の出典は参考文献に一括で載せる。

(注1) 特に固有名がないため便宜上、「調度本」万葉集Iとする。

(注2) 特に固有名がないため便宜上、「調度本」万葉集IIとする。

(注3) 片仮名別提訓は冷泉家本系統のみにみられる珍しい書写形式であると述べたが、藤原定家は冷泉家の祖先にあたるため、藤原定家の万葉集を祖本とする廣瀬本が冷泉家本系統の片仮名別提訓であることには納得がいく。

参考文献

図(画像)の出典

- ・〔図1〕林勉〔監修〕『西本願寺本万葉集(普及版) 巻第四』(主婦の友、1993)
- ・〔図2〕『日本名筆選 27 桂本万葉集 伝紀貫之筆』(二玄社、1994)
- ・〔図3〕佐佐木信綱〔編〕『校本万葉集〔新增補版〕17』(岩波書店、1995)
- ・〔図4〕京都大学電子図書館 貴重資料画像 (<https://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/index.html>)
- ・〔図5、9〕国文学研究資料館 (http://dbrec.nijl.ac.jp/KTG_B_100239474)
- ・〔図6〕日本古典文学会『復刻日本古典文学館 万葉集金沢本』(ほるぷ出版、1973)
- ・〔図7〕国立国会図書館デジタルコレクション (<http://dl.ndl.go.jp/>)
- ・〔図8〕国立国会図書館デジタルコレクション (<http://dl.ndl.go.jp/>)
- ・〔図10〕国文学研究資料館 (http://dbrec.nijl.ac.jp/KTG_B_100239475)
- ・〔図11、12〕関西大学 CSAC Digital Archives (<http://www.db1.csac.kansai-u.ac.jp/csac/>)

- ・木下正俊、神堀忍「廣瀬本万葉集概要」(『文学』5 (2)、1994)
- ・佐竹昭広〔他〕「廣瀬本万葉集解説」(『校本万葉集〔新增補版〕十八』、岩波書店、1994)
- ・田中大士「廣瀬本万葉集の性格—巻20の特異な傾向をめぐって」(『文学』6 (3)、1995)
- ・木下正俊「廣瀬本万葉集—その後のことなど」(『万葉』156、1996)
- ・北井勝也「廣瀬本万葉集目録に関する二三の問題」(『美夫君志』54、1997)
- ・木下正俊「廣瀬本万葉集について」(『万葉集の諸問題』、1997)
- ・神堀忍「廣瀬本万葉集あれこれ」(『万葉集の諸問題』、1997)
- ・山崎福之「『定家本万葉集』攷—冷泉家本『五代簡要』書入と廣瀬本」(『上代語と表記』、2000)
- ・田中大士「長歌訓から見た万葉集片仮名訓本—廣瀬本万葉集を中心として」(『上代文学』93、2004)
- ・北井勝也「廣瀬本万葉集校合書入考」(『美夫君志』69、2004)
- ・田中大士「廣瀬本万葉集の信頼性」(『和歌文学研究』91、2005)
- ・田中大士「廣瀬本万葉集の巻二の長歌訓—片仮名訓本系統の祖本の姿」(『解釈と鑑賞』76 (5)、2011)
- ・田中大士「廣瀬本万葉集とはいかなる本か」(『関西大学アジア文化研究センターディスカッションペーパーvol.8』、2014)
- ・乾善彦「テキストとしての廣瀬本万葉集」(『高岡市萬葉歴史館叢書 28 古写本の魅力』高岡市万葉歴史館、2016)
- ・奥村和美「廣瀬本万葉集の書入 巻十九・四一五二番歌をめぐって」(『国語国文』86 (4)、2017)

共産主義時代の旧チェコスロヴァキアにおける日本語教科書の特徴

石田 薫

カレル大学 チェコ語とコミュニケーション理論研究科 言語教授法専攻 博士課程

[Abstract]

In this article I'll analyze Japanese language textbooks published in the Czech Republic, former Czechoslovakia. In this state Japanese language education started in the 30's of the 20th century. I'll introduce some specific characteristics of Japanese language textbooks published in former Czechoslovakia during the communist period. Featured textbooks were V. Hilská (1963), J. Jelínek (1966), I. Krouský, (1972) and I. Krouský (1982). To find out their characteristics I referred to a book by H. Yoshioka, ed. (2016). In this book Yoshioka concludes that most of Japanese textbooks published in Japan since 1896 had the structure of the sentence build-up approach and these sentences start with a formal speaking form. The Japanese verbs have several forms, however, it's one of the most popular methods to introduce verbs with only the formal speaking form at the beginning of learning and learners must practice that form for a long time. After that, it's quite difficult to accept the other forms of a verb. However, that does not apply to the textbooks from Czechoslovakia, as they introduce also an informal form of sentences from the beginning. Such an approach could be complicated for beginners, but it could also be a good way to teach, because the learners can acquire a wider view of the Japanese grammar from the beginning. This could be very inspiring for the authors of textbooks today. Except the grammatical topic I'll also follow if the Japanese language textbooks published in former Czechoslovakia have gotten any influence of language teaching methods from the abroad. For this topic the importance of the political situation in this country will be considered as well.

[論文]

はじめに

旧チェコスロヴァキア(現チェコ共和国・現スロヴァキア共和国、以下、チェコと略)では 1930 年代から日本語教育が始まり、首都プラハのカレル大学に日本研究学科が開設された 1947 年より本格化した(Boháčková, Winkelhöferová, 1987)。30 年代後半から現在に至るまで、チェコでは、主にチェコ人著者による複数の日本語教科書が出版されてきた。今回の報告論文において、全ての出版物を研究対象とするには、紙面の都合上、不可能であるため、本論文では、共産主義時代、特に 60 年代から 80 年代にかけて出版された教科書を取り上げ、それらの特徴および日本語教育の観点からの問題点について考察する。そして、これらチェコの日本語教科書の特徴をより明確に指摘するため、日本での日本語教材に関する先行研究との比較も記述する。

研究対象を制限するにあたって、60 年代から 80 年代を選択した理由としては、まず、第二次世界大戦以前の著書は少なく、チェコでの第一冊目の日本語教科書として重要な意味を持つ、V. Hilská による教科書(1939)は、ほぼ同一の内容で 60 年代に出版されていることがあげられる。そしてチェコにおける共産主義時代は 1989 年に幕を閉じ、新たな時代へと突入する。特にチェコにおいて、一時代の特色を簡潔にまとめるには、この 30 年間で興味深いのではないかと考えたためである。

教科書分析においては、様々な着眼点、方法論があげられるが、今回の論文では、主に動詞の活用および文型導入について分析、考察する。日本語教育において、動詞活用の導入方法は、問題とされることが多

く、今後の改善が期待される項目である(海老原、2015)。学習初期段階に、どのような動詞活用の紹介がなされるかによって、例文に使われる文型が変わってくることは想像に難くなく、そちらも同時に着目する。現代日本語教育においての問題点を、共産主義時代という、まだ国交が盛んではなかったころのチェコで出版された教科書の分析に起用するのは、研究内容として意味をなさないもの、と見なされるかもしれない。しかし逆に、古く忘れ去られてしまったものの中に、今日の教育者、研究者が発想し得ない方法論を再発見する可能性は多いにある。そして、第二次世界大戦後、第二言語習得において、世界的な教授法理論の流れがあり、日本語教育も多大な影響を受けてきたが、当時のチェコの日本語教科書にも、それが反映されていたのかも検証したい。

本論文では、当時チェコで出版された教科書と日本で出版された教科書の相違点を指摘し、そこから、現代の日本語教科書作成に反映しうる観点を探り、考察する。

第一章 日本における日本語教科書に関する研究

チェコで出版された日本語教科書の内容分析に入る前に、まず第一章では主に日本で出版された日本語教科書に関する先行研究についてまとめておく。そして日本国外で出版された教科書に関する先行研究も参考にしながら、チェコの日本語教科書の分析における着眼点を固める。

今回、主に参考にしたのは吉岡(2016)と関(1997)の著書二冊である。吉岡は第一章を「日本語教材の歴史の変遷」と題して、1896年から2000年代に至るまでに、主に日本で出版された初級日本語教科書、計102冊の分析を記載している。「主に」と表現しているのは、この102冊の中にCambridge Pressedから出版された『An Introduction to Modern Japanese 1.』(Bowring, Uryu, 1992)が含まれているためである。吉岡は、この102種の教科書調査の結果として、ほぼ全ての教科書に共通する以下三点の特徴を挙げている。

- (1) 120年前から現在まで、文型を軸に編纂された文型積み上げ式の総合教科書が作成され続けている。
- (2) 最初の文型は「です」「ます」という丁寧体となっている(初級教科書では、全体を通して「です」「ます」体の話し言葉を学ぶようになっている)。
- (3) いつの時代でもほとんどの教材が、「NはNです」または「～は～です」が最初の文型として使用されており、これが文型積み上げ式の基本的で学習しやすい文型だと考えられている。(注1)

ここでまとめられた三点の特徴が、この調査で対象とされなかった資料を研究するにあたって多いに有意義となるであろうことは明らかであり、チェコの日本語教科書を分析する際にも重要項目とする。

関(1997)の著作の中でも、時代を追って、日本での日本語教科書発行の変遷を把握することができる。本論文で取り上げた、60年代から80年代にかけての日本での日本語教科書発行状況は、第二章「学習法・教授法、教科書・教材の変遷」の中で、以下のようにまとめられている。

戦後の日本語教育は1950年代・60年代の復興期を経て、70年代に入ると、制度的にも内容的にも拡充期を迎える。[.....]そして80年代に入ると、文部省の「留学生受け入れ10万人計画」(1984年)が打ち出され、国内の日本語学習者が急増した。[.....]こうした、いわば日本語教育のバブル化のなかで、欧米の外国語教授法理論を導入した新日本語教授法が提唱され、それらの教授法と学習者の多様化とが相まって、新しい教科書・教材が続々と刊行された。(注2)

ここで「欧米の外国語教授法理論」と表現されているのは、主に60年代ではアメリカで開発されたオーディオ・リンガル・メソッド、70年代以降ではポスト・オーディオ・リンガル、いわゆるコミュニカティブ・アプローチなどである。次章からは、これらの世界的な流れが、チェコの日本語教科書には、どのように反映されていたのか、もしくは影響を受けること自体、可能であったのかも、検証していく。

日本国外で出版された日本語教科書研究としては、韓国での高等学校で使用される教科書の内容分析を行った金(2016)や、中国の大学での教科書を検証した鮑(2011)などがある。特に鮑は中国語母語話者にと

って、日本語教育文法が有効であるかどうかを、教科書内で使用されている用語の対比などで検証しており、他国で出版された教科書分析にも参考になる視点である。鮑が主張するように、学習者が誰であるのかを考慮し、相手によって教育の方法は違ってこなくてはならないはずである。中国のように、歴史的、文化的に長期にわたる交流があったわけでもなく、漢字使用圏でもないチェコの日本語教科書研究では、全く違った視点、観点を見出せるのではないかと考えられる。

第二章 60年代の日本語教科書

本章では、60年代にチェコで出版された二冊の教科書を取り上げる。一冊目は V. Hilská の著書、『Učebnice hovorového jazyka japonského (日本語口語文法)』(1963)である。この教科書は、先にも述べたように、1939年初版の改訂版として発行された。1935年から1936年にかけての著者自身の日本滞在中に日本語母語話者の執筆による会話文なども含めて作成されたもので、63年の改訂版も、内容変更はほとんどしていない。改変した点は、日本という国の概要、参考文献、そして巻末に付け加えられた漢字かなまじりの日本語文である。初版では序章の一部を除いて全編アルファベットのみの書籍だったのに対して、63年の改訂版では、手書きの平仮名・片仮名表と単語帳、そして夏目漱石の『草枕』の一部を巻末に付録のような形態で収録している。この手書きの日本文字および日本語文は日本人の手によるものである。

Hilská 自身はもともと英文学が専門で、日本語学習もイギリス留学中に開始したことから、参考文献は英語で書かれたものが多い。しかし、チェコ人による初の日本語教科書の執筆の大部分を日本で行うことができたのは、たいへん意義のあることであっただろう。文法解説にも、外国語としての日本語教育文法より、母語話者のための国語文法に近いものが見受けられる。

本論文の主要テーマである動詞の導入はどのように展開されているであろうか。この教科書は入門から始まっていて、序章には初級学習者が日本語話者とコミュニケーションが取れるようになることを目的に書かれているとあるが、文法を重視している学習書であり、文型積み上げ式を採用している。全32課のうち、第一課で日本語の品詞の説明を行っており、動詞は辞書形(国語文法における終止形)と動詞の丁寧体(連用体)であるマス形、つまり語尾「ます」を使用した場合の動詞活用を紹介している。ここでは詳しい活用による動詞の分類は説明しておらず、例文も練習問題も丁寧体で統一されている。辞書の中で調べられる動詞の形を、ヨーロッパ言語に見られる動詞の不定詞もしくは原形と同格、とみなした場合、動詞を辞書形から紹介するのはチェコ語を母語とする人々にはごく自然なことであろう。助動詞「です」は、第三課で導入されており、ここまでは、日本の日本語教科書の特徴であった「学習を「です」「ます」の丁寧体で始める」と同じ傾向が見られる。

吉岡(2016)の日本語教科書調査の結果では、初級教科書では全体を通して丁寧体のみで学習が進められる、という特徴も挙げられていたが、それは動詞の活用形を一つしか使用しない、場合によっては、動詞が活用によって分類されるという事実を知らないまま長期にわたって学習を進める、ということも意味する。一方、Hilská の教科書では、すでに第四課で動詞の活用による分類および五段活用動詞の活用表が紹介されている。一段活用動詞は「母音動詞 (slovesa samohlásková)」、五段活用動詞は「子音動詞 (slovesa souhlásková)」と名づけられている。やはり子音と母音を分けて表記する言語を母語とする学習者にとって、五段活用動詞は「子音を変化させる」と考えたほうが、「同じ行の平仮名に変化させる」よりも受け入れやすいのだろう。ただ、この課では変格活用動詞については触れられておらず、第12課で「不規則動詞 (nepravidelná slovesa)」として導入している。この「不規則動詞」には、サ行変格活用「する」、カ行変格活用「来る」のみならず、ナ行変格活用「死ぬる(死ぬ)」、「いぬる」、そして「行く(ゆく・いく)」が含まれているのも特徴的である。

日本語の動詞活用は当然、五段活用で終わらない。国語文法では連用形に含まれる音便形、日本語教育文法では「テ形」と呼ばれる活用形があり、五段活用動詞において、もっとも複雑な変化をする。Hilská はテ形を第10課で導入しており、やはり動詞活用としても、別格扱いをしているが、彼女はこの活用形を「親称分詞 (přechodník důvěrného způsobu)」と名づけている。なぜ「親称」なのかというと、すでに第五課で「連用形に「まして」をつける」という文法を、「敬称分詞 (zdvořilý přechodník)」という用語で解説しているからである。例文としては「Kesa kao wo araimašite, šinbun wo jomimašite, šokudži wo tabemašita. 今朝、顔を洗ひまして、新聞

を読みまして、食事を食べました。(漢字かな表記は筆者)(注3)」といったものをあげている。

せっかく第四課という学習初期の段階で五段活用を紹介しているのに、第11課で親称の話し言葉を導入するまで、例文は極力、マス形(丁寧体)で済ませようとしている傾向もある。第五課の会話例では「Hima ga arimasureba, 暇がありますれば[.....]mada tabemasen deshitara, まだ食べませんでしたら(漢字かな表記は筆者)(注4)」といった、不自然と言わざるおえない表現が登場する。

以上、60年代に出版された Hilská の日本語教科書における動詞導入に関する概要である。「日本語母語話者とコミュニケーションが取れるようになる」というのがこの教科書の目的である以上、会話の例も豊富である。同時に、文学もたいへん重視しており、山本有三、小林多喜二、夏目漱石などの文豪の作品の一部を、やはりアルファベット表記で日本語を、その後にチェコ語訳を収録している。50年代にカレル大学で日本語を学んだチェコ出身の言語学者、J.V.ネウストプニーは、彼が日本語を学習していたころは、まだ文法訳読法(注5)が主流であった、と回想している(1995)。それは、基礎文法の学習が終わるか終わらないかのうちに、辞書を頼りに文学作品を読解する、といったものだったらしい。Hilská が初版を書いたのが30年代、改訂版を作成したのが60年代初期、オーディオ・リンガル・メソッドが日本語教育に強く影響し始めるのが、やはり60年代に入ってから、と考えると、Hilská にとって、文学作品を読み下すことによって「生きた日本語」に触れ、そこから学び取る、という文法訳読法は当然の選択であったと考えられる。

ここからは、もう一冊の60年代出版の日本語教科書、J. Jelínek 著、『Úvod do moderní japonštiny(現代日本語入門)』(1966)を取り上げたい。Hilská の教科書が456ページあるのに対して、Jelínek の著書は全72ページ、と、かなり小さくまとめられている。それでも40課に分けられ、やはり文法を重視した文型積み上げ式を採用している。序文には、読者がその後、実際の会話や辞書を使った読み書きの学習を続けられるよう、現代日本語の基礎を提供する、と記されている。

Hilská の教科書との決定的な違いは、仮名、漢字の学習を含んでいる点である。第一ページ目から平仮名のア行、カ行、サ行の書き方および読み方の指導が始まっている。日本語の例文のアルファベット表記は一切使わず、指導済みの仮名、漢字の学習が始まってからは漢字も使って、例文が表記されている。ページ数が少ない上に、文字の書き方は分かりやすく示さなければならないため、縮小するにも限界があり、紙面の節約のためであろう、チェコ語での説明には一文字が1mm幅くらいの極小のアルファベットを使っている。漢字と仮名は、この教科書でも、すべて手書きとなっている。

次に、この教科書における動詞の導入について見ていこうと思う。この教科書でも、動詞は辞書形から始まっているが、一度に複数の活用を提示することはしていない。動詞の活用を同時にいくつも導入しないのは日本語教育にはよく見られる傾向であり、Hilská の教授法のほうが特殊である、と言えそうだが、Jelínek の教科書では、日本発行の日本語教科書や Hilská の教科書で見られたような、丁寧体で初期学習を進められるということもなく、辞書形(終止形)のみの述語で記された例文ばかりで学習が進められていく。日本語の文体には大きく分けて丁寧体と、親しい間柄などで使われる普通体があるが、第二言語としての日本語教育が一般的に丁寧体から始める傾向があるのは、学習者が学習初期の段階でも、日本語母語話者と円滑にコミュニケーションが取れるように、との配慮に基づいている。一方、Jelínek は二つ目に学習する動詞活用として、第13課でナイ形(国語文法の未然形)を導入し、普通体における否定表現を勉強できるよう展開、名詞文や形容詞文も含め、普通体で様々な表現を学習するよう指導している。初級日本語における丁寧体のみの日本語は不自然に聞こえることがある、という事実は、Jelínek の普通体のみの初級日本語にも当てはまる。普通体の文末に終助詞「か」を付け加えただけでは、疑問文として、とても硬い表現になってしまうが、Jelínek の例文では多用されている。以下、ナイ形を導入した課の例文の一部である。

わたくしのえんぴつはどこにあるか。— そのテーブルのうえにある。

きょうあなたはもういくか。— いいえ、きょうはまだいかない。(注6)

名詞文、形容詞文の丁寧体を作る助動詞「です」と、動詞の丁寧体であるマス形(連用形)は、第17課、28ページ目で登場する。そこで初めて、普通体と丁寧体の違いや、ここまでで習得してきた文体では親しい間柄でない限り話すことができないことなどが説明されている。次の動詞活用形としては、テ形(音便形)が第19課で導入され、やはり文法用語は「分詞(přechodník)」となっている。意志形(未然形)は第33課、59ページ

目で「予想可能法 (pravděpodobnostní způsob)」として紹介され、バ形(仮定形)は教科書も終わりに近づいた第 36 課、66 ページ目で導入されている。

全 72 ページの B5 弱ほどのサイズの教科書で、どのようなレベルの日本語まで解説できるものなのかが疑問になってくると思われるが、ここまで記述してきたとおり、Jelínek の教科書は動詞の五段活用のほとんど(注 7)を網羅し、普通体、丁寧体、両方の文体の指導もしている。その上、平仮名・片仮名、そして約 200 字の漢字の書き方・読み方を収録している。以下、バ形を取り入れた第 36 課の例文を引用する。

今年の夏休みには少し旅行したいと思っています。けれども、そのためには何とかしてお金を作らなければなりません。だからいろんなアルバイトをしています。通訳をしたり、日本語を教えたりしてみても、あまりお金にはなりませんので、何か大きな翻訳でもしてみたいと思います。しかし何を翻訳すればいいかわかりません。(注 8)

教科書があるレベルに達しているからといって、それを使用した学習者がそのすべてを習得できるとはいえない。目的言語を習得した著者が、学習者の視点をかえりみず、説明不足の教科書を作成している可能性もある。しかし、それは他のすべての教科書に起こりうる問題である。Jelínek の教科書の大きな特徴の一つは動詞活用形導入の順序だと思うが、実はたいへん効率の良い教授法なのではないか、と思われる。辞書形を最初に勉強すれば、実際に辞書を手にして困惑せずにすむだろうし、ナイ形を勉強した時点で、簡単なことなら肯定文でも否定文でも表現できるようになる。丁寧体を勉強する際にはマス形に合わせて、丁寧体の否定形はナイ形に「です」を付け足したものもある、という文法も抵抗なく受け入れられるであろう。ただ、やはり忘れてはならないのは、この教科書での学習の初期段階で、学習者が普通体のみで日本語話者との実践会話を試みる可能性である。しかし、Jelínek の教科書において、丁寧体が説明されるまでの学習で表現できることは限られており、そのレベルで話す非母語話者に言語表現による敬意を期待する人もほぼ皆無と言っているのではないだろうか。その上、Jelínek がこの教科書を執筆した時代に、学習初期段階から日本語母語話者と接する機会に恵まれた学習者が多数いたとは想像に難い。普通体の学習終了時点での実践会話など、杞憂であっただろう。

Jelínek の教科書において、世界的な言語教授法理論の影響は見られるであろうか。60 年代でいくと、日本語教育に多大な影響を与えたのはオーディオ・リンガル・メソッドであるが、それは簡潔にまとめると、書き言葉より、「話す」という行為を重要視し、話すための様々な練習方法を編み出した教授法である。Jelínek の教科書は、仮名や漢字の指導からも見てとれるように、「書く」ということに重きを置いている。紙面の都合上、読解のための教材を含めることは不可能だったのであろうが、Hilská の教科書同様、海外の新たな教授法理論の流れには影響を受けていないと言える。

第三章 70 年代・80 年代の日本語教科書

ここからは 70 年代および 80 年代に出版された日本語教科書を取り上げる。研究対象としたのは、I. Krouský 著『Učebnice japonštiny (日本語教科書)』(1972)、同じく Krouský による『Učebnice japonštiny I. (日本語教科書 1.)』(1982)であるが、この二冊は実質同じものである。1972 年に出版した初級教科書を、82 年に、三巻に及ぶ日本語教科書の第一巻として再版している。再版したものであることは言及されていないが、改変された箇所としては、装丁と参考文献、そして 82 年版には巻末に活字書体の漢字かなまじりの復習問題が収録されたことがあげられる。本編の日本語は 72 年版も 82 年版も、すべて手書きで記されている。本章では 72 年版を分析し、その後 82 年版の活字書体による日本語文について触れる。

Krouský の 72 年出版の日本語教科書は索引も含め全 218 ページ、40 課に分けられている。Jelínek 同様、書くことをおろそかにしておらず、第一課はア行からタ行までの平仮名の書き方・読み方から始まっている。第一課では文法に関しては、簡潔にチェコ語との違いを説明している。動詞は辞書形がチェコ語においての不定詞である、しかし人称によって活用されることはない、という説明がされている。続く第二課では助動詞「です・でした」、「だ・だった」についての解説があり、前者は丁寧体、後者は普通体であることが説明されて

いるが、動詞に関しては、新しい単語として登場しても、辞書形しか紹介せず、動詞の丁寧体の説明はされていない。

動詞の丁寧体の説明は第九課、動詞の五段活用を導入したところで登場する。Krouský も、Hilská と同じく、一段活用動詞を「母音動詞」、五段活用動詞を「子音動詞」と名づけ、やはり変格活用動詞は、ここでは言及されていない。第二課で名詞文、形容詞文の丁寧体と普通体の両方を導入するのに対して、動詞は第九課まで辞書形、つまり普通体の現在形肯定の述語としてしか紹介されていないので、第八課までの例文の羅列は、かなり不自然なものになっている。以下、片仮名の最初の二十字を学習する第六課の練習問題の一部である(注 9)。

スイスのとけいはゆうめいです。こどもはココアをのむ。とりはそらをとぶ。
わたしのがっこうのともだちはサーカスがすきです。きつてをあつめる。(注 10)

変格活用動詞は第 19 課で「不規則動詞」として紹介している。Krouský の不規則動詞は「行く」、「来る」、「する」の三つで、ナ行変格活用「死ぬる」、「いぬる」は含まれていない。テ形は Hilská や Jelínek 同様、「分詞」として第 12 課で登場する。動詞の活用の導入順序だけを追ってみると、Hilská の教科書と、たいへん似かよっていることが分かる。実際、Krouský は Hilská の教科書を 72 年版でも、82 年版でも、参考文献としてあげている。Jelínek の教科書も、72 年版には参考文献に入っているが、82 年版では削除されている。しかし、第一課から平仮名の書き方を導入し、順を追って片仮名、漢字まで紹介しており、それがすべて手書きで進められていく点で、Krouský の教科書は、特に視覚的印象において、Jelínek の教科書をより見やすく作り直したかのように見える。

前述したように、82 年に再版された教科書は、本編は 72 年のものとまったく同じだが、巻末に各課に対応した練習問題がまとめて付け足されている。そしてそこでの日本語の単語および文章は活字書体で、以前の教科書には一切、見られなかったものである。逆に、その問題集のなかで、チェコ語の文章にはチェコ特有のアルファベットが使われておらず、チェコ語として読めるように、手書きで欠如している箇所が書き足されている(注 11)。この追加問題集は明らかに日本で、和文タイプライターなど、何らかの活字技術を使って作成されたものである。

全体を通して、Krouský の教科書は、Hilská と Jelínek の教科書を統合させたかのような印象を受ける。Krouský は他にも参考文献として、日本で出版された書籍も掲載しているが(注 12)、それらは、特に 72 年版に関しては、第二言語としての日本語教育に関するものではない。82 年版には『Foundation of Japanese Language』(曾我松男・松本典子、1978 年)が加わっているので(注 13)、追加問題集の作成の際、参考にしたものと思われる。Hilská の参考文献の幅広さ、国際性の強さに比べると、選択肢の狭さが見え、ここに 1968 年のプラハの春以前と以後の違いが現れているように思われる。日本における日本語教育が、すでにポスト・オーディオ・リングルとして採用されるようになったコミュニケーション・アプローチの影響を受けていた 70 年代日本発行の教科書を手にしてはいたものの、Krouský は再版において、教科書の内容を変えようとはしなかった。Hilská の時代から受け継がれた、チェコの日本語教育の伝統を 80 年代まで守りとおした、とも言えるかもしれない。しかし、本論文の研究対象とはしなかったが、Krouský はその後、84 年、85 年に中級・上級者向けの続編を出している。彼が、チェコの日本語教科書の新たな発展のために貢献した人物であることは疑いの余地がない。

おわりに

本論文では、共産主義時代にチェコで出版された日本語教科書において、主に動詞活用の導入方法に関して分析し、当時の時代背景についても考察を試みた。研究対象とした四冊のチェコ出版の日本語教科書と、主に日本で発行された日本語教科書に関する調査を比較した結果、60 年代から 80 年代にかけて出版されたチェコの日本語教科書の共通の特徴として、次の二つことがあげられる。

- 1) すべての教科書が、動詞は辞書形から学習を開始している。
- 2) 五段活用を一度に紹介している教科書も、テ形は別の課で扱っている。

日本で出版された教科書によく見られる、動詞の丁寧体、マス形だけで初期の学習を進める教授法は、やはりヨーロッパ言語を母語とする人々には不自然なのだろう。動詞の辞書形を、ヨーロッパ言語において動詞の不定詞とみなせば、辞書形を最初に学習するのは当然であるし、五段活用も、ヨーロッパ言語における現在形の活用とみなせば、学習初期の段階で五段活用を導入するのも、自然な流れだと言える。テ形は「分詞」なのだから、難解度の高い文法として別の課で扱うのは、なんら不思議ではない。もちろん、日本語の動詞の五段活用は、ヨーロッパ言語に見られる人称による現在形活用に対応するものではないし、導入されても、すぐに使用しないのであれば、初級段階の学習者にとって、五段活用の詰め込み習得は無意味なものになってしまうだろう。逆に、最も複雑な変化をするテ形は、実生活の中での日本語において使用頻度が高く、現在、様々なメディアを通して、学習開始以前から「生の日本語」を耳にする機会が多い学習者にも身近な活用形である。動詞の活用をどのような方法で効率的に、できる限り混乱を避けつつ導入するか、今後も教授法に工夫、改善の望まれる文法項目である。

辞書形を最初から紹介していても、30 年代初版の教科書が原本となっている Hilská の教科書は、丁寧体の例文ばかりで初期の学習を進めている。日本の日本語教科書でも、初期学習において丁寧体が重視されるのは、母語話者との実践のコミュニケーションを考慮に入れているためであるが、それに対して、60 年代、70 年代に新たに執筆された Jelínek と Krouský の教科書は初めから普通体の例文を用いている。Hilská は本編の日本語文をすべてアルファベット表記していたが、Jelínek と Krouský の日本語文は、漢字かなまじりで表記されている。「聞く」「話す」能力を重視していたオーディオ・リンガル・メソッドや、コミュニケーション能力の育成を第一目標にしていたコミュニカティブ・アプローチなどの教授法理論が日本で採用されていた時代に、チェコでは逆の流れが起こっていたと言える。ただ、80 年代以降も日本語教科書の執筆を続けた Krouský が、Hilská の教科書に影響を受けていたのも事実であり、30 年代から続くチェコ独自の「日本語教科書の伝統」が存在する、と言っても良いのではないだろうか。そのヨーロッパの遠国で生じた伝統が、現代日本語教科書の作成において、直接参考になることはないかもしれない。だが、これまでに、世界各地の非母語話者によって、日本語教育に対してどのような試みがなされてきたのかを知ることは、日本国内では発想し得ないインスピレーションとなり、今後の日本語教育の新たな発展に貢献するのではないだろうか。

注

(注 1) 吉岡英幸(2016 年)23 頁。

(注 2) 関正昭(1997 年)200-201 頁。

(注 3) Hilská, V.(1963 年)49 頁。

(注 4) Hilská, V.(1963 年)51 頁。

(注 5) ネウストプニー自身は Grammer-Translation Method を「文法翻訳教授法」と訳している。

(注 6) Jelínek, J.(1966 年)21 頁。

(注 7) 国語文法においての「命令形」の解説はされていない。

(注 8) Jelínek, J.(1966 年)66 頁。

(注 9) この教科書では各課の最後に「練習 (Cvičení)」という項目があり、後半の一部の課を除いて、関連性のない日本語文が改行もされず記述されていて、その下にチェコ語訳がついている。この項目で何を「練習」すればよいのかの指示は明記されていない。

(注 10) Krouský, I.(1972 年)29 頁。

(注 11) たとえば「S」とタイプしているものに「Š」など、チェコ語特有のアルファベットが必要な箇所に手書きで記号部分だけが付け加えられている。

(注 12) 72 年版では湯沢幸吉郎『国語法精説』と小学一年から六年向けの読本があげられているが、出版社や発行年号は明示されていない。湯沢の書籍は『口語法精説』の可能性もある。

(注 13)『Japanese Grammar』(Ono, H. 1973)も加えられ、湯沢と Jelínek は削除されている。

研究対象文献

- Hilská, V. (1963) *Učebnice hovorového jazyka japonského*. Nakladatelství Československé akademie věd
- Jelínek, J. (1966) *Úvod do moderní japonštiny*. Nakladatelství Československé akademie věd
- Krouský, I. (1972) *Učebnice japonštiny*. Státní pedagogické nakladatelství
- Krouský, I. (1982) *Učebnice japonštiny I*. Státní pedagogické nakladatelství

参考文献

- 鮑頭陽「中国の主要大学日本語学部における日本語教科書の使用状況」(『朝日大学一般教育紀要』No.37、2011 年)
- Boháčková, L., Winkelhöferová, V. (1987) *Vějíř a meč*. Brno: Panorama
- 海老原峰子『日本語教師が知らない動詞活用の教え方』(現代人文社、2015 年)
- 金義泳「韓国の日本語教科書における記述内容の変遷」(吉岡英幸・編著『日本語教材研究の視点』くろしお出版、2016 年、26-46 頁)
- Krouský, I. (1984) *Učebnice japonštiny II*. Státní pedagogické nakladatelství
- Krouský, I. (1985) *Učebnice japonštiny III*. Státní pedagogické nakladatelství
- ネウストプニー, J.V.『新しい日本語教育のために』(大修館書店、1995 年)
- Průšková-Novotná, V. (1939) *Učebnice hovorového jazyka japonského*. Praha: Orientální ústav v Praze
- 関正昭『日本語教育史研究序説』(スリーエーネットワーク、1997 年)
- 吉岡英幸・編著『日本語教材研究の視点』(くろしお出版、2016 年)

関西大学大学院文学研究科副専攻「EU・日本学」
平成 29 年度活動報告書
第 10 回 KU ワークショップ／第 9 回 EU ワークショップ報告論文集

発行日 平成 30 年 3 月 31 日
編集・発行 関西大学大学院文学研究科副専攻 EU・日本学室
〒564-8680 大阪府吹田市山手町 3 丁目 3 番 35 号
Tel 06-6368-1121
印刷 株式会社 イシダ印刷

